
後継者 ~ Magical Girl Lyrical NANOHA ~ Successor of WHITE-GLINT ~

AA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは　　白き閃光の後継者　　M a g i c
a l G i r l L y r i c a l N A N O H A 　　S u c c e s
s o r o f W H I T E - G L I N T

【Nコード】

N 8 6 9 6 J

【作者名】

A A

【あらすじ】

本作品は魔法少女リリカルなのは&アーマードコアシリーズの二次創作となっております。随所にオリキャラが登場しますので、苦手な方はブラウザバック推奨です。

プロローグ（前書き）

駄文です。

いまだリリカルじゃありません。

「それでも見てやるぜ!」という方はどうぞ

感想、アドバイスなどもらえるとうれしいです。

- - - 回想 - - -

人類は地上の深刻なコジマ汚染から逃れるために航空プラットフォーム、”クレイドル”を建造し、高度7000mの清浄な空で快適な生活を形成していた。

しかしながら、すべての人類がクレイドルに移住できたわけではなかった。移住できたのは人類の過半数、特権階級というべき人間だけである。地上に残された人類はただ、クレイドルを空に飛ばすためのエネルギー供給施設”アルテリア”の維持と希少な資源の”企業”間による争奪戦の戦闘要員となり果てていた。

”国家解体戦争”、”リンクス戦争”において企業の主戦力であったアーマード・コア”ネクスト”の搭乗者である”リンクス”もまた例外ではなく地上に残され、企業間の闘争の尖兵となっていた。

だが、人類が戦えば戦うほどコジマ汚染は広がり、いつしか清浄であった空さえ汚染しかねないほどになっていた。

この現状を憂いた”マクシミリアン・テルミドル”が”ORCA旅団”を設立、後に世界各地のアルテリアを同時襲撃した。

” To Nobles . Welcome to the Earth . ”

それは全企業いや、全クラニアムの住人に対しての明確な宣戦布告であつた。

マクシミリアン・テルミドールは嘯く、” このままでは人類は種として閉塞し、この惑星で諦観のうちに壊死するだろう ” と。

国家解体戦争以前に衛星軌道上を埋め尽くすようにばらまかれた無人兵器 ” アサルトセル ” 。これにより人類は自ら宇宙への道を閉ざした。

ORCAの進める計画 ” クローズ・プラン ” はクレイドルを

支えるエネルギーを衛星軌道掃射砲にまわし、”アサルトセル”
を衛星軌道掃射砲によって一掃して宇宙という開拓地を切り開き、
人類の宇宙への進出とそれに伴い人類のコジマ汚染による衰退を防
ぐ計画である。

オレはORCAの一員として戦ってきた。クロース・プランの最
終段階。世界最大のアリテリア施設「アルテリア・クラニウム」の
制圧作戦に参加出来なくなったが…。

なぜ参加できなかったのかといえば、クラニウム制圧作戦の準備
中にAFアンサラーの襲撃があったからだ。正確には唐突にアンサ
ラーが巡回航路を変え、こちらに向かって来たがためであつたから
なのだが。

企業の主力たるAFがオレ達を強襲することなど本来ありえない
ことである。なぜなら企業とオレ達の間では一つの密約があるから
だ。

”企業の上役（老人たち）の身の約束”

これは事実上、企業がクロース・プラン及びORCAの存在を黙
認したことになる。企業の連中は狡猾だ。自分たちの命の保身が確
実であり現状以上の利益が見込め、なおかつORCAがクレイドル
をおろした後の罪もろとも被ってくれるのが確定している現状でオ
レ達ORCAを襲撃する旨みがない。

そんなこんなで襲撃を受けた訳だが、ORCAの主戦力は既にク
ラニウム襲撃のために整備に入っており迎撃できる人間がオレしか

いなかったため単機で迎撃。アンサラを墮とすことは出来たが墜したことに安堵して気を緩めたオレの機体に最後の抵抗とばかりに一齐に打ち出されたコジマキャノンの一発がかすったのだ。オレ自身には大した怪我はなかったが機体が大破。結果、オーバーホールに時間がかかるということで作戦に参加できなくなってしまったのだ。

「すまない、テルミドール。どうやら間に合いそうにない」

「気にすることはない。あの状況ではあれが最善…とは言わんがああするしかなかったのだ。」

それより怪我の方は大丈夫なのか？」

「ああ。幸い大した怪我はしていない。機体からのフィードバックがきつかったぐらいだ」

「それはよかった。」

なに、君に死なれると今後の世界のORCAの立場に支障をきたすのだよ。なあ、ORCA最強のリンクス？」

「よせよ、そんなガラでもなければ大した人間でもない」

「フツ…、君は君が思っているよりも周りに影響を与えていることを理解しているか？」

まあいい、配置の調整をしなければいかな。老人どもめ、未だ空に未練があるようだな」

「……といっても一部の独断専行と言ったところか？」

あの急な航路の変更はそうとしか考えられんのだが」

「だろうな。」

メルツェルがいなくなったからと我々を舐めてかかっているのだろっ」

「……ああ。っと、そろそろ時間か？」

「む、確かにな。では行ってくるよ。
精々そこで見物でもしておけよ？」

「言われずとも。」

こっちは暇なんでな、ポップコーン片手に見ておこう。
作戦の成功を祈っておこうか？信じてる神なんざ死神ぐらいしかないがな」

「縁起が悪いな、君は。
らしいといえづらいが……」

後にこの会話がアイツとの最後の会話になるとは思ってもみなかった。いや、ただ忘れていたかっただけなのだろう。なぜなら

オレは”知っていた”のだから。

クラニウム制圧の失敗を聞いて茫然としているオレに彼のオペレーターから一つの記憶媒体を手渡された。どうやら作戦が失敗し、自身が死亡した場合に渡すよう言われていたらしい。

—— カラードのリンクス、マクシミリアン・テルミドールだ。

君がこれを聞いているのであれば、私は既に死亡している。

ORCAは……君一人になったということだ。

頼む、私に代わりクラニウムを制圧してくれ。

クラニウムが停止すれば、クレイドルは最後の支えを失いすべての人は大地に還る。

衛星軌道掃射砲はクレイドルを支えたエネルギーを得てアサルトセルを清算し、宇宙への道を切り開くだろう。

すべてを君に託す。

人類と……、共に戦ったORCAの戦士たちのために……

「……………」

「はあ…。っ、すうっ…」

セレン曰く、高ランクのリンクスの一部も出来るらしい。

「ジン！…！」

「っ！…！ どうした、セレン？」

「……………」

「……………」

ち、沈黙が痛い。この人との付き合いは ” 恐ろしく長い ” が
いつまでたってもこの空気には慣れない。

この人は怒っているときに黙り込むタイプの人だ。

「…………… どうした、じゃない。」

もう目標は近いんだ、シャキツとしろ」

「すまん」

『 作戦は覚えているな？

このまま、クラニウム付近まで移動した後、ネクストで内部に侵入。クラニアムの制御装置を破壊しクラニウムを停止させるんだ。』

「 わかっている。忘れちゃいないさ 」

『 …… 』

「 …… 」

しばしお互い無言の時間が続くが、セレンの方から切り出し始めた。

『 お前は自分が何をしようとしているか、わかっているか？ 』

「 …… 」

本当にこの人には頭が上がらない。

今必要な事、理解しておくべき事をしっかりと確認してきてくれる。

「 …… クラニウムを停止させて、クレイドルを強制的に地上おろす。

力技だからな、何千万人かは死ぬだろうな。おろしたらおろしたらで地上の環境に適応できなくてさらに死ぬ奴が出るだろうな 」

「……」

「なにかを成すためには、なにかを切り捨てなければならない。収支が釣り合うからこそ世界は回り続ける。」

まあ、いくら大義を振りかざそうとオレが人殺しになることは変わらないがな。

それも、いつもやってきたことと変わらんさ」

そう、リンクスで有り続ける限り人の生き死にからは逃れられない。なにせ傭兵だ。誰かの代わりに誰かを殺すことを仕事とする職業だ。だが…

「なにより友との約束であるし、”コイツ”を託された責務でもある」

ラインアークの防衛ミッション後に天才アーキテクト”アブ・マーシュ”が自らやって来たのだ。最初は一体何の用かといぶかしんだものだが、どうやらホワイト・グリント、”レイヴン・アナトリア”のオペレーターからの進言でオレにホワイト・グリントを渡しに来たらしい。

まあ、思うところがあったのだらうな。オレもあつたし。

「”何のために戦つか”……。
少なくともオレにとっては人類がこんなところで滅びるのを良しとしないからこそ戦っている」

「……そうか、それがお前の答えか。
なら……私はそれでいいさ」

《リンクス、作戦開始まで残り一分です》

ORCAの指令所からオペレーターの通信が入る。いよいよ……か。
アルテリア・クラニアム、”今回”はいつたい何人のリンクスが
防衛に参加しているのか。

少なくともORCAの精鋭たちが全滅するほどの人数だったんだ
ろうがそれでもテルミドール達が行った頃よりは減っているはずだ。

「時間か」

「ああ」

自分自身を戦闘のためのものに切り替える。

心で唱えるのは ”手は綺麗に、心は熱く、頭は冷静に” だ。

「多くは言わんがこれだけはいわせてもらっぞ？」

「……………」

『生きて戻れ、それがお前の責任だ』

作戦前だというのに思わず笑みが浮かぶ。

本当にこの人は…

「……了解」

《作戦開始。リンクスどうかお願いします。
人類に黄金の時代を……》

「ホワイト・グリント タイプ・エレベア、ジン出るぞ！」

「こちら、ジン。目標の入口を確認した。これより突入する」

『ああ、そのまま真つすぐ進め。』

……しかし、あらためてみると無駄に馬鹿でかいな』

まあ、そうだよな。始めて見た時は ” 誰だ、こんな馬鹿げたものを作っただのは ” と思うわな。

ソルディオス・オービットの比じゃないが。誰だ？あんなもん飛ばそうなどと思った奴は！！

『 内部にネクストの反応を確認。』

数は……クソ、ECMか？

気をつけるよジン……レーダー関係が全滅している。』

「 待ち伏せ、か。 」

犬に相応しい所行だ。容赦はせん。 」

『 熱くはなるなよ？ 』

「 よく言う。その言葉、そっくりそのまま返してやる。 」

『 言ったな、ジン。貴様、後で覚えているよ？ 』

「 おお、怖い怖い（棒読み）。 」

とかなんとかしてセレンと遊んでいるうちに目標が見えてきた。

「 っと、こちらジン。目標を視認した。それと……お迎えもな。 」

『 そうか。さっさと終わ……せ……だ…… 』

通信が切れた？ジャミングか？これで文字通り孤立無援というわけだ。

【お客さんだぜ、ウィンディー。予想通りのな】

【貴様も、革命を気取るかジン……いや……ホワイト・グリント】

【あなたにもここで果ててもらいます。理由は、お分かりですね？】

ロイ・ザーランド、ウィン・D・ファンション、リリウム・ウォルコットか。

ということはどこかに王小龍がいる、か……？

「盛大な歓迎だな。カレードランク上位が勢揃いだ。周りのスクラップを見る限り、他にもいたようだが……皆と相打ち、と言ったところか。」

王小龍はどうした？くたばったか？

【残念ながらあの老人は来ていなさ、ホワイト・グリント。どこから監視はしているだろうが、な】

「怖気づいたか。
ならば最初からネクストなどに乗らなければいいものを……」

【それ以上王大人を侮辱するのは許しません】

「……盲目的な信頼、か。
どう思う？ ロイ」

【個人的には気に入らないが……今は仕事中だ。
悪いな、美人の涙が最優先さ】

「へえ、泣きついたのか……ウィンディー」

【何の冗談だ、それは？
誰がこんな優男に泣きつくものか】

「だ、そうだ。振られたなロイ」

【このままあきらめる気はないさ。だろう？】

「そうだな。お前はそんな奴だったな。……さて最早語るまい、
お前達とオレは敵同士。」

あとは戦うのみだ……どちらかが滅びるまで、な！」

そう言いつつロイの機体 ”マイブリス” オーバーブースト にOBで突っ込んで
行きながら右手の突撃銃 ”マーヴ” を乱射する。

【そうかよ！
まったく、気が乗らないな！】

などと口では言うがきつちりこっちの動きに反応して右にQBし クイックブースト

て避けて行く。ちっ、かすっただけか。責めて背武器のレーザーキヤノンだけは潰したかったんだが。

などと考えていると横合いから美しい青い螺旋を描きながらレーザーキヤノンが飛んでくるのが見えたのであえてそのまま前方に向けてQBを吹かし、加速して避ける。

【 つれないな、私を忘れてないか？ 】

「 いやなに、両手に花を実践している奴が気に食わなかったただだ 」

オーバーブースト
QBを切り、クイックターン瞬時にQTで向き直る。

「 つ！ 」

いやな予感がしたんで直感に従い、後ろにQBするとさっきまでオレがいた場所に赤い閃光が突き刺さる。 リリウムの ” アンビエント ” のレーザーライフルか！

【 ホラよ！こいつをもつてけ、酔っ払い！ 】

マイブリスからミサイルが雨あられと飛んでくる。

オレはそれを天井付近まで一気に上昇し避けようとするが傍を通りすぎようとしたミサイルが急に爆発した。

「 近距離信管型か！？ ならば！ 」

QBでいったん下がリミサイルを引き離れたところで、背中のレーザーキャノンを展開し左のレーザーキャノンでミサイルの進路上の上にあった天井のタンクみたいなのを狙い撃つ。青い螺旋は狙い通りにタンクのような物の支えに当たり、重力に引かれて落下したそれがミサイルの盾となり爆発で煙幕を張る。

これで ウインディーの ” レイテルパラッシュ ” とアンビエントからはこちらが見えないようにする。

レイテルパラッシュもアンビエントも前衛型の機体構成だ。お互いがお互いを邪魔してうまく動けないだろうから後衛型のマイブリスを今のうちに仕留める！

オレはついだとばかりに右肩のレーザーキャノンでマイブリスの真上にあった同じものに同様のことをする。

【 んな！？ 】

奴にとっては悪夢のはずだ。なにせ自分の機体の数倍はあろうかという質量の物が上から降ってくるのだから。

マイブリスは奴から見て左側、オレの方にQBを吹かして回避する。

よし！

オレは奴が上に気を取られているうちにマイブリスに接近し、機体を横に着地させる。

【うお！？ いつの間に！？ だがこのタイミングで、この距離じゃあ……】

そう、こうまで機体同士の距離が近ければ突撃銃による銃撃は口ツクオンをしている間に回り込んで避けることが出来るし、レーザーキャノンはさっき撃ったばかりでリロード中だ。アサルトアーマーAAは建物の中で使うには向いてない。崩壊の危険性があるからだ。

だがオレとて考えなしで突っ込んだわけではない。

左手の銃身全体を覆うように白く発光するレーザーブレードを生させる。

これは企業が販売している突撃銃の銃身にレーザーブレードを生させるようにオレが改造した物だ。欠点はレーザーブレード程のリーチがないことぐらいで弾薬の節約に意外と役立っている。

そしてそのままマイブリスのコアに機体を捻るようにして銃身を突き刺す。まずは一人…

【レーザー…ブレード、だと？

噂のファング（牙）か……見誤っちまったな……】

「残念だったな、ロイ」

【ロイ様！？】

今になってようやく互いが見えるぐらいに煙幕が晴れ、現状を見てリリウムが声を上げる。

当然か、いきなり視界が悪くなったと思っていたら次の瞬間には一人ヤラレていたのだからな。

【ぐっ……。ハッ、ダセエな……。俺も。

すまねえ、ウィンディー……。あんまり助けられなかったな】

【最後に殊勝とは……らしくないな、ロイ・ザーランド】

【そんな……ロイ様……】

「戦場に迷い込んだか？ リリウム・ウォルコット……話にもならんな。」

尻尾を巻いて逃げてもかまわんぞ？」

出来るだけ高圧的にかつ嫌みたらしく言葉を吐き出す。イメージするのは某水没王子だ（笑）

【ッ…！！】

一人釣れたか。案外簡単な挑発に乗るものだな…いつもの冷静沈着ぶりはどこに行ったのやら。B F Fの王女が聞いてあきれる。

【落ち着け、リリウム・ウォ…オイッ！！】

それに気づいたのか、ウィンディーがリリウムに声を掛けようとするが止められない。

今の彼女は頭に血が昇っていて周りの声など聞こえていない状態だ。普段起こらない奴が起こると手がつけられないのと同じだな。

【堕ちなさい！ この●×■！】

「……………（汗）」

自分でやつといて何だがここまで口が悪かったか？ 何百というループの中で一番口汚いと思う。B F Fの王女が今度は別の意味で聞いてあきれるな…（汗）

だがりリウムが激昂しているおかげでウィンディーの方が冷静になってしまったのか、中距離での支援を開始し始めた。

これは失策だったか？

目の前のアンビエントのレーザーライフルなどに気を取られていて、その後ろからレイテルパsshのレーザーキャノンが飛んでくる。

どちらもあまり喰らいたくはないから必死に避けるがいかんせん、この機体は構成上EN消費が激しい。長くはもたんか…

そうこうしているうちにリリウムの方も熱が冷めたのか。機体に無駄な動きがなくなってきた。

【 ああああ…私はなんて恥ずかしいセリフを…。
聞きましたね？ 聞いてしまいましたね？ 】

「 いやまあ、オレに言ったわけだろうし…」

【 あなたにはここで消え去っていただきます。理由はお分かりです
ね？ 】

【 …… 】

ちよ、なんかキャラ違くない？ ウィンディーでさえ黙り込んだじゃったんだけど！ しかしラチがあかな。このままじゃジリ貧だ。

オレはマイブリスのそばに機体を着地させ右手のレーザーブレードでミサイルポッドを切り取る。

「借りるぞ、ロイ」

そして切り取ったミサイルポッドをアンビエントに蹴り飛ばす…！

【 なっ！？ 馬鹿ですかあなたは！？ 】

まあ、今ので誘爆しかねなかったからな。

「失礼な、大馬鹿の間違いだろう？」

【 よりダメになった！？ 】

甘いな、リリウム。ツツコミを入れている場合ではないぞ？

アンビエントの目の前でミサイルポッドを銃で撃ちぬく。

【 しまった！ 】

ミサイルを誘爆させてまずはP Aを剥がし、爆炎で見えなくなつた位置に今度は背中^{ブライマルアーマー}のレーザーキャノン二門を展開させて勘に任せ

て撃ち抜く！

【 きゃああああ！ 】

爆炎の中から両腕とコアの一部分を消失させ溶解したアンビエン
トが抜け出てくる。これでは戦闘は不可能だろう。

「 ジャックポッド！！ 」

別に歓声を上げたって悪くないよな？ マグレあたりだったし。
あんたもそう思うよな？ … オレ、誰に言ってるんだ？ 電波か？

「 グッ！！ 」

【 品がない言葉だ… 】

オレの機体に衝撃が走る。

咄嗟に回避行動をとったといえ、迂闊！ くそ、脳内の誰かさん
としゃべってるうちに両背中レーザーキャノンを撃ち抜かれた！

【 申し訳ありません、ウィンディー様。 リリウムはもう戦うこ
とができません。御武運を 】

そういつてアンビエントは出口に向かって撤退していく。オレはそれを横目で確認しつつレイテルパルッシュから目を離さない。腐っても”ブラス・メイデン”だ。今まではアンビエントが前衛として暴れていたから援護に徹していたが、本来は前衛こそが彼女のベストポジションだ。

【 良いのか？ 見逃して 】

「 … オレの目的はクラニアムの停止だ。ネクストとの戦闘でも、破壊でもない 」

【 クラニアムを停止させれば、多くの弱い人々は死ぬことになるだろう。お前はそれでいいというのか 】

「 言っただけだぞ… 最早語ることなどない！ 」

そう言っただけオレは機体をつっ込ませる。レイテルパルッシュもさっきのでレーザーキャノンとレーザーライフルは撃ち切れたのか、パージしながら突っ込んでくる。

互いに決定だと言える射撃武器が切れた状態、残された近接武器で戦おうとするのは必然。

レイテルパルッシュはパルス砲を乱射しながら、オレは両手の突撃銃を乱射しながら右に左にと避けながら接近していく。

【 革命を気取るか。ならば死を実践して見せろ、マクシミリアン・

テルミドールと同じように！」

「死など、とうの昔に乗り越えた！」

通信越しに、機体越しに、互いの信念をぶつけ合う。それからどれだけの時間がたったのだろうか。時間の感覚が曖昧だ。

そんなことを思っていると唐突に互いが張っていた弾幕が途切れる。

「弾切れか…」

【貴様もか…】

レイテルパッシュはパルス砲をパージし、お互い示し合わせたかのようにレーザーブレード展開させる。

【……】

「……」

無言で切り結び合う、レイテルパッシュのレーザーブレードがこちらの右肩を削るように融かし斬ってゆく。

ならばとお返しにこちらは右手をもらってゆく。

レイテルパッシュはレーザーブレードを切り返しこちらに再び

切りかかってくる。こっちのレーザーブレードは出力は向こうのソレより弱い。

よってオレはそれに合わせるように両手の銃剣を使って鰐迫り合いに持ち込む。

お互いの機体は度重なる戦闘ですでにボロボロだ。通常のリンクスなら機体の損傷でAMSからのフィードバックによる激痛により失神していてもおかしくない。ならばなぜいまだ互いに動けるのか？

それは互いに背負うものがあるからだ。ウィンディーはクレイドルの住人、オレは長い目で見た全人類の未来。

どちらの方が重い、ということはない。価値観など人それぞれだ。

ウィンディーから再び回線が入る。

【企業の雇ったネクストが増援に来るそうだ。さすがのお前もその機体の状態じゃ多勢に無勢だろう。残念だったな】

「時間がない、か……。しかたない」

オレは鰐迫り合いをやめる。右腕が斬り落とされるが機体を体当たりさせそのままクラニアムの制御装置まで叩きつける様に機体を押しきる。

「うおおおおおおお！」

【ぐああああ！】

ちょうど制御装置を押しつぶすような位置になったがまだ足りない。レイテルパラッシュはさっきの衝撃で制御系がやられたのか動けずにいる。

オレは残った左手の銃剣でレイテルパラッシュのコアごと突き刺した。

制御装置は止まったのか、クラニウム全体から照明が落ちる。

【一人の命を愚かというか…歪んでいるよ、お前も…世界も】

「歪んでいるのは認めるが、それがあんたの答えなどだろうか？
ならばそれが間違いであるはずがない。」

あんたの答えも刻んでいくさ…」

【そうか、だがお互いここまでのようだな】

「ばれていたか。正直しゃべっているのがつらい」

【私もだ。残念だが、後のことは他の連中がやってくれるだろう
さ…】

「ああ、そうだな。」

…すまんなセレン、約束は守れそうにない…」

【……】

「ウィンディー？」

【……】

「…先に逝ったか」

一人になっても最後まで時間があるようなので今後のことを考えてみる。

「…また初めからのだろうか？ 正直疲れたんだがな…」

思わず声に出していたか。耳に響いた言葉を聞いて始めて気づくが、ゆっくりと眠気が襲う。これは何度も経験した感覚だ。死、というものののだろうか？ いやループしている時点でそうとは限らないか。

そんなことを最後までグダグダと考えながらオレは意識を手放した。

プロローグ（後書き）

いかかでしたでしょうか？ テスト前なのにこんなことしていいのかと思いつながら書いてました。

前書きにも書きましたが感想、アドバイス待っています。できるだけ小説に反映していきたいと思います。

最後に一言、「リ、リリカルのりの字もねえ！」

第1話 L i n k s (前書き)

不定期更新かつ駄文書きのAAです。
今回はリリカルへの導入部です。

いちおう伏線を張ったつもり・・・。

なかなか筆が進みません。

感想、アドバイス待っています。

第1話 L i n k s

第1話 : L i n k s

s i d e - ジン

あたたかい。

意識がハッキリしてくる。

自然に目が冴えてきたのでオレはそのまま起き上がることにした。

「毎度のことながら、見事に何もなし」

周りを見回しながら思ったことを口からこぼす。

そこは真っ白な空間だった。

上も下も、左も右も…何も、ない。

生活品もなければ壁すらない。

かといって目に映る光景に果てが有るのか無いのかすらわからない。そもそもしっかりと地面というか床というか、そういうものを踏みしめて立っているのかですら定かではない。

わかるのそこに自分が存在しているということだけだ。

少しの間待っていると目の前に木製の少し壊れかけた、そこらにあるような扉が出現する。

毎回ループする前のこの空間にコレが出てくる。

コレの向こう側へ行くことでループが始まるのだ。

なら最初から開かなければ良いのではないかと試したことがあったがいつまで経っても何も起こらなかった。

この何もない真っ白な空間で何もないのは死ねる。

何がって精神的に死ねる。

暇すぎて、何もすることがない。

何もしていないと段々自分と周りの世界との境界がなくなってきた自身でさえ真っ白になっていくような感覚に襲われるのだ。

ある意味死という物なのだろうが、そんな死に方は嫌だ。

オレはまっとうな死に方がしたいのだ。

なので毎回ドアを開いてしまうというわけだ。

まあ、何もしなくても現状は変わらないというのは既に実証済みなのでさっさと目の前の扉を開けようと取っ手に手を掛けようとしたところで後ろからパキンと音がした後にギギィ〜と何かを開くよう

な音がした。

こんなことは今までなかった。

当たり前だ。ここには文字通り何もない。

音がするなんてことは目の前の扉以外にはありえない。

とりあえず固まっただけでもしょうがないので後ろを振り向く。

瞬間、言葉を無くした。

後ろにはもう一つの扉があった。

それはいい、いやよくないんだけど。

そんな事どうでもいいと思うほどオレはソレに魅せられた。

ソレは扉だった。

いまオレの後ろにあるようなつまらない壊れかけの扉ではなく、それ自体が芸術品のような美しさあるいは神々しさという物を兼ね備えていた。

扉というより門と言った方がいいような大きさだ。

全体的には大理石で出来ているような感じだが、部分的に金や銀が使われているのがわかる。

扉の縁には何かの植物の蔦をあしらった造形が施され、左右にソレに捕まるように成人男性の像が扉の真ん中の方に手を伸ばしている。

扉自体にはセフィロツリーのような物が、その上から六枚羽の天使が何かを抱えているような絵が扉の真ん中に彫られている。

天使が何を抱えているのかわからない。

そこだけ何かが足りないかのように直径30センチほどの円形の穴が存在している。

扉の最後の部分が欠けてしまっている。
シンメトリーで形成された扉には真ん中の部分だけがない。

それが、少しだけ内側に開いていた。

よく見れば穴は奥まで貫通しており、周りが少し欠けている。削られた形跡はない。

奥に行けばいくほど穴は大きくなっている。

だがこれではまるで錠の取れてしまった扉だ。

最後のピースは一体どこに行ってしまったのだろうか。

周りを見渡してみたがそれらしき物はどこにもない。

ならばあの扉の中に？

そう考えるのが普通なのだろうが、明らかにおかしい。

このような、穴の空き方はいり得るのだろうか？

これではまるで ” 穴の向こうから抜き取られたようではないか ”

得体が知れなさすぎる。

見た目は確かに美しいのだが、迂闊に近寄りたくない。

だが確かにオレの中の ” 何か ” があれに、いやあの扉の向こうに惹かれてる。

まるで、自分の半身を向こう側に置いて来たといわんばかりだ。

さて、どうするか。

目の前には新たな扉。ただし嫌な予感がする。
後ろにはいつもの無限に等しいループへの扉。

オレは目の前の新しい扉に進むことにした。

どちらを選ぶにせよ嫌なことになるのは同じだ。

ならば新しい物の方が新鮮味があつてまだましだし、中に入っていたのであろう扉の一部にも興味がある。

そうしてオレは開きかけの扉に手を掛け、向こうに進むために扉を完全に開ききつたところでこの空間よりなお眩い白い光に包まれた。

第1話 L i n k s (後書き)

いかがだったでしょうか？『こんだけ待たせといてこれかよ・・・』
と思った方。

ゴメンナサイm(――)m

近いうちに次の話も投稿しますので許してください。

そもそも待つている方がいるのだろうか？

題名のL i n k sは複数の解釈があると思います。御自由に解釈
してくださって結構です(投げるな)

作者は2つの意味を持たせているつもりです。

リンクスと・・・です。

とりあえずこの場を借りて感想返しを。

幻想の庭師様、黒いスト様、ガンアーク様ご感想ありがとうございます。
います。

作者は喜びのあまりハレハレユカイを踊ってしまいました。

・・・嘘ですよ？

幻想の庭師様。

ご注意くださいった点を若干改善しました。どうでしょうか？しかし
アレのネタがわかる人がいるとは・・・

黒いスト様。

ありがとうございます！大変励みになるお言葉でした！頑張つて
tsまで書きたいと思います！！

ガンアーク様。

ありがとうございます！

回想はいちおう考えてはいます。チョロツとしか出なかったり、な

んなり。これ以上はネタバレになりかねないのでストップです。

感想、アドバイス引き続き待っています。

それでは最後に一言『さっさとリリカルに入れ!!』

第2話 GATE（前書き）

AAです。

次話が出来たので投稿しました。

ううゝ・・・文章量が一定しないな！。

話もそんなに進んでないし、相変わらず駄文だし。

感想、アドバイス待ってます。

第2話 GATE

第2話 : GATE

side - 高町士朗

3月下旬。

今日もいつも通り朝早くから恭也と美由紀を連れ、裏山で我が家に
伝わる剣術の修行をしていた。
なんてことはない、いつも通りの光景だった。

「それがこんなことになるとはなあ……」

目の前で眠っているのはと同じ年ぐらいの少年を見ながら僕は今
朝の出来事を思い出した。

s i d e o u t

* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *

|| || || 回想 || || ||

s i d e - 高町士朗

今二人は模擬戦をしている。
お互い小太刀ほどの木刀を二本ずつ持ち、自らの持つ力を存分にぶ
つけ合っている。

美由紀が自らの木刀を恭也に向け振っているがそのすべてを恭也は
防ぎ、受け流している。

美由紀の才能は決して悪くない。むしろ恭也のそれより上回っているくらいだ。

だが、訓練してきた期間が違う。

恭也には小さな頃から付きっきりでしたものだ。

それ故に恭也はそれなりに力を持つに到ったと僕は自負している。

恭也と美由紀は経験にまだ差がある。

経験とはそれだけでも力になるものだ。走っている途中に転んで痛かったのならば次は転ばないような走り方をする。

これも経験の力。

ああやって冷静に攻撃を受け流せるほどに美由紀と恭也の間にはまだそれほどの力の差があるということだ。

そうこうしている内に恭也が今まで受けにまわっていたのから一転して攻撃にまわり始めた。

美由紀も懸命に恭也の攻撃を受け流そうとするが徐々に押され始め、ついには持っていた木刀を弾き飛ばされ喉元に木刀を突き付けられた。

「そこまで！」

決着が着いた頃合いを計って僕は模擬戦の終了を告げる。

恭也は美由紀に右手を差し出し、美由紀はその手を取って立ち上がり弾き飛ばされた木刀を拾って二人でこちらに戻ってきた。

「いや。やっぱり恭ちゃんには敵わないや」

「当たり前だ。まだ美由紀に勝たせるつもりもなければ、今後勝たせるつもりもない」

「うう…」

「恭也はこう言っているが以前よりずっと強くなっているよ」

恭也の言葉に落ち込んでしまった美由紀に僕はフォローを入れる。

「ほんと！？ お父さん！？」

一転して明るい表情を浮かべる美由紀。

「ああ。だがもう少し考えて動かないとさっきみたいな事になるぞ？」

「はい」

こちらの教えに素直に答える美由紀。…教える側としてはうれしいのだが年頃の女性としてはどうなのだろうか？
剣だけではなく料理の方も…。いや、やめよう。あえて悲劇の記憶

を思い出す必要もあるまい。

そんな事を思いながら僕たちは帰る用意をしていた、その時だった。

ゴオオオオ……ーン……

まるで教会の鐘のような体の底まで響くような音があたりに響き渡った。

「な、なんだ!？」

「恭ちゃん! あれ!-!」

美由紀は何かを見つけたのか声を上げながら空を指差していた。僕と恭也はつられるようにして美由紀の指差している方へ目を向けた。僕たちはそれを見て声を失った。

ソレは扉だった。

この世のものとは思えない、美しい扉だった。それがあり得ないことに宙に浮いていた。いや、存在していたと言った方がいいかもしれない。その扉が今まさに ”ギギギッ…” と音を立てて開いていく。まるで、中から何かが出てくるといわんばかりに…

そして扉が開ききったとき、眩い白い閃光が僕たちの視界を埋め尽くした。咄嗟に腕で視界を遮ることで僕は抵抗することが出来たが恭也と美由紀はできなかったようで隣から悲鳴が漏れる。

その時僕は確かに見た。あの扉の向こう側から小さな影がこちらに來たのを。

小さな影はそのまま重力の法則にしたがい、僕の目の前の林に落ちていった。

”ギギギッ…” と音を立てて扉は閉まっていつて辺りを照らしていた白い光は扉の隙間と同じように徐々に収まっていき、完全に閉まったその扉はまた ”ゴオオオオ……ーン…” と音を立てて元からなかったかのように光の粒子となって消え去ってしまった。

僕はこのことを目の当たりにして茫然となっていたが、隣から聞こえる苦悶の声に我に帰った。

「恭也！ 美由紀！ 大丈夫か！？」

「俺は大丈夫だ、父さん……」

「ううゝ…、わたしもゝ。けどまだ目がチカチカするかも…」

そう言つて二人ともすぐに立ち上がる。よかった。

美由紀はまださっきの光のせいで視界が利いてないのかフラフラしているが、まあ大丈夫だろう。

「恭也、ちよつとここで待っていてくれ」

「どうしたんだ、父さん？」

恭也が何かを察したのかあたりを警戒しながら聞いてくる

「いや、さっきな。あの扉の向こうから人影らしき物があつちの林に落ちていったな、確かめようと思つたんだ」

「お父さん、ひとりで大丈夫なの？」

「俺も付いていった方が…」

「いや、いい。美由紀もあだし、ここで待っていてくれ」

そう言つて僕は美由紀を見やる。そこにはいまだフラフラしている美由紀がいた。

「…わかった」

そう言つて渋々頷く恭也。

「氣をつけてね、お父さん」

「ああ」

そう言つて僕は先ほどの人影が落ちた林に歩いて行く。

何が出るかわからないので修行に使つていた木刀を二本構えながら慎重に進んでいく。

そろそろ、影らしき物が落ちた辺りだと思つんだが…そう思いながら足を進めていると。

「……うううう……」

少し前の林の中から何かの…いや、あきらかに人の唸り声が聞こえてきた。

警戒しつつ僕は声の聞こえる方に向かったが、そこで見たものは黒髪の小さな少年だった。

背丈から察するに、うちの末娘のなのと同じくらいだろう。

黒いズボンに、紫色の半袖のシャツ。その上から膝ぐらいまであるやや長めのロングコートを。靴は運動靴ではなく黒い革製の軍用ブーツのようなものをはいている。

一言で表現すれば全身真っ黒といったところか。

彼がこんなところにいるということはさっき見た小さな影は彼なのだろう。

僕はそう結論を出し、彼に声をかける。

「君、こんなところで寝ていると風邪をひくぞ」

「……うつ、ぐうう……」

まだ起きないようなので僕は強引に起こそうと彼を揺するために彼に手を伸ばした。

「なっ……！　すごい熱だ！　君、おい！」

触ってみて初めて彼が熱のために倒れていることに気付く。しかも体温が半端じゃない。これはこのままにして置くのはまずい。

僕はそう判断して彼を抱き上げ背負い、恭也たちの所まで急いで戻っていった。

side out

「まあ、そうだね。お父さんだもんね」

「ああ」

「…けどさっきの何だったんだろうね？」

「わからん」

「UFO…じゃないし。うゝん…」

「……」

美由紀は何やらさっきのことと考え込んでしまった。

普通はさっきのことは笑い飛ばすようなことなのだろうが、忍のこともあってかあまりそういう気は起こらない。世の中あり得ないことなんて結構あるものだ。

そうして少しの間待っていると父さんがやや急いで背中に何かを背負いながら帰って来た。

「おかえり〜。お父さ…ってどうしたのその子？」

美由紀の言つとおり、父さんは背中に黒髪で全身黒ずくめの男の子を背負って帰って来た。

「おかえりなさい。士朗さん…その子は一体どうしたの？」

帰ってきて真っ先に会ったのは出迎えのために出てきた最愛の妻の桃子だった。

「ちょっと訳ありでね…、すごい熱を出してるんだ」

「わかったわ。和室に寝かせましょう」

そう言って和室に寝かせる準備をしに向かってくれた。

僕が和室に着いた時はすでに準備が出来ていたので背負ってきた少年をコートを脱がし布団に寝かせる。

桃子が冷却シートを少年の額に張りながら体温計を使って熱を計る。

「38度…。このまま看病しておけば明日には大丈夫そうね」

「ほんとうかい？ 結構な熱が出たと思うんだけど」

「本当よ。ほら」

そう言って桃子は僕に体温計を見せてくる。

「本当だ…」

体温計にはキッチリ38度という数字が表示されている。ではさっきの熱は一体何だったんだろうか。

まあ、何はともあれ大事に至らなさそうではあった。

そして冒頭の部分に到るのである

* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *

「それがこんなことになるとはなあ…」

「 ? どういうことかしらっ…」

「それはリビングの方で説明するよ」

僕たちはいったんそのまま和室を出てリビングに行くことにした。リビングには恭也と美由紀が待っていた。

「お父さん、あの子は？」

「今は寝てるよ。明日には目が覚めそうだ」

「よかった…」

僕の報告を聞いて恭也と美由紀は安心したのか、肩から力を抜く。

「それで士朗さん。わたしにはいつになったら説明してくれるのかしら？」

「すまない、桃子。実はな…」

そうして僕は桃子に裏山での出来事を話す。

「扉、ねえ…不思議な事ってあるものなのね」

「信じてくれるのかい？」

「恭也たちも見ていたんだし、それに今まで土朗さんが私に嘘ついたことなんてないじゃない」

「桃子…ありがとう」

「それにしてもどこの子なのかしら」

「さあ？ 扉から出てきた子だから見当もつかないな」

「持っているものに何か証明できるものはなかったのか？ 父さん」

「ああ。一応コートの中まで探してみたんだが身元が分かるような物は出てこなかった」

「じゃあ、あの子の目が覚めるまで分からないってこと？」

「そついうことになるなあ…」

結局看病は交代することになり、僕たちはただあの少年の目が覚めることを待つことしかできなかった。

s i d e - o u t

白色のロボットさんが大きな銃2つを交互に撃っていました。
そして茶色っぽいロボットさんと白色のロボットさんが言い争って
もいました。

【革命を気取るか。ならば死を実践して見せろ、マクシミリアン・
テルミドールと同じように！】

【死など、とうの昔に乗り越えた！】

ちよつとわたしには難しい言葉を使っているのなんて言っている
のか分かりませんでしたけどうちのロボットさんも自分の想いをぶ
つけ合っているということは分かりました。

そのうち、ロボットさんたちは銃を撃つのをやめて光る剣みたいな
ので戦い始め、少したってからまたお話を始めました。

【企業の雇ったネクストが増援に来るそうだ。さすがのお前もそ
の機体の状態じゃ多勢に無勢だろう。残念だったな】

【時間がない、か……。しかたない】

白いロボットさんがそう言うと、あっという間に茶色っぽいロボッ
トさんを壁際に押していつて白く光る銃みたいな剣で体を刺してし
まいました。

すると建物の光が消えて真っ暗になってしまいました。

でもまだロボットさんたちはお話をしているみたいです。

【 一人の命を愚かというか…歪んでいるよ、お前も…世界も 】

【 歪んでいるのは認めるが、それがあんたの答えなどだろう？
ならばそれが間違いであるはずがない。あんたの答えも刻んでいく
さ… 】

【 そうか、だがお互いここまでのようだな 】

【 ばれていたか。正直しゃべっているのがつらい 】

【 私もだ。残念だが、後のことは他の連中がやってくれるだろう
さ… 】

【 ああ。…すまんなセレン、約束は守れそうにない… 】

【 …… 】

【 ウィンディー？ 】

【 …… 】

【 …先に逝ったか 】

【 …また初めからのだろうか？ 正直疲れたんだがな… 】

そういつて白いロボットさんは目をつむるみたいにお顔の光を消していきました。

そこでわたしは目が覚めました。なんだか部屋の中がぼやけて見えます。

まだ目が覚めてないのかな？
そう思ってたわたしは目をこすってみるとこすった手が濡れてしまいました。ここまで経ってからようやくわたしは…

「わたしは…泣いてるの？」

そう。泣いているのに気が付きました。
気付いてからはもう止めようがありませんでした。あとからあとから涙が出てきて、白いロボットさんの最期の言葉を思い出しては胸の奥がギュウとなって、悲しくなって…

結局わたしはお母さんが起こしに来るまでずっと泣いていました。

わたしが泣きやんだ後にお母さんはどうしてわたしが泣いていたのか聞いてきました。

だからわたしは夢で見たロボットさんのお話を出来るだけ詳しくお母さんに話しました。

「それでね、白いロボットさんが疲れたって、もう戦うのは御免だつて…」

そこまで言ってまた泣き出してしまったわたしをお母さんは抱きしめて、

「なのはは白いロボットさんにどうしたかったの？」

と聞いてきました。だからわたしは、

「もういいよって、グズッ…戦わなくてもいいよって、えぐっ…言
つてあげたかったの…」

「そう、なのははやさしい子ね」

そう言うってお母さんはわたしを抱きしめたまま頭をなでてくれました。

わたしは泣きやんだ後にまだ朝ご飯を食べてないのを思い出して時計を確認すると11時を過ぎていました。

た、大変です！ 少しというか結構というか、朝ごはんの時間を過ぎていきます！

わたしが慌てているのを見たお母さんが時計を確認し、

「あらあら、もう少しでお昼ね。なのはも着替えて下りてきなさい。ちよつと遅いけど、少なめの朝ご飯を作っておくわ」

「ありがとう、お母さん」

わたしがそう言うとお母さんはにっこり笑って一階に下りていきました。急いで着替えて下りて洗面所で顔を洗ってからリビングに行くとお兄ちゃんと、お姉ちゃん、それにお父さんもいました。

「おはよう、なのは」

「なのは、おはよう」

「おはよう、お兄ちゃん、お姉ちゃん」

「おはようにはちょっと遅くないかな？　なのは」

「にやはは…。おはよう、お父さん」

家族みんなに挨拶をしてリビングに来てから気になってたことをお父さんに聞くことにしました。

「お父さん」

「どうしたんだい？　なのは」

「お店は大丈夫なの？」

「ああ。今日はお休みにしたんだ」

そう言いながらお父さんは和室の方を見ました。わたしもつられて和室の方を見るといつも空いている襖が閉まっていました。

「なんで和室の襖が閉まっているの？ お父さん」

「えええ〜と、だな…」

お父さんは何か迷いながらわたしに何かを伝えようとして、

「士朗さんが連れて帰って来た男の子が寝ているのよ？」

「ふえ…？」

「桃子…」

私の朝ご飯を作って台所から持ってきていたお母さんに全部言われてしまったようです。

「いいじゃない、士朗さん。隠したって仕方のないことだわ」

「…そうだな」

「士朗さんがね、今朝恭也たちと帰ってくるときに熱を出して倒れている男の子を連れて帰って来たのよ」

「え？ ええ！？」

わたしは突然の出来事に頭の中が疑問でいっぱいです。
連れて帰って来た？ 男の子？ もう訳がわかりません。

とりあえずわたしは落ち着くために目の前に出された朝ご飯を食べることにしました。

ちょうど私が朝ご飯を食べ終わったころお母さんが、

「そろそろ、あの子の様子を見に行った方がいいかしら」

なんて言いながら和室の方に向かい始めました。わたしはちよつぴりその男の子の事が気になったのでお母さんに一緒に行ってもいいか聞いてみました。

「別に構わないけど、騒がしくしちゃだめよ？」

「はい」

お母さんからの許可が下りたのでわたしはお母さんの後についていきました。

和室の中にお母さんと一緒に入ったわたしはお母さんが言っていた男の子をみました。

黒い髪の毛で、髪型は目に掛かるぐらいの前髪を額より少し上で真中から左右に分けていてちよつとツンツン頭の子でした。

顔はその、えと……クラスの子に比べてもカッコいい方だと、思いました／／／

「あら？ どうしたのなのは。そんなところで立ち止まって」

「にゃ！？ な、なんでもないよ？ お母さん／／／」

「そう？ フフフツ、顔が真っ赤よ」確かにこの子寝込んでてもカッコいいものねえ」

「にゃ！？ にゃあああ！！？」

お母さんのその言葉にわたしは顔から火が出そうなほどに真っ赤になりました。

「はいはい。なのは、静かにしてなきゃだめよ？」

「うううう／／／」

お母さんがちよつと意地悪です。

そうこうしているうちにお母さんは手際よく男の子の汗をタオルで拭いて、冷却シートを張り替えてしまいました。

「さて、これで大丈夫かしらね。ほら、なのは。出るわよ。あんまりここにいてこの子も休めないでしょう？」

「うん」

わたしとお母さんは用が済んだので和室を出ることにしました。

でも、なぜかあの男の子を見た時に白いロボットさんのことを思い浮かべたということは最後までお母さんに言うことができなかったのです。

第2話 GATE（後書き）

「AAとジンのリリなお茶会」

AA「ええ、駄文書きの書きのAAです」
アサルトアーマー

ジン「この作品の主人公の迅だ。しかし一体なんだ、この突発的に始まったコーナーは……」

AA「ぶっちゃけ他の作者の方がしているのを見て、いいなあ」と……」

ジン「真似してみた？」

AA「うん」

ジン「駄文だけの阿呆じゃなく真性の阿呆だったか……。またもな文章も打てん奴が何をしているんだか……」

AA「いや、まあ練習がてらに？」

ジン「疑問形で聞くな、作者」

AA「基本的にこのコーナーは作品の愚痴と反省、感想返しを主軸に展開予定だ」

ジン「……思ったよりまとまだな。じゃあ愚痴と反省から逝くか？」

AA「字が違つような・・・？　まず愚痴と反省から。た、高町家のキャラごとの話し方がわからねえ！！」

ジン「ついに脳まで錆びたか？貴様」

AA「さつきから何、この作者を作者と思わぬ態度」

ジン「別に空気でも構わんだぞ？　貴様」

AA「（何この子・・・）えーとですね、作者はリリなのを二次小説と劇場版しか知らないんでなのは以外のメンバーの話し方がイマイチ掴めてないんですよ。劇場版じゃなのは以外喋らなかつたし」

ジン「まさか貴様・・・それで全シリーズ書けると思つてないだらうな？」

AA「思つてないし、そんな状態で書けるとは思つてない」

ジン「それはよかつた。　それ以上妄言を吐こうものならどうしようかと思つたぞ」

AA「とりあえず無印は劇場版主体でいくつもり。なので『劇場版観てねえよ！』っていう方。ネタバレになつていくと思うのでご容赦ください」

ジン「まあそれは仕方ないとして、主体っていうことはテレビ版やドラマCD版が入るということか？」

AA「正確には入るかもしれないって所かな？　ちゃんと調べてから入れたいし」

ジン「だな。愚痴はオレも言っていんだよな？」

AA「あゝ、うん。いいよ別に」

ジン「じゃ、言つがオレは今回唸っていたただけだな？ 一体どう
いうことだ？」

AA「それはだな、お前を喋らそうと思ったたら区切りの良いところ
までが恐ろしく長くなりかねなかったからだ」

ジン「本当だろうな？」

AA「ホント、ホント。起きたお前と高町家でテンプレ展開する
話までだから結構長い」

ジン「さりげなくネタばらしだな」

AA「あつ、ホントだ」

ジン「（大丈夫なのか？こんな作者で）やはり阿呆か」

AA「えー、あんまりダラダラ書くのもあれなんでこの辺で」

ジン「感想、アドバイス待っている。この阿呆のやる気に繋がる
んでな」

AA「いまだ無印にすら入っていませんが長い目で生暖かく見て
くれればさいわいです」

A A・ジン「これからもうよろしくお願いしますm（——）m」「

今日の一言』ざ・わーんど！ 話の内容が進まない』

第3話 MINDS（前書き）

毎度お馴染みの（馴染まない）AAです。
導入編完結です。

さあ、次話から時間を飛ばして無印だ！！・・・どうしよう。

今回はジンがハガレンの真理の門的ななかで知識を叩き込まれます。

うまく表現できるといいなあ。

不定期更新ですが応援していただければと思います。

第3話 MINDS

第3話 : MINDS

s i d e - ジン

頭が割れる頭が割れる頭が割れる頭が割れる頭が割れる
頭が割れる頭が割れる頭が割れる頭が割れる頭が割れる
頭が割れる頭が割れる頭が割れる頭が割れる頭が割れる
頭が割れる頭が割れる頭が割れる頭が割れる頭が割れる
頭が割れる頭が割れる頭が割れる頭が割れる頭が割れる
頭が割れる頭が割れる頭が割れる頭が割れる頭が割れる
頭が割れる頭が割れる………！

やめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろ
やめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろ

やめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろ
やめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろ
やめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろ
やめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろ
やめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろ
やめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろ

「……じゅうじゅう」

オレの頭に勝手に入るな！

「君、……で寝て…と…邪を……ぞ」

何か聞こえるがそんな事にオレは構っている暇などない…！！

平行世界の跳躍世界のルールによってオレ自身が塗り替えられていく前の世界の技術は全てこちらの世界のものに修正されるコジマ技術AMS技術光学兵器技術巨大兵器の運用技術ネクスト機体オレの愛機エレベア魔導士騎士基礎魔法理論多次元世界の解釈次元航行技術インテリジェントデバイスストレージデバイスアームドデバイスデバイスインターフェイス及びそれに準ずる作成に必要な技術失わ

頭が痛い。

オレは自身の脳髓を満たす鈍痛により目を覚ました。

「知らない天井だ…」

なんとなしに呟いてみる。どうやらまだ頭はゆだっているようだ。
オレは布団に寝かされているらしい。これは、和室か？ 懐かしい
な…

庭が見える窓の外の空の色を見る限り、どうやら今は夜らしい。

そんなことを考えながら自分の体を起こす。すると首に掛かっていたエジプトの絵画っぽい、眼をイメージにしたのであろう造形のネツクレスが視界に入る。

「エレベア、か？」

《そうです、リンクス。私はあなたの愛機であったエレベアです。正確に言えばネクストに搭載されていたシュミレーション用のAIが元なのですが…》

ネツクレスの眼の青い部分、コアなのだろう部分を光らせながらしゃべりだしたネツクレスを見てもオレは何も思わなかった。まるでそれが当然なのだというように…

「お前がオレの、デバイスなのか？」

《…Yes Links》

オレの問いにエレベアは迷うように、しかしながらしっかりと返事を返してきた。

「なるほど、な。ここがどこだかわからんのに、お前が何なのか理解できることが皮肉だな」

《そう、ですね。わたしも自身がどういう存在かわかるのですが、わかることが分かりません》

こいつはオレの愛機であったネクストのエレベアだ。本人(?)の言う通りならシュミレーション用に搭載されていたAIらしいが。

「なんか、ややこしい会話だな」

《はい…》

「しかし、お前のそのデザインはホワイトグリントのエンブレムが…」

そう、さっきからばかしながら表現しているがエレベアのデザインはそのまんまホワイトグリントのエンブレムなのである。

ただし、眼に当たる部分が青い宝石のようなものでできているのだが。

唐突に頭の中から知識が溢れ出すかのように浮かんでは消え浮かんでは消えを繰り返し始めた。

「今わかってきたことなんだが…ここは平行世界とやららしいな」

《…その、ようですね。私の方もそのように認識できるようになってきたようです》

「…戻ることもできないようだな」

《私のほうでもそのような知識は存在しないようです》

「お前の構成、魔法とやらの基礎理論も。勝手に頭に思い浮かんできて困るな」

《推定ですが、おそらく無理やり詰め込まれた知識が処理できずにいるのでしょう》

「オーバーヒートしてるって訳か」

さつきから頭の中で溢れ出すように知識が思い浮かんでくる。

それも現在の状況と全く関係のない知識やらも溢れてくるから始末に負えない。

《その通りです、リンクス》

「リンクスはやめてくれ。この世界にはネクストはないらしいし、オレの見た目は子供だ。傭兵なんて柄じゃないだろう?」

そうなのだ。起き上がってみると何か目線が低いと思って部屋にあった化粧台の鏡を見ると小学生ぐらいの黒髪のがきがいた。自分の体の変化に戸惑ったが別に初めてのことではないので放っておいている。

《そうですね。ではなんと呼べばよいのでしょうか?》

「"ジン" でいい。そうだなこの世界では"ジン・R・アナトリア" と名乗ろう」
レイヴン

この身はかの伝説といわれたレイヴンのクローンだ。

それに世界が違う。

あの世界のことを忘れないためにこの名を継ごう。伝説の、そしてリンクス戦争の英雄の名"レイヴン・アナトリア"を…

《……わかりました。リンク…いえ、ジン》

「これからよろしく頼む。長い付き合いになりそうだ」

《ジン…。こちらこそよろしく願います。しかし、この世界に

は魔法がないようですね…」

「だな。この世界では使うことになりそうにないのだが…使わないのならこんな特典じみたものが付くはずがない」

《いずれ巻き込まれる、と?》

「ああ。異端の力は異端の力を呼ぶだろう」

それに他の次元世界にはあるようだしな、とぼやくオレは部屋の外からこちらに向かってくる足音を聞いた。

「『この家の人間が来たみたいだな。少しの間黙っておけよ、エレベア』」

《『はい、ジン』》

オレは新しく得た知識の中から ” 念話 ” とやらでエレベアに指示を出す。

指示を出し終えてからすぐに襖が開かれた。
向こうの部屋からの光が逆行でまぶしいが影から判断してどうやら襖を開けたのは女性らしいことはわかった。

「あら、目が覚めたの?」

「…ええ。まだ頭がズキズキしますが」

あまりにも警戒心のない柔らかな声で尋ねられてしまったのでつい自分の状態を答えてしまった。

「そう、ならもう少し休んでいなさい」

「いえ、ですがご迷惑に……」

「い・い・か・ら・休んでなさい」

「……はい」

何か得体の知れないプレッシャーに負けてまた布団をかぶるオレ。

《『あれですね。セレンさんに似ていますね』》

「『ああ……なるほど。方向性が違うがそんな感じだな。なんか逆らえん』」

「？　どうかしたかしら？」

「いえ、なんでもないです。………何も聞かないんですか？」

「しんどいんでしょう？　病人には何も聞かないわ。明日調子が良さそうなら聞くことにしましょう」

夜になってなのはが眠るために自分の部屋に上がって少したった後、私はあの子の様子を見ることにした。
あの子の眠る和室の襖を開けると驚いたことにあの子は起きて布団から体を起こしていた。

「あら、目が覚めたの？」

起きているとはいえ熱があったのだ。私が心配してそう声をかけると彼はポカンとした表情を浮かべてから私に返事をしてくれた。

「…ええ。まだ頭がズキズキしますが」

確かによく見るとまだ顔色はまだ良くないようだし、少し頭がフラフラしている。

「そう、ならもう少し休んでいなさい」

「いえ、ですがご迷惑に…」

「い・い・か・ら・休んでなさい」

「……はい」

あんまりにも恐縮そうにしていたのでやや強引に布団に私は彼を寝かせようとしたら、あの子は渋りながらもすっかり布団に入ってくれた。

私があの子の汗を拭いたり冷却シートを替えたりしている間に何か視線を感じたのでそちらに向くと、彼が見ていた。

「？　どうかしたかしら？」

私がそう尋ねるとどこか気まずそうにして、

「いえ、なんでもないです。……何も聞かないんですか？」

なんて聞いてきた。

ああ、なるほど。得体の知れない人間である彼を何も聞かずに看病をしている私を不思議に思っただろう。この子は見た目よりずっと大人びているみたいね。

「しんどいんでしょう？　病人には何も聞かないわ。明日調子が良さそうなら聞くことにしましょう」

「…ありがとうございます」

「おなかは空いてない？ 軽いものでも食べる？」

「大丈夫です」

「そう。なら今日はもう寝ちゃいなさい」

「はい」

「それじゃあまた明日ね？」

「はい、また明日。えと、おやすみなさい？」

私はまさかそう返されるとは思ってたので少しびっくりしたがすぐに彼に返事を返した。

「…ええ、おやすみなさい」

フフフツ、大人びてる子だと思ってたけれど案外素直な子だったわね。

そして私はリビングに戻る途中で大切なことを思い出した。

「あっ！ あの子の名前、聞くのを忘れちゃった」

「桃子、どうしたんだい？」

僕が不思議に思って声をかけると、

「あの子が目を覚ましていたみたいで少しお話をしたのよ」

なんてかわいらしく言った。

ああもう、桃子はいつまでたっても可愛らしいところが……ってそうじゃなくて！

「目が覚めていた！？」

「士朗さん！ しゝ……」

僕は急な出来事につい大きな声を出してしまったが桃子に注意されて声のトーンを下げる。

「それで何を話したんだい？」

「うゝん……今の容体かしら？」

「……それだけかい？」

「それだけよ？」

「あゝ…じゃあなんでそんな上機嫌なんだい？」

「フフツ。あの子ね、見た目と中身がチグハグな印象を受けるんだけど気を抜いたときときの言動が年相応っぽくってかわいいなあって思っただけよ」

「……」

「それにね…」

桃子があの子の少年の事について語っているが、ああ、ダメだ。どうやら桃子の琴線にふれてしまったようだな。

「それでね、ちょっと困った風におやすみなさいっていつのよ」
「…」

明日は大変そうだな。僕は現実逃避しながら桃子の話を聞き流すのだった。

s i d e o u t

エレベアと喋っているとまた外から誰かが近づいてくる音が聞こえたので、昨日と同じようにエレベアに指示を出したところでまたもや昨日と同じ人物が顔をのぞかせた。

「やっと起きたのね。おはよう」

「えーと、おはようには日が昇りすぎている気がします…おはようございます」

昨日は逆光でよく見えなかったが腰まで届くような長い栗毛の髪の毛の綺麗な人だった。

「なにか食べれそうかしら？」

「はい。むしろお腹が減っている方だと思います」

そのとき計っていたかのようにオレの腹の音が鳴る。

き、気まずい…。今のオレの顔は真っ赤になっているだろう。

あまりに恥ずかしかったので俯くことしかできなかったオレを見ながら目の前の美人さんは少し笑い、

「フフツ。ついていらっしやい。軽めのものを作るわ」

「…何から何まですいません」

そんな会話をしながら目の前の美人さんについていき、リビングの
ようなところで待つように言われたので適当な椅子に腰かけ待つ。
ほどなくしていいにおいが漂いはじめ、少ししてからおいしそうな
リゾットが運ばれてきた。

「はい。簡単なものしか作れなかったけど…」

「いえいえ、作っていただいてありがとうございます」

「どういたしまして。それではどうぞ召し上がれ」

「はい。それではいただきます」

そんな会話をした後にはオレはリゾットを口に運んだ。

「っ!？」

昨日から何も食べてなかったせいもあるのだろうが作ってもらった
リゾットはとてもおいしく、口に運ぶスプーンが止まることはな
かった。

「ごちそうさまでした。とってもおいしかったです……」

オレがリゾットを食べ終え感謝の意を作ってくれた目の前美人さんに伝えようと顔を上げたところで、人が三人ほど増えていたことに驚く。

「えーと、いつぐらいにいました？」

「君が一心にリゾットを食べ始めたころぐらいかな」

「わたしたちはそのちよつと後ぐらいかな？　ねえ、恭ちゃん」

「ああ、そのくらいだろう」

そ、そんな前からいたのか…。

新たに現れた男の二人と眼鏡におさげのこれまた美人さんの三人組がいた。それでも一樣戦場に出ていたから気配には敏感なはずなんだけどなあ。

などとひそかにショックを受けているオレに向かってこの中で一番隙のない男の人がこちらに話しかけてきた。

「とりあえずお互いの自己紹介から始めようか」

「あ、はい。そうですね」

「僕は高町士朗。隣の恭也たちの父親だよ」

「次は私ね。私は高町桃子。士朗さんとは夫婦よ」

「じゃあ次は俺だな。高町恭也だ。身分は大学生だ」

「はいはい！ わたしの名前は高町美由希だよ。高校に通ってまゝ」

とまあ、目の前の人たち改め高町家の面々はそれぞれ個性豊かに自己紹介してくれた。

「んんっ。…オレは、ジン・R・アナトリア^{レイヴン}です」

「じゃあ、ジン君と呼んでいいかな？」

「はい、結構です。高町さん」

「士朗でいいよ。ややこしいだろう？ みんなもいいよな？」

「私は構わないわよ？」

「わたしも」

「俺も構わない」

「わかりました。士朗さん、桃子さん、美由希さん、恭也さん」

「うん。それでな、ジン君」

「はい」

「君はいつたい何者だい？」

「……」

その質問が来たとき心中『ああやっぱりか』とは思った。

「君が大きな扉みたいな物から出てきたときはびっくりしたよ」

「!？」

まさか、アレを見たのか！？ てっきりどこかで倒れているのを助けてもらったばかり思っていたが… これは誤魔化せるか？

「えーっと……」

「「「「「……」」」」」

4人ともオレが答えるのを黙ってじっと待っている。これはムリそうだな…

「…これから語ることは荒唐無稽な話かもしれない、信じられない話かもしれない。それでも聞いてくれますか？」

オレの言葉に黙って頷く4人。

「ある世界がありました。人類は地上の深刻な汚染を……」

そしてオレは前の世界の事を語った。

オレ自身は24、5歳だった事。

世界の汚染の事。

人型巨大兵器アーモードコア・ネクストの事。

クレイドルの事。

ORCAの事。

クローズプランの事。

アルテリア・クラニウムでの死闘の事。

オレは前の世界でおそらく死んでいる事。

そしてここは並行世界と言われる世界であるという事。

オレは魔法の事やオレの出自の事、ループを繰り返していたことは伏せつつ伝えるべきことを伝えた。

「……以上です」

「」「」「……」「」

話し終え、食後にと出された紅茶で喉を潤す。うん、おいしい。

4人は皆黙りこくっている。

それはそうだ。いきなり並行世界だのなんだの言われても戸惑うだけだろう。

オレはこの人たちのお世話になった後、今後どうすればいいのか考えようとしていたところに恭也さんが声を上げる。

「俺はジン君の言ってること、信じるぞ」

…驚いた。この中で一番頭が堅そうなイメージだったのに一番最初にそんな事を言うとは…

「それにな、あんな扉を見せられてはありえないことなんてないと思ってしまうぞ?」

「たしかにそうだね」

続けて美由希さんが声を上げる。残った大人二人は難しい顔をしているが、桃子さんがオレに不思議な質問をしてきた。

「ジン君」

「はい、何ですか桃子さん?」

「ジン君はその ” あーまーどこあ ” って奴に乗っていたのよね」

「? はい、ネクストに乗って独立傭兵として生活していましたが?」

そこまで答えると桃子さんは言いづらそうにしながら質問を重ねてきた。

「その…ジン君の最後に戦ったという…」

「アルテリア・クラニウムですね？」

「そうそれ。それって中は薄暗いの？」

「？ はい、そうですが……」

他の三人も質問の意味がわからないのか首をかしげている。

質問の意図が全く分からなかったオレは次の質問で驚かされることになる。

「ジン君の乗っていたロボットって全身真っ白で、目の部分が青くて、背中に羽みたいなのがある？」

「……どうしてそれを？ オレってそこまで詳しく言いましたっけ？」

「いいえ、そこまで言っていないわ。最後にもうひとつ……ジン君が最後に戦っていたロボットは茶色っぽくて青いビームを撃つ？」

「っ！？ どうして知っているんですか！？」

ここまで言い当てられては逆にオレが落ちついてられなかった。

「ジン君、とりあえず落ち着いて」

「！？ はい……」

オレをなだめて落ち着かせた後、桃子さんは再び口を開いた。

「実はね、ジン君が内に運ばれてきた朝になのはが悲しい夢を見た
って泣いていたの」

「なのは？」

オレは聞き覚えのない人物が出てきたのに疑問を浮かべていると士朗さんが内の末娘なんだと教えてくれた。
今はいないのでどうしたのかと聞いてみると友人の家に遊びに行っているらしい。

「疑問も解けたところで、話を進めてもいいかしら？」

「ああ、すいません」

「それでなのはが泣いていたからいったいどんな夢を見たのって聞いたら『暗い何か大きな建物の中で2体の大きなロボットさんがすごいスピードで戦っている夢だった』って」

「……」

「じゃあなんで泣いていたのってきたら『白いロボットさんが疲れたって、もう戦うのは御免だって…』って言っていたのを聞いて悲しくなったって…」

それを聞いて愕然とした。まんまあの時の事じゃないか！

「それでジン君の話している話によく似ていたなあ」と思ったんだけど…、ジン君？」

「……」

「ジンく〜ん？」

桃子さんの呼びかけでオレはハッと我にかえた。

「それでどうだった？」

「間違いありません。最後にオレはそんな事を言っただと思います」

「じゃあ、私もジン君の事を信じるわ」

「「は？」」「

脈絡がなさ過ぎてつい士朗さんとセリフが被ってしまった。

「だって夢に出てきた人と同じ、なんて不思議な事が今現実目の前にいるのよ？」

信じない方がおかしいでしょう？なんて言う桃子さん。

思わず士朗さんと顔を見合わせてしまったオレは悪くないはずだ。

「わかったよ、僕もジン君の話を信じるよ。全くこれじゃ僕が悪者みたいじゃないか…」

なんて言って結局高町家の人間はみんな信じてくれた。何と云うか、予想外だな。

「ああ！ そうなるとわたし、ジン君て呼ぶよりジンさんて呼んだ方がいいのかな？」

美由希さんが若干の外れな事を言う。

「いえ、今まで通りで構いませんよ。この体は7歳児らしいですから。それに『健全なる魂は健全なる肉体に宿る』っていうでしょう？ 昨日から肉体の方に精神が引つ張られているようで所作のところどころが幼児退化しているようですし…」

「そう？」

「そうですよ」

なんて会話をしていると士朗さんと桃子さんが何か相談事をしていくようだったのだが決着がついたのか、オレに士朗さんが質問してくる。

「ところでジン君」

「はい、何ですか士朗さん？」

「この後の予定とかは決まってるのだろうか？」

「ええ、特にこれといって行く当てもありませんしどうしようかと考えていたところです」

「じゃあ、しばらく家に住まないか？」

それはとても魅力的な提案だった。現状、さっき述べたように行く当ても戸籍すらないこの状況でどうしようかと思っていたのだ。

「…いいんですか？」

「ああ、いいともさ。恭也と美由希はどうだ？」

「俺は賛成だ」

「わたしもOKだよ」

「ほら、恭也たちもこう言ってるし」

「ですが…！」

「戸籍すらない君には世間はつらいぞ？」

「うう…！」

「もう士朗さん、あんまり意地悪しないの。で、どうかしらジン君？」

「うーん…。一つ条件が」

「条件？」

オレが出した条件という言葉に首をひねる士朗さんたち。

「なのはちゃん…でしたっけ？ 彼女の意見も聞いてあげてください。全てはそれからです」

「ああ、何だそんなことか」

「そんな事か、じゃすまないと思うんですけど…」

「大丈夫よ。もうすでに許可をもらったから」

なんて言って得意げに携帯を振る桃子さん。

おまけという名の蛇足

s i d e - 高町なのは

わたしは今日、すずかちゃんの家でアリサちゃんとすずかちゃんとお茶会をしています。
けれどわたしは昨日の男の子の事が気になってそれどころではありませんでした。

「ちょっと！　なのは、聞いているの！？」

「にゃ！？　ごめんねアリサちゃん……」

「謝るぐらいなら私たちに相談しなさいよ……！」

ああ、悩んでいるのがバレしてしまったのか。アリサちゃんを怒らせてしまったようです。

「まあまあ、アリサちゃん。それにしてもどうしたの？なのはちゃん」

すずかちゃんがアリサちゃんをなだめながらわたしに聞いてきます。そこでわたしは昨日会ったことを二人に話すことにしました。

「…っというわけなの」

「ふん、倒れてた、ねえ？」

アリサちゃんが疑い深そうに聞いてきます。
それとは対症的にすずかちゃんは興味深そうに私にさらに質問してきました。

「どんな子なの？」

「え」と…／／／

は、恥ずかしくてい、言えません！ クラスの子に比べてもカッコいい男の子だなんて！

私のそんな態度が気に障ったのかアリサちゃんも聞いてきました。

「なによ、何か言えないことでもあるって言うわけ？」

「そ、そんなことないよ！」

「じゃあなんなのよ」

「ううゝ…／／／」

「なのはちゃん」

「すずかちゃんまで…ううゝ、しょうがないよね？」

「……………ったの」

「なによなのは。声が小さくて聞こえなかったわ」

「……………よかったの」

「え？ 何がよかったの？なのはちゃん」

「クラスの子に比べてカツコよかったの！！」

わたしは自棄になってつい大きな声で叫んでしまった。

わたしの小さな声を拾おうとしていたアリサちゃんとすずかちゃんは耳に手を当てて離れていきました。

「ゝゝゝっ！ なにするのよ、なのは！」

「あう、頭がくらくらする…」

「ご、ごめんね。アリサちゃん、すずかちゃん。大丈夫？」

「大丈夫じゃないわよ全く…」

「…まだちょっとくらくらするかも」

わたしが落ち込んでしょんぼりしているとアリサちゃんが話を進めてくれました。

「それで？ カッコいい男の子に一目惚れしたのは何を悩んでいるっていうの？」

「ひ、一目惚れって…」

わたしは何か反論しようとしたがアリサちゃんが目で違うの？って聞いてきたアリサちゃんにわたしは反論できませんでした。

「で、ほんとに何を悩んでるの？」

「えと、その…」

「あ、もう！ さっさと言いなさいよ！」

「なのはちゃん!？」

「さ、さ、さささつき話してお、お男の子と一緒に住ましてあげたいんだけど、どう？　ってお母さんが!？」

「アンタ、落ち着きなさいよ!」

「わわわわかったなの!」

「アンタ全然落ち着いてないじゃないの!」

「アリサちゃんもなのはちゃんも落ち着いてよ!」

s i d e
o u t

第3話 MINDS（後書き）

「AAとジンのリリなお茶会」

ジン「酷いな」

AA「ちょ、いきなりなんだよ・・・」

ジン「話が酷過ぎるだろう。これは」

AA「・・・黙秘権を行使する」

ジン「いきなりフラグ立つし。オレ寝てただけだぞ」

AA「・・・さて、感想返しをしよう」

ジン「オイ！無視か！！」

AA「うるさいな！作者たるおれだって反省してるわ！」

ジン「どの辺が？」

AA「駆け足過ぎたかなあ、とか。それにしても長いなあ、とかだよ！・・・」

ジン「自覚あんのかよ！！ まったく・・・」

AA「しかしよろこべ！！ 感想に『神と俺の原作破壊物語』の悠先生様からおもしろかったという感想をいただいたぞ！」

ジン「社交辞令だっつの。真に受けるなよ・・・」

AA「くくく」

ジン「聞いてねえし。おい帰ってこーい」

AA「ハッ!? いかんいかん。あまりのうれしさにUBWの詠唱を口ずさんでしまったわ!!」

ジン「全部覚えてんのかよ・・・」

AA「士郎版もアーチャー版も劇場オリジナル版も英文、日本語どちらもそらで言えるぜ? 書けもするしφ(・・)カキカキ」

ジン「阿呆だなんて、どこに書いてやがる! 書くなら自分のそのマヌケ面に書いておけ!・・・今ので作者に心当たりのある知人がいる奴。生暖かく見てやるか、弄って遊ぶかしてやってくれ」

AA「じゃあ今回はこの辺で」

ジン「引き続き感想、アドバイス待っている」

AA「これからも」

AA・ジン「「応援よろしく願いいたしますm(____)m」」

第4話 出会いの魔法（前書き）

すみません。大変長らくお待たせしました。

リアルが留年危機のAAです。
アサルトアーマー

明日追試だ（＜―＞）

とりあえずあんまり長く放っておくのも何なので投稿。

感想、アドバイス、誤字指摘、物語の展開希望など待ってます。

第4話 出会いの魔法

第4話 : 出会いの魔法

魔法少女リリカルなのは 白き閃光の後継者
Magical Girl Lyrical NANOHA
Successor of WHITE-GLINT

真夜中の森。

蠢く異形と戦う少年。

一人と一体は移動し続け、やがて開けた大きな池のある広場に出る。

「お前はこんな所にいちゃいけないんだ！」

「グオオオオオオオオ！」

異形はその不定形な体から水を固めたような球体を作りだし少年に弾丸のようにして放つ。

少年は繰り出される数々の弾丸を避けるがそのうち避けきれなくなっている。

程無く限界が訪れ、少年は手のひらを中心に緑色の魔法陣を展開し防御し始める。

「ぐううううう……！」

「ガアアアアア！」

少年に己の攻撃を防がれたのが癪なのか、次々と球体を発射していく異形。

それをことごとく防ぐ少年。

異形が攻撃し、少年が防ぐ図式が成り立っていたが不意に異形は攻撃の手をやめる。

「ハア、ハア、ハア、今のうちに封印を…」

少年はそう言うと言から掛けていた真紅の宝石を右手の人差し指と中指の間に挟むようにして持ち、先ほど異形の攻撃を防いでいた魔法陣の構成を変えていく。が、それをただ黙ってみていた異形ではない。体勢を立て直すと共にその巨体に似合わないスピードで少年に突進を仕掛ける。少年は異形の突進を先ほどと同じように防ぐと少年が指に挟んでいる真紅の宝石は徐々に光が灯り始め、女性の声と共にその表面に封印を意味する英単語が左から右へ流れる。

「ジュエルシード、封…」

「グギヤアアアアアア！」

少年が異形に何かしようとしたがその前に異形が渾身の力で少年を空高く吹き飛ばし林の向こうに叩き込んでしまう。異形はそれを確認すると追撃しようとはせずそのまま行方をくらましてしまった。吹き飛ばされた少年はダメージが大きかったのか立とうとするがなかなか立てずにいたが、ついには力尽きてうつ伏せに倒れてしまう。

「早く…あれを…封印、しなく…ちゃ…」

そう言って少年の体が一瞬緑色に光ったかと思うと、そこには一匹のフェレットと赤い宝石だけがその場に残っていた。

* * *

それは不思議で、

なぜだか心がざわめく光景。

—— だけど目が覚めれば、

それはやっぱり、ただの夢。

いつも通りの日々、

いつも通りの毎日。

いつもと違ったのは

小さな「彼」と出逢ったこと

それが運命の始まりだと、

まだ知らずに。

[illegible]

窓のカーテンの隙間からは朝を示す明るい光がさし、小鳥たちがさえずっている朝。

部屋の主たる少女は、まだ気持ちよさそうに布団に潜りこみながら眠っている。

だが少女には学校がある。夜のうちにアラームの設定をしておいた携帯電話が予定通りの時間になって鳴り響きだす。

「うーん……」

少女は布団から出ずに腕だけを出し、寝る前に携帯電話を置いた場所を手探りで探り当てるとそのまま布団の中に引き寄せてアラーム

を切る。

いつもならここでまた寝てしまい、現在ひとつ屋根の下に暮らしており想いを寄せている少年 兼 兄貴分の少年に起こされるのがいつもの朝の定番の風景（少女にとっては大切な日課）となっているがこの日少女は自らの意思で起きた。

なぜなら、

「…うん。なんか、変な夢」

そういったのは頭の横で栗色の髪をツインテールにしている青みがかった瞳の色をした少女、名を高町なのはというが…今日は妙な夢を見て眼が冴えてしまっていたのである。

「変な夢？　なんかどつかで同じような事があったような気がするの」

とはいっても普段は起きない時間帯であるため半ば思考もろとも眠った状態ではあるが…

そうして少しの間ボーとしていると　”コンコン”　と部屋のドアをノックする音が聞こえる。

「なのは、起きろよ。飯食う時間がなくなるぞ」

「ふぁゝい」

なのはは眠たげな声でドアの向こうの人物に返事をする。

「……起きてるのか？ 入るぞ？」

何かに驚いたのか、少しの間だけ時間の間隔を開けてからドアの向こうの人物は部屋に入ってくる。

その人物はまだまだ少年の域を出ない少年であつた。

黒髪にエメラルドのような綺麗な翠眼。髪型は目に掛かるぐらいの前髪を額より少し上で真中から左右に分けたいつも通りのツンツン頭。

「ホントに起きてた…と思ったらまだ寝てやがるな」

なのはは部屋に入ってきた少年をいまだ働かぬ頭でぼうつと何とはなしに見ていたが、

パン！！！！

少年が自らの手と手を勢いよく叩いた大きな音を聞いて体を一度ビクツと震わせるとようやく目を覚ましたかのようになのは少年に向かって挨拶をしだす。

「…ふぁ。おはよう、ジン君」

「おはよう、なのは」

なのはにジンと言われた少年はそう挨拶をすると部屋のカーテンを開けながら疑問に思っていたことを聞く。

「珍しいな、なのはが起こしに来るまでに起きているなんて。今日は雨でも降るかな？」

「ふ、降らないよー！！ わたしだって朝ぐらい起きれるもん！！」

ジンの言葉に憤慨し、頬を大きく膨らみながら両手を頭の上でブンブン振るなのは。ジンはそれを微笑ましそうに見ながらさらに言葉を重ねる。

「いつも起きてこない奴が何言ってるんだか…。説得力がないぞ？なのは」

「うつうつ…」

いつも起こしてもらったために寝ているのだ、とは言えないのはとそんな事は見越したうえで更に質問するジン。

「じゃあこれからは朝に起こさなくてもいいんだな？ いや、仕事の一つ減って何よりだ」

「そそそ、そんな事ないよジン君！？ 今日は何々だよ！？」

このままでは朝の日課が潰れてしまうとテンパるなのは。ジンはその反応に満足しつつ、本来の仕事を果たす。

「うん、いつものなのはに戻ったな。さっきまでやけに暗い顔をしていたぞ？」

「……」

「ほら起きたんならさっさと着替えて下に降りて来い！ せっかく早く起きたんだからゆっくりごはん食べる時間ぐらいあるぞ？ 今日」

「…うん！」

なのはは自分のことを心配してくれたことをうれしく思いながら満面の笑顔で頷く。

ジン・R・アナトリア^{レイウン}だ。

高町家の人間に拾われてからもう1年も経つ。

最初の頃はただの居候だったが…、現在はなぜか高町家の養子となっている。

わからん。

本当に居候だけで済ますつもりだったのにいつの間にやら戸籍を偽装するだの、学校へ行くだの言ってくるのを尽く断ろうと思ったが桃子さんの謎のプレッシャーに負けて思わず頷いてしまっただけから坂道を転がり落ちるようにして現在の状況になってしまっている。

……本当にわからない。

高町家の人間というより士朗さんと桃子さんという人間というものがわからない。

なにか犯罪行為が混じっていた気がして思わず聞いてしまったオレに二人は仲好く声を合わせて

「バレなきゃ犯罪じゃないんだよのよ？ ジン君」

なんて言ってきた。啞然としていたオレの肩を恭也さんが叩き、振り向いたオレに同情の眼差しを送りつつ首を振る恭也さん。

(諦める)

うん。オレには聞こえたね。恭也さんの心の声が…

この出来事から恭也さんとの仲が一気に良くなったのは言うまでもない。

《ジン。そろそろ起きなければ朝食に間に合いませんよ》

「ああ、わかってるよ」

そう言っただけでオレは眠っていた布団から体を起こす。高町家から与えられた二階にあるオレの部屋のカーテンの隙間からは清々しいほどの青空が見える。

「ん…おはようエレベア」

《はい、おはようございますジン。というか起きていたのですね?》

「…まあな。何か嫌な予感がして考え事してたんだ」

そう。起きてから今までグダグダと布団で考え事をしていたのは起きてから感じているこの感覚が何なのかを考えていたからなのだ。

……途中から現状確認になっていた気がするが orz

《嫌な予感、ですか？ 夜のうちにこの辺りで魔力反応がありましたか…それでしょうか？》

「なんだって…？」

オレのこぼした愚痴にエレベアの口から驚くべき情報が出る。

《はい。大きな、ですが曖昧とした魔力反応が10件以上。それと戦闘をしていたのであろう魔力反応が一件ありました》

「……今日が、オレの力を振るうときなのか。あるいは大きな流れ、運命の日とやらなのかもしれんな」

《どちらにせよ、ジン。なのはちゃん巻き込まれる可能性があるありますね》

「そうだな。現状でおそらく平均的な保有魔力量以上を持っているのはだ。オレ以上に力のあるものが巻き込まれないはずがない、か」

ちょうど一年前のことだ。居候をする身としては高町家の人間に迷惑をかけたくないのでオレ関連で巻き込まれそうな人はいないかエレベアに頼んでサーチしてもらった結果

高町なのはに魔力反応あり。

しかも保有魔力量が半端じゃない。軽く、とは言わないがオレ以上の魔力を持っていた。この世界では魔法がないが故に興味などないとは思ったがいずれオレと共に巻き込まれる可能性がある。

だからオレはすぐにこの家を出ようと思ったのだが、さっき考えていた通りに有無を言わずいろいろと押し切られた結果いつの間にか養子にまでなっていた。さすがに高町の姓まではもらわなかったが…

まあここまで来てはしょうがないと開き直り、オレ達で何とかすることを決意したのだった。

「オレ達で何とかできればそれでいい、もし巻き込まれたのならオレが守ってやればそれで良しとするしかないか…」

《はい。ミッション内容を確認します。内容は ” 高町なのは ” またはそれに準ずる者を巻き込まないこともしくは防衛すること、ですネ》

「フツ、そう、だな。じゃあ、久しぶりにミッションを遂行することにするか」

エレベアの言い方は以前の世界の生活を思い出させるものだった。ミッション。そうだこれは成し遂げなければならぬ仕事、あるいは責務か。オレにやさしく接してくれた人たちに迷惑だけはかけたくない。

結論を出したオレは一階に向かって下りていった。

一階に下りて洗面所に向かい顔を洗ったオレはリビングに向かうとすでに桃子さんが朝食の準備を終えており、あとは家族が揃うのを待つだけだった。

「あら、おはようジン君」

「おはようございます。桃子さん」

「んー、やっぱり」お母さん　　「って呼んでくれない？」

「…勘弁してください」

このやり取りは何回もしてきた。どうやら士朗さんも桃子さんもオレに　「お父さん」　「お母さん」　と呼ばせたいらしい。さすがにそれは勘弁して欲しいものだ

「強情ねえ、もう家族でしょう？ その敬語もやめてって言ってるじゃない。それより今日は遅かったわね、どうかしたの？」

「いえ、昨日の夜は少し寝付きが悪かったただけで…だよ」

「そう？ とりあえず士朗さんたちは…」

桃子さんと他の家族が揃うまで話をしているとタイミングよく道場の方から士朗さん達が帰ってきたみたいだ。

「…来たみたいだからなのは起こしに行ってもらえるかしら？」

「わかり、わかったよ」

「ふふっ、お願いね？」

オレが敬語を使わないよう四苦八苦している姿を微笑ましそうに見つつそうお願いしてくる桃子さん。美人のお願いは最優先だ。

…どうでもいいがその温かい視線で見るは止めてもらいたい。オレはいい歳の（中身は）男なんだが…

オレはなのはを起こしに行くために再び二階のオレの部屋の横の部屋に向かう。

「桃子さんには敵わない…」

《相変わらず桃子さんには弱いですね、ジン》

「なんか強く出れないんだよねあゝ」

そしてなのはの部屋の前で一度立ち止まりノックをしつつ声をかける。

「なのはゝ起きろよゝ。飯食う時間がなくなるぞゝ」

「ふあゝい」

中からはなのはの眠たげな声がする。

「『今返事をしたよな？ エレベア』」

《『はい。確かになのはちゃんが返事をしましたね』》

あまりの事について念話でエレベアに確認してしまうオレ。

「……起きてるのか？ 入るぞ？」

驚いた、なのはが起きているだと？ 毎回起こしに行ったときには

狸寝入りか本当に寝ているのかのなの？

オレは何か言いようのない気持ちのままなのはの部屋に入る。

「ホントに起きてた…と思ったらまだ寝てやがるな」

なのはは部屋に入ってきたオレをいまだ働かぬ頭であろう顔と、何かあったのか気持ち暗めの表情でぼうつと見ていた。

どうやって起こそうか？ ふむ…

パン！！！！

オレは自分の手と手を勢いよく叩き、大きな音を立てることで起こすことにした。案の定、なのはは体を一度ビクツと震わせると挨拶をしだす。

「…ふぁ。おはよう、ジン君」

「おはよう、なのは」

オレは挨拶をするとまだ完全に目を覚ましていないなのはの代わりに部屋のカーテンを開けながらなのはの目が覚めるように会話を続ける。

「珍しいな、なのはが起こしに来るまでに起きているなんて。今日は雨でも降るかな？」

「ふ、降らないよー！！ わたしだって朝ぐらい起きれるもんー！」

頬を大きく膨らみしながら両手を頭の上でブンブン振るのは。実際に年相応の反応で微笑ましい。なんかいじめたくなってきたな…

「いつも起きてこない奴が何言ってるんだか…。説得力がないぞ？なのは」

「うつうつ…」

オレの言っていることに反論できないのはは恨めしそうにこちらを睨みながら唸っている。

「じゃあこれからは朝に起こさなくてもいいんだな？ いや、仕事の一つ減って何よりだ」

「そそそ、そんな事ないよジン君！？ 今日偶々だよー！」

急に慌てだすのは。本当にからかいがいのある奴だ。

なのはをいじった後、オレは本来の仕事を果たす。

「うん、いつものなのはに戻ったな。さっきまでやけに暗い顔をしていたぞ？」

「……」

キョトンとした表情を浮かべるなのはを見つつ、オレはなのはを急かす。

「ほら起きたんならさっさと着替えて下に降りて来い！ せっかく早く起きたんだからゆっくりごはん食べる時間ぐらいあるぞ？ 今日」

「…うん！」

なのはは先ほどの表情とは打って変わって満面の笑顔で頷く。それを確認したオレはなのはの部屋を出て下に向かう。

「うん。やっぱりなのはには暗い表情は似合わないな」

そう、ひとり呟きながら…

あれからなのはすぐに下りてきていつもより時間に余裕のある朝食を家族全員で食べ、学校に向かうための送迎バスのバス停へ向かった。

そう、オレは私立聖祥大付属小学校に通っている。この学校には送迎バスがあり、毎朝これに乗って学校に登校する。ちなみに転校扱いで編入したのだからなのは同じクラスになったのは何かの意思か、意図があつたとは思えなかつたのは余談だ。

なのはと ” 今日の授業何だっけ？ ” みたいな他愛のない話をしながらバス停で待っていると送迎バスが来たのでなのはと二人で乗り込み、運転手のオジサンに挨拶をしつついつも座っている一番後ろの席に向かうと二人の少女が手を振っているのが見えた。

片方は金髪のロングヘアーにオレと同じ翠色の目に吊り目の気の強そうな少女。もうひとりには紫がかったロングヘアーに白い力チューシャを付けたお淑やかさそうな雰囲気を出している少女。

二人の名前は、アリサ・バニングス と 月村すずか

二人とも編入してからすぐになのはに紹介してもらった友人だ。

「おはよう。ジン、なのは」

「おはよう。ジン君、なのはちゃん」

「おはよう。アリサ、すずか」

「おはよう！ アリサちゃん、すずかちゃん！」

「あんた、また朝から元気ね」

「うん！」

「あはは、なのはちゃんらしいんじゃないかな？」

「なんだかんだ言っつて、アリサなのはの元気がないと一日中そわそわするくせに（ボソッ）」

「なんですって！？ ジン！ー！」

「いや、なんにも？」

「じゃあなんで目をそらしてるのよー！」

「今日は天気がいいなと思って空を見上げているだけだが？」

「そんな嘘が通じると思ってるの！？」

「友達を嘔吐き呼ばわりか、悲しいぞオレは。なあ、なのは？」

「にゃ！？ ええつと…」

「そんなニヤニヤした顔で言われて納得できるかー！」

「うるさいぞアリサ。他の人に迷惑だ」

「誰のせいよ!!」

「まあまあ、アリサちゃん…」

最初は女子三人の中に男一人混じるのは気が進まなかったが、今はそれなりに気に入っている。

オレが火種を作ってアリサが騒ぐ、更にオレが油を注ぎ、なのはがとぼっちを受けてすずかがアリサをなだめる。これがオレ達の大体のスタンスだ。

いつも通りバスの中で騒いでいるといつの間にか目的地に着いていたようでオレたち以外に人がいなかった。

「着いたみたいだしさっさと教室に行くか」

「うん！」

「そうだね、ジン君」

「わたしを無視するなあ!!」

そんなこんなで時間はあっという間に過ぎていき、いつの間にか放課後になっていた。

今日は四人とも塾があるので学校が終わってすぐに塾に向かうことにした。ちなみにオレが塾に通っているのは無論、桃子さんたちのゴリ押しがあつたが故にである。

「どうしたの？ あんた。変な顔して」

「いや、なんでもない」

「？」

どうやら顔に出ていたみたいだ。

オレ達はいつもの通り道を歩きながら塾へと向かっていたが唐突にアリサが横手の公園に入っていく。

「こないだ知ったんだけど、こっちを通れば早く塾へ着くのよ」

「へえ」

それは気が付かなかったな…

「よくそんな事見つけられたね、アリサちゃん」

「うんうん！」

「フフン」

さすがアリサのことを褒め、なのは同意するよつに首を振る。

「本当に無駄に頑張ったな」

「な・ん・で・す・ってえ〜!!」

オレとアリサで口喧嘩にならないほどに騒ぎつつ進んでいくと、やがて開けた大きな池のある広場に出た。

広場は一言で言うならば滅茶苦茶だった。

あちらこちらに大きな穴があき、池にある棧橋やアヒルの足漕ぎボートはボロボロになっていた。

《『ジン。魔力反応が残滓として残っています。おそらく昨日の戦闘はここで行われていたでしょう』》

「『だろうな。しかし凄まじいもんだな』」

エレベアの念話に対応しているオレと、近くにいた現場検証に来たのだろう警察官に何があったのか聞きに行く三人娘。

あらかたの事情は聞いたのだろう三人はこちらに戻ってきた。

「で、なんだって？」

「わかんなかったわ。いたずらにしては酷過ぎるって……」

「ふん……」

オレとアリサが喋っているときにそれは唐突に聞こえてきた。

「『——れか、た——てく——さい』」

念話か…しかしひどくノイズが混じっているな。

「ねえ」

「ん？」

「今何か聞こえなかった？」

唐突になのはがそんな事を聞きだす。唐突でもないか…おそらくなのは念話が聞こえているのだろう。

「いや、なにも？」

とりあえずオレは嘘を吐きつつ他の二人の方へ顔を向ける。

「ううん、わたしにも何も…」

「別に何にも聞こえなかったわよ？」

オレの意図を読んでくれて素直に答えてくれるずかとアリサ。

「『———れか、たす——てくだ——さい』」

今度は若干ノイズがなくなってきたな。そんな事を思っているとなのは念話の発信者がいるであろう方向に駆け出し始めた。

オレたち三人は慌ててなのはの後を追いつめる。なのはは近くの林に飛び込んでいき奥へ奥へと進んでいくと少し開けたところで止まった。

オレたちはなのはに追いつき、アリサが何か文句を言おうとしていたがその言葉なのはの足元のものを見て止まる。

そこには一匹のいたちに似た動物がいた。毛色がクリーム色といふかなんというかありえない色をしていたが…

《『ジン…』》

「『わかってる。こいつからは魔力が感じられる』」

そう、この傷だらけの動物からは確かに魔力を感じられる。念話を送っていたのはこいつだろう。

「『それにこの赤い宝石…』」

《『おそらくデバイスですね』》

「この子、すごい傷…」

「どうしよう、ジン君」

「どうしようと言われてもな…」

「役に立たないわね」

「うるさいな。とりあえず動物病院に連れていくか？ 榎原動物病院はこういうケースは無償で診てくれると聞いたことがあるな」

「じゃ、じゃあ！ そこに連れていこう！」

なのははそう言う件と件の動物をやさしく持ち上げ、オレたちは榎原動物病院へ向かうことにした。

「はい。これでおしまい」

「」「」「榎原先生。どうもありがとうございました」「」「」

オレたちは今、榎原動物病院で診察してもらった動物を囲みながら

話している。

「それで槇原先生。この子、大丈夫なんですか？」

さすがが心配そうに言う。他の二人も心配そうだ。みんな動物好きだしなあ。アリサとすずかの家に行ったときはえらい目にあつたな。

「大丈夫よ。衰弱しているけどちゃんと休ませてあげればすぐに良くなるわ」

「よかった…」

ホツとしたように溜息を吐く三人娘。

「槇原先生、こいつは一体何の動物なんですか？」

とりあえず疑問だったので聞いてみる。

「うーん…」

「フェレットじゃないんですか？」

とアリサ。こいつフェレットだったのか…

「フェレット、なのかしら。それにしても変わった毛色ね」

専門家でも変わった色だと思っのか…

「とりあえず今日はうちで預かるわね。飼い主が見つかったら返す
ってことで」

「」「」「はい！」「」「」

「ところでみんな」

「なによ、ジン？」

「塾の時間はとくに過ぎているわけだが…」

「」「」……「」「」

「ほ、ほんとうだね…」

「い、今から急いで行けば…！？」

「急いだところでもう間に合わないって言ってるでしょ、なのは！
？」

「まあ、理由さえ言えば大丈夫じゃないかな？」

「と、とりあえず急いで塾に行くわよ！」

「「うん！」」

「やれやれ……」

「車には気をつけてね」

「……って聞いてませんね」

「……君は急がなくていいの？」

「どうせ間に合いませんし。ああ、でもあいつらは放っておけないな。やっぱり急ぎます」

「……いつてらっしゃい」

「はい。そいつのことよろしくお願いします」

そうしていろいろあったがオレたちはようやく塾へと向かったわけだ。

夕暮れ時のオレンジ色に照らされた森の中。

異形はそれを見つゝ歡喜の感情を表すかの如く触手を蠢かせ、吠える。

運命は今、
周りだす。

第4話 出会いの魔法（後書き）

「ジンとAAのリリなお茶会」

AA「言い訳をさせてください・・・」

ジン「いいだろう。言ってみろ」

AA「更新が遅れてしまつて申し訳無い。

リアルが留年危機なのでパソコンの前にあまり向かえなかつたんだ」

ジン「その割には貴様・・・PSPは触っていたようだが？」

AA「あれは気分転換d「セイ！！」ゲハッ」

ジン「まったく、この阿呆が・・・。

とりあえずオレが読者様の代わりに罰して置いたのでこれくらいで勘弁してやってくれ」

AA「ゴホッ・・・み、鳩尾に・・・」

ジン「それじゃ、感想返しいくぞ。悠様、ガイア様、少佐様こんな駄文に感想ありがとう。感謝する」

AA「あゝ、やっと収まつてきた・・・。

悠様、感想ありがとうございます。今回は更新遅れましたが放り出すつもりはありません。はい。

ガイア様、誤字指摘していただいてありがとうございます。なにぶん処女作なのであちこち間違っていると思います。これから応援

よろしくお願いいたします。

少佐様、感想ありがとうございます。ここで同志を見つけることが出来るとは思いませんでした。これからも応援よろしくお願いいたします、ガンダムとのクロスには負けません。どっちも好きですが」

ジン「それよりお前は勉強しろ。明日だろう?。」

A A「わかってる。俺、これを投稿したらやるんだ・・・。」

ジン「ま、待て!!それは死亡フラグだ!!。」

A A「それでは今回はこの辺で」

A A・ジン「これから応援よろしくお願いいたします!!。」

今日の一言「ラストレイヴンムズイ〜!!。」

第5話 桜色の魔法（前書き）

前回『遅かったじゃないか・・・』と言われてしまったAAです。
（笑）

更新が遅れてしまって申し訳ない。m（――）m

リアルな追試の結果にドギマギして書ける心理状況じゃなかったんです（・・・;）

受かったがな！！（ノ><）ノ

応援してくれた皆さん、ありがとう！！

励みになりました！！

今日は設定も投稿するのでそちらも見てもらえれば・・・と

高町なのは明日も続くであろう日常のために学校の用意をし、眠るためにベットに入るそのときだった

「んっ!？」

急にキーンと大きな耳鳴りがし、彼女は咄嗟に両耳をふさぐ形で両手を耳に当てる

しかしそんなことでは聞こえなくなる訳でもなく、耳鳴りは止まらずに徐々に大きくなる

「~~~~っ!! な、何なの!？」

彼女は一人困惑し、現在の状況をただ受け入れ続けるしかなかった
だが耳鳴りは徐々にノイズ混じりの何かの音声のように聞こえるようになってくる

例えるのならラジオの電波をチューニングするような感じだ

「『き——か? ——だ——のこ——か?』」

「……？」

「『きーえーすか？　だーかーくのこーがーえーすか？』」

未だノイズがひどいが彼女には段々と声の主が何を伝えようとして
いるか聞き取れるようになってきた

「『きーえますか？　だれかーくのこーがきーえますか？』」

「……………」

「『きこえますか？　だれかぼくのこえがきこえますか？』」

「……………！」

ついに、聞こえた

しかしながらこの声に、彼女はどこか聞き覚えのある声だと感じる
彼女はどこで聞いたのか深く考えようとしたが、その思考に割り込
むように声は続ける

「『これが聞こえるあなた。どうか僕を、助けてください…。あな
たには資質があります。だからどうか…！　僕にあなたの力を貸し
てください！…』」

それは助けを求める声だった

声の主の切迫した声音からは切実な想いが感じられる

「…行かなくちゃ」

彼女はたった今着替え終わった寝間着を脱ぎ私服に着替え、誰にも見つからないように細心の注意を払いつつ家を出た

彼女に迷いはなかった

未知の現象への恐怖、好奇心

自分の本能が ” 関わるな ” と警告してくる

しかしそれ以上の何かが彼女をその場へ向かわせる

それが彼女の内から出たものなのか、何なのかは彼女自身さえわからない

それでも彼女はなぜ助けを求める人物の場所がわかるのかわからぬ

ままた、その場所へ向かう

それは傍から見れば迷いなく進んでいる様に見えた

まるで、彼女が向かうことがあらかじめ決まっているかのように

そしてその後方五十メートルには、彼女のことを追う一つの黒い影があつた

* * *
* * *
* * *
* * *
* * *
* * *
* * *
* * *
* * *
* * *
* * *
* * *
* * *
* * *
* * *
* * *
* * *
* * *
* * *
* * *

魔法少女リリカルなのは ） 白き閃光の後継者 ）
Magical Girl Lyrical NANOHA ）
Successor of WHITE-GLINT）

第5話 ： 桜色の魔法

夜、人々が寝静まる頃

高町なのはが助けを求める念話を受ける少し前

人一人としていない街の中で白い子供ほどの小さな影と、まるで尺度を間違えてしまったかのような全長二十メートル、体の太さは人ほどはある巨大な蛇が激しく暴れまわっていた

白い影の正体はジンだ

普段と異なり黒い髪と翠眼は白髪と濃い青眼に変わっており、手にはレイレナードの傑作 ” マーヴ ” に似た逆三角形の人の腕ほどある黒い巨大な長銃を二つ持っている

更にジンの身に纏っているもの

魔導士たちにバリアジャケットと呼ばれるものは、一般的な魔導士のソレとは趣が違うように見える

上下とも白い長袖のシャツに長ズボン

それはいい

だが、胴体部分は白い鎧。背中真ん中に戦闘機のような噴射孔が大小合わせて上下に二つ

そして、ひどく特徴的な羽のようにして付いている左右に長い、蜂の巣の穴のような五角形の噴射孔が無数に付いた長方形のパンツが上斜めに付き、それより短く小さな折りたたみ式で塞がれた噴射孔が付いた物が下斜めを向いて二つ付いている

肩には横に長い逆三角形の白い肩当てが付いており、手は指抜きのない手袋をし、下半身は腰の中ほどから白いベルトで縛った白いマントが膝下まで覆っている

両脚には踵から斜め上方向に鋭いブレードが左右両方に二つずつ付いており、膝まで白い鋭角的なデザインの脚甲が覆っている

一般的なバリアジャケットが服に似たものであるのに対して、ジンのそれは鎧というよりどこか機械的なイメージが印象的なデザインだ
また、ジンの周りには膨大な魔力がジンを中心として緑色の光となつて集まつてきており、球体状に形状を留めながらジンを覆っている

マジックチャージャー 魔力収集

ジンの持つ能力でも規格外といえる能力である二つの内の一つ

周りにある未使用、使用済みの魔力素をかき集め自らのリンカーコアに溜め込む能力。通常は不可能とされる未反応の反応魔力素さえ貯蔵できる能力

一気にリンカーコアに吸収できる魔力量より多くかき集めているため、理論上魔力切れが起ころことはない無限のバックアップである

そして蛇が暴れることにより町にある家々は崩れ去り、押し潰され、

騒音があたりに鳴り響く中

誰一人として外の様子を見に出てくることはない

「これが魔法か…」

ジンが普通の蛇ではありえない現象、口から出る炎の塊を無数にある噴射孔の内の右側から魔力を噴射し、瞬間的に加速することで避けながら自身の感想を呟く

瞬間加速魔法

否、魔法というにはあまりにも稚拙

しかしながら単純である

ジンの周りを滞留している膨大な魔力を利用しての超高速の瞬間加速

クイックブースト

前の世界であつた技術概念を魔法として再現したシロモノだ

それよりもなぜ誰も外の様子を見に来ないのか

それもジンが張った封時結界によるものだ

封時結界

本来の世界との位相をずらすことによって結界に選択した人間、または魔力を持つ者のみが存在できるようにする魔法

事実ここら一帯は蛇とジン以外の人影は一つとして見られず、両方とも好き放題に暴れている

「いい加減、喧しいな…」

ジンは蛇に向かって手に持つ二丁の長銃を向け魔力による弾丸を放つ

弾丸が蛇に直撃したとき、その着弾点から生えてくるかのように白色の帯が出現し蛇に何重にもなって絡みつきその身を束縛しようとするが蛇は邪魔だと言わんばかりに勢いづけてそれを砕くことで脱出した

「砕かれたか……。どうも結果といい、バインドといい、補助系列の魔法はうまくいかな」

ジンは自身が行った結果を淡々と分析し、相手の様子を窺がうというよりは次は何をしようかといった感じで目の前の蛇を見やる

《ジンには元々、戦闘補助は向かないと言ったはずですが？》

そんな中、ジンの胸元から若い女の声がする

彼女の名はエレベア

ジンのデバイスである

通常、デバイスは主の剣となり盾となるものだが鎧の内側にいる彼女の今の形態は普段と変わらぬネックレスの姿である

ならばジンの持つ長銃は何なのか？それはジンの持つ能力にある

ジンの持つ能力でも規格外といえる能力である二つの内の最後の一つ
魔力による物質の再現。作った物質は破損すると魔力に戻り消えて
しまつが魔力がある限り作り続けることが出来る

今ジンが持っている長銃も、身につけている鎧もこの能力により作
成したものである

「そうは言うがな、エレベア。どうしてもやると言うなれば周りの
被害は最小限度に抑えなければいけないだろう？　だからこそ補助
魔法が必要になってくるんだ」

《それこそなのはちゃんと一緒にやればいいでしょう？　なのはち
やんが補助特化型の可能性もあるんですから》

「お前が調べた限り砲撃型だったんだろう？　それにな、元より巻
き込むつもりなんてないからな。巻き込まれて、本人が望むんなら
別かもしれないが…」

《関わってほしくない、ですか？》

「そつだ」

《矛盾してますよ、ジン。あなたは一年前にこう言った。『異端の力は異端の力を呼ぶだろう』と》

「……」

《あなたが望まないにしろ、なのはちゃんは大きな力を持っている。きっとこの事態に巻き込まれますよ。それに守るって決めたんでしよう？》

「…そうだな。オレはまだ「シャアアアアアア！」「チッ！」

エレベアとジンが魔法の事から外れてなのはの事について話していると、いつまで経っても空中から降りてこないジンにしびれを切らした蛇がその巨体を揺るがしてジンに呑み込みまん躍りかかってくる

「あらかた今オレの使える魔法は試したか…。そろそろこれにも引導を渡してやるか」

そう言うとジンはクイックブースト（QB）を連続で使用しながら高速で移動し、蛇の背後に回り込むとジンの持つ長銃の銃口を蛇の頭に向ける

「エレベア！」

《Yes, Links・MARVE Bullet・》

唯一違うところは、修復した傷口がより固く、貫き難い体になっていることだ

「なら、体ごと消滅させるのみだ！」

「シャアアアアアア！」

蛇に対する対処法を決めたジンに何か不穏な気配を感じたのか、蛇はまたもやジンに向かってその口を大きく開くと先程より大きな炎の塊を吐き出してくる

だがそんなものに当たるジンではない

QBを使い炎の塊を避けきると再び二つの銃口を蛇の頭部に向け、こちらも先程と同じ二重構造の魔力弾を放つが蛇の頭は大きく弾痕の形にへこんだだけで貫通することはなかった

「…何？」

ジンは一瞬だけ動きを止めてしまった

その隙を突くかのように蛇は口を開き、無数の、数えるのも億劫になるほどの炎の塊を吐き出してきた

「チィ…！」

ジンはすぐさま回避行動を取り始めるが数が多すぎる

その内の数十発が立て続けに当たり、ジンの姿は爆炎のせいで見えなくなる

蛇は仕留めたのかと思ったのか煙幕が晴れるのをただその場で見続けていた

春とはいえ時刻は夜

夜の冷たい夜風に吹かれ煙幕は徐々に晴れ始め、中からは一つの小さな影が浮かび上がってくる

影はもちろんのことジンであった

その身はあれほどの攻撃を受けたというのに傷一つ無く、体の周りには薄くはなっているが緑色の光がいまだ球体状に形状を留めながらジンを覆っている

プライマル・アーマー

通称PA。前の世界におけるネクストに必ず搭載されていた、マジック粒子を用いた防御フィールド

だが今のそれは魔力素を用いたものになっている

マジックチャージャー

魔力収集により収集した魔力がリンカーコアの限界以上に溜め込もうとした時にあふれ出る魔力素、または収集中の魔力素を体の周りに漂わせることで発生する天然の魔力素による全方位防御フィールド

防ぐのではなく相手の魔力・物理攻撃を減衰、消滅させ、接近しての攻撃も効果範囲に入るとスピードが落ちてしまう。（水の中で暴れるような感じになってしまう）

マジックチャージャー

これは魔力収集使用時の副産物であり、ジンにはある程度しか制御できず、半自動で生成される

ジンはPAにより炎の塊をすべて消滅させることによりその身を守ったのだ

その代償に今は身に纏う魔力素の濃度は低く、先程と同じ攻撃を受けたならばただでは済まないだろう

しかしジンは魔力収集を使うことによりものの数秒で薄くなってしまったPAを回復させ蛇の真上数十メートル、ちょうど蛇がその身を伸ばせばギリギリ届く距離に浮遊する

「…エレベア」

《Yes, Links. Magic charging, start.》

そして二つの銃口の先にさっき使った魔法陣より大きな魔法陣を二つ展開し、今度はジン自身の魔力を溜め込み始める

「シャアアアアアア！」

蛇は目の前のジンに向かってその身を伸ばす

当然だ。伸ばせば届く距離に餌があるのならば跳びかからずにはいられないのは動物の本能だ

そしてジンの方も準備ができたのか、二つの銃口を再度蛇の方へ微修正する

「これで終わりだ…」

《Charging complete》

蛇はその身を伸ばしきり、あと少しでジンに届くかといつときジンがそう言つと二丁の長銃の引き金を引く

「ベクルックスバスター……」

《BECRUX Buster.》

二つの銃口……否。二つの魔法陣から白い光が蛇を貫く

光は一つの魔法陣から二つずつ螺旋を描きながら放たれ、蛇を焼き尽くしていく

「■■■■■■■■！！」

蛇は声にならない断末魔をひとしきり上げると光となって消えていき、消滅した後には地面に普通のサイズとなった蛇と地面から一メートルほど離れた所に浮いている青い種のような形の宝石が一つあった

ジンは地上に降り蛇を一瞥してから目の前に浮かぶ青い宝石を見やる

「これが騒動の原因か」

《おそらく、これが何らかの要因で蛇が呑み込んでしまつて巨大化した、といったところでしょうか》

ジンはエレベアと今回の騒動について意見を交わした後、ネックレスであるエレベアを胸元から取り出し青い宝石に近づけると宝石はエレベアのコアの部分に溶け込むように消えていき、収納された

「さて、帰つて寝るとするか」

《はい。さつさと帰つて眠つてしましましょう》

そう言つてジンの体が光つたかと思うとそこには元の格好と元の容姿に戻つたジンがあり、続いて封時結界を解除すると辺りにあつた破壊の跡はすべて消えてなくなり、周りの家からは人の気配がするようになつた

「わかつていたことだが…ホントに非常識だな」

ジンは自分がしたことに戸惑いと呆れを感じていると

「『き——か？　だ——の——か？』」

「念話か…」

「『きーえーすか？　だーかーくのこーがーえーすか？』」

ノイズがひどいが確かにそれは念話だった

「現状において念話が出来る存在は…」

「『きーえますか？　だれかーくのこーがきーえますか？』」

「ああ、もう！　人が考えている時にゴチャゴチャと！」

「『きこえますか？　だれかぼくのこえがきこえますか？』」

ノイズが取れ、聞こえるようになったがジンにとってはどうでもいい事であった

しかしながらこの声に、ジンはどこか聞き覚えのある声だと感じる

「何だったかな、この声…」

《今日病院に連れていったフェレットもどきでは？》

「それだ！」

「『これが聞こえるあなた。どうか僕を、助けてください…。あなたには資質があります。だからどうか…。　僕にあなたの力を貸してください！』」

「これまた随分と身勝手なお願いだな…」

ジンが悶々としていた疑問に答えを見つけ、念話をしている人物の身勝手さに呆れているとエレベアから声がかかった

《ジン》

「なんだ？」

《高町家から移動する魔力反応を確認。魔力波長から確認を取っても高町なのはである可能性、100%です》

「ああ、大体分かってるけど向かっている方向は？」

《念話の発信源の方向です。…！？》

「はあ…」

《ジン！！》

「…今度は何だ？ 良い知らせか？ 悪い知らせか？」

《悪い知らせです！ 念話の発信源の方向に魔力反応！》

「…何？」

《魔力波長から先程の宝石と思われる反応を確認！ 数、およそ三

！
《

「結局巻き込まれるってか…」

ジンが溜息を吐きつつ現場に向かおうと足を向けたところで、目の前の角から見覚えのあるツインテールが見えた

「…ナイスタイミング」

《止めますか？》

「いや、放っておこう」

《…なぜですか？》

「ここまで来てしまったらもう巻き込まれずにはいられない。ならこの念話の主に一度引き合わせなきゃいけない。それが危険であろうとなかろうと、魔法に関わるということは危険だということを分らせる必要がある」

《スパルタですね》

「心配するが故ってやつだ。…オレもセレンのことを言えんな」

《そうですね》

まあ、それでも関わることを選ぶんだろっがな。なのはは

[illegible]

今日、塾へ行く時に通った道

「そっぴいばあの子……。大丈夫かなあ？」

182

止めず、走り続ける

やがて件の榎原動物病院のあたりに来たときに、なのはは異変に気づいた

ドゴン！　ズガン！

地響きと共に聞こえてくる何かを破壊する音

それは目の前の榎原動物病院からするし、声の主の所からもする

「……」

なのはは意を決して榎原動物病院へ入っていくと

見慣れないどころか本当に生物かどうか怪しい大きな黒い影が目に入った

黒い影は何か小さな影を追っている

小さな影は黒い影の攻撃を左へ右へと、時にはその場で大きく飛び跳ねることで避けていく

黒い影は小さな影に攻撃が当たらないのを見てとって、一際大きくその身を反らせて今までのが比ではない攻撃を行う

小さな影は攻撃を避けることには成功したが、発生した衝撃までは殺せず空中に大きく弾き飛ばされ、なのはの方へ向かって飛んで来た

「わ、わ、わ」

なのはは飛んできた小さな影を受け止めることに成功したが飛んできた小さな影を見て少し驚いた

小さな影は、今日拾ったフェレットだった

「来て、くれたんだ」

「にゃ！？　しゃ、喋った！？」

フェレットが喋り、その声が聞こえていた声の主だと気が付いて更に驚いていたのはだったが、黒い影はそんな事を待ってくれるはずもなくなのはたちに向かって突進してきた

「きゃっ!!」

なのは横に大きく飛び込むことで避けると、勢い余った黒い影は病院の壁に頭から突っ込み頭が抜けないのか暴れだす

「何!? 一体何なの!？」

「君の力を少しだけ貸してください、お願いします! 御礼は後で必ずします!」

「御礼とか、今はそんな事言ってる場合じゃないでしょう!？」

なのは抱えたフェレットにそう言つと病院から抜け出し、出来るだけ遠くへ向かい走り始めた

「君には資質がある!」

「資質?」

「僕はある探し物のために、ここではない別の世界から来ました。でも、僕一人では想いを遂げられないかも知れない。

だから…迷惑だと分かっているのですが、資質を持っている人に協力して欲しくて……」

なのは走りながらフェレットの話を聞いていると不意にフェレットがなのはから飛び降り

「僕の持っている力を君に使って欲しいんです。魔法の力を！」

「魔法？ それって…」

どういうこと？ そう聞こうと思ったなのはだったが病院の壁から抜け出てきた黒い影が病院の塀を壊して飛び出して来たことでその言葉を飲み込み、咄嗟にそばにあった電柱の陰に身を隠した

なのはは電柱の陰から黒い影の方を見ると、黒い影はあたりをキョロキョロ見回しなのはたちを探しているようである

「ど、どうすればいいの？」

「これを！」

なのははフェレットにそう聞くとフェレットは首から下げていた赤い宝石を器用に外し、なのはに向かって差し出してくる

「それを手に、目を閉じて、心を澄まして！ 僕の言う通りに繰り返して！」

「う、うん！　ってきやあ！」

フレットに渡された宝石を持ち、言う通りに行おうとしていた矢先に黒い影はなのはたちの隠れているところを見つけ出し襲いかかる何とかそれを避けることが出来たなのはだが、地面に倒れこんでしまい体がうまく動かない

それを見た黒い影は、その身を震わせて体から無数の触手を出し、なのは目掛けて一斉に繰り出した

なのはは思わず、この先に待つ自分の無惨な光景から目を逸らすようにして目を瞑った

「おいおい、オレの妹分に何をしようとしてるんだ？　化け物」

黒い影、化け物はその言葉とともに魔力弾を撃ち込まれ、大きく吹

き飛んでいった

なのははその声を嫌というほど覚えている

一年前からなのはの家に住み、気になっている少年

「ジン、君？」

「呼んだか？　なのは」

なのはは瞑っていた目を恐る恐る開き、ジンの姿を確認すると驚きに今度は目を見開く

当たり前だ。なのはがいつも見ている黒いツンツン頭は今白一色に染まり、エメラルドのような綺麗な翠色の眼は空よりなお深い青色に染まっている

そして何より印象的なのはその奇抜な姿だ

それは鎧というよりどこか機械的なイメージが前面に押し出された姿

なのははその姿に見覚えがある気がしたが、続くジンの言葉で思考を断ち切られる

「それでな、なのは」

「は、はい！」

ジンの真剣な声に思わず敬語で返事をしてしまうのは

「ホントにこの件に関わる気か？」

「えっ…？」

「確かにお前には魔法を使う資質も、才能もある。だがさっき味わったように危険なことはたくさんある。

だが、都合よくオレには魔法が使える。オレが変わりにやることだつてできる。はつきり言つてオレはこの件にはもう関わつて欲しくない」

「うん…」

「だがお前の才能はとても大きなものだ。いずれ巻き込まれと分かつていたし、この後も巻き込まれることは予想できる。

けれどもその度にオレは、なのはの事をあらゆるものから守つてやる」

「あう…／／／」

ジンのその言葉に顔を赤くするのは

そんなことには気づかずにジンは続ける

「だけど、関わるか関わらないかを決めるのはなのはだ。今ここで力を手にし振るう術を手に入れるか否か…。

もし力を手にすることを選んだとしてもオレはその選択を否定はしないし、未熟なうちは守ってやる」

「わたしは…」

「……」

なのはは一度言い淀み、今度はジンの顔をしっかりと見ながら答える

「わたしは、魔法が知りたい！ 困っている人がいて助けられるんだったら助けたい！」

「……」

「……」

少しの間の沈黙

それを破ったのはジンの方だった

「そうか…。そうだろうな、そう言っと思った」

「え、と…」

あんまりにもすんなりといったことに戸惑うのは

「なんだその顔は」

「ええっと、もっと反対するかなって…」

「さっきも言っただろう？ 否定はしないって」

「うん」

「決めたんだろう？」

「…うん」

「ならオレだって決めたことをするだけだ。ところでさっきから空気になるっているフレット君」

「えっと、僕？」

「そうだ。君以外に誰がいる？」

「…そうだね。それで…いいの？」

「別にかまわんよ。なのは決めたことだ。聞きたいことはあるだろうが、とりあえずなのは頼む」

「わかった」

ジンはそれだけ言うと、起き上がろうとしていた化け物の方へ向かって行った

「それじゃ、気を取り直して…いくよ！」

「うん！」

「我、使命を受けし者なり」

「わ、我、使命を受けし者なり」

「契約の元、その力を解き放て」

「えっと、契約の元、その力を解き放て」

「風は空に、星は天に」

「風は空に、星は天に」

「そして、不屈の心は…」

「そして、不屈の心は…」

「「この胸に！」」

「この手に魔法を！ レイジングハート、セーットアップー！」

《Stand by ready, set up》

その言葉と共にフェレットから受け取っていた赤い宝石から桜色の光が溢れ、天に昇る

「なんて魔力だ…」

「予想以上、だな…」

フェレットは目の前の溢れるほどの魔力に驚き、ジンは予想を上回る魔力に驚く

光と共に空中に浮かんだのはは呆然とした表情で辺りを見回している

《使用者登録が完了しました。はじめまして、新たなマスター》

「え、えと、はじめまして！」

なのはは目の前に浮く赤い宝石がいきなり喋り出した事に驚きつつも律儀に返事を返す

《バリアジャケットの設定はこちらで勝手に設定してもよろしいですか？》

「えと、とりあえず…はい！」

《では、落ちついてイメージしてください。あなたの魔法を制御する、魔法の杖の姿を。そしてあなたの身を守る強い服のイメージを》

「は、はい」

なのははその言葉を聞いて目をつむりイメージする

魔法を使う自身の姿を

するとさらに桜色の光は増し、なのはを包み込むようにしていった

なのはを包む桜色の光が晴れるとそこにはバリアジャケットを着たなのはがいた

聖祥大付属小学校の制服を彷彿させる白い上着に、胸元を守るようにして付いた装甲がある黒いインナー、金属パーツで出来た腕より一回りほど大きい青い籠手に白いブーツ。

その手には白い柄の先端に金色のパーツで囲むように赤い宝石を付けた杖を持っていた

目を瞑りながら地上に降りてくるなのは

化け物に適当に牽制の弾を撃ち込みつつもなのはの着地点に近づ

《マスター。今までに魔法を使った経験は？》

「全然！全く！これっぽっちも！」

混乱しているなのは声をかけてくるレイジングハートの問いに、最早日本語としてギリギリな文法で返答をしてしまうのは

《わかりました。わたしがお教えしましょう。それでよろしいですか？》

「お、お願いします！」

「オレからも頼む」

「ジン君！？」

《はい、わかりました》

いつの間にかなのは隣の浮かんでいたジンはレイジングハートに向けてそう頼みこみ、レイジングハートはそれを了承した

地上ではフェレットがこれ以上被害が出ないように封時結界を発動させる

するとさっきジンが張っていたように周りの民家からは人の気配が消えていく

なのはそれを敏感に察知し、ジンの方を不安そうに見る

「ジン君…」

「封時結界か…。大方さっきのフェレット君か、デバイスなしでここまでとは。存外やるものじゃないか」

「封時結界？」

「ん？ ああ。まあ、他の人間に被害が出来なくなる結界ぐらいに考えておけ」

「うん…」

《そろそろよろしいですか？ マスター》

「あ、ごめんね。レイジングハート」

《いえ。それではマスター。今使っているのは飛行魔法です。そして…》

化け物は空に浮かぶなのはたちを見上げその触手を急速に伸ばしてなのはたちに襲いかかってくる

「きゃあああ！？」

《 R a u n d s h i l d 》

思わず目を瞑ってしまったのはだがいつまで経っても体に痛みはない

不思議に思っているとレイジングハートから声をかけられた

《目を開けてください、マスター》

「……？」

恐る恐る目を開けたなのは目の前には、桜色のバリアといえるものがなのはに向かって来た触手の尽くを阻んでいた

《これはシールド系の魔法です》

レイジングハートは今使っている魔法を説明し、シールド出力を上げることによりその触手を弾き飛ばした

《任意の方向からの攻撃はこの魔法で防御するのが基本です》

「……」

化け物は弾き飛ばされた触手を自分の体の付近に一度戻し、今度は倍の数で攻撃してくる

《今度は攻撃を飛行魔法を使って避けてみましょう》

なのはレイジングハートの魔法の解説を真剣な表情で耳を澄まし、言われたとおりに不慣れな挙動で空を飛びまわる

触手はそんなのはを追い始めるが、なかなか当たらない

当たりそんな触手はジンの放つ貫通力の高い魔力弾で文字通り弾き飛ばされているからである

化け物は敵わないことを悟ったのか攻撃目標を先程まで屠ることのできたフェレットに替え、襲いかかる

「うわっ！」

フェレットはなのはのとても初めて使うと思えない魔法の威力に気を取られていて、化け物の方を見ておらずあっという間にさっきと同じ追う追われるの状況になってしまった

「おや？ こりゃどうしたものかな…」

「……」

それを上空で見ていたなのは覚悟を決めたようにレイジングハートの柄を一度しっかりと握ると、さっきまでの拳動が嘘のようなスピードでフェレットと化け物の間に向かって降下していく

「お、おい！　なのは！　クソ、マジであれで突っ込んでいく気が！？」

《案外猪突猛進ですねえ、なのはちゃん》

それを見たジンは慌てて追いかけ始め、エレベアはのんびりとした口調で自身の感想を言う

地上では化け物がフェレットに攻撃したのとほぼ同時になのはが飛び込んだせいで辺りは砂煙とアスファルトの破片が飛び散り、中の様子はうかがえない

「ああ、クソ！！　見えん！！」

《ジンは過保護ですね。なのはちゃんのことを信じてあげたらどうですか？》

「魔法初心者であることを信じろという方が難しいに決まってるだろ！」

《ジンも一応今日が初めての魔法使用ですが…》

「ぐッ…。いや、しかしな。覚悟といふかなんというか…」

一人と一機がそんな漫才を繰り広げているうちに砂埃は徐々に晴れていき、現れたなのはが化け物の攻撃をフェレットの前でラウンドシールドを使って身を挺して防いでいるのを見てジンは安堵のため息を吐くとすぐに銃口を化け物の方へ向けるが、先になのはが化け物に魔力弾を左手から発生させて撃ち込み、吹き飛ばす

ジンはなのはたちのすぐそばに着地すると安否を尋ねる

「あんまり無茶すんなよ、なのは」

「あつ、ジン君。わたしは、大丈夫だよ」

なのはは肩で息をしながらも無事であることをジンにアピールすると化け物が吹き飛んでいった方向に飛行魔法を使って飛んでいく

ジンはそれに溜息を吐きながらも追従するように後から飛んでいく化け物はジン達に敵わないということをやく悟ったのか、体を三つに分裂させ軽快な動きで跳ねながら結界の外へ逃げようとしていた

「そんな！ あんなのが外に出たら大変なことになっちゃう！」

「確かに、あれはマズイな…」

「レイジングハート…。さっきの、もつと遠くへ飛ばせる?」

《マスターがそう望むのであれば》

なのはは先ほどの魔力弾を遠くへ打ち出す方法はないかとレイジングハートに聞き、レイジングハートはその方法があることを自身のマスターに伝える

それを聞いたなのはは近くにあったこの辺りで一番高いビルの上に着地するとその縁に立ち、化け物たちの方向へ手に持ったレイジングハートを向ける

するとレイジングハートは主の意思をくみ取り、自身を最適な形に姿を変える

《 Cannon mode 》

その姿は先程の魔法使いの杖、というコンセプトと一線を画した近未来的な姿だった

先端にあった宝石を囲む金色のパーツは上側の方が長く、全体的に白い印象を受ける音叉のような形になり、パーツの一部が手元の方へ少し下がリトリガーユニットとして形作っていた

なのははその様変わりしたレイジングハートを支え、下を向いていたトリガーユニットに左手を添えて左に九十度回転させ横向きに変

える

するとレイジングハートの砲身とも言えるだろう音叉状の少し下のスタビライザーから三枚の桜色の羽が出る

「はあ、はあ、はあ…」

「……」

なのはは初めて使った魔法の疲労感を我慢しつつ狙いを三体の化け物に定めようとし、ジンはその姿を黙ってみている

「デイベイインバスター！」

《Divine Buster.》

なのはの掛け声とともに飛んでいく三つの桜色の光はそれぞれ分裂した化け物に直撃し、その身を消滅させていくが一体だけ出力が足りなかったのか

消滅しなかった者がおり、先程の軽快な動きはできずとも結界の外に出ようとノロノロとしていたが

「あばよ」

《 BECRUX Buster 》

それは白い二重螺旋の光によって掻き消された

「なのは、大丈夫か？」

「ふえ、ちよつと疲れたかも…」

「ほら」

なのはは先程の砲撃の反動を抑えきれず後ろに吹き飛んでおり、ジンはそんなのはを心配しつつも手を差し伸べる

「ありがとう、ジン君」

なのはは素直にジンの手を取りその場で立ち上がる

立ち上がったなのはの目の前には青い種のような形をした宝石が三つ浮かんでおり、いつの間にかビルの屋上に上ってきたフェレットが

「レイジングハートをその宝石にかざして」

「いっつ？」

言われた通りになのはがすると三つの宝石は順にレイジングハートに吸い込まれていって、なのはの服装も家を出てきたときと同じ私服に戻った

フレットはそれを確認すると封時結界を解除する

町は再び人の気配で溢れ返り、平穏な様子が見られるが病院あたりの惨状は凄まじいものだった

「何はともあれ、家に帰るか。なのはも眠そうだし」

「…うん」

「力を貸してくれてありがとう。御礼は必ずs」何言ってる。お前も来るんだよ、家に」えっ？」

「えっ？ じゃない。なのはをこのまま放って置くつもりだったと言わないだろうな」

「でも…」

「デモもストライキもない。そもそもお前、まともに魔法使えないだろ？ 今」

「うつ…」

「協力者はこれからも必要となってくるだろうし、オレたちも関わったんだ。最後までやらせろ」

「…いいの？」

「人の好意は黙って受け入れろ。気になるんなら恩を返す時に倍で返してやれ。男ならな」

「そう、なのかな？」

「そうなんだよ」

「そっか…ありがとう。これからよろしく」

「ああ、よろしくな」

フェレットと握手する傍から見れば奇妙な一人と一匹だったがなのはが先程から何も言わないのが気になってジンは声を掛け…

「おい、な…」

…ようとしてやめた

なのはは立ったままうつらうつらとしており、今にも寝そうだったからだ

「多分、慣れないことをしたから疲れたんじゃないかな？」

「だろうな。とりあえず、背負って帰るか…」

ジンは右手をフェレットに差し出し体に登りやすいようにするとフェレットは察しが付いたらしくそのままジンの右肩に乗った

そしてもはや半分以上眠っているのはを背負い、顔を左肩に乗せるとジンは家のある方向へ歩きだす

「はあ…。ホント、これからどうなるんだかな」

《そうですね…。なのはちゃんは今これで晴れて魔法少女となってしまったわけですし》

「魔法少女って、お前なあ」

「ごめん。僕のせいで…」

「ああ、やめろやめろ。なのはにも言ったけどあんだだけの潜在能力があつたならいずれ巻き込まれてたんだから気にしても仕方ない」

「でも…」

「わかった。ならオレとお前でなのはを守る。これでいいだろう?」

「……」

「お前も結構頑固だな…」

そんな会話をしながら家路に就くジン達

「しかし魔法少女か…。うん？」

《 ？ どうかしましたか、ジン》

「いや、なんでもない（魔法少女？ 高町なのは？ どこかで聞いたような…）」

* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *

ようやく

白き少女 と 白き閃光の後継者は

物語の始まりに立つ

賽は投げられ

運命の齒車は回り始めた

イレギュラーな存在である彼を巻き込みつつ

物語はここから始まる

戦い続けた

繰り返し続けた

新たな世界で巻き込まれたこの事件に

白き閃光の後継者は一体何を想うのか…

この世界でも

戦い続け

繰り返し続けるのか

それは誰にも分らない

そう、
誰にも
…

第5話 桜色の魔法（後書き）

「ジンとAAのリリなのお茶会」

AA「さあ、恒例となりました。リリなのお茶会！！
今回は突っ込む所が多々あるのでネタに困らないな！ジン君！！」

ジン「喜々として語るな、このたわけ。

突っ込む所がないように書くのが小説だろうが」

AA「グハツ！ た、確かに……。」

ジン「まあ、突っ込む所の解説をしようという心意気だけは買ってやる」

AA「……………」

ジン「な、何だよ……」

AA「ジンってさ、ツン」今すぐその口を塞げ。もう一つ額に口をつくるぞ？」イエッサー！」

ジン「とりあえずオレから質問していつてやろう。
魔力素関連はオリジナル設定か？」

AA「うん。そうだよ。（し、死ぬかと思った）
公式設定にあったのをフロム脳全開にして作った」

ジン「なるほどな……。」

次の質問だ。デバイスが英語だったり日本語だったりするのはどういうことだ？」

AA「ああ、それは自分の英語力の無さが招いた結果だよ」

ジン「詳細を言え、詳細を」

AA「うーん。英語できない↓デバイスのセリフが！？↓日常会話なら日本語でよくない？↓じゃあ、戦闘の一部だけ英語で。って感じかな？自分では結構クールな感じになったと思うんだけど・・・」

ジン「中途半端だ」

AA「うーん、やっぱりそうかなあ？」

ジン「変換ソフト使えよ」

AA「持ってないんだよなあ、これが。誰かいいやつ知りませんか？」

ジン「他人任せじゃなく自分で調べるよ・・・。
ともかく次だ。ユーノの扱いはどうにかならんのか？あれは酷すぎる」

AA「どうにもなりません」

ジン「即答だったな。しかも言い切りやがった（汗）」

AA「だってなのはヒロインの内の一人だし・・・」

ジン「だからってあれは……ん？ヒロインの内の一人？まだいる
つてのか！」

A A「いるよ。構想段階で5人」

ジン「なんだと！？いったい誰と誰と誰と誰なんだ！！」

A A「ハハハ、言う訳無いだろ。ネタバレ禁止」

ジン「グッ！そ、そうだな……」

だがこれだけは聞かせてくれ」

A A「ん？なに？」

ジン「ハーレム、じゃないよな？」

A A「……………」

ジン「……………おい。何かいつてくれ」

A A「さあ？」

ジン「貴様……！！」

A A「予定は未定だし、しょうがないよ」

ジン「それは無計画というんだ！！」

A A「まあまあ。それじゃ感想返しいくよ」。

機械屋様、確変様、少佐様、悠様、黒いスト様、荒神丸様、J A M様、感想ありがとうございます！」

ジン「こんな駄文もついに2万PVを突破した」

A A「お気に入り登録件数も徐々に増えて来ております」

ジン「この作者は遅筆過ぎるかと思うが」

A A「どうか見捨てずに最後までお付き合いしていただければと思います」

ジン「そして作者はこの小説の意見、感想を待っている」

A A「もちろん。小説の展開をこつしたら？みたいな感想も全然OKです」

ジン「さて、そろそろ終わるか」

A A「そうだな」

ジン・A A「これからも変わらぬ応援よろしくお願いしますm

——」m「」

最後に一言「ユニコーン、かけー!!」

無印のキャラ設定(2010/6/19更新)(前書き)

主人公設定です。

別に投稿しなくても・・・と思っただが、気分で投稿。

現状確認にどうぞ。

無印のキャラ設定(2010/6/19更新)

6月の更新記録

- ・ヘリックスの性格を書くのを忘れていたので追加
- ・ジンの魔法に追加
- ・ジンの性格に追加
- ・ヘリックスの魔法に書き忘れたのを追加
ブリッツアクション
- ・ジンの戦闘形態を追加
スタイル

キャラクター1

***** 名前 *****

ジン・R・アナトリア
レイウン

・ A C f A ↓数十回ループ ↓謎の扉を潜る ↓リリカルなのは世界へ

・ レイヴン・アナトリアはホワイトグリント、ジンのオリジナルのパイロットの名前。（リンクス名ではない。フィオナに拾われたときに自らの名前を捨て、”レイヴン”と自分を受け入れてくれた”コロニー・アナトリア”から取った名前）

・ 自身がレイヴン・アナトリアのクローンであることとなのは世界の技術、魔法を使っても帰れないことがわかって（アカシックレコードで）A C f Aの世界を忘れないように、今度は自分のことを忘れないようにと思って名前を付けた。

・ ジンにとって魔法とは息をするようなもの。よって感覚的であるため人に教えることは難しい

***** 年齢 *****

肉体的には9歳

***** 容姿 *****

黒髪に翠眼。髪型は目に掛かるぐらいの前髪を額より少し上で真中から左右に分けたツンツン頭

イメージはFF?CCのザックスのソルジャー2nd時代の髪型(わかんなかったらググってください。たぶんすぐ出てくるかと…)

無駄のない筋肉の付き方をしている。

***** 利き手 *****

右手(別に左手も同じように使え、両利きといっても過言ではないが無意識に使ってしまうのは右手)

***** デバイスセットアップ時 *****

・白髪に濃い青眼になる。髪型に変わりなし

・バリアジャケットは上下とも白い長袖のシャツに長ズボン

・胴体鎧、肩アーマー、脚部アーマーがそれぞれホワイトグリント。手は指抜き白い手袋に、下半身は腰の中ほどから白いベルトで縛

った白いマントが膝下まで覆っている。（F a t eのアーチャーをイメージしていただければ。もしくはセフィロスの腰から下だけ版みたいな感じ。または初代リインフォース）

・実はジンの魔力運用技術が未だ不完全（未熟）のため本来の姿を再現出来ていないでいる。（これはこれで理に適っているが）

***** 身長 *****

なのはより5 c mぐらい高いくらい

***** イメージC V *****

櫻井孝宏（肉体が子供のためC V変更）

***** 性格 *****

基本的には熱い奴。戦闘時は ” 手はきれいに、心は熱く、頭は冷静に ” を素で行く人。

だが最近は精神が肉体に引っ張られているようで年相応の態度をとることもあり、上記の行動が出来ていない気がするというのは本人の談。

最近、自身の記憶がないことで不安なためか、若干覚めている

魔力保有量 *****

AA+

魔導士ランク *****

非保有

戦闘スタイル *****

空戦／高速機動万能型

魔力光 *****

白

使用魔法 *****

■ マーヴバレット (MARVE Bullet)

二重構造の魔力の弾丸を撃つ射撃魔法
貫通力が高いが誘導性はない

■ ベクルックスバスター (BECRUX Buster)

銃身に魔力をチャージし放つ双発型の砲撃魔法
一発一発はデイベインバスターほどはないがそこその出力を誇る
美しい螺旋を描きながら飛んでいく

■ 封時結界

ユーノが使っていた世界を隔離する結界
二次創作とか、劇場版を観ていて「地味にすごくない？」と思ったのは作者の内緒

ユーノ君並に広域かつ長時間展開することは不可能

■ リングバインド

一般的なリング状のバインド
ジンのいそれはあんまり強度がよろしくない
ジンは総じて補助系は苦手っぽい

■ クイックブースト (QB)

魔力を噴射し瞬間的に加速する魔法というより、技能
瞬間速度は音速の域に到達する

— 以下、更新で追加された魔法 —

■ サリーンシューター (SALINE Shooter)

一発の魔力弾が途中から八発に分裂する魔力誘導弾
分裂後の誘導性能は鬼である

■レーザーファング（LASER Fang）

ジンがACfAの世界で使っていた武装をそのまま名前にしている銃身を覆うように魔力刃を発現させる近接用の魔法
名前の由来は見た目が牙のように見えることから

***** レアスキル *****

マジックチャージャー

■魔力収集

・ 周りにある未使用、使用済みの魔力素をかき集め自らのリンカー
コアに溜め込む能力

・ 通常は不可能とされる未反応の反応魔力素さえ貯蔵できる。（余
談だが公式設定上、アリシアの死因は未反応の反応魔力素を大量に
吸収したことによるショック性の心停止である。なお現場にいた関
係者を含め、近隣での死亡者がアリシアただ一人であったことから
作者は毒ガスのようなものであり、耐性に個人差があると考えてい
る）

・ 戦闘中は常時発動しており、一気にリンカーコアに吸収できる魔
力量より多くかき集めている

- ・理論上魔力切れが起こることはない無限のバックアップである

- ・ただしジンのリンカーコア以上は溜めこめないとため周りに溢れてしまう

- ・わかりづらいつて人は常時スターライトブレイカーの収束をしていると思えばよいかと

ブライマル・アーマー

■ P A

- ・上記の能力により収集した魔力がリンカーコアの限界以上に溜め込もうとした時にあふれ出る魔力素、または収集中の魔力素を体の周りに漂わせることで発生する天然の魔力素による全方位防御フィールド

- ・防ぐのではなく相手の魔力・物理攻撃を減衰、消滅させる。また接近しての攻撃も効果範囲に入るとスピードが落ちてしまう。（水の中で暴れるような感じになってしまう）

- ・上記のスキルの副産物である

- ・わからない人はA M Fの強力な感じだとイメージしていただければ（あっちは魔力の結合を緩ませるのであって、こっちは常時水の膜を張っているような物であるが…）

マジッククリエーター

■ 物質創成

- ・魔力による物質の再現。汎用性が高く、ジンの知識によりその場

アカシックレコード

でデバイスを強化することさえ出来る

・作った物質は破損すると魔力に戻り消えてしまう

・ジンの持つ銃も鎧もこれで毎回作成している。作成できないものは有機物などを中心とした生命体

・わからない人はF a t eの投影魔術をイメージするといいと思う

アレゴリー・マニユビレイト・システム

■ A M S

・スキルというよりは体質。体質というより改造人間

・本来はネクストと脳神経をつなぐことにより自分の体のように機体を操れるというものだが、なのはの世界に来たときに世界の修正力によりデバイス（この場合はエレベア）と接続することにより自身のマルチタスク処理能力の向上や演算能力の向上。自身の体調のデータ化による管理や魔力吸収能力の効率向上などになっている

・エレベアとユニゾンデバイスに近い関係になる。（融合するわけではない）

・もちろんフィードバックも健在で、デバイスが破損すると自身の精神に多大な負荷がかかり最悪、脳が焼き切れて廃人または死亡してしまう

・デバイスとの差込口は普段嚴重に隠蔽されているために発見することが出来ない。（首元の後ろあたりにある）

・わからない人はエヴァンゲリオンの精神リンクとマトリックス的なジャックをイメージすればいいかと

戦闘^{スタイル}形態 *****

■^{ノーマル}第一段階

最初からジンが行っていた最も魔力消費量（魔力消費＝リンカーコアへの負担。精神負荷じゃない）が少ない高機動タイプ。（それでも一般的な魔導師から見たら結構速い）小回りが利く形態であるが、防御力がPAだよりのために不安が残る。（それでもBJの上から胴鎧型のデバイスを着けている訳だから一般の魔導師よりは防御力は高い）

第一段階ということはまだ先の段階が……？

デバイス1

***** 名前 *****

エレベア

- ・ A C f Aの世界でのジンの愛機だったものがデバイス化したもの
- ・ セットアップ時でも胴体鎧部分の内側にネックレスとして存在する
- ・ 演算処理補助特化型であり、フォームを記憶する領域を持つぐらいなら演算の処理にリソースを回すコンセプトである（そもそも武器としての機能がない）

・ ネックレスをコアとし、ジンのレアスキルマジッククリエイターの物質創成により現状に必要な武器、鎧などを構成する。この辺りはアーマードコアの構成理論の流用である

・ 武器や鎧などはエレベアのサブデバイス、外装に近い感覚でリンクさせている。（stsのプラスタービットのような感じ）

・ 間違えないで欲しいのは鎧の部分はバリアジャケットではなく、デバイスだということ

***** 見たい目 *****

待機形態： エジプトの壁画っぽい眼をイメージしたネックレス。
またはホワイトグリントのエンブレム

戦闘形態： 上記と同じ。 胴鎧の裏に隠れてて見えない

***** イメージC V *****

坂本 真綾（あとはわかるな？ リンクス諸君）

***** 性格 *****

・ 礼儀正しい付き人のような性格。かといってジンのことが最優先というわけではなく周りの事も考えての言動が見られる

・ 最近はジンと漫才じみた会話をするのが気に入っている

・ 戦闘中の魔法の発動時の淡々とした声は、某オペレーターの前作からの変わり様を想起させる

キャラクター2

***** 名前 *****

ヘリックス・テストロッサ（通称リック）

・現実からのトリッパー

・自称フェイトの兄

・実際はプロジェクトFの失敗作。何の因果か男性になってしまい、そこにリックが憑依した。……のかは不明。最初から意識があったのかもしれない、と言うのは本人談

・なのははアニメ版しか知らない

***** 年齢 *****

肉体的には9歳

***** 容姿 *****

金髪に紅眼。フェイトそっくりの顔の造形に（クローンだし）髪型は目に掛かるぐらいの前髪を額より少し上で真中から左右に分けた

ツンツン頭に左右不揃いのもみあげ

イメージはFF？ACのクラウドの髪型（わかんなかったらググってください。たぶんすぐ出てくるかと…）

***** 利き手 *****

左手

***** デバイスセットアップ時 *****

・ 黒い半袖のジャケットに軍用ブーツとズボン。左肩だけに付けた黒い革製の肩当てとそこから左腕をすべて覆うようにした長袖。両手先からは肘まで覆う手袋をし、腰にはこれまた左側の足全体を覆い隠すようにして装着した黒いマント

・ ぶつちやけFF？ACのクラウド

***** 身長 *****

ジンと同じくらい

***** イメージC V *****

福山 潤（本人はジンの声が ” 彼 ” に似ているから羨ましいと
少し思っている）

***** 性格 *****

明るいお調子者

クラスに一人はいるようなムードメーカー

非常に妹（あるいは姉）思いの兄（あるいは弟）である

***** 魔力保有量 *****

A A A +

***** 魔導士ランク *****

非保有

***** 戦闘スタイル *****

空戦／高速機動接近戦型

***** 魔力光 *****

蒼

***** 使用魔法 *****

■ ブレイド・ブレイク (Blade・Break)

自身の魔力変換資質である蒼炎（下記参照）を纏わせた飛ぶ斬撃着弾後に炎が対象に纏わり着きながら燃え、魔力を削っていくもとよりバリアブレイクの性能を持っているのと蒼炎の効果により、かなりのバリアブレイク性能を持つ
基本、受けに入ると危険な魔法である

■ フレイムランサー (Flame Lancer)

フォトンランサーの蒼炎版
フォトンランサーとは違いサイズが大きいが連射が利かない
もちろん蒼炎の効果も付いている

■ フレイムバインド (Flame Bind)

一般的なリング状のバインドの蒼炎版

捕縛対象の魔力を削っていく

性質（捕縛対象を無効化するという点）としてはストラグルバインドに近いのかもしれない

ジンにはあまり利がなかったようだ

■ブリッツアクション（Blitz Action）

フェイトも使う高速移動魔法

フェイトほどスピードが出ないが、結構速い

***** レアスキル *****

■魔力変換資質 『蒼炎』

・ヘリックス固有の魔力変換資質。ただの炎ではなく、触れた物の魔力を燃焼し燃え上がる性質がある

・魔法に組み込むことで極めて優秀なバリアブレイク性能を持つことになる（厳密にバリアブレイクではない。防御魔法を構成する魔力を燃焼させて攻撃を届かせるだけ）

■ファントムウィング（PHANTOM Ⅱ 幻影 WING Ⅱ 翼）

・自分の意思により周りにある生物及び魔力を含む物質以外の物質

を”分子”レベルで分解し魔力に変換する能力

・また、魔力収集時に未だ半物質状態の魔力素（以下、マテリアルと呼称）をも引き寄せてしまう。これらは使用者の魔力に変換されることはなく体全体に付着する。その状態で高速移動することで付着したマテリアルが体から剥離し、質量のある残像として機能する（本編の疑似幻影がそれ）

・ちなみに”まだ”不完全な状態での使用であるため、使えない能力がいくつか存在し時間限定である

デバイス2

***** 名前 *****

フエンリル

・ヘリックス監修、リニス製作の合作

・インテリジェントデバイスなのにアームドデバイス並みの強度を誇る

・カートリッジシステムは未搭載

***** 見 目 *****

待機形態 ： バルディッシュの2Pカラー。外縁が黒で中心の
アが青

戦闘形態 ： 鋼色の大剣。ぶつちやけクラウドの合体剣

***** モ ー ド *****

■ブレイド（Blade）
元ネタは……うん。アレです
パワー型

■ツインソード（Twin Sword）
デバイスを分解しての二刀流
元ネタは……（ry
利点は手数が増えるのみ

フェンリルはビジュアル重視と頑丈さが取り柄のデバイスという結
論に

***** イメージCV *****

中田譲治

***** 性格 *****

・今のところ本編では全く描写されていないが、某外道マーボー……ゲフンッゲフンッ！！神父のようにチクチクと人の心を攻め立てる性格

・ヘリックス曰く「どうしてこうなった？」

・ヘリックスの手により会話の機能（念話も含む）のほとんどを管理者権限により封印されている（過去にあった出来事のせいでフェイトが若干トラウマになっているため）

・でもときどき自力で封印を解除して出てくるらしい。性質が悪い

各キャラの精神状態（2010/6/19更新）

6月の更新記録

- ・管理局サイド解放
- ・ヘリックスの精神状態に追加

|||||主人公サイド|||||

■ ジン ■

自分が何か……それも決定的なものを忘れていることに気づく。しかも中途半端にキーだけ覚えているから自分の存在に疑問を持ってしまった。（転生者であることと現実世界の記憶を失っている）

自分の精神支柱の ” レイヴンのクローンであること ” と ” リンクス ” としての誇りが折れかけていたがはやてとの会話で折れることはなくなったが結果を先延ばしにしているだけ。それでも……守りたい世界（自身の身内）があるんだ！ と本人は思っている。

■ エレベア ■

ジンが何かに悩んでいるのは分かっているが、相談してきてくれないので何も言えないでいる。そのことに不甲斐無さを感じ、また信用してもらえてないのかと悩んでいる。

■ なのは ■

フェイトちゃんが知りたい。友達になりたい。以上。ジンに対しては小学生の好き嫌いの範疇でしかない。（の割には積極的である）

■ ユーノ ■

自分のせいでなのはたちに迷惑をかけてる。早く集めきらないと……。ジンとは何故か馬が合う。なのはとの関係？ さあ……？

■ 士郎 ■

最近、末娘のなのはが夜遅くに帰ってきたり、やたら疲れてたりしてて心配。でもジンが付いてるから大丈夫か、と思っている。出番がない人その1。

■ 桃子 ■

上記と大体同じ。夫が何も言わないので自分も何も言わない。ジンに『お母さん』と呼ばせたい。ジンに『お母さん』と呼ばせたい。重要なことなので二回言った。高町家で怒らせてはいけない人であり、出番がない人その2。

■ その他兄弟 ■

紹介ですらまとめられてしまうほど影が薄い。ユーノ以下。ジンとなのは何か隠していることに気付いているし、無用なものに巻き込まれているのではないかと二人のことを心配している。出番がない人その3、その4。

|||||フェイトサイド|||||

■ ヘリックス（リック） ■

一人だけ愛称あり。原作と過程が大きく違っているのに内心戸惑っている。（アニメしか見てないから。本編は劇場版準拠）ジンが手強いのでどうしようかと思っている。フェイトLOVE（妹として）

もう一人は嫌だ、らしい。過去に何があったのか？

■ フェイト ■

お母さんっ子 及び お兄ちゃんっ子。 一人で無茶しないことをアルフと約束した。以上。

■ アルフ ■

原作より冷静と言うより落ち着いた雰囲気を持つ。（作者にも予想外。好きだからいいけど……） リックもフェイトも無茶するから心配。アレ？ お姉さんポジション？

■ プレシア ■

無印ではいまだ出てこないラスボス。 アリシアアリシアアリシア
アリシアアリシア（以下無限ループ）

＝＝＝＝＝＝管理局サイド＝＝＝＝＝＝＝＝＝

■ リンディ ■

面倒なことになってないといいけど……。あ、この紅茶おいしい。

■ クロノ ■

管理局正義。逆らう奴はいない。フハハハハハ！

||||| 日常サイド |||||

■ アリサ ■

ジンに対してはよく自分をからかって来る嫌な奴。でもわかって乗ってしまう自分も嫌い。嫌いと言っても友達の範囲内、あれさえなければ……と思っている。親友であるのはが隠しごとをしているのが気に入らない。そんなに信用ならないの！？ 出番ない人その5（ちよつと待ちなさいよアンタ！！）

■ すずか ■

しょうがないなあ……。などと思いながらアリサの暴走を止めてく

れるありがたい人。でも自分たちにも悩んでることを相談してほしいと思ってる。出番がない人その6。

〓 〓 〓 番外サイド 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓

■ はやて ■

図書館でしか出会いが今のところない。ジンに好意を抱いている。このあと無印では一切出番がない。

■ はやて姉（仮） ■

はやての双子の姉。はやて曰く美人。原作には登場しない人物だが……？

第6話 金色の魔法（前書き）

はいはい。一週間ぶりに駄文が通りますよ〜っと。

今回は最後にアンケートがあるのでよろしくお願いします。

魔法少女リリカルなのは { 白き閃光の後継者 }
Magical Girl Lyrical NANOHA }
Successor of WHITE-GLINT }

第6話 : 金色の魔法

side - ジン

ジンだ。昨日は大変だった。いや、確かなのはに気を使いながら戦うのは大変だったが、あのあとからが大変だった。

家に入る前に背負ったのはを叩き起こし、門をくぐって玄関のドアに手をかけた時、後ろから声がかかり不覚にもビクリと身を震わせてしまった。

まあ、そこにいたのは恭也さんと美由紀さんだった。

よく考えれば当然だ。

オレはバレないように出ていったから問題はないだろうが、なのは余程慌ててたに違いないからな。バレても仕方がない。

もとより、桃子さんを除き一般人からかけ離れたこの家の人間からバレないように出ていくのが難しい話だ。

なのはがいくらこっさり出ようと、氣付くに違いない。

で、なのはは今日拾ったフェレットが心配だったと二人に言い訳していたわけだが、どうやら魔法のことは秘密にしておきたいらしい。

まあ、賢明な判断といえば判断だ。魔法の存在を信じろという方が難しい。

面倒は嫌いなんだが仕方がない。

オレは適当になのはの話に合わせながら二人で言い訳し、納得がいかないまでも出ていった理由だけはわかったのだろう兄様方と玄関から家に入ったわけだが…

うん。まあ、予想通りだったな。気付くのが嫌で現実から目を背けてたけど…

予想通り（？）高町家で圧倒的発言権を持った桃子さんと、家長である士朗さんがいた。

ほんと、面倒は嫌いなんだけど。嫌いというか、この家でこの二人を相手にするのが間違ってるというか…

高町家のリビングでとりあえず恭也さんたちに話した内容で言い訳するオレたち二人。

これは無理かなあ、と内心士朗さんたちの反応を見ながら思っていたが、なのはが件のフェレット君を出した後、桃子さんが陥落。

桃子さん的には…いや、美由紀さんも陥落してたから高町家の女性的にはど真ん中ストライクだったらしい。

士朗さんと恭也さんは何か言いたげな顔でこちらを見ていたが、桃子さんたちの方を一度二人でチラッと見た後同時に溜息を吐き、何か諦めた顔で桃子さんの方へ向かって行った。

これは見逃してもらえたのか、あるいは全権を任されたのか。

なのはも高町家特有といってもいいほど、自分で決めたことは曲げない人間だ。

なのはがここまで必死になって言い訳している姿を見て何か感じるものがあつたのだろう。後で追及されそうな気がするが。

これで何とか今日は寝れそうだ…

以上が昨日の夜にあった高町家での出来事だ。ホント〜に大変だ

った。

桃子さんのあの顔が笑ってるけど気配が笑ってない（目ではない）
プレッシャーはヤバイ。

先程少し目を覚ました時に確認した現在時刻は八時。

昨日の戦闘で思いのほか疲労していたのか、休日であることを最大限利用して惰眠を貪っている訳だが…

—— ボフィン！！ ——

「ゲハッ！？」

突如発生する腹部への衝撃。後から来るそれ相応の痛み。

「ゴホッ、ゲフッ！！」

「な、なのは…ちょっとやりすぎじゃない？」

「にやはは…、ちょっとやりすぎたかも」

「ケホッ、…ちょっとじゃないぞ、なのは。お前にも同じ痛みを受けさせてやるのか？」

オレはいきなりお腹に飛び乗ってきたなのは体を反転させることでベットにうつ伏せに放り出し、背中の上でマウントを取った後、両の拳をなのはの頭の横に添えグリグリと捻る。

「にやあああああ！ 痛い痛い痛いー！！ ジン君ストップ！
な、なのはが悪かったから、止めてー！」

「そうか？」

オレは拳の動きを一度止めて、なのはに問う。

「ううゝ、そうだよ。ジン君、ごめ…」

「だが止めん！」

なのはがそのまま謝ろうとしたが、オレは拳の動きを再開することによって遮る。

我が情眼を妨害する者に裁きの鉄槌を！

「にやあああああああ！」

「ところで珍しくなのは休日の割に早起している訳だが…」

「酷いよジン君…」

「それはさっきのことか？」

「両方だよ!」

「結論から言わせてもらおうと、どっちもなのは悪い」

「うう…」

「ま、まあまあ」

《そうですよジン。大人気ない》

オレがなのはに鉄槌を下した後、最早あうあうとしか言えなくなった涙目のなのはの代わりにフェレット君が今後の話をしたいと言ったのでオレはなのはの部屋で待っているように言い、寝間着から着替えた後にエレベアを持ってなのはの部屋に来たわけだ。

なのははそれは見事な orz の体勢で部屋の隅でいじけている。

「とりあえず自己紹介からするか。オレはジン、ジン・レイヴン・アナトリアだ」

「僕はユーノ、ユーノ・スクライアです」

フェレット君、もといユーノ・スクライア君はフェレットの姿で器用に頭を下げながら自己紹介をする。

「んじゃ、改めてよろしく。オレはユーノと呼ばせてもらっぞ?」

「うん、いいよ。改めてよろしく。じゃあ僕はジンって呼んでいいかな?」

「ああ、頼む。堅苦しいのはごめんだ」

「もう! 二人とも無視しないでよう!」

「「ああ、ごめんごめん」」

部屋の隅でいじけていたなのはが復活してきたので、二人して同じタイミングでなのはをなだめる。

つい、お互いに顔を合わせてから笑いあう。…ユーノとは気が合
いそうだ。

「もう、二人して！」

「拗ねるなよ」

「拗ねてないもん！」

なんて言って明後日の方向に向くのは。だからそれが拗ねてる
って言うんだよ…

「あはは…」

「むっ」

ユーノは何と言ったらいいいのかわからないという顔で苦笑し、な
のはは可愛らしく唸りながらこちらを睨む。別に怖くはないが。

「悪かった。悪かったからそう睨むな」

「ハア…わたしはなのは、高町なのはだよ。なのはって呼んでね。よろしくね、ユーノ君」

「うん、よろしく。なのは」

「んで、こっちが相棒の…」

オレはそう言ってから首から下げているネックレスを突く。

《私はエレベア。ジンのデバイスです》

「デバイス？」

「レイジングハートと同じような存在だよ、なのは。魔法を補助する存在」

《そうです。ジンの魔法を補助したり、観察日記をつけたり、寝顔を撮ったり…》

「待て待て待て待て待て…！ お前は一体何をしている！？」

何かいらんことを話したエレベアを遮るようにしてオレは口を挟む。

《別にこれといって変わったことはしてませんが？》

「嘘つけ！ 魔法の補助をしたり〜の後はあきらかに変わったことだろうが！」

《そんな！？ 私は趣味すら持つてはいけないって言うんですか！？》

「趣味なのかよ！ しかも何でそんな悲壮そうな感じで言うんだよ…。」

ええい、なのはたちもそんな目でオレを見るな！ オレが何か悪いことをしたみたいじゃないか！」

「したみたい、じゃなくてしてると思うの…。」

《ほら見なさい、ジン。やっぱりあなたが悪いのです》

「……な、なんだ？ オレが悪いってのか？ そうなのか？」

《そうです》

「そ、そうか。すまなかった」

《わかっていただければいいんです》

「……なんだろう？？ 激しく丸め込まれた気がしかせんのだが…。」

なんか納得がいかないんだが…オレか？ これ、オレが悪いのか？

「あはは…。それにしても本当の人みたいに感情豊かなデバイスだね」

「他は違うの？ ユーノ君？」

「うーん、普通は違うかな？ レイジンググハートと比べてもらえればわかるけど、もうちょっと機械的というか…」

「ホント、なんでこんなに人間臭いんだか…」

《きつとジンに似たんですね》

「お前はペットかなにかか？」

「…ホントよく喋るね。一応聞くけどインテリジェントデバイスなの？」

「《……》」

「えっと、違うの？」

「ユーノ君、インテリジェントデバイスって何？」

「ああ、うん。独立した意思と喋ることのできるデバイスのことだよ。レイジンググハートもそうだけど…」

「へえ。じゃあエレベアさんもそうなの？」

「《……》」

「えと、えつと、どうしたのジン君？ エレベアさん？」

「いや、こいつ…」

《本当に私…》

「《一体何なんだろうな／でしょうか？》」

「「…えつ？」」

いやホントに何なんだろうか？

ユーノが言っていた分け方からするとインテリジェントなんだろうが、バリアジャケット展開時はオレとジャックで繋がって一つになってる感じだし、ユニゾンデバイス？ いやいやいや…

「ーン君、ジン君ってば！」

「ん？ ああ、悪い。考え込んでた」

「大丈夫？ ジン」

「ああ、大丈夫だ。ただこいつが、な…」

「え〜と…僕から言い出したことだけど、それは置いといて…」

「……」

「君はいつたい何者なんだい？」

「……」

ついに聞いてきたか…まあ、隠しようがないしな。どこまで話そうか…なのはまでこつちをジッと見てるし。

…やれやれ、面倒は嫌いなんだがな。

「…オレは、この世界の住人ではない。

一年前にこの世界に転移し高町家に拾われて以来、養子として迎えられている」

「…次元漂流者” ってこと？」

「…次元漂流者” ？」

なのはは聞き覚えのない単語に首を傾げて言外にオレたちに説明を要求するが、オレに聞かれてもわからない。

オレの中途半端なアカシックレコード内を探しても、その単語は見つからない。

「ごく稀に次元震とかで別の世界から他の世界を渡ってきてしまう人がいるんだ。その人たちを総称して”次元漂流者” っていう

んだけど…ジンはほんとに知らないの？」

「知らんな。その疑問に答えてやってもいいが、それよりもなのは次元世界の解釈とか教えてやってくれ。

混乱どころか頭がパーになりかねない」

オレとユーノはそろってなのはの方を見ると、見事に頭の上に？を付けたのはがいた。

っていうのを幻視出来るほどんんん唸って頭を抱えているのはがいた。

「えっと、なのは。次元世界って言うのは…」

ユーノはいまだ頭を抱えているなのはに次元世界についてのレクチャーと自分も別次元の人間なのだと言うことをあらためて説明をする。

しかしやはりオレの知識は穴だらけらしいな。別にかまわんが、中途半端なのは気が済まない性質なんだけどな…

「なんとなくだけど、わかった気がするの…」

「ああ、なのは？ 大丈夫か？ 話を続けたいんだけど…」

「うん、大丈夫だよ。ジン君」

「そうか…じゃあ話を再開しよう。オレが次元漂流者のことについて知らないのは…」

「知らないのは？」

「ここ一年で魔法の存在を知ったからだ」

「…どういうこと？」

「オレの世界に、魔法など存在しなかった。あるのは荒廃した大地と、経済戦争だけ…」

「……」

自らのことを語り始めたオレに二人はジッと耳を澄ませる。

そんなに真剣だとすべてを語る気のないオレの良心がチクチクと痛むんだが…

「一年前、ある出来事の結末見た後…オレはこの世界に飛ばされていた。」

そして訳も分からず無理矢理注ぎ込まれるような知識の奔流の後、オレはこの世界に来てすぐに気を失って土郎さん、高町家に拾われた」

「知識って言うのは…？」

「魔法を含めた技術全般のことだ」

「技術全般？」

ユーノが不思議そうに聞いてくる。言ってもパツと思い浮かばないか…

オレは例えを出すためにアカシックレコードに自身を接続して知識を引き出す。

「基礎魔法理論、多次元世界の解釈、次元航行技術、デバイス及びそれに準ずる作成に必要な技術、失われた世界の技術、世界の遺産ロストログアの作成技術…」

「なっ…！」

「悪いがこれ以上は知識を引き出そうとすると脳髓が痛むんで止めさせてもらっぞ」

そう言っオレは自分のこめかみを人差し指でグリグリとマツサージする。

ああ、痛い。

慰めにしかないんだけど何んとなくしてしまっようなぁ、この動き。

「じゃあ、君が持っているデバイスは…」

「ユーノが考えていることとはたぶん違うと思うぞ？ エレベアは当時オレが所有していたものがデバイス化したらしい。

ありえない現象だとは思うんだが、オレの中の知識はその可能性があることを否定はしなかった。むしろその現象を利用した技術すらあった」

《違いといえば、私に自己意識があることぐらいでしょうか？》

「そうだな」

もともとシュミレーターのアＩだしな。本人曰く、だが。嘘を吐いてると思わないけど。

「ちなみにオレがバリアジャケット展開時に眼と髪の色が変わるのは、オレの世界の技術のせいらしい」

そう言っオレは首に掛かった髪の毛を退かし、隠蔽用に組んだ魔法を解除して二人に見えるようにエレベアとのジャック（接続口）を見せる。

「名をAMS。もともとある機械と一体化する技術なんだが、こつちに来てからはデバイスと自身を接続するようになってしまったよ
うだ」

「えと、触ってもいい？」

「ぼ、僕もいいかな？」

「別にかまわないよ」

オレがそう言うのと二人は恐る恐る首元を探ってくる。どうでもいいが、ユーノの体毛がこそばゆい。

二人にジャックを触らせながらもオレは説明を続ける。

「利点としては自身のマルチタスク処理能力の向上や演算能力の向上とかあるな。欠点はさっき言ったように体の色素が一部変わってしまうことぐらいか」

他にもあるがこの際省いてもいいだろ。

「……………」

二人は固まって動かない。

いや、ユーノは絶句しているだけなのだがなのはあきらかにオーバーヒートしているだけか。頭から黒い煙出してるし。

「こんなところか。オレのことはそれくらいにしていと、と…ユーノ次は君の番だ」

なのはがこれ以上混乱しないようにオレは話題を変える。

「……」

「おゝい、ユノ？」

「……」

まだ絶句してやがる。

オレはユーノの意識をこちらに戻すために、その小さな頭に生えているアホ毛（？）を引っ張る。動物虐待？ 知らないね。どうもこいつ変身魔法使った人間っぽいし。

ついでに頭から黒煙を出しているなのはも戻すか。右斜め四十五度からのチョップ！

「イタタッ！ ジン、ストップストップ！ 抜ける抜ける！？」

「ふにゃ！？」

「ようし、戻ってきたなお二人さん。ユーノ、次は君の番だつてば。

なんでこの世界に来たのか、何を手伝ってほしいのか…」

「ああ、うん…。実は…」

ユーノは自分の頭を押さえ、若干涙目になりながらも説明を始めた…

そこからかれこれ一時間ほどユーノの説明は続いたが、

「…要するにユーノが発掘したロストログア、ジュエルシードだったか？ をしかるべきところに輸送しているとき、襲撃を受けてこの世界にばら撒かれてしまった…」

「…うん」

「それでもって一人で何とかしようとしてみたはいいものの、体質的な問題でこの世界の大気中の魔力素との適合不和を起こし魔力不足だ…」

「……うん」

「このままじゃ昨日の夜のように大変なことになってしまうので…」

「君たち…ジンとなのはに手伝ってほしいんだ」

「もちろんだよ、ユーノ君！」

「…なのはならそう言うと思った。少しは迷えよ。なのはらしいと言えばらしいが…」

「困ってる人は放っておけないよ！」

なのはの様子を見る限りそれだけの理由じゃない気がする。

この一年間それなりになのはを見てきてきたが、ここまで生き生きしたなのはの表情は見たことがない。

「ハア…やれやれ、オレも協力はしよう」

ホントやれやれだ。まあ、それはそれでいいんだけどな。

「二人とも…ありがとう」

ユーノは感極まったのか、若干鼻声になりつつもフェレットの姿で頭を下げる。

やっぱりシュールだ。

《ジン。報告しておくことがあるのでは？》

「ああ、そうだった」

「「？」「」

二人は何のことなのかといった風に首を傾げる。

「エレベア」

《 P u t o u t . 》

「「えっ！？」」

エレベアの言葉とともに出てきたのは一つの青い宝石。件のジユエルシードだ。

「ジン、これはどこで…」

「なのはが魔法を知る数十分前にな、蛇に取り憑いていたのを叩き潰して手に入れた」

「潰してって…」

なのはオレの言葉に苦笑しながらも、目の前に浮かぶ青い宝石に目を向ける。

「大丈夫だったの？ ジン」

「大丈夫じゃなかったらあそこには向かってなかったよ。それに楽な仕事だったし」

「一応生物を取り込んだジュエルシードって結構強いんだけど…」

《まあまあ、ユーノさん。そこはジンですから》

「…何でだろう?? それで納得してしまう僕がいるんだけど」

「で、だ。これはとりあえずなのは、お前が持っておけ。大丈夫、キッチリ封印処理はしてある」

「ふえ!? わ、わたし!？」

「そうだ」

「べ、別にジン君が持っても…」

「言い出しっぺは自分で責任を持て」

そう言ってオレは半ば無理やりなのはジュエルシードを押しつける。

あれって結構リソースを取るんだよな。エレベアはもういっぱいいっぱいだし、処理が遅くなつてはオレが困る。

なのはは文句を言ってきたがオレは適当に受け流し、結局はレイジングハートの中に収めることに決まった。

「うう…」

「オレに口で勝ちたかったらもう少し国語の成績を上げることだな」

適当に捨てゼリフを吐きながら、オレはチラッと時計を見やる。

午前十一時。

長々とお互いに喋りすぎていたようだ。

「ともかく朝食を食べよう。腹が減って仕方がない」

「にやはは…結構時間が経ってたね」

「うわ、ホントだ。ごめん二人とも」

「気にはしないさ。どうせユーノの分もフェレット用の餌で用意してあるんだろうからな」

そうしてオレたちは遅すぎる朝食を食べに一階のリビングに下りていく。

朝食を食べながらの相談でジュエルシード探しは昼を過ぎてからに行くことにした。

s i d e o u t

* * *
* * *
* * *
* * *
* * *
* * *
* * *
* * *
* * *
* * *
* * *
* * *
* * *
* * *
* * *
* * *
* * *
* * *
* * *
* * *

時刻は夕方。

空は時間と共に青から赤へとその色を変えていく。

そんな時間。

木々の隙間から差し込む光が赤く地面を染めるなか、森の中でじやれ合う三匹の猫達。

人から見ればそれほど大きくなく、森とは言えない林程度だったけれども猫たちにとってはまさしく森のような大きさだった。

じやれ合う三匹の猫達は時間を忘れているかのように夢中になって遊んでいるが、そのうちの一匹が強く押し出され弾き飛ばされる。

その猫は弾き飛ばされながらも大した事はないといった風に起き上がると、仲間であるもう二匹の猫の所に勢いをつけて飛び込む。

それに気づいた二匹の猫はじやれ合うのをやめて二手に分かれて飛び込んでくる猫を避ける。

飛び込んでいった猫は勢い余ってじやれ合っていた猫たちのすぐ後ろの草むらに飛び込んでしまい、その草むらを抜けながらもその

体を一転二転させ、ようやく止まった。

もう一度仲間たちのもとに向かおうと思ったのか、猫はその閉じていた目を開けると目の前には青い種のような形をした宝石。

猫はそれに興味を惹かれたのか、宝石を見つめていると唐突に宝石は眩いばかりの青い光を放ち、辺りを埋め尽くす。

そこには青い宝石と猫の姿はなく、黒い虎ほどもある大きな獣の影があつた。

全体的なフォルムは猫科の動物を思わせるしなやかな体つきだが背中から尻尾と肩の部分からは刺のような突起物が。

また、その下顎の犬歯は以上に伸び、まるで古代の生物…サーベルタイガーのように長く見た目通りの牙となっていた。

「グオオオオオオオオオ!!」

黒い獣の咆哮は辺り一面に響き、先程までじゃれ合っていた二匹の猫たちはお互いに身を寄せ合い、突然現れたその大きな獣に身を震わせることしかできなかった。

「にゃあああ…」

「にゃううう…」

「グルルルルル…」

だがそんな状態が長くは続くはずもなく、黒い獣：猫獣は二匹の猫に跳びかかっていく。

しかしその凶爪は猫たちに届く事はなく一陣の魔法陣、金色の魔法障壁で阻まれていた。

猫たちを後ろに庇い前に立ってその凶爪を防いでいるのは一人の少女だった。

流れるような美しい金色の髪は左右で黒いリボンにより結っており、黒一色の服装でまとめられたその体はどこか華奢な印象を見る者に与えるが、その整った顔立ちと紅い瞳に映る意志の強さは同年代の少女が持つにしては強い光があった。

左手は魔法障壁を張るために前に出し、右手は上に構え魔力弾を生成してただ一言。

「バルディッシュ…」

《Get set》

その言葉に答える声はどこか機械的な男性の声であり現在の状況からして少女は魔導師であり、返事を返したのはデバイスだとわかる。

そして少女は右手で生成した魔力弾を振りかぶり、目の前の黒い獣に放つ。

魔法障壁と同じ金色の魔力弾は地面を抉りながら黒い獣を吹き飛ばしていく。

黒い獣が体勢を立て直した時には既にそこに少女の姿はなく、黒い獣の雄々しかった尻尾は漆黒のバリアジャケットに黒いマントを羽織った少女の持つ、これまた黒い斧状のデバイスで見事に根元から断たれていた。

「ギャオオオオオオ！」

黒い獣は悲鳴を上げながらもすぐさま反転し、少女の方へ向き直りいつでも飛びかかれるようにその身をかがめる。

少女はそれに対して持っていたデバイスを構えて目の前の黒い獣に注意を向ける。

が、黒い獣が一際その身をかがめたとき、先程少女が斬り飛ばした尻尾が無数の触手に分裂し背後から襲いかかる。

それに気づいた少女は軽やかな身のこなしで避け、あるいは手に持ったデバイスで斬り払いながら防いでいくがそうしている間に黒い獣はその背から黒い、ドラゴンのような翼を生やし大空へ逃げようとしていた。

少女はそれを追おうとしたが横合いから猛烈なスピードで黒い獣に突っ込んでいく白い影を見て動きを止めた。

side - なのは

あれからお昼ご飯を食べた後、ジン君とユーノ君の二人と別れて
三人別々にジュエルシードを探していたんだけどなかなか見つから
ない。

もうお空が真っ赤だよ…

『二人とも、見つかった？』

二人に教えてもらった念話って言う魔法の一種でユーノ君から声
が掛かる。

『いや、悪いが見つかってない』

ジン君のぶつきらばうでいて、すまなそうな返事。

うん。やっぱりジン君はやさしいと思う。なんだかんだ言っ
てわ
たしの事もユーノ君の事も手伝ってくれてるし…

「『ごめん、ユーノ君。わたしも見つからな…』っ!!」

そのときわたしの近くから身に覚えのある感覚がよぎっていく。

わたしがそちらの方向に目を向けると金色の光が林の中からいく
つも漏れ出てきて、あちこちで爆発を上げていた。

『ユーノ。ジュエルシードが発動したみたいだな』

『なのは。僕たちが行くまでそこで少し待ってて!』

ユーノ君がわたしに待っているように言うが、そんなの…

「『そんなの待ってられないよ! あんなのが町に出たら大変なこ
とになっちゃう!』」

『だから待ってて言ってるんだよ! なのは!』

『そうだよ、なのは!』

ジン君とユーノ君が止めてくるけどきつと大丈夫！

「『昨日の夜は大丈夫だった！ 今日もきつと大丈夫！ それにレイジングハートもいる！』」

『だからって…！』

ジン君が何か言っていたけどわたしは無視してそのまま林の方へ向かって走っていく。

誰からも周りから見えなくなったところでわたしはバリアジャケットを展開して空を飛ぶ。

少し先には黒い虎みたいな動物とアリサちゃんみたいな金髪の女の子が戦っているが見えた。

虎みたいな動物は女の子に攻撃して、それを女の子が受けている間に空を飛んで逃げようとしていた。

「レイジングハート！ お願い！」

《Yes, master. Cannon mode.》

わたしのお願いにレイジングハートは昨日の夜の最後に見た形に

変わってくれた。

「行くよ、レイジングハート！ ええええーい！」

わたしはそのまま虎みたいな動物に突撃していつて地面に自分と一緒に叩きつける。

そのままその上に乗った状態でレイジングハートを向け昨日と同じように攻撃しようと思ったとき、ふと女の子の事が気になってそちらに目を向ける。

その子と目が合った。

綺麗な紅い目。けど、どこかさびしそうな目。

わたしがその子に見惚れていると乗っていた動物が体を揺らしてわたしを振り落とす。

「きゃあー！」

わたしがバランスを崩して振り落とされると、上半身だけになってもその虎のような動物は飛んで逃げようとする。

ダメ！ 追わなくちゃ！

わたしがそう思っていると、いつの間にか虎のような動物の前に回り込んでいた女の子が鎌みたいな武器で体を縦に一閃する。

落ちてきた虎みたいな動物の体が青く光ったと思うと光の中から猫が出てきて林の奥に走って行ってしまった。

わたしはそれを見送ると空中に浮いている女の子の方に目を向ける。

女の子は空中に浮いたままになっていた青い宝石、ジュエルシードを取るうとして近寄っているところだった。

「待って！」

「…！」

わたしの声に一旦止まってくれる女の子。

わたしは同じように空中に飛んでいって女の子と同じ目線まで行く。

「それは私の友達が探している物なの。あなたは どうしてそれを集めているの？」

「答えても… たぶん、意味がない」

女の子はそう言って斬りかかってくる。

かろうじてレイジングハートの柄でそれを受け止めながらわたしは女の子と話そうとする。

「そんなこと… きゃあ！」

そんなことない。そう言おうとしたわたしを女の子は手に持った武器で弾き飛ばして、いくつもの魔力弾を撃ってくる。

わたしはそれを防ごうとしたけどすぐに防御を抜かれ、攻撃が当たっていく。

地面に堕ちていくわたしに向かって最後の一発の魔力弾を撃とうとしている女の子。

撃つ前に何か呟いていたけどわたしにははっきりと聞こえた。

「……ごめんね」

女の子はそういつてわたしに向かって魔力弾を撃つ。

わたしにはもう、一発も魔力弾を防ぐ力なんてなくて、そのまま魔力弾に当たり地面に吹き飛ばされていく。

「うつうつ…」

地面に吹き飛ばされたわたしが見たのは、ジュエルシードをその手のデバイス（今さらそれがデバイスだとわかった）に収納して去っていく女の子の後ろ姿だった。

わたしはそれを最後に見ると意識を失った。

s i d e o u t

side - ジン

「あの、馬鹿!!」

オレはそう悪態を吐きながらなのはの許へ全力で走る。

《『ホント猪突猛進ですね、なのはちゃん』》

エレベアが周りに配慮し、念話を使って話しかけてくる。

「まったくだ！ これなら一緒に行動しているべきだった！」

《『ジン、落ち着いてください。周りの方々が不審そうに見えます』》

確かに周りの人はいきなり叫んだオレを驚いたような目で見て
いる。

「そんなこと関係あるか！」

《『落ち着きなさいと言ってるんです！ あなたが冷静にならな
くて、誰がなのはちゃんを守るんですか！』》

「ッ！」

普段全く聞かないエレベアの大声に幾分か頭を冷やされるオレ。

普段どこるか今まで聞いたことがないのではないだろうか？

そんな余分な思考がよぎるほどに頭が冷えたオレはエレベアに礼
を言う。

「『すまん、エレベア。ちょっと我を見失ってた』」

《『はい。あなたは常に余裕を持った態度をしとく方がらしいです』
》

「『…ありがとう。それにしてもなのは奴、自分が戦闘訓練を受
けてないってわかってるんだろうか？』」

《『どうにかなる、とは思ってるんでしょうね。確かにあれほどの
才能ならゴリ押しで何とかかなりますから』》

「『別れて探す前に言っとくべきだったな』」

幾分か冷静になったがオレの足は一秒たりとも休まず、全速力で走り続ける。

オレがなのはから一番遠い所にいることを恨みながら…

オレが現場に着いた時には既に事は終わっており、体中をあちこち怪我をし気絶したなのはがユーノの治癒魔法を受けているところだった。

「一体どうなってんだ？」

オレはすぐに二人に近づきユーノと二人で治癒魔法を行う。

「わからない。僕が来たときにはこうだったんだよ。それにしてもジン、治癒魔法も使えたんだ……」

ユーノはビックリしたようにオレに言うがそんな得意ではない。

「一応な、あんまり得意じゃないしユーノに比べれば気休め程度にしかないが……」

「それでもだいぶ助かるよ。あんまり僕の魔力回復してないから治しきれるか不安だったんだ」

「そうかい」

「……ん」

合流したユーノと喋りながら治癒魔法をかけているとなのはが目を覚ました。

「……ジン君、ユーノ君？」

「ああ」

「うん」

「…ごめんね。わたし…」

「今はいいから黙って治療を受けてろ」

「そっだよ、なのは」

「でも…！」

「いいから。お前には山ほど説教がある。後で楽しみに待っているよ。」

「ふえ？ えと、あの、お手柔らかに？」

「フフフフフ…」

「『《……》』」

フフフ…言いたい事がありすぎてなぜか笑いが込み上げて来るんだけどなんでだろう？

なぜそんな怯えた目をしているんだい？　なのは。

というかユーノ。「ジンはあんまり怒らせないようにしよう」だって？　聞こえてるぞ？　それにオレは怒ってなんかいやしないしぞ？

エレベア、何をそんなにコアをチカチカさせているんだい？ 微妙に震えているように見えるんだけど。

オレたちは終始そんな雰囲気では今日は帰宅するのであった。

s i d e o u t

* * * * *
* * * * *
* * * * *

s i d e - ? ? ? ?

公園の噴水の縁に腰を下しながらジュエルシードの事を考える。

何に使うのかわからないけど、母さんは必要だと言ってたもの。たぶんロストロギアじゃないかな、とは思っている。

これさえ集めたらきつと母さんは昔のやさしい母さんに戻ってくれる。

わたしはそこで結論を下して定時連絡の時間が来たのでアルフ、私の使い魔であり家族でもある存在に連絡を入れる。

「アルフ、どうだった？」

【フェイト！】

空中に開いたウィンドウにはオレンジの髪に青というよりは水色の眼をした私の家族、アルフがうれしそうな顔をしていた。

【発動前のやつを一つ見つけたよ。フェイトはどうだったんだい？】

「わたしも一つ見つけたよ。それに魔導師にも一人あった」

わたしがそう言つとアルフは目を細めながら

【…管理局の奴かい？】

そう聞いてきた。けどたぶん…

「うっん。たぶん違うと思う。戦うの初めてだったみたいだし…」

【まあ、いいや。フェイトに何かしようとする奴はあたしがボッコポコにしてやるからさ！】

アルフはそう言いながらも左右の拳を誰かを殴るようにして振ってみせる。

「ありがとう…」

【そりゃそうだよ！ フェイトのためならって奴さ！】

アルフはわたしに褒められたのがうれしかったのか、お尻に生えた尻尾をブンブン振っている。

「そっいえば兄さんは？」

【まだ連絡は来てないよ？ それにアイツなら真っ先にフェイトに連絡するんじゃないかとあたしは思っただけどねえ！】

なんてアルフと話していると兄さんから連絡が入る。

【すまん、フェイト！ 連絡遅れた！】

ウィンドウに映ったその顔はわたしと同じように紅い目をしていて金髪。髪型は空に向かってツンツンと頭の上から立っていて、耳元の髪は左右両方共顎くらいまでに長いけど右側だけ左側より少し長い。後ろ髪はわたしと違って短くしてある。

「ううん。大丈夫だよ、兄さん。兄さんの方はどうだった？」

【そっちもすまん。一つも見つけられなかった…】

いつも元気な兄さんが落ち込んでる。わ、わたしが何とかしなきゃ…！

「そ、それはしょうがないと思うよ。わたしも発動したやつしか見つけられなかったし…」

【あたしは発動前のやつを見つけたけどね】

【グハッ！】

せっかくわたしがフォローしたのにアルフの一言でウィンドウから消えてしまった兄さんの顔。

「だ、大丈夫？ 兄さん？」

【いや、大丈夫だよフェイト。ただちょっと心が痛くなっただけさ】

そう言いながらウィンドウに戻ってくる兄さん。えと、こういうときは…

「えと、えっと…兄さん頑張れ！」

【うん、頑張るよオレは！ たとえアルフと同じように探しても見つからないのは、きっと場所が悪かったに違いない！】

うん。兄さんの元気が出てよかった。元気な方が兄さんらしいと思うし。

【ただ探索魔法が苦手なだけじゃないのかい？】

【ゲハッ！】

「アルフ！」

【アハハ！ ゴメンゴメン、フェイト。やっぱりこいつ面白いからさあ、ついね】

「もう！」

【いやいや、フェイト。気にしてないサ、気にしてないトモ！ そ

うなのサ、そうだとモー！】

【あゝ…】

「始まつちやった…」

兄さんは時々こうなる。暴走といふかなんというか…

兄さんの暴走が一通り終わり元に戻ってからこれからのことを話し合う。

「この調子で集めれば全部集められるかな？」

【大丈夫さ、きっと！】

【どうだろうな。管理局の連中に見つかるのは時間の問題だと思うけど…】

「そっだよな…」

【簡単じゃないか！ 管理局の連中が来る前にあたしらで集めてしまえばいいだけさ！】

【そう簡単にいくものかな？ けどま、それもそうか。今日は止めて明日にしよう】

「うん、そっだね。わたしも疲れたし…」

【そうそう、早く帰ろう。今日の晩飯は何だい？】

【今日か？ 今日はな…】

兄さんが今日の献立を言い、アルフは跳び上がらんばかりに喜んでいる。

あつ、今日はハンバーグなんだ。うん、兄さんの作るハンバーグは好きだな。

そのあとすぐに兄さんは晩御飯の食料を調達しに行くと言って、アルフは嬉しそうな顔ですぐに帰ると言って連絡を切った。

わたしも座った噴水の縁から立って、晩御飯を楽しみにしながら帰るのだった。

第6話 金色の魔法（後書き）

「ジンとAAのリリなお茶会」

AA「すまねえな相棒（読者）…、俺の器（戦闘描写）はどつやらここまでらしい…」

ジン「なんだ藪から棒に。そんなオールドキングみたいなことを言ってるって死ぬぞ？」

AA「長らく待たせてしまった今の自分の心境を語ってみたまでなんだけど…」

ジン「重度のコジマ汚染患者にしか受け取れないな」

AA「やっぱり？ 最近友人とのメールがこんなんばっかで受信ボックスを見ると笑える状態になってたんだ」

ジン「ああ、そう。で？ いつまでこんなこと喋ってるんだ？」

AA「おっとっと、そうだった。それじゃあ、今日はゲストがいるぞ？」

ジン「ゲスト？」

AA「本編のヒロイン。高町なのはちゃんだ！」

なのは「えと、お邪魔しまーす！」

A A「うんうん。狭苦しいとこだけど座って座って」

なのは「ありがとうございます!」

A A「あゝ、癒される…。素直な子はいいいえゝ。それに比べてうちの主人公は…」

ジン「なんだ?」

A A「可愛げがないなあ…」

ジン「男に可愛げがあってどうする、この駄作者が」

なのは「なんか…ジン君、喋り方いつもと違うくない?」

ジン「ん? ああ。こっちが本来の喋り方なんだよ、なのは」

なのは「そ、そうなんだ(ちょっとキツイけどこっちのジン君もかっこいいなあ)」

ジン「で、その屑」

A A「それっておれのこと?」

ジン「お前以外の誰がいる」

A A「ヒドイ…。本編のジンは一体どこに行ったんだ」

ジン「(無視)じゃあ恒例の補足質問タイム行くぞ。なのはも何かあったら言えよ?」

なのは「うん」

ジン「まずはオレから。オレのこと喋ってしまったているがあれはいのか？」

AA「ああ、うん。肝心なところは喋ってないしね。クローンだ、とか。実は大人だった、とか」

なのは「ええ！？ ど、どういうこと！？ ジン君！？」

ジン「本編で語られるまでお前は待ってけ」

なのは「ええええ」

ジン「ええええ、じゃない。オイ、その屑。いらんことを言うな。空気も読めないのか…」

AA「悪い。つい口が滑った」

ジン「滑ったで済む問題じゃないぞ、まったく…」

なのは「うう、ジン君のことは気になるけど…。次、わたしが質問してもいいかな？」

AA「どうぞ」

なのは「質問というか不満なんだけど…わたし、あそこまで突撃思考じゃないと思うの」

ジン「嘘つけ。お前、止めても止めなくても突撃だろうが」

AA「それにアニメ版はまだしも、劇場版を主体にしてるからね。あれ観た時は笑ったよ」

なのは「うう、二人がいじめる…」

ジン「ならやる前に一度は考えて行動しろというのだ、この馬鹿が」

AA「そういえば、ジンの説教はどうなったの？」

なのは「ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ」

ジン「フッフ…（黒笑）」

AA「えーと、なのはちゃんが回復するまで感想返しに行こう。

悠様、確変様、少佐様、秋永様感想ありがとうございます」

ジン「こんな駄文もPV30000、ユニーク60000を超えるに到った」

AA「特に確変様のアドバイスは為になりました！」

ジン「どんなやつだったんだ？」

AA「チェックしとけよお前…」

ジン「貴様が見せなかったただけだろうが…」

A A「そうだっけ？ えつと内容は『ジンは武器アセンを変えたり出来るのでしょうか？ネタでいいから』とつつき』しているジンを見てみたいですわwww」だ」

ジン「アセン変えは出来るよな？」

A A「できるよ。無印編ではしないけど」

ジン「なんでだよ」

A A「ジンの魔力運用が未熟だから武装を固定して慣らすため。アセン変えはA'sからかな？」

ジン「案外まともな設定だな」

A A「他の設定に使ってたのをこっちにも使っただけだね」

ジン「他の設定？」

A A「それは主人公設定の所でも見といえればわかると思うよ？ああ！大切なことを忘れてた！」

ジン「なのは（↑復活）」「大切なこと？」

A A「うん。フェイトの兄」

ジン「ああ、勢力バランスのために後付け設定で加えられた奴な…」

A A「おまつ、そういうこと言うなよ！」

なのは「にやはは。それで作者さん、フェイトちゃんのお兄さんがどうしたの?」

A A「うん。実は「名前が決まっていなかったと言っなよ?」「…うっ!」

ジン「うっ!　って貴様…」

なのは「図星みたいなの」

A A「いやいや。一応考えてるんだよ?　けどね、作者のネーミングセンスがあまりにも酷いから厨二臭くて…」

ジン「知らんよ、そんなこと」

A A「お前には期待してないわ!」

ジン「なんだと?　貴様…」

A A「お前とはこの空間でどっちが上なのか白黒はつきりつけなきゃいけないみたいだな…」

ジン「…おもしろい、行くぞ!」

A A「来い!」

——ドカツ!　バキッ!——

なのは「え」と、作者さんとジン君が喧嘩を始めてしまったのでこ

ここからはわたしがするね！

作者さんも言ってたけど、まだフェイトちゃんのお兄さんの名前が決まってないの。というわけでアンケートを取りたいと思います。期限は今日から三日間。3月27日の午前0時までだって。

こっちから下が一応のプロファイルらしいので参考にして下さい。あつ、忘れてたけど感想に書いてね♪ それじゃ次回をお楽しみに♪」

名前：

（誰か付けて…！）・テストロッサ

前世の名前は 織野おりの 翔大しょうた

・現実からのトリッパー

・現実↓リリカルなのは世界へ

・恋人と喫茶店でイチャついていたらトラックが突っ込んで死亡。気が付いたらプロジェクトFの実験体に憑依していた

・フェイトの兄を公言しているが実際はフェイトの後の実験で生まれたため弟と言える

年齢：

肉体的には9歳。憑依前は18歳

容姿：

金髪に紅眼。髪型は目に掛かるぐらいの前髪を額より少し上で真中から左右に分けたツンツン頭。さらに耳元の髪が左右両方共顎くらいまでに長いが右側だけ左側より少し長い。

イメージはFF?ACCのクラウド（わかんなかったらググってください。たぶんすぐ出てくるかと…）

利き手：

左手

身長：

フェイトより5cc3倍くらい高いくらい。よりするゑにズンと同じくらい

イメージCV：

福山潤

性格：

明るなお調子者。料理が得意。

最後に一言「文才が欲しい…」

第7話 想いの魔法（前書き）

明日投稿するといつて翌日になっちゃった orz

みんな遅れてスマン。今回クオリティーもちよつち下がってるかも…バイトしんどい。

あつ、アンケートの協力ありがとうございました。
またみんなに頼ることがあるかも？
そんなときはよろしくお願いします。

第7話 想いの魔法

二度目の生

架空の世界に生きし者

自分がそうなるとは、思ってもみなかった

イレギュラーな存在だとは分かっている

それでも、愛しい妹（姉）を支えてやりたい

例え結末を知っていても、

決めたことだけは曲げる気はない

ただ、それだけのこと

第7話：想いの魔法

side - ???

昨日から開始したジュエルシード探し。昨日の段階で見つかったものは既に二個。

フェイトはなのはと交戦したっぽい。あんまり深く聞いてはいないからわからないけど、この時期に地球で戦うのはなのはだけのはず。

それに原作じゃ序盤でこんなにもジュエルシードがフェイトの下に集まっていなかったはずだ。

まだ始めてから1日目。確か月村邸の巨大猫からだったと思う。

疑問に思ってフェイトに聞いてみたところ月村邸でもなく、猛獣相手だったとか。

猛獣？ デカかった？ 普通の猛獣サイズ？ ふん…

俺のせいで原作からも既に離れてしまっているのだろうか？

ん？ どうしたフェイト？ 何で聞かかって？ そりゃ愛する妹が心配だったからに決まってるだろう？

ああ…そんな頬を染めて俯きながらモジモジして「あ、ありがとう…」なんて言わないでくれ。萌え殺す気なの？

なんだよ…俺が誰かって？ 今我が妹に萌えている所なんだ。邪魔しないでくれ。

ああ、ホント可愛い。現実で見ると更にだな。

…あれ？ 俺って基本同じ顔なんだから服装と髪型さえどうかしたらあれが出来るのか？

……………。

何も考えなかった事にしよう。

？ なんだまだ居たのか…。俺の正体を暴くまでは立ち去れない？
？ そもそもあんた誰？

…何だよ二人とも。そんな痛い子を見る目でなぜ俺を見る？

誰に向かって喋ってるのか？ 目の前のコイツに決まってるんだろ。

いやいや…何でそこで溜息吐くのアルフ？「また始まった…」って何がだよ！　おゝい。

あゝ…二人して寝室に行っちゃった。何なんだよ全く…

ああ、はいはい。アンタもしつこいな。

わかったわかった。ちゃんと自己紹介やるから急かすな、まった
く…

俺の名前はヘリックス・テストロッサ。気軽にリックって呼んでくれ。

名前は自分で付けた。螺旋って意味だったと思う。何語か忘れたけど…。

名前の通りフェイトとは　”きょうだい”　だ。

似すぎ？　双子かって？

厳密に言つと違うな。俺もフェイトもある人物のクローンだ。

オリジナルはアリシア・テストロッサ。すでに故人だが、女だ。

なんでクローンなのに俺が男になってるのが不明。そもそも原作に俺いねえし。

まあ、ここまで来たら名前の意味はわかんと思うけど人の遺伝子

配列って螺旋状だろ？ 要するにそういうことだ。

勘の鋭い奴なら薄々わかっていると思うが…現実世界、要するにこの世界が”リリカルなのは”って名前のアニメで、それが放映されていた世界からの転生者。

いや微妙だな、憑依かもしれん。生まれた時から既にある程度体が大きかったから判別し辛いな…

前世って言うのか？ まあいいや。前世の名前は 織野 翔大。
何でこの世界に来てしまったのかこれまた不明。お気に入り作品だっただけでもマシか？

親友の一年目の命日だったんで、由希…フルネームは おおにし 大西 由希、
な。俺の最も愛しい人。と一緒に墓参り行って近場の喫茶店に入って件の親友について話してたんだよ。

アイツには世話になったからな、俺たちは。俺たちの共通の親友というか、腐れ縁というか…

んでまあ、一時間ぐらい話し込んで”さあ帰るか”って席を立ったところで道路側から轟音。視界が暗転。

目が覚めてみるとそこはなんだか変なポットが乱立する場所だった

たつて訳だ。

…自分で言つといて何だが、意味不明にもほどがある。

で、だ。俺もその、何かの液体で満たされているポッドの中にいたわけだけど出たくて暴れてみればなんか手足が短い。それに視界に入ってくる髪の色がなぜか金髪。

まあ、下を向いたときにあるものあつてよかったけど…

自慢じゃないけど俺は自分の髪を染めたことはない。無論、純性日本人なのでパツキンな訳がない。

アレか？ 俺は実は死んでいて仮面。イダーが如く改造されてしまったのか？

俺は焦った、そりやもう意味わかんねえこと考えるぐらい焦った。

んで、わたわたししている所に黒髪で長髪のサドっばい目つきの美女がやってきた。このとき俺はこう思ったね

アレ？ この人プレシアじゃね？

美女は失敗策だの、わたしのアリシアだの、フェイト以下の屑だの罵っていた。

ここにきて俺はようやくと自分の事態に気付く事が出来た訳だ。

ああ、なるほど。テンプレ展開ですね、分かります。金髪なのはアリシア嬢のクローンだからで、なんでか実験失敗で男になってしまつて、それに俺が転生だか憑依だかなんだかしたんですね。

で、一人罵り続けていたプレシアは急に黙り込んだと思うところを向き、手元の制御盤らしき物を操作し俺を生体ポッドらしき物から出した。

出した、というよりは中の液体と一緒に押し流したって感じだったわけ？ 混乱してたからあんまり覚えてないや。

俺は気管に入った謎の液体のせいで咳きこみながらもプレシアの方へ目を向ける。

「あなたは私の駒よ。あなたにはさつさと力を付けてもらって私のために働いてもらうわ。いいわね？」

いいわね？ って、あなたデバイス向けながらお願いすことじゃないよね？ 断ったら殺る気満々じゃん…。

俺に抗う術もなく、というか生身で素っ裸の状態では勝てる訳もなく

「Yes , Master…」

Noと言えない日本人ぶりを発揮したわけだ。

これが3年前の話。俺が二度目の生を受けた時のことだ。

この辺りからプレシアはフェイトのことをアリシアとして見るこ

とはなくなった。

で、俺はフェイトとアルフ引き合わされた訳だけどうやって俺のことを説明しようかと思ったが、あるうことがプレシアは俺を親戚に預けていた双子の兄だと言い張った。

いやいや、さすがにそれは無理がある…って通るのか我が妹（仮）
… or z

そんなに無邪気に喜ばないでくれ、アルフでさえ怪訝な顔をしてるのに…

そんなこんなで数日、原作の引っ込み思案な性格はどこに行ったのやら妙にフェイトに懐かれていた俺達の元にある人物がやってくる。

茶髪とクリーム色の中間ぐらいの色の髪とそれと同色でまとめた服装。そして頭に生えた猫耳。ああ、彼女が…

リニス か。

いやドラマCDしか出番ないからあんまり印象に残ってなかったけど、実際見るとスゲーインパクトだな。

アルフもそうだけど獣耳って……

最高！！

おわっ！ 石を投げないで！

それから2年。リニスに徹底的に鍛えられた俺とフェイトはそれぞれデバイスをリニスに作ってもらうことになった。

フェイトはリニスにデザインから設計まで全部任せたいだけと俺はリニスにやってほしい事があったので時の庭園の中にあるデ

バイスルームにいた。

「どうしたのですか、リック？」

「いやデバイスのことだけど要望があつてさ」

「要望？ 出来る範囲でならいいですけど…」

「ああ。出来る範囲でいいから頼まれてくれない？ まあ別にそれほど難しいことでもないと思うんだけど、片刃の大剣型デバイスにしてくれないかな？」

「ええつと、具体的にはどんな形にして欲しいんですか？」

「この紙に描いていい？ こう身長ぐらいの大きさで、ここを取り外して…」

「フムフム…」

・ ・ ・ ・ ・

「…って具合なんだけど。えゝと俺、接近戦得意だし。あんまり補

助系得意じゃないから…」

「別に構いませんよ。逆に独創的で面白いと思いますし、リックの戦闘スタイルとも合いますから」

「よっしゃー！」

「…リックは何のために強くなるんですか？」

要望が叶ってテンションが上がっている俺にそう質問してくるリリス。そんなもの、自分の状況を把握してから決まっていた。

「妹…いや、姉であるフェイトを守る。それが救いようがない真実であろうとも、外敵であろうとも…。すべてから守る。それだけだ」

「……！」

俺の言葉に絶句するリリス。当然の反応といえば反応か。

「リックは…自分が何なのか知っているのですか？」

「でなければこんなことは言わないさ」

「……」

「別に怨んでる訳じゃない。俺がこうして存在できるのはあの研究

の結果だし。

けど、フェイトは違う。記憶を持っている、持ってしまったっている。今でさえあれだけ心を痛めているというのに真実を知ったらどうなるのか…」

「……」

原作じゃ立ち直るけど一度壊れかけるのには違いない。俺は…

「そんなのは嫌だからな」

「……」

「…デバイスを作ったらリニス、逝くつもりだろう？」

「！なぜそれを…！」

「…なんとなくそんな気がした」

本当は原作知識からわかっていた内容をそのまま言っただけなんだけど適当にごまかす。

「俺はそれを止められないのかな？」

「はい。プレシアとの、契約、ですから…」

「……」

「……」

「……そっか」

俺はそのまま部屋を出る。っと、その前に…

「絶対、リニスのことは忘れないからな」

それだけ言っていると俺は部屋から出ていった。

リニスが逝ったのはそれから数ヶ月後のことだ。完成したデバイスを俺たちに預けるとそのまま消えた。

その後フェイトとアルフが泣きじゃくって大変だったんだよなあ。俺も貰い泣きしかけたし。

で、それから1年。プレシアの願いという命令でジュエルシー

ド探しをしてるって訳だ。

なんか途中から話が脱線したな。こんくらいで良いか？

で、さっきからあんたに言ってるんだけど…、あんた誰？

は？ 冗談はよしてくれ。——だと？

んじゃ、なに？ あんたがここに俺を呼んだってか？

ってか、そんなん俺に言ってるいいの？

明日になったら忘れる？ そりゃどついつことだよ…

だんまりですか。そうですね…

………

本当に話す気ないの？

――

あっそう。ハア…俺も疲れたし寝るわ。あんたもさっさと元いた所に還れよ？

はいよ、おやすみ…って ” 欠片の子 ” ってなんだよ？ って
もういねえし。

なんなんだよ全く… ああ、眠い。俺もさっさと寝よう。

side out

* * *
* * *
* * *
* * *
* * *
* * *
* * *
* * *
* * *
* * *
* * *
* * *
* * *
* * *
* * *
* * *
* * *
* * *
* * *
* * *

side - ジン

ジンだ。あれからなのは単独で突入したことに対するお説教をした後、飯食って風呂入って後は寝るだけってなったとき、オレの部屋にユーノとレイジングハートを連れてなのはが来た。

「何の用だなのは。こんな時間に」

まったく、子供は寝る時間だというのに。

「あの、ね。今日のことは反省してるの」

「当たり前だ。反省してなかったらもう一度説教するところだ」

「……（ガクブル）」

「ハア…そんな事を言いに来たわけじゃないんだろう？」

「ゴメンナサイゴメンナサイゴメ…はっ！　そうだったの！」

「で？」

「えと、やっぱりわたしもちゃんと戦えるようになりたい。ジン君たちが来るまで戦って待てるぐらいの力が欲しい。

それに…あの子ともちゃんと話したい」

「あの子ってのは今日なのはが会った金髪の子か？」

「うん」

「話を聞いた限りじゃお話とやらが出来る状態だとは思えないんだが……」

「ううん、違うの。あの子、わたしに魔法を撃つときにごめんねって言ってたの」

「……」

「あの子はきっと優しい子だよ。それに……」

「それに？」

「……とっても哀しそうな目をしてた」

何か思うところがあったのか……なのは寂しそうな、それでいて遠くを見つめるような目をしてそう言った。

「だから、わたしはあの子とお話したい。けど今のままじゃきっとあの子はわたしのお話を聞いてくれない。あの子ともぶつかれるぐらいの力が欲しい」

そう言って何か決意したような表情を浮かべ、なのははオレをその澄んだ目で真っ直ぐ見てくる。

「だから教えて！ 魔法の上手な使い方！」

真剣な、そして心からのお願い。

あまり普段から我が儘を言わないのはにしてはとても珍しい。
だからオレは…

「だが断る」

あとエレベア！ お前理由知ってる癖に便乗して騒ぐな！」

「ヒドイよ、ジン君…（涙目）」

「もう少し考えてあげてもいいじゃないか！」

《女の敵〜！》

「このっ…！ だからうるさいと言って…」

——ガチャリ——

騒音の中にいやに響く音。

「……」

「……」

《……》

「……」

振り向いたオレ達の眼に映ったのは。極上と言ってもいい笑顔を浮かべる桃子さん。

「起きてるのはいいけど騒がないようにね？　夜も遅いんだから」

「「…はい」」

「《……》」

——キィ…パタン…——

「…」

「…」

《……》

「…」

死ぬかと思つた。比喻ではなく。なんで一般家庭でこんな気分を
味わわなくてはいけないんだ。

「と、とりあえず説明するから、な？」

「う、うん」

「まず、オレは魔法を教えることはできない」

「どうして？」

「最後まで聞けって。前に話したよな。オレは学んで魔法を扱ってるんじゃないくて元からあった知識から使ってるって」

「……あ」

「ん？ ユーノは気づいたか？」

「？ どういうこと？」

「仮説だけど…って僕が言ってもいいの？」

「まあいいか…言うだけ言ってみるといいさ」

「最初から知識があるから感覚的というか、直観的に使ってるんじゃないかな？」

「????」

「概ね正解だ。なのはに分かりやすいように言うと…今なのはハイハイから立つところを練習しているが、オレは最初から立つことが出来ていたってところか」

「？ えっと、わたしは生まれた時には立てなかったけど、ジン君は最初から立つことが出来たってこと？」

「ああ。そう言った方が分かりやすかったか。
要するに立つための苦労も練習もオレは知らないから教えられないってことだ」

「うう…せっかくジン君と一緒に魔法の練習が出来ると思ったのに…」

なのはそう言うとしょんぼりと肩を落とす。前々から思っていたことだがそのツインテールは感情に反応して動くのだろうか？今は力なく垂れている。動物の耳と一緒になのか？

それは置いておいて何か予想以上にがっかりしているなのは。

何でこう、この子は人に罪悪感をビシバシ与えてくるのだろうか。

「ああ…その、なんだ。あんまり落ち込むな？確かに魔法は教えられるが…」

「教えられるが…！？」

なのははさっきまでの様子が嘘のように目を期待に輝かせてこちらを見る。

「戦う術は教えてやれるからな。…ああ、練習ぐらいは付き合っ
てやる」

「…ありがとう、ジン君！」

なのはそう言うとオレ目掛けて飛びついてくる。

オレはオレで気恥ずかしかったから顔を背けつつ飛びついてきたのはの頭をなでるのであった。

《（ああ、恥ずかしがりつつも嬉しそうなジン。初々しいです♪
記録記録〜♪）》

何か悪寒が…気のせいかな？

その後ユーノと相談して最初の家は魔力運用など基礎的な事をユーノとレイジングハートから学び、それがある程度できるようになったらオレを相手に模擬戦形式で戦う術を学ぶことにした。

なのはは授業中もレイジングハートとイメージトレーニング（と言っても限りなくリアルなんだが）をして学んでいるらしい。勤勉なことだ。無茶しなきやいいが…

そんなある日のことだ。

いつも通りの面子で小学校から帰っているとアリサが急にこちらに向き直る。

「いい加減にしないよ！」

正確にはなのは見ていたのだがその表情は酷く怒っているように見える。

「この間から何を話しても上の空でボーっとして！」

「あ、ごめんね、アリサちゃん」

「ごめんじゃない！」

相当頭にきているのか、なのは謝罪の言葉をばっさり切り捨てるとそのままたみかけるようにして続ける。

「あたしたちと話してるのがそんなに退屈なら、ずっと一人でボーっとしてなさいよ！ 行くわよ、すずか！」

「ア、アリサちゃん……」

そう言ってズンズンと進んでいくアリサ。すずかはそれを見てなのはとアリサの方を交互に見ながらオロオロしている。

厄介な事に…なのはが何かに悩んでるのに気づいたのか？ あれでアリサは鋭いからな。

もう少し話を聞いてもいいと思うんだが…小学生にそれを求めるのも酷か？

「なのはちゃん…」

「…いいよ、すずかちゃん。今のはなのはが悪かったから…」

「そんな事ないと思うけど…とりあえずアリサちゃんも言い過ぎだよ…少し話してくるね」

「うん…ごめんね」

「すまん…フォロー頼む」

「…うん。わかったよ、ジン君」

すずかは一瞬何か言いたそうにしていたがこちらの意思を読み取ったのか、そう言ってアリサの後を追う。

「怒らせちゃった…ごめんねアリサちゃん」

「『学校なんだから学校のことを考えていればいいものを…』」

魔法関連の事も話すだろうから念話でなのはと会話をする。周りに人がまだいるからな。

「『朝からだな？ いや、昨日の魔法の練習からずっとか…。
例の金髪の子の事か？』」

「『うん…。どうやったらあの子とお話できるかなって、考えて
いたら…』」

「『それで友達怒らすのは良くないと思うが…』」

「『うつ…』」

「『まあ、とりあえず名前でも聞いてみたらどうだ？』」

「『名前？』」

「『いつまでもあの子じゃ話しづらだろう？
それに名前がわからないとお互いに理解なんて出来るものじゃな
い』」

「『…』」

なのはは黙ってオレの話に耳を傾け続けている。

「『まあ、オレが言いたいのはあんまり深刻に悩むなってことだ』」

「『…そう、だね。ありがとう、ジン君』」

「『『よろしい。じゃ、帰っていつも通りに練習でもする…』っ！』」

「っ！ ジン君、これ！」

「ああ！」

『なのは！ ジン！』

「『ユーノ君！』」

「『ユーノ、ジュエルシードが発動したみたいだ』」

『うん！ 今僕もそっちに行くから…』

「『いや、そのままジュエルシードの方へ向かってくれ』」

『ジン！？』

「『心配するな。オレもなのはと一緒に向かう。お前ほどじゃないが封時結界も張れるからな。』

合流したらとりあえずオレの結界の上から封時結界を掛けてくれ』

「

『わかった。気を付けてねジン、なのは』

「『ああ。行くぞなのは』」

「『うん！』」

オレ達は念話で各々の取るべき行動を伝えあうと発動したジュエ

ルシードの元へ向かう。

《『ジン』》

「『どうした？ エレベア』」

《『ジュエルシードの発動付近に三つの魔力反応を確認しました』》

「『三つか…最悪オレが二対一で戦うことになるかな？』」

《『ユーノさんが来れば少しはマシかと…』》

「『それでもアイツ本調子じゃないだろう？』」

《『防御に徹すれば何とかなるのでは？』》

「『…ここであれこれ考えても仕方がない。急いで現場に向かおう』」

「

《『それもそうですね』》

オレは少しだけ走る速度を上げる。運動神経が切れているのははついてくるのがやっとという感じだがこの際仕方がない。

戦場の香り。戦場の気配。

久しく感じていなかった感覚。

知らずオレはそれを感じ取っていたのかもしれない。なぜなら…

こんなにも気分が高揚しているのだから。

オレは口元に浮かぶ笑みに気付かない。気付けない。

空は既に夕暮れを越え、夜の闇が空を覆い始めていた。

戦いの気配を覆い隠すように。オレの心の奥底にある感情を覆い隠すように…

第7話 想いの魔法（後書き）

「ジンとAAと愉快的仲間たちのリリなお茶会」

ジン「いきなりコーナー名が変わったな」

AA「おっ！ 良いところに気づいたな、ジン！」

ジン「ふん…ここまであからさまだと誰でもわかる気がするが…
愉快的仲間たちってなんだ？」

AA「まあまあ。というわけでコーナー名に書いてある通り新レギュラーを紹介しまーす」

ジン「新レギュラー？」

AA「どうぞ入ってください」

「???」はいはい！ あとがきコーナーの新レギュラーことヘリックス・テストロツサだ。

気軽にリックって呼んでくれ！」

ジン「またうるさい奴が入ってきたな」

AA「はいはい、そんな事言わない。リック、自己紹介お願い」

リック「まかせろ！ 好きな物はフェイトと料理と前世の彼女。」

嫌いなものは弱い者いじめと理不尽なこと。原作はアニメしか知らないなあ。本編じゃまだあんまり活躍してないけどよろしく」

ジン「前世の彼女って…女々しい奴」

リック「ぐっ！ 何が悪い！ 俺は由希を愛してるんだ！ 死ぬ前も、これからもな！」

A A「おお…」

ジン「いや、スマン。大人気なかった。

しかしそこまで言い切ってしまうとは羨ましいな…（ボソ）」

A A「ん？ どうしたのジン？」

ジン「…いや、なんでもない。それよりも例の質問コーナーにいく」

リック「質問コーナー？」

ジン「ああ。この駄作者の小説で補足しきれなかった部分の突っ込みコーナーだ」

リック「なるほど」

A A「ちよっ！ そう言う発言止めてくんない！？」

ジン「（無視）じゃ、始めるか」

リック「（同じく無視）そうしようか。俺も聞きたい事あるからな

あゝ
」

A A「リックまで…酷い orz
」

リック「俺からいってもいいかな？」

ジン「構わん。檻樓屑のようになるまで切りこんでこい」

リック「アイアイサー！」

A A「そこで了承しないで!？」

リック「質問その1」。冒頭で俺が話している人って誰？ 記憶ないんだけど」

A A「それは教えられませんね」。この物語のキーになる御方ですから」

リック「御方」？ それなりに偉い人ってことか？」

A A「しまった！」

ジン「…しまったと言ってる時点で白状しているもんだよな」

リック「そうだよな」

A A「ああ!？」

リック「まあいいや。質問その2」。俺に元々付けようと思っ
た名前って何さ？」

A A「その前に名前のアイデアをくれた方々に感謝を。ありがとうございます」

リック「ちなみに俺の名前は確変様の案。きつちり理由も書いてくださってありがたかったらしいな？」

A A「はい、ありがたかったです。元ネタはA C 4のウォルコット姉弟の機体からだそうです。なるほどって思ったね、ぽかぁ」

ジン「あの連携は手強かったな…（遠い目）」

リック「？ ジンは知り合いなのか？」

ジン「ん、あ、ああ…。殺し合った間柄だな」

リック「殺し合った!？」

A A「はいはい、そこまで。本編であまり語られていない未開部分分は暴露しないように」

ジン・リック「すまん／ごめん」

A A「うん。素直でよろしい」

リック「ところで俺の質問には答えてくれないのか？」

A A「ああそうだった。元々付ける予定だった名前ね…」

リック「そうそう」

A A「……リオン」

リック「リオン？」

A A「そう、リオン」

リック「なんか……」

ジン「厨二臭いな」

A A「自覚あるんだからその辺にしてくれ……！ 他に質問ない？
ないなら感想返しに行きたいんだけど……」

リック「俺はないけど……ジンは？」

ジン「オレは特にないな。あまり出番なかったというか短かったかな、今回は」

A A「グハッ！」

リック「なんかクリーンヒットしたみてえだ」

ジン「一応自覚はあったらしいな」

A A「……グッ！ だが負けんよ！（↑何にだ） 感想返し行くぞ！
佐山・御言葉、B「S」様、EX「S」様、少佐様、ぱぼ様、確変様、
悠様。

感想・アドバイス・アンケート協力……」

一同「「「ありがとうございます!」「」」

ジン「PVは40000を突破し…」

リック「ユニークは7000を突破!」

AA「単にタグのブランド力を借りているだけ、そう分かっていても作者はうれしくて仕方ありません!」

ジン「駄文をダラダラ…」

リック「文章量が一定しない…」

AA「グフツ! …拙い作品ですが…」

一同「「「変わらぬ御声援よろしくお願いします!」「」」

リック「ところで前回の喧嘩ってどっちが勝ったの?」

A	ジ
A	ン
「	」
{	…
}	…
」	」
」	」

第8話 闘争の魔法 前編（前書き）

久々の更新。一か月以上って…遅すぎる、これは。

中身もあんまりいい出来では…。スランプって怖いなあ。

感想待ってまーす！ 叩きだろっがなんだろうがやる気につながる
んで！

第8話 闘争の魔法 前編

魔法少女リリカルなのは 白き閃光の後継者
Magical Girl Lyrical NANOHA
{ Successor of WHITE - GLINT }

第8話 : 闘争の魔法 前編

夕暮れから夜へと変わる空
の下。先程まで見えていた星達はその身を黒雲に隠し、頭上の急激な変化に気付いた人々は不安そうに空を見上げる。
そんな中、人込みを走り抜ける二人分の影。

「馬鹿なのか？ こんな街中で結界も使わず広域魔法でジュエルシードの強制発動なんて…」

敵対者になるだろう人間のあまりの考えのなさに、思わずジンは口から思った事が出る。

本当に何を考えているのだろうか？ こんなにも目撃者がいる中で封印作業などできるはずもないだろう。いや考えようによっては自分達を誘っている、とも取れる。ジュエルシードの封印のついでに他のグループを潰すのが目的であるのならば

「…舐められたものだ」

「ちよつ、ジン、君…すこ、し…待つ、て…」

ジンの後ろをなのはは必死に走っているが、いかんせん。なのはは運動神経が切れている。

「ん？ すまん。しかしその運動神経を魔法の才能並みとは言わないから一般レベルにはならないのか？」

「そんな、こと、言われ、ても…」

少しの間立ち止りなのはの息が整うのを待つ。そうしている間にもジュエルシードの反応は徐々に大きくなっていく。

このまま被害が広がるのも、一般人に目撃されるのもまずいと判

断し

「封時結界、発動」

世界の位相をずらし世界そのものを隔離する。

向こうの策に乗るのは気に入らないがこのままじゃまずいのは変わらないからである。

「あれ？ 周りの人が…」

「結界を張ったんだよ。さっさとセットアップしろよ、ここからは飛んで行ったほうが早い」

ジンはそれだけ言うと言首から提げている自身のデバイス、エレベアのコードを首筋のジャックに接続してセットアップし、ジュエルシードの反応がある方へ飛ぶ。

少しだけ、本当に少しだけナニカが起ることを楽しみにしながら…



「本当にいいのか？」

「うん」

この街でおそらく一番高いであろうビルの屋上に三人の人影があった。

二人は金髪、一人はオレンジの髪をビルの上特有の強い風になびかせながら下に見える街を見下ろしていた。

「こういう力任せの奴は俺の役割だと思っただけだな」

「でもアンタ広域魔法なんて器用な真似できないじゃないか」

「グハッ！」

「もう、アルフ！ ホントの事は言っちゃだめだよ、兄さんはそういうのが苦手なだけだよ！」

「……」

「…えと、なんか変なこと言った？」

「イヤ、イッテナイヨ？（天然って恐ろしいな…俺のライフはもうゼロよ！）」

「うん、言っていない言っていない（リックに止めを刺しちゃったよ…うわ、なんか真っ白になってるし）」

「？」

金髪の少年、リックは少女の言葉に深く項垂れ、オレンジ色の髪の女性、アルフはそんな彼に同情の眼差しを送り少女はそんな彼らを不思議そうに首をかしげながら見ていた。

「と、とにかくフェイト！ さっさとやっちゃって帰ろうよ。そろそろお腹も空いてきたしね」

「うん、そうだね」

「リック、今日の晩御飯って何なんだい？」

「…ん、おう…今日の晩御飯は…」

「「晩御飯は…？」」

「特に何も決めてない」

「「……」」

「あー…冷蔵庫には何が残ってたかな？ いやまあそれはともかく、さっさとやっちゃおう。」

ついでにジュエルシードに釣られてやってきたもう一組の魔導師を警告がてらに一回潰せばいいだろ」

「…うん」

リックの言葉にフェイトと呼ばれた金髪のツインテールの少女は表情を暗くしながら俯いてしまう。フェイト自身は他人を傷つける事だけはしたくなかったのだ。

「大丈夫か？」

「…うん、それよりもう始めよう。わたしもお腹がすいてきたし」

フェイトはそう言って表情を取り繕いながらも広域魔法を発動させる。空は徐々に雷雲が覆い始め、魔力により発生した雷が次々と宙を走る。

そしてついにそのうちの一つが目的の、ジュエルシードに当たったのだろう。ジュエルシードの起こす魔力の渦が光となり空に柱のように立つ。

フェイト達はすぐに飛行魔法を使用し、ビルの陰に隠れながらジュエルシードの元へ飛ぶ。そうしている内に突如、通りにいた人々は忽然と姿を消し、辺りにはジュエルシードの方から吹き付ける風がビルの間を通り抜ける音だけが聞こえるだけになってしまった。

「結界…」

「アツチも気づいたみたいだねえ」

「だな。ま、予定通りだな。急いで飛んで行こうか。向こうが先に着いていたなんて話にならないし」

リックの言葉に二人は口を開かずに頷き荒れ狂う魔力の中心点へ、ジューエルシードに向けて先ほどよりもスピードを上げながら飛んでいく。

ヘリックス・テストロッサはこの物語を知る転生者である。

だからこそ知らなかった。

待ち受ける者が正史における少女だけではなく、山猫（大鴉）がその身を疼かせながら待ち受けていることに…

「デイベイイインバスタアアー！」

なのはの砲撃魔法がジュエルシードに突き刺さった時、真逆の方
向から金色の魔力光と共にジュエルシードに突き刺さった。おそら
くこの騒動を起こした犯人で、なのはの言っていた子だろう。

「あつ……」

なのはも気づいたのだろう。そちらの方へ顔を向ける。そこにい
たのは金髪の少女と少年、そして使い魔であろうオレンジの髪の女
性。耳の形から推測される素体はイヌ科の生物か……。

両者は動かず、ただお互いの動きにだけ注視する中ただ一人。歩
みを進めて行くものがいた。

「あなたの、名前を教えて？」

「……」

「わたしなのは、高町なのは！ 私立聖祥大付属小学校三年生！」

少女はなのはの問いかけに一瞬考えるようなそぶりをした後

「…フェイト。フェイト・テストロッサ…」

ただ、そう一言漏らして自らのデバイスを振りかぶり鎌状の魔力刃を生成すると同時に、自らの周りに電気を纏った魔力弾を生成して臨戦態勢に入る。

それを見たなのははレイジングハートを構え、他の奴ら臨戦態勢に入る。

「なのは」

「なに？ ジン君」

オレの掛ける声にいちいちこちらを向いて聞いてくるなのは。戦闘前なのに敵から目を離すなどあればと言ったのに…これは後で説教だな、じゃなくて。

「あの子の相手は任せるぞ？ オレは他二人相手するから」

「……」

今度はさすがに声に出してはこなかったがその目にはありありと大丈夫なのか、とこちらを心配する色が見て取れた。

やれやれ、心配するなら自分の心配をしろっての。戦い方ってのは練習したからといってすぐに身に付く物ではない。所詮は付け焼刃なのだから自分の心配をして欲しい。

そこまで考えてずいぶん甘くなったものだと思いながら続けてなのはに声を掛ける。

「大丈夫、心配無用だ。それよりも自分の心配をしるよ？ 邪魔しないですて頼んだのはそっちなんだからな」

そうここまで来る間になのはから、あの子（フルネームはフェイト・テストロッサだったか？）との間は邪魔しないで欲しいと頼まれた。

もちろんオレは反対したが、いつぞやの時みたくなのはが頑固に自分の意見を譲らなかつたために、こうしてオレが譲るハメになつてしまったのだ。

まあ、本当に危なくなつたら約束を破つてでも介入するが…

「うん」

なのははそう簡潔に返事をした後に目の前を向き、あの子もそれを律儀に待っていたのかそれを確認すると二人そろって魔力弾を撃

ち合いながらどこかに飛んでいってしまった。

「…俺達も名前の教え合いでもするか？」

そう言って向こうの方から声を掛けてきた。

「オレはどっちでもいいんだが…まあいいか。
オレの名はジン。ジン・レイヴン・アナトリアだ」

「そうか、ジンか…。俺はヘリックス・テストロッサだ。呼び難い
だろうからリックでいいぞ？」

「ヘリックス、ね…」

”ヘリックス”、か。記憶にしか…いや正確に言えば記録か、
それしか知らないがどうもあの姉弟を思い出すな。
フツ…思い出すってのも変な表現になるのか…

ザザザ…ザザザザ／ザアアアアア…

——捉えたわ。あれが、アナトリアの傭兵…ジーン、いくわよ。
援護をお願い——

——了解。でも無理しないで、姉さん——

ザ／／…ザザ／／／ザア／／ザザザアア…

脳裏に、ノイズが、走る…

——まずい、読まれてる。姉さん下がって。俺がやる。姉さんは
見てて——

ザ／／…z aザ／アザA z a／ザア／／ザアア…

……走る…

——ジーン…逃げて——

——姉さん！？ キッサマアアアア！——

ザザザザ／／…ザざZ A Z a z A A aアaあaA a

ノ…iズ…が、はシ…r u……

「……」

「…おい、どうした？ いきなり黙り込んで俺の名前がどうかしたか？」

「…いや何でもない」

どうやら少し呆けていたらしい。少し頭痛がする。久々だな、この感覚も…。

目の前ではヘリックスと名乗った少年が使い魔であろう女性にも自己紹介するように促している。

女性は何で敵と自己紹介しなくちゃいけないんだと至極まっとうな事を言いながら少しの間抵抗していたが、ついに折れたらしい。

「アルフ。フェイトの使い魔だよ」

少し不機嫌そうにしながらそう簡単に名乗った。なぜかその様子が彼女には似合って見えたのだが少し不思議だ。

「自己紹介はすんだな。」

じゃ、オレ達も子供らしく欲しいものの取り合いでもするか?」

「お前…本当に二人相手にする気か?」

「別に三人でも良かったが?」

「——っ! アンタ…!!」

その一言をオレが言った瞬間に先ほどのまでの雰囲気が一瞬に嘘のように消え失せ、ただコッチを敵視する雰囲気だけが漂い始める。

「本気か?」

「本気だとも。大袈裟だな、そこまで驚くこともないだろう?」

「…わかった」

「リック!? アンタここまで舐められて平気なの? ただ後悔するなよ? コッチは全力で行くからな」…かい…」

ヘリックスはなんでもないうに言っているが…未熟だな、顔に出ているぞ?

まあ、この年代にポーカーフェイスをしろという方が無理な話か。

「後悔するな? …なら」見せて/魅せて” みる、オレを後悔させ

るまでの力を…！」

そう言っ てオレは向こうの世界で ”マウ M A R V E ” と呼ばれた
レイレナード社の傑作、その長銃二丁を物質創成で作成し、ヘリッ
クスたちに向ける。同時に魔力収集も起動させると周りに緑色に発
光する魔力素が集まり始め、オレを包み込むように球体を形作っ
ていく。

それに驚いたのか一瞬目を見開いた二人であつたがすぐに戦闘体
勢に入った。

ヘリックスは持っていた身の丈ほどのもある鋼色の大剣を、アルフ
は自らの拳を握り締めファイティングポーズ。
こんなにも心が浮つくのは久々だ。

そつだ。戦え。それでこそ…

「やりがいがあるというものだ…」

s i d e o u t

S i d e - ヘリックス

「ああ、もう！　当たりなよ！」

「そういつて当たる奴はいないと思うが？」

ジン・レイヴン・アナトリア…そう名乗ったアイツは本当に俺たち二人を相手にしている。

「ハアア！」

「フン…」

——ドビュウ——

アルフとやり合っていたアイツの隙を付いての上段から振り下ろした俺のデバイス、フェンリルの一撃は一つの爆音と共に避けられ、また一つ聞こえた爆音と共に急激に振り返ったアイツのデバイスだろっ長銃の銃口がこちらを向く。同時に銃口から発する光。

《 M A R V E B u l l e t 》

「——ッ！ ブリッツアクション！」

《 B l i t z A c t i o n 》

ブリッツアクションで急速離脱した俺は数瞬前までいた場所を白い魔力弾が2発飛んでいくのが見えた。

…信じたくないけど、本当にアイツはたえフェイトを含めて戦っても勝てるのだろう。

「ちよつとは、止まってな！」

アルフの言葉と共にアイツの左右から挟みこむようにして現れたチェーンバンドは爆音と共に前に加速したアイツに避けられ、加速したスピードのまま放たれた蹴りがアルフの腹部に直撃する。

アイツの蹴りを受けたアルフはそのままビルに直撃し、突っ込んだ所は衝撃で崩れ落ちた瓦礫や煙で見えない。

「アルフ——！」

「よそ見してる暇はあるのか？」

Defenser

「っ！　ぐあああ…！」

すぐさま飛んでくる数十発の白い魔力弾。

咄嗟にフェンリルを盾のようにして正解だったな。してなかったら間違いなくあの魔力弾を食らったところだろう。

しかしなんて威力だ。フェンリルが張ってくれたシールドも貫通して、なおかつインテリジェントデバイスだがフェイトのバルディッシュと同様に…いや、それ以上にアームドデバイス並みの強度を持っているはずのフェンリルに輝が入ってしまった。

おそらくあの魔力弾はS t sでティアナが使っていた”ヴァリアブルシールド”と同じ物か、あるいは似た物だろう。でなければあのサイズの魔力弾にしては込められている魔力に説明が付かない。

それにあの爆音と共に行う瞬間的な加速…対峙しているときに一瞬だけの加速とはいえ視界から消えたように移動するスピードは驚異的だ。フェイトの最高スピードをたぶん超えている。俺もそれなりどころか結構スピードに自信があっただがちょっとくじけそう

だ。
「ハアアアア…！」

さっきの蹴りのダメージから回復したアルフが俺に注意を払って

いたアイツにフォトンランサーを放つ。本家であるフェイトのフォトンランサーほどの威力はないが、牽制くらいにはなるだろう。俺もアルフの攻撃に一瞬目を向けたアイツに向かって射撃魔法を放つ。いや、射撃魔法かといわれれば微妙だが。

「ブレイド・ブレイク！」

Blade・Break

振り上げたフェンリルに自らの魔法変換資質の青い炎（俺は蒼炎と呼んでいるが）纏わせ一気に振り抜くと、フェンリルの先から蒼炎が迸りながら魔力の塊に乗り、アイツに向かって飛んでいく。

これは「ブレイク」の名が付く通り、この魔法はバリアブレイクの効果も持っている。俺が使える遠距離攻撃で最高の、威力はリニスによって立証済みという魔法。さすがになのはのディバインバスターほどの威力はないが、瞬間的なバリアブレイク効果は折り紙つきだ！

「……」

また一つ爆音。

アイツも防ぐのは不味いと思ったんだろう。瞬間加速によって回避しようとするが

「むっ……！」

あらかじめアルフと一緒に設置してあったバインドがアイツを拘束する。”何故か” アイツの近く、というかあの球体の中にはバインドを設置できなかった。設置しようとしても座標が ” 何故か ” 不安定で設置場所を固定できなかったのだ。

たぶんアイツの周りにあるフィールドの効果なのだろう。あれはレアスキルか何かなのだろうか。あれからは術式をまったく言っていないほど感じられない。

ジャマー系の能力だと推測し、故に周りに大量にバインドを設置することで逃げ場をなくす。中に設置できないなら外に設置すればいい。魔力を結構使ったが無駄ではなかったはずだ。

事実、アイツはバインドによって拘束されている。

そこにアルフが先に放ったフォトランサーが軌道を微調整しながらアイツに次々と直撃していく。

最後に俺が放ったブレイド・ブレイクが直撃。派手な青い炎が着弾点から吹き上げられ、アイツの防御を燃やし散らしているはずだ。

そのはずだ。

「やったね、リック！　いててて…」

「気を抜くなよ。あっちの子のこともあるんだから」

「あんな奴フェイト一人で大丈夫さ！」

「……」

不安は拭い去れない。

何故だ？ 何故あの攻撃を喰らっておきながらあの煙の中からアイツは落下なり何なりして出てこない？

「アルフ。フェイトのほうに行くのはもう少し待ってくれ。
まだアイツの魔力ノックダウンを確認していない」

「心配性だねえ…早くフェイトと合流し「なかなかどうして、侮れないな」っな！？ まだやられてなかったのかい！？」

海辺の街特有の潮風が吹きすさび、もはや残滓となっていた蒼炎を吹き消していく。

徐々に見えてくるアイツの姿。俺の目に飛び込んできたのは…

「そんな馬鹿な…」

無傷でその場に漂うアイツの姿。

「…一応聞くけど、どうやって防いだんだい？」

「聞かれて答えるだけでも？ 学校の授業じゃあるまいし、答える訳

ないだろう」

——ブウウン……

そんな音と共にアイツの周りを覆うように展開される球体上のジャマー系フィールド。

……いや待て。なぜ再展開されるんだ？ 防御のために一度切ったのか？ ありえなくはないけど……まさか。

「全方位防御フィールド？ ジャマー能力は副産物なのか？」

「え……？」

アルフが獣特有の聴覚で俺の小さな呟きを拾い、こちらを驚いたように見てくるがそれは今はどうでもいい。問題はアイツだ。

俺とアルフの一斉掃射を食らってなお健在。いや、一度あのフィールドは消えている。とはいえ、あの無傷具合からして最後まで展開できていたと考えれば、あれの力ラクリは一定以上の蓄積ダメージを防御し、ついでに張っている間は間接的なものでは内側には干渉できない？

くそ！ チートにもほどがある！ 俺の存在のせいだたださえ原作から離れかけているというのに、ここにきて本来存在しないはずのイレギュラー。しかもそれが馬鹿げた強さってどういうことだ！

俺だけでも魔力量はA A A +、アルフでさえAだ。それなのにどうして倒せない！ 軽く見たってアイツの魔力量はA A ぐらいだろうが！

「そら！ 今度はこつちからいくぞ！ サリーンシューター！」

S A L I N E S h o o t e r

アイツの背後から現れる二つのフォトンランサーより一回り大きいめの魔力弾が射出され一つはアルフへ、もう一つは俺へと向かって飛んでくる。

よし、そんなに弾速が速いわけじゃない。俺はそれを後退しながら大きく迂回しようとするがそれについてくるかのように魔力弾はその軌道を変える。

「誘導弾か！」

見ればアルフも振り切ろうとしているが魔力弾はしつこく喰い付いている。振り切るのは骨が折れそうだ。なら…

「撃ち落とすだけだ！」

俺は右手でフェンリルを持つと左手に魔力を集める。集まってきた魔力は俺の魔力変換資質に影響されて蒼い炎を纏う。

「フレイムランサー！」

Flame Lancer

術式はほとんどフェイトのフォトンランサーと同じだがフェイトとは魔力変換資質が違ったため別物になってしまった魔法。

俺のそれはフェイトのそれとは違い大きいが連射が利かない。まあ、俺の魔法全般がそうなんだが…

そんなことをつらつらと考えながら放った俺の魔力弾がアイツの誘導弾に直撃する瞬間、誘導弾は破裂し八つに分裂することで俺の魔力弾を避けてしまった。

「——っ、ディフェンサー！」

Defender

正面から殺到する八つのディフェンサーで防ぐが、その隙にアイツは俺の背後にまわってその右手に持つ逆三角形の形をした長銃を振り上げる。

「…エレベア」

LASER Fang

俺がそれに気づいて後ろを首だけ回して見たときには、振り上げた長銃を覆い尽くすように白く発光し双刃の魔力刃が形成されているところだった。

それはどこか獣の牙を思わせるようでいて、それが俺にそのまま振り下ろされ…

「っ！」

…ることはなく、俺の右側から飛んできた魔力弾を断ち切るために強引に軌道を横向きに修正され、その間に俺はアイツから距離を取った。

「すまん、助かった」

「いいよ。それにアイツ…」

「ああ。強い、な」

距離を取った俺のすぐ隣に先ほど援護射撃してくれたアルフが来る。

フェイトがなのはに負けることはないだろうが、こいつはダメだ。ここで俺が何とかしとかないと…

「どうして!」

…? 向かい合って対峙している俺たちの僅かに上から聞こえてきた声に、アイツも俺たちも頭上を見上げる。

「どうしてフェイトちゃんはジュエルシードを集めるの!？」

そこには先ほどまで魔力弾を撃ち合っていたフェイトとなのはが向かい合い、なのはがフェイトにジュエルシードを集めている理由を聞いていた。

+ + + T o b e c o n t i n u e d . + + +

第8話 闘争の魔法 前編（後書き）

♪ジンとA Aと愉快的仲間たちのリリなお茶会♪

A A「更新が大幅に遅れて申し訳ございませんでした！ m（――）
」

ジン「駄文」

リック「短い」

ジン「空気」

リック「失望」

ジン「粗製」

リック「途中下車」

ジン「水底」

リック「遅い」

A A「その通りでございますm（――）m 自分はダメな奴です。
ごめんなさいごめんなさいごめんなさい……」

ジン・リック「……」

AA「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい……」

リック「さすがに追い詰めすぎたか？」

ジン「いや、このぐらいやらんとこの超粗製リンクズは反省せよ」

AA「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい……」

ジン「（そろそろ鬱陶しくなってきたな……）」

リック「（なんとかしてくれよ、ジン）」

ジン「（…面倒は嫌いなんだが）」

リック「（俺だってヤダよ。けどそっちの方が付き合い長いだろ？）」

ジン「（乙樽。いや、ダル…）あゝ…反省しているところ悪いが遅れた & amp; 駄文になった説明をしないと読者の諸君が納得しんと思うんだが？」

AA「言い訳をさせてください……」

ジン「さっさとしてくれ」

A A「ん、ん…ゴホン。お気に入りユーザーの登録をしてくれている人は知っているかと思いますが、PCのOSがリカバリー領域ごと吹き飛びました」

ジン・リック「…は？」

A A「だから、リカバリー領域ごと吹き飛んだ」

ジン「いやいや。いったい何をした？」

リック「普通飛ばないよな？」

A A「学校でLinux入れようとしたら吹き飛んだ」

ジン「それでも吹き飛ばんと思うが…」

リック「それで今PCはどうなってんだ？」

A A「修理工場行き。あと2週間はかかるかな」と

リック「これどうやって投稿してんの？」

A A「学校の貸し出し用劣悪PC」

ジン「劣悪？」

A A「VistaからXPにすると途端に起動に不満が出てくる。というかスペック低過ぎるのも問題。完全起動に5分かかるとかありえない」

ジン「自業自得だな」

AA「うつっ…」

リック「ま、まああの辺で。話し進まないし」

ジン「そうだな。じゃ、恒例の補足コーナーをしようか」

AA「質問コーナーだ！」

リック「（無視）今回ジンがちょっとどこるか無双している気がして仕方ないんだけど」

AA「無視しないでくれよ…（泣）
リックの質問だけでもないよ。結構いっぱいだよな、ジン」

ジン「まあな。気を遣いながら戦うのはちょっと難しいな」

リック「へっ…って、手加減してあれかよ！」

ジン「手加減じゃない。気遣ってるだけだ」

リック「同じじゃないか！」

AA「それが違うんだな」

リック「どこが！」

A A「ジンはなのはの方を気にしながら戦ってたんだよ。な？」

ジン「…ああ（言えない。いつ非殺傷設定を切りそうだったかわからなかったから自分を気にしていたなんて言えない）」

リック「マジかよ…。あれ？もしかして俺たちって片手間であられてた？」

A A・ジン「…（二人ともリックから目を背けている）」

リック「あ、あれ？おかしいな？目からしょっぱい水が…」

A A「か、感謝コーナーに行こう！あんまり長々とやるのもあれだし！」

ジン「ああ。」

A A「ついに！ついに！この小説もP V・60000越えを果たしました！」

ジン「ユニークにいたっては10000越え…同じ奴が平均六回は見ている計算になるな」

A A「本当に、本当にありがとうございます！」

ジン「作者は面倒くさがりのリンクズだから誤字修正とか滅多にしないがその辺は許してやれ、とは言わん。むしろケツ叩く勢いで催促してやれ」

A A「けどコジマミサイルはカンベンな！」

リック「（空間の隅の方で） あれ？ 俺って準主役だよな？ やっぱ後付け設定だから扱いがひどいのかな？ ブツブツ…」

AA「おおーい！ そろそろ終わるよー！」

リック「俺なんて、俺なんて… ってちよつと待って！？ 終わりがらい参加させて！？」

ジン「やれやれ…。駄文と遅筆のこの作品を応援している方」

リック「どうもありがとうございます！」

AA「この度は更新が遅れて申し訳ない！ けど次回はできるだけ近いうちにします！ たぶん！」

ジン・リック「……」

AA「え？ やあ、あはは…」

ジン・リック「…ハア」

AA「こ、これからよろしく願いしまーす！」

××××××××××××××××

追記

AA「今回はACネタ（ほとんど4）を入れてみました。まあ、セ

リフだけだね。

参考にしたのはACのMADの”アーマードコア4（AC4）

MAD - Raven's Anatolia - ”

あれはやべーです。リンクスじゃないレイヴンな方も、見ると鳥肌が立ちます。

ちよくちよくこつからネタを出していききたいと思います。

みんなもニコ動で探してみよう！ あっ、知ってる？ 常識？

す、すんません……」

第9話 闘争の魔法 後編（前書き）

投稿が宣言から過ぎたー！ー！！
大丈夫だよな？ セーフだよな？

今回ちょっとグダグダかも……特にあとがきが。

胃薬片手にどうぞ

第9話 闘争の魔法 後編

魔法少女リリカルなのは 白き閃光の後継者

Magical Girl Lyrical NANOHA
{ Successor of WHITE - GLINT }

第8話 : 闘争の魔法 後編

side - フェイト

飛んでくる桃色の誘導弾をバルディッシュで切り裂いて、追って

来るあの子に向かってフォトンランサーを放つ。それをあの子は飛行魔法を駆使して危なげなく避ける。

別人。

そう、まさに別人だ。あの時会ったあの子と今のあの子の動きはまるで違う。動きに無駄がなくなって、わたしの動きにしっかりといて来る。端的に言えば強くなった、と言える。

でもまだわたしは負ける気がしない。確かにあの子は強くなっているけれど、あの時に比べてだ。

「……どうして！」

「……？」

お互いにいくつか魔力弾の撃ち合いをして様子見をしようと空中で対峙しているときに、あの子はわたしにそう言ってきた。

「どうしてフェイトちゃんはジュエルシードを集めるの!？」

「……多分、話しても意味はない」

そう、話しても意味はない。わたしが話したところでジュエルシードがすべて集まるわけでもないのだから。

「そんなことない！
わたしがジュエルシードを集めるのは友達のコノ君が困ってるから！これがわたしの理由！」

あの子の勢いに少し、わたしは怯む。あの子にもジュエルシードを求める理由がある。でも、わたしにだって……

「わたしは……」「フェイト、別に答えなくてもいいんだぞ？」……
えっ？」

いつの間にか隣に来ていた兄さんが、もう一人の男の子の方を警戒しながらわたしに言う。

「自分が心の底から大切だと思うことは、そうそう簡単に人に言うものじゃない。

言葉にした瞬間から、それは大切なものからくだらない物になり変わることがあるからな。フェイトの中では集める理由はそういうもんなんだろう？ まあ、言葉にしなければ伝わらないっていうのもあるけど……。

とりあえず俺はどっちでもいいかな？ 言うも言わないも。俺は妹が大変そうだから手伝ってるだけだし、途中で遮っというてなんだけど結局のところはフェイトの判断次第だな」

大切なものから、くだらないものに……
それは、嫌だ。母さんが欲しがってるから。わたしは母さんのた

めにジュエルシードを集めるんだ！もう一度、もう一度……

母さんの優しい笑顔を見たいから。

わたしに笑いかけて欲しいから。

「リックの言う通りさフェイト。ジュエルシードを集めてあのババ……女の所に行くんだろう？ さつさと終わらせようよ」

アルフもあの男の子の後ろで油断なく構えながらわたしにそう言ってくれた。

「……うん、そうだね」

……そうだ。早くあのジュエルシードを封印して母さんの所に報告に行こう。今度は褒めてくれるかな？ 笑ってくれるかな？ 最近母さんは研究に没頭しがちだから心配だ。

だからわたしは……

「そのジュエルシードを貰います。
邪魔しないで……！」

side out

side - ジン

「……どうしてー!」

「……?」

その戦域にいた者すべてに聞こえたその声。

「どうしてフェイトちゃんはジュエルシードを集めるの!？」

なのはは自分で戦うと言っていた金髪の少女にそう問いかけていた。

「……多分、話しても意味はない」

至極当然のことを少女はなのはの質問に対しての返事とする。

話し合いで済めば人は争うことはないし、ましてや奪い合うための殺し合いなどとうの昔になくなって。なのはの奴め、戦闘中に何を聞いてるんだか。説教の内容にもう一つ追加だな。そんなことを思いながらオレはなのはの隣に飛ぶ。

「そんなことない！」

わたしがジュエルシードを集めるのは友達のコノ君が困ってるから！　これがわたしの理由！」

眩し過ぎるその純粋さ。まるで真っ白なキャンバス。ナニモノにも染まっていない真っ白な色。

だが世の中、純粋さと善意だけは信じられない。どちらも第三者が判断し、それを正面から受け取ることができないから。

何か裏があるのではないか。

こいつは本当にそう思っているのか。

挙げればキリがないが、総じて大多数の人間は ”信用できない” その一点で自らが納得のいく答えを探ろうとする。事実、目の前の少女は戸惑っている。

なのはの言葉を真正面から受け取ってしまったようだ。それはあの少女が純粋なのか、あるいは子供ながらの素直さからなのか。そうして何か言葉を探すかのようにして考えていた彼女はやがて答えを見つけることができたのか、その閉じられていた口を開く。

「わたしは……」「フェイト、別に答えなくてもいいんだぞ？」……えっ？」

彼女が言おうとしていた言葉を重ねるように、あるいはかき消す

ように俺と同じように彼女の隣に飛んでいたヘリックスはそう言う。

「自分が心の底から大切だと思うことは、そうそう簡単に人に言うものじゃない。」

言葉にした瞬間から、それは大切なものからくだらない物になり変わることがあるからな。フェイトの中では集める理由はそういうもんなんだろう？ まあ、言葉にしなければ伝わらないっていうのもあるが……。

とりあえず俺はどっちでもいいかな？ 言うも言わないも。俺は妹が大変そうだから手伝ってるだけだし、途中で遮つていてなんだけど結局のところはフェイトの判断次第だな」

……なかなか面白いことを言う。

大切なものは心の奥底に留めておく、か。オレにも……

……？

……

……何か、あったはずだ。あの世界での前に……

……あの、世界の、前？ 何だ、それは……。あれ以外の世界があった？ いや、そもそもオレはあの世界以外にいたことがある？

それは、ありえない。

[illegible]

この身は ”伝説” であり ”英雄” のクローン。あの世界で唯一のモノ……それに間違いはない。

恨みはおろか、この身を誇りに思っていた。

例えばこの記憶の半分以上がオリジナルの記憶であろうとも。

ジャア、アトノハンブンハ？

オレが誕生してからの、何回もループし続けるあの世界の記憶。

ダガソレデハナニカタリナイ。

何だ……、何が足りない？ この違和感、この焦燥感、オレはい
つたい何を忘れているんだ？

「そのジュエルシードを貰います。」

邪魔しないで……！」

凜と夜闇に響く、決意の声。ふと隣からなのはの気配が無くなり

「ジン君!？」

誰かが呼ぶ声。

” ジン ”

そうだ。なんで『ジン』なんだ？ あの男のクローンであるこの身は何故に『ジン』なにゆえなのか。何か意味があるのではないだろうか？
そう、オレは何か決定的なことを忘れている気がする……

リンクス!!

相棒の、自らの半身と化した者の呼ぶ声と共に直接頭に送られる衝撃によって急激に正気に戻る。慌てて前を見たときにはすでに視界のすべてを埋めるまでに近づいていた魔力弾。

しかしその魔力弾はオレの身に到達する前に急激にその大きさを何かに喰い潰されるように、あるいは削られるようにして縮めていきオレの鼻先で消滅する。いつもなら展開しているPAによってこんなに接近するまで魔力弾が消滅することはないのだが……

大丈夫ですか？ 先ほどまで意識がロストしていたようですし、バイタルが不安定です。何か不安なことでも？

……どうやら、何もかも放って意識が飛んでいたらしい。しかも感覚までも一体と化しているエレベアには、心理状態まで見抜かれているという失態。さらに言えばエレベアが強制的にマジックチャージャーを起動し、PAを張らなければ今のも顔面に直撃していたな。

「すまん。少し……考え事をしていただけだ」

……そう、ですか？ 戦闘中に意識を飛ばすなんて……あんまりなのはちゃんのこと、言えないですよ？

「しゃべりながらなんて、余裕だな！？ ジン！」

オレの鼻先を掠めるようにして振るわれる剣型のデバイスをQBで後退して避け、背後からインファイトにまで近づいてきた使い魔のアルフ（そう彼女が名乗ったのだからそう呼ばなければ失礼だろう）の魔力の箒もった拳を腕の側面を振り返りながら左のMARVEで下から掬い上げるようにして叩き軌道をそらす。その勢いを利用して拳をそらす時に開いた体の態勢を利用し、己のデバイスを振りぬいた姿勢だったヘリックスの方へ右手の長銃を向け、砲撃魔法『ベクルツクスバスター』を放った直後に上昇して二人から距離を取る。ヘリックスはオレの砲撃が当たる直前に高速移動魔法を使って離脱し、対象を見失った二重螺旋はそのまま奥のビルに直撃して貫通痕を残し消えていく。

「どうした？ さっきより動きが鈍いぜ？」

AMSのシンクロ率低下。リンクス、いったい何が……？

「……」

「まあいい、好都合だ。ここでお前には堕ちてもらってから」

そういつて二人で突っ込んでくる。オレは二人の攻撃を捌きながら、自らの勝機を掴むための方法を模索し続ける。が、先程までそんなに明確なビジョンが浮かんでいたというのに、今はまるで見えない。

まるでオレが自身を見失っているのと同じように。

数分、あるいは数十分かもしれない。二人が攻撃しオレが捌き、避ける。それは一見拮抗しているようだが戦っているオレからしてみれば若干オレの方が不利である。このままではジリ貧だ。そう思い始めた頃、ヘリックスとアルフはオレから大きく距離を取る。

「フェンリル、モード” ツインソード”！」

Yes, sir.

そう言っただけ距離を取ったヘリックスは自身のデバイスの鍔^{つば}の部分に手を掛け、引き抜くようにして両手を真横に広げるとその両手には片刃の大小不揃いの剣が二振り、左に大きい方を、右に小さい方を握っていた。

バリアジャケットの見た目が先ほどと変わってないところ（黒い半袖のジャケットにおそらく軍用ブーツとスボン。左肩だけに付いた黒い革製に見える肩当てとそこから左腕をすべて覆うようにした長袖。両手先からは肘まで覆う手袋し、腰にはこれまた左側の足全体を覆い隠すようにして装着した黒いマント）を見ると、単純に手数が増えただけのように思うが。いや、なんだあれは……

「
” PHANTOM WING ”……」
ファントムウイング

ヘリックスがそう宣言した瞬間に右肩から生える青い光の片翼。それはどこかヘリックスの蒼炎を思わせるように揺らめきながら、それ自体が発光し辺りを照らす。

「
” ALTERATION（変換） ”……」

その言葉とともにひとときわ輝く青い光の翼。同時に起こる周辺の

異変。

ビルが、道路が、信号が。あらゆる物質が崩壊し光となってあの青い翼に吸い込まれるようにて飛んで行き、徐々に翼が大きくなっている。

「エレベア、何が起きている……？　オレはあんな現象を知らないんだが」

しばらく調査する時間をください

「わかった」

そう、オレが知らない。それが意味することは、
”アレ”と
繋がっているオレが知らないということは……

”ここ”に存在することがありえない能力か、あるいは過去に存在しない能力かのどちらか。

こういつ時に中途半端に ”アレ” 繋がっている自分を恨めしく思う。今のオレの繋がり程度では知らないことが多すぎるのだ。と言っても直感的にそう思っているだけだが、おそらく間違いではないのだろう。本来、過去現在未来あるいは全てを知ることができるものだ。まあ未来など知りたくもない。未来が決まったレールの上にあるなんてのはオレはゴメンだ。

思考がそれたな。とりあえずアレはオレの知りえない能力だ。それにアレは何か異物な感じがする。この世界にとってアレはオレと同じ……

「……ジンのそれ」

「っ！」

青い翼に見惚れ、思考もズレつつあったオレはその一言でヘリックスに持っていた二つの銃口を向ける。

「名前なんて知らないけどさ。その防御フィールド……」

「……」

「最初はジャマー系のフィールドかと思った。けどそれは違って、攻撃してから防御のフィールドだと気づいた。ジャマー系の能力はただの副産物だったと……」

確かにP A内は魔力素が充満し、一種の非干渉空間になっている。

「けどそれも違った……。それさえも副産物だった。

その正体はジンの魔力を集める何らかの能力の副産物。変換しきれなかった魔力を周りに漂わせることでできる魔力の防御膜……」

（リンクス。調査結果が出ました）

「（報告）」

ヘリックスの会話の最中に入るエレベアからの調査結果の完了報告。オレはヘリックスの独白に耳を傾けながら簡潔に念話でエレベアに報告をさせる。

（了解）

「理論上魔力切れのない能力。まあ負担はそれなりあるかもしれないけど……この際それは置いておき、最悪の過程で推論を進める。

それとその副産物である堅固な防御膜……今の俺たちじゃその防御膜を抜くのは難しく、また接近戦でも分が悪いときた」

（あの羽根の正体は視覚化されるまでの密度を得た魔力の塊です。さらに言えば周辺の物質を分子レベルに分解し、魔力に変換して自身の魔力に再構成しているようです）

「ではどうすればいいのか？ その防御膜が過剰魔力分だけで構成されているのなら……」

（よって、リンクスの能力と効果範囲が被ることにより……）

「過剰分の余裕をなくせばいいだけだ」

（P Aを構成する魔力が足りなくなります。P A、切れます）

ヘリックス、エレベア。両者の言葉が終わった瞬間にオレの周りがP Aが消失する。今までいくつか喰らっていた攻撃を防いでいた防御が、無くなる。今まで均衡を保っていた要素の一つが消える。その程度のことでは負けることはない、普段なら。そう普段なら……今のオレでは、オレの精神状態ではいささか不利だ。事実A M Sのシンクロ率が下がってきて各部ブースターとの出力調整及び出力の低下、マジックチャージャ - の吸収魔力量が下がってきている。

「ジンは言ったよな。『なら』見せて／魅せて」みる、オレを後悔させるまでの力を……！』って……」

「……言っ たな」

「いまでも同じセリフ、言えるか？」

「……言えんな。少なくとも、見せられてはいるな。だが後悔させるまでには足りない」

「そうか、んじゃ……今から後悔さしてやるよ！」

「っー」

そう言ってヘリックスはオレの視界から消える。だが今まで培ってきたリンクスとしての経験が、直観が後ろだと告げている！

オレはQBで前方に移動しつつQT。クイックターン振り向いた先では既にヘリックスが右手の剣を頭上に大きく振りかぶっていた。それを左手の魔力刃を発生させたMARVEで合わせるようにして軌道をそらし、右手のMARVEでヘリックスの心臓に向けて突きを放つ。

「遅いぜ！」

それを瞬間的な高速移動での後退で避けきると、右手の剣をこちらに投げつけてくる。突きの態勢からまだ立ち直っていないかったオレはそれをモロに右側のアーマーの羽の部分に直撃してしまい、更に体勢を崩す。態勢が崩れた所を狙ってヘリックスは左の剣で斬りかかって来るがオレはそれを辛うじてQBで左に避ける。ヘリックスは通り過ぎる時にオレに刺さっていた剣を抜き取って再び対峙する。

「……まさか自分のデバイスを投げるとは思わなかった」

オレが驚きながらそう言っつとヘリックスは

「でも虚は突けたろ？」

なんてあつけらかんと言う。何かヘリックスのデバイスコアが不満そうにチカチカ光ってる気がするがおそらくそういう風に使う物じゃないために主に文句でも言ってるのだろう。

「そいじゃ続きと行こうぜ！」

そう言つて今度真つ直ぐ突つ込んでくる。

馬鹿な……そんな物は愚者のすることだぞ？ オレは躊躇いもせずその体に銃口を向け、続けざまに十発の魔力弾を撃ち込む。

それを次々と直撃して……いくことはなく、魔力弾はそのまま後方へすり抜け行く。

「何！？」

「こつちだ！」

魔力弾がすり抜けたことに驚いているとヘリックスの音が後ろから聞こえた次の瞬間には衝撃。振向きざまに振りぬいたオレのM A R V Eは簡単に避けられ、前方十メートル程の距離にヘリックスは
たす佇んでいた。

何だ今のは？ 幻影魔法……と言うわけではないだろう。魔力反応が一切しなかった。おそらくあの羽根の能力なのだろう。それがいったい何なのか見当もつかないが。

解析をエレベアに念話で指示し、オレは現状の把握をする。今のオレは半壊状態といつてもいい。左右のホワイトグリント特有のア

「マーの両翼は斬り落とされ、腰のマントも所々破けている。オレは物質創成マジッククリエイターを使い、すぐさま破損部分を修復していく。それを見たヘリックスは驚いて目を少し見開いている。

「そんなこともできるのか？」

オレはヘリックスのその質問を無視しそのまま先ほどのことについて聞いてみる。もちろん答えてくれるとは思ってない。エレベアの解析時間を稼ぐための行為だ。

「……何をした」

「『聞かれて答えるだけでも？ 学校の授業じゃあるまいし、答える訳ないだろう』」

ヘリックスは先ほどオレが言っていたセリフをそのまま返してくる。

「……いい性格をしている」

「ありがとよ」

そうしてまた始まる戦いの舞曲。ヘリックスは急激に上がったスピードと先ほどの幻影魔法のような技を使用しながらこちらを翻弄

し、オレはそれに合わせるようにして魔力刃を振り、魔力砲・魔力弾を放つ。

オレとヘリックスが交差するたびにオレの装甲やバリアジャケットが千切れ飛び、オレの攻撃はヘリックスに掠^{かす}りもしなくなってきた。

「チィ……！」

「ハアアアア！」

破壊される外装の喪失感が痛みとなってAMSを経由し、オレに負担を掛けてゆく。徐々に下がるシンクロ率と当たらぬことに苛立ちながら放った魔力砲の一撃は軽々と避けられ、すれ違いざまにまた一撃貫つ。それを防いだ左右のMARVEは真つ二つにされ形状を留められなくなり魔力となつて空气中に霧散する。

「もらった！」

すぐさまこちらに旋回したヘリックスが叫びながらまるで羽を広げるようにして左右の剣を構えながらこちらに突っ込んでくる。

が、その動きはその態勢のまますぐに止まってしまう。

「バインド！？！」

「使えないなんて言うてはないぞ？」

「だがあの銃がなかったら……」

「砲撃が撃てないとでも？」

目の前のヘリックスに右手を向けそのまま砲撃魔法のチャージに入る。以前エレベアに言われたように補助系の魔法はあまり得意ではない。よって長時間拘束が持つ訳がなく早急に一撃を入れなければならぬ。魔力砲のチャージが臨界点に入る直前、ヘリックスその口を笑みの形に歪める。

「ジンは一人忘れてないか？」

そう言えばアルフはどこに行った？ ヘリックスが翼を出した辺りから見ていないが……

と、思考の何割かをその事に分けながらもチャージを続けているとオレの体にも幾重のバインドがかけられる。

「チェックメイト♪」

目の前には勝利を確信しきったヘリックスの顔。そして上から感じる魔力反応。そうか上か。好都合だ。

「これで、堕ちなああああ！……」

おそらくチャンスを窺いつつも溜めこんだ渾身の一撃だろう。戦術としては完璧なタイミング。オレに逃れる術はない。

なら、避けなければいい話。

轟音と衝撃。人が起こせる物理的範囲から明らかに外れたような……例えるならトラックと電車が互いに正面衝突したような轟音が辺りに響き渡り、着弾点からは大量の粉塵と煙が覆う。

「遅かったじゃないか……」

オレンジ色に輝く拳を受け止める翠色の魔方陣。

「一応病み上がりなんだけど……。
ジンの方こそ余裕ぶってた割には案外切羽詰ってるよね？」

病み上がりだ、なんて自分で言っている割には息一つ切らしていない少年……ならぬ小動物姿のユーノ。

「少しな……」

小動物の悪態に苦笑しながら答えるオレはチャージし終わった魔力砲を茫然としているヘリックスに撃つ。

「騙して悪いが……こっちも実は三人組だ」

s i d e o u t

s i d e - なのは

なんで？ きつと話せば、聞けば答えてくれると思ってた。でもフェイトちゃんは話しても意味ないって言いながらわたしに攻撃してきた。そんな、そんな悲しそうな目をして言われても納得できるわけがない！

ジン君と別れてから何十分もの間、わたしとフェイトちゃんは魔力弾を撃ち合いながら、お互いに避けながら戦っている。フェイトちゃんは一旦戦いを止めたときの前よりも速いスピードでわたしに近づいてきて攻撃してくる。わたしはそれを本当にギリギリのタイミングで避けてはお返しにと誘導弾を撃ち込むけどフェイトちゃんはそれを切り裂きながら近づいてくる。

わたしが今まで頑張って飛んでいられるのはジン君の訓練の賜物だと思うの。あっ、思い出すと少し震えが……っていけないじゃない！ 今は目の前のフェイトちゃんのこと集中しなくちゃ。

わたしがもう一度距離を取って誘導弾を撃とうとした時、わたしとフェイトちゃんのちょうど真下の辺りから突風が吹き荒れた。

「きゃああああ！」

「うつ……」

わたしもフェイトちゃんもお互いの動きを止めてしまつ。目を瞑っていたわたしが風が少しゆるんだ時に見た光景は、青く光るジュエルシールドだった。

「いけない！ ジュエルシールドが暴走しかけてる！」

「ユーノ君！？」

いつの間にか来ていたユーノ君が赤い大きな犬と向かい合っていた。

「なのは！　すぐジュエルシールドを封印して！　僕もジンも手が離せないんだ！」

ユーノ君の言葉に周りを見渡してみると少し離れたところで見慣れた白い光と青い光がぶつかり合っているのが見えた。

「うん！ わかった！」

わたしはジュエルシードの見ていたフェイトちゃんの横を抜けるようにしてジュエルシードに向かって飛んでいく。これって ”落ちていく” の方が正しいのかな。そんなことを考えていたけど後ろからフェイトちゃんが追いかけてきているのがわかる。

フェイトちゃんの方が速いからグングンと私との差を詰めてくる。わたしも負けていけない！

ジュエルシードのもとに着いた時にはフェイトちゃんも追いついてきていて、封印するために目の前のジュエルシードにレイジングハートを突き出したとき、同じタイミングでフェイトちゃんも杖を突き出してきた。

瞬間私たちは光に包まれた。

わたしが気づいた時にはわたしもフェイトちゃんもジュエルシードから吹き飛ばされていて、レイジングハートにはたくさんの罫が入っていた。

「大丈夫？ レイジンハート」

No problem.

問題ないってレイジンハートは言うけどその声はどこか壊れかけた機械みたいに聞こえた。

「止まれ、止まれ、止まれ、止まれ止まれ止まれ止まれ止まれ止まれ止まれ止まれ止まれ止まれ……！」

わたしはレイジングハートの心配をしているうちにフェイトちゃんにはジュエルシードを素手で握りしめて封印しようとしていた。

それはどこか神様をお願いごとをしているように見えて……わたしはその姿に見惚れてしまった。

「お願い……止まって……!!」

フェイトちゃんがそう言うのとジュエルシードはその願いを聞いたみたいに光らなくなっていくって、完全に光らなくなった瞬間にフェイトちゃんは力尽きるようにして地面に崩れ落ちてしま……うことはなく、地面にぶつかる前にオレンジ色の神のお姉さんに抱きとめられていた。

よかった。そう思っていたわたしに女の方はわたしを睨みつけてきて、

「帰ろうか」

空から降りてきたフェイトちゃんそっくりの顔をした男の子にその声をかけられて、そのままわたしに振り返ることなくどこかに飛んで行ってしまった。

わたしがそれをボーと見ていると近くに心配そうな顔をしたユーノ君が寄ってきた。

「大丈夫、なのは!？」

「うん。でもレイジングハートが……」

そう言っただけわたしはユーノ君にあちこち罅の入ったレイジングハートを見せる。わたしのせいでレイジングハートが……

「これは……」

ユーノ君もレイジングハートを見て声を詰まらせる。そのとき私の後ろに静かな着地音。振り向くとあちこちボロボロになったジン君が立っていた。

「いろいろ反省することもあるが……とりあえずオレたちも帰ろうか？」

「……うん」

お互いボロボロになって、疲れた体を引きずりながら家に帰る。難しそうな顔をしていたジン君は唐突に何かに気づいたのか、目を見開いた後に頭を抱えて蹲り出した。

「ジ、ジン君！？ どうしたの！？ 頭、怪我したの！？」

「えっ！？ ジンちょっと見せて！？ 回復魔法を……」

「いやどこも怪我はしていないよ。ただ……」

わたしたちが心配して声をかけるとジン君はすぐに立ち上がったけど……

「ジン君大丈夫？　顔が真っ青だよ？」

そう、本当に真っ青になっていたの。やっぱりどこか怪我したのかな！？

わたしが一人ワタワタとジン君の周りを回りながらしばらく怪我を探していると、ジン君は黙っていたその口を開く。

「なのは。今何時だと思う？」

「ふえ！？」

ジン君はそう言いながら近くの公園にあつた時計を指さす。わたしが見ると……

「八時二五分……？」

「そう、八時二五分だ」

「？」

ジン君は何が言いたいのかな？　八時二五分ってなにかあつたっけ？

「ハア……なのは。オレたち、飯食べてきてるのか？ それ以前にこの時間に外に出てていいと思うか？」

「！！」

わたしはジン君の言いたいことをようやく理解する。わたしたち黙ってこの時間まで外にいたんだ……

「……どうしようか？」

「どうしようかって言われても……」

ああ、お父さんもお母さんもお兄ちゃんもお姉ちゃんもきつと怒ってるだろうなあ……じゃなくて！

「どうしよう！？」

「ハア……」

「大変だね、ジン」

s i d e o u t

* * * * *

カーテンを閉め切った私室は夜の街の明かりを遮って暗く暗く部屋を染め上げる。

その暗い部屋の中、使い魔が主の怪我に巻く包帯の音だけがシュルシュルと聞こえる。

「痛っ！」

「ご、ごめんよフェイト……大丈夫かい？」

先ほどの封印の時に両手に怪我を負ったフェイトは、自分でうまく包帯が巻くことができないためアルフに巻いてもらっているのだが怪我に触れてしまったのだろう。痛みを堪えた声が少し出てしまいアルフに心配を掛けてしまった。

「ううん。大丈夫……ありがとう、アルフ」

「……フェイトあんまり無茶したイヤだよ」

「……ごめん」

「あたしはまたフェイトが無茶するんじゃないかって心配だよ……」

「……」

部屋に落ちる気まずい沈黙。使い魔は己が主の身を心配し、主は使い魔に辛い思いをさせていると悔やむ。どれだけの時間そうしていたのだろうか。お互い何も話さないその静寂を破るようにして使い魔は声を上げる。

「フェイト」

「っ!」

使い魔の言葉にフェイトはビクリと身を震わせる。彼女は嫌われたのではないかと思っていたのだがアルフから出た言葉はその真逆のものであった。

「あたしと約束して……もう一人で無茶しないって。フェイトは一人じゃないんだよ？ あたしだって、リックだっている」

「でも……！」

「でももなにもないよ！」

「っ！」

アルフの迫力に何かを言おうとしたフェイトだったがそれを遮られてしまう。

「フェイトが無茶するのは……本当は止めたいけど止めないよ」

「……」

「だから、無茶するときはあたしたちも一緒。一人より三人の方が無茶できるし、がんばれるだろ？」

「兄さんは……」

「リックなら何にも言わずに手伝ってくれるよ。今日だって結構無茶してたし……」

「兄さんが？」

「うん。ファントムウィングも使ったし」

「え？ それじゃ兄さんは今……！」

「ストップ。リックはあたしと一緒に無茶したから時間一杯まで無茶することはなかった。だから大丈夫だよ」

その言葉を聞いてあからさまに安心して胸を撫で下ろすフェイト。その様子を見たアルフは苦笑しながら見つめつつも話を続ける。

「リックは無茶したけど……一人ではなかったから無事だった。けどフェイトは？」

「あう……」

二の句が継げなくなったフェイトにアルフは続ける。

「だから約束して。一人じゃ絶対無茶しないって」

アルフのどこか悲しげな、そして真摯な瞳に魅入られつつもフェイトは……

「うん、約束。一人じゃ絶対に無茶しない」

「絶対だよ？」

「うん」

「絶対絶対だよ？」

「うん」

「絶対絶対絶対、絶ええええ対だよ？」

「うん！」

自らが一人じゃないことを自覚しつつもそう約束した。二人が見つめ合いながら微笑み合っていた時、部屋のドアがコンコンと二回叩かれる。

「おい、飯できたぞ？」

二人は同時にドアの方を振り向き少しの間見つめた後、同時にお互いの顔を見合せ笑い合う。

「ふふふ……」

「あはは……」

「二人とも早く来い。全部食べちまうぞ」

「今いくよ！」

「わたしも！」

その日の夜は、部屋から笑顔が絶えることはなかった。

第9話 闘争の魔法 後編（後書き）

「ジンとA Aと愉快的仲間たちのリリなのお茶会」

A A「申し訳ありませんでしたm（――）m」

ジン「どうも家の馬鹿がすみません」

リック「万死に値する行為でした」

A A「なぜ冒頭から謝罪しているのかと言つと……」

ジン「この阿呆が感想をくれた方の名前を前回あとがきで掲載するのを忘れたからだ」

A A「誠に申し訳ありませんでした。皆様からの感想を糧とし、書いている身にも関わらず恩を忘れるこの失態。

文面で謝るだけでは収まらない。今まさにモニターに向けて絶賛土下座中でございます（現在 5 / 2 3 2 3 : 5 0 ）」

リック「完全にこちらのミスだそうで。すみませんでした」

ジン「まあ、元気出せ、な？ いくらお前が阿呆でも人間である限りミスはある。今回のは取り返しのつかないものだったが」

A A「うぐっ……」

リック「それ慰めてんの？ まあまあ、作者さん。今回お叱りの感想でも貰って反省すればいいじゃないか」

AA「ううう……ありがとうリック」

リック「いやいや。んじゃ始めようよ」

ジン「（やけに上機嫌だな）いつもの質疑コーナーって言いたいが……」

リック「え？ なに？」

ジン「この阿呆がもう眠いから今日はなしだそうだ」

リック「ええええー！？ ナニソレ！？ ちょっと作者さん！！ っていないー！？」

ジン「逃げ脚だけは速いな。仕方ここはオレがやろっ」

それじゃ前回できなかった感想返しつと…… B 様、悠様、E X - S 様、確変様、ガイア様。

この度は大変申し訳なかった。そしていつも感想ありがとう」

リック「鈍亀更新でもあるにも関わらず、PV・75000、ユニーク・12000を突破しました！」

ジン「多くて12000人も人がこの小説に目を通され、そこからずっと読んでくれる方がいる……この小説はもはや一人では成り立っていない。たくさんの人によって支えられているということだ」

リック「あつ、いいこと言っただねジン。その通り！ 最早ごめんな

さいで辞めれる状態ではないのだ！」

ジン「見てくれている方、本当にありがとう。嬉かったよ」

リック「（うわぁ……素直なジンってレアだなぁ）俺もうれしいです！」

ジン「ということで今日はこの辺で、つと言つことらしい」

リック「質問疑問は感想にどうぞ。次回のこのコーナーで答えるそうな」

ジン「それじゃ」

リック「これで終わり！」

ジン・リック「これから応援よろしくお願いします（します）」！

「

第10話 日常の魔法（前書き）

あれ？ フェイトより先にはやてフラグが……
どうしてこなった？ ま、いつか♪

第10話 日常の魔法

戦いの最中さなかに気づいてしまったこと

あるいは……最初から知っていたのかもしれない

気づきたくなくて

自身の存在を揺るがしたくなくて

でも、気付いてしまった

自分がいったい何を忘れたのか

大切なものほど失ったことに後から気づく

そんなありふれた話

自身がいたい何なのか

彷徨い、悩む

I'm looking for Answer". (己が
"答え" を探し求めて)

魔法少女リリカルなのは
Magical Girl Lyrical NANOHA
(Successor of WHITE GLINT)
白き閃光の後継者

第9話　：　日常の魔法

side - ジン

ハア……。いやまあ、予想はしていたさ。うん。高町家に帰った時に見たものは……。いや、止そう。ただ、あれに挑むぐらいならアンサラーに単機で挑む方がまだ気楽だった。

……オレ、誰にしゃべってるんだろうか？　誰ともなくしゃべりかけるほどに追い詰められてるのか？（精神的に）

高町家一同にこっそり搾り取られたオレとなのはは、げっそりしながらもなのはの部屋に集まっている。なぜかと言われれば、今後のことについてと……

「ユーノ君……。レイジングハートは……」

そう。先の戦闘により破損したレイジングハートの状況を確認するためだ。

オレとて ”アレ” と繋がっているためデバイスぐらい診れる。まあ、本格的に設備がないと何もできんが…… 簡易なことで済むならオレがやってやれる。

「ううん、たぶん大丈夫だよ。今は自動修復プログラムを使って直してるから」

「よかったあ……」

ユーノの言葉を聞いて安心したのか、なのはその場に座り込んでしまう。レイジングハートは机の上で罅割れたコアを明滅させながら自動修復プログラムに従って自身を再構築している。パツと見だが、完全修復は明日まで掛かるだろう。

「『エレベア……』」

オレは胸元に吊り下げたエレベアに念話で声をかける。これならオレよりこいつが診た方が最善だと判断したからだ。

『ジン……』

たった一言。ただ呼びかけたただけだというのに、エレベアにはオレが言いたいことがわかつたらしい。

それが故に、今不安定な状態であるオレを心配するかのような声を出してくる。ホント、よくできた相棒だ。

「『オレは……大丈夫だ。それよりもレイジングハートを手伝ってやってくれ』」

『……本当ですか？』

「『ああ……』」

『……』

「『……』」

目の前ではなのはにユーノがレイジングハートがいつぐらいに直るかなどを話している。

『無理……しないでくださいね』

「『大丈夫だ。少し、一人で考えたいことがあるだけだ』」

そう言って目の前の光景をなんとなくに眺める。なのははユーノの説明を聞いて安心したり、戸惑ったり、困惑したりと百面相をしており、そのたびにユーノがこちらに助けを求めるような微妙な視

線を向けてくる。

『……ハア、わかりました。もう何も言いません。で・す・が！』

わざわざ一文字ずつ区切るようにしてあからさまに ” わたし怒ってるんですよ？” とアピールしてくるエレベア。

『悩んだ分だけの答えはきっちり見つけてきてくださいね？ じやないと割に合わないですから。主に私が』

「『……了解』」

なんの割に合わないんだよ、とか無粋なことは聞かない。ただ、これだけ心配をかけているのだから答えを見つけてこなければ……と思う。

「ユーノ……」

「だから明日のいつになるかわからないけど……ってどうしたの？」

「レイジングハートの修復にエレベアを手伝わせていいか？」

「いいけど……どうやって？」

「エレベアのコネクタをデバイス用に換装して接続する。 接続したエレベアでプログラムの処理速度を上げると同時に最適化する」

「なるほど……それなら修復期間が短くなるのか」

ええ。それもレイジングハートさんが了承してくれば、ですけど

私は構いませんが……

「レイジングハートがいいなら僕はいいと思うけど……なのでは？」

「ふえ！？」

今まで会話に付いて来れていなかったのだろう。頭にいくつものクエスチョンマークが幻視できる様な混乱ぶりを発揮していたのはは素っ頓狂な声を上げる。と言つか、前々から思っていたのだけれど ”ふえ！？” って何だ。

「え、えと……？ わたしもそれがいいと思うよ？」

「 「 …… 」 」

今オレたちの心は一つになっているだろう。”分かってないのに返事したな？”と。

「な、なに？」

「えと……ごめん、なのは」

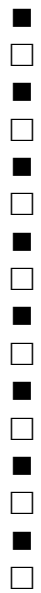
「ええええ！？」

「なら最初から説明を……いや、面倒だ。面倒は御免だから、さっさとやっちまおう」

そうですね

……
よろしく願います

「? ? ?」



ハンドガンで武装した集団。総数四人。目標までの距離5メートル、障害物なし。

向こうに気づかれた！ 一番近くにいた男が発砲。発砲前に射線から頭部を狙っていると予測し、引き金を引く前に上半身を地面に着くんじゃないかというほど態勢を傾ける。弾丸が頭上を通り過ぎる音を背後に置き去りにするように前方へ進む。

発砲から1・5秒。

もつとも近くにいた男、先ほど発砲してきた男の懐に入り込みながら鳩尾に右の拳を叩き込む。

最初の発砲からようやく3・0秒。

発砲に対して警戒を強め、銃を構えた男たちは一人が崩れ落ちたのを見るのと同時にオレを発見するが、味方が邪魔で撃てない。戸惑っている間に残り三人のうち二人の間を抜けるようにして通り過ぎ、すれ違いざまに左右の喉笛に抜き手を放つ。

5・0秒。

残り一人に最初の男のときからずっと続けてきた低い低い体勢を開放するようにして体中のバネを生かし、相手の顎にむかつて蹴りを槍のようにして放つ。

「ハアアアア！」

周りには地に伏した男たち。その只中に立つ自分。勝利の余韻に浸るでもなく、ただ息を整えるためだけにすべての行動を中止する。

想定訓練終了。

道場の外からはチュンチュンと小鳥が朝の到来を告げている。

朝っぱらから毎日、何度も何度も続けているこれはリンクス時代から続けていることだ。企業専属のリンクスならまだしも、独立傭兵であったオレはたびたび狙われる立場にあった。殺し殺され、それ故に恨まれることは当然であり報復を受けることも必然だ。

リンクスと言ってもネクストから降りれば一人の人間。だからこそ自らを鍛え続ける。何度となく命を狙われたが、それをすべて撥ね退けてきた。

今日もまた早朝に目が覚めるのと同時に道場に来て訓練を開始した。

最初のころは同じ時間に道場を使用する土郎さん、恭也さん、美由紀さんは大いに驚いていたが、オレの事情を説明したら納得したようだ。同時に ” もうそんなことはしなくても大丈夫だ ” とも言われたが ” 半ば習慣化している ” と言って毎日この時間、道場の隅の方を貸してもらっている。

オレとしては庭だろうが公園だろうがどこでも構わないんだが、土郎さん曰く ” 恭也と美由紀の良い刺激になる ” らしく、ありがたく貸してもらっていると言うのが実情だ。

オレが呼吸を整えていると、向かい側で美由紀さんの稽古をつけていた恭也さんがこちらに来た。

「お疲れ」

そう言っ てオレにタオルと水の入ったペットボトルを投げて寄越してくる。体中にかいた汗を簡単に拭き取っ てからキャップを取り、ペットボトルに口をつける。程よく冷えた水は火照った体に気持ちよく、半ばほどまで飲んでから口を離す。

「……今日は動きにキレがなかったな」

飲み終わるまで待っていたのか、恭也さんがそう言っ てくる。

「ええ。どうにも調子が良くないみたいですね」

「……」

今日の訓練はいつものようにはいかなかった。いつもならあの程度、5・0秒もかからずに倒せる。

オレが今日の訓練の反省をしていると妙に視線を感じるのだから目を向けると、まだそこに立っていた恭也さんがこちらを何か言いたげな目で見ていた。

「……何か？ 模擬戦なら今日は勘弁してほしいんですが……」

「何をそんなに焦っ てるんだ？」

「……焦る？」

何か言いようなない感覚。ああ、確かにオレは焦っているのか？
自身がわからなくて、拳句 ” なのはを守る ” って約束すら守
れなくて……。

なんて無様。それでも長いこと人生を経験していると言うのに、
今更、こうもオレは揺れるものなのか。

「そうだ。お前は……昔の俺だ」

「……」

恭也さんが語る言葉。以前のオレならば真摯に聞いていただろう
言葉。だが今はそれがとても煩^{わづら}わしい。放っておいてほしい。一人
で考えさせてほしい。

だからオレは言葉を続けようとする恭也さんの横を黙って通り過
ぎる。体ぐらい掴んで止めてくると思ったが別にそんなことはなく、
恭也さんは黙ってオレを見送っていく。

どこか拍子抜けしながら道場を出ようとドアに手を掛けたオレに、
恭也さんは再び声をかけてくる。

「俺は……馬鹿だった」

「……」

どこか自身を嘲笑するような声音にオレは振り向くことなく足を

止める。恭也さんが自身を嘲笑う。いつもの苦笑いなどではない、ただ自身を貶める笑い方。

……少し、興味が惹かれた。

「俺はただひたすらに強くあろうとした……。それが家族を守れることだと信じていた……」

迷いながら、言葉を選びながら。自身について語る恭也さん。オレは後ろを向いているから恭也さんがどういった表情で話しているのかわからない。

「我武者羅^{がむしやう}に強くあろうとした結果……結局、家族を傷つけていることに気がつくことはなかった」

「……」

「だからオレに言えることは……」

「……」

「焦って事を急ぐより、今何をすべきなのか。今自分が必要とされる役割が何なのか、それを考えることだと……俺は思うぞ？」

今自身がなにをすべきなのか……か。

ザザザ…ザザザザ／ザアアアア…

——考えてください。何のために戦うのか——

脳裏に浮かぶ一つの言葉。オレの恩人であり、戦友。記録でしか知らない人間であり、偽りの記憶にしかない人間。
やめよう。これ以上ここで考えていてもしょうがない。

「……お先にお風呂、もらいます」

オレは何かから逃げる様に、手に掛けたままだったドアノブを捻りその場を後にした。

■
□
■
□
■
□
■
□
■
□
■
□
■
□
■
□

オレは今、海鳴の中でおそらく一番大きいのであろう図書館の前にいる。

なぜオレがこんなところにいるのか。それは学校が終わった放課後のことだった。以前オレが借りていた本が返却期限が過ぎていたらしく、返却を催促する手紙が送られてきたのだ。

まあ、ちょうど良かったのかもしれない。家でクダクダ考えていたときよりも外に出たおかげか、幾分か頭も冷えてきた。……問題が解決したわけではないが。

こんなところで立ち往生しているわけにいかない。オレは図書館に入り受付のところに借りていた本を返却しに行く。

「今度からは返却の期限を〓守って〓くださいね？」

「……はい。どうもすみませんでした」

どこかおっとりとしたした雰囲気の受付の女性の間延びしたしゃべり方に若干イラツとしながら本を返し、家に戻ろうとしたところで後ろから声が掛かる。

「あれ？ ジン君？ どないしたん？」

独特な口調。おそらく京都辺りの関西弁なのだろう。おっとりとした雰囲気は目の前の受付の女性と変わらないが、不思議と苛立ちを感じさせない。そんな口調にオレは後ろを振り返る。

目の前には車椅子の少女。茶色い髪を短く切ったその髪はどこか活動的な印象を受けるにもかかわらず、車椅子のせいでそれがすべ

ておとなしく見えるというのが不思議だ。

「はやてか……。今日も本を借りに来たのか？」

「ああ、うん。そうなんや……。って違うやろ！ 私の方が先に聞いたやん！ 答えてえな！！」

相変わらずのツッコミ……。じゃなかった、明るさでオレの言葉にいちいちツッコ……。反応してくる。……。少し、はやてで遊んでいくか。

「今、不穏なこと考えんかった？」

「……さあ？ 何でそう思ったんだ？」

「女の勘」

「却下」

「なんでえな！？」

「まず色香が足りない、優雅さも足りない。そして……。ああ、これが最も決定的なことなのだが……」

「うぐっ……。ええもん、これからやもん。きっとナイスバディになつて見せるもん。……。それで最後はなんや？」

「女という年じゃない」

「女の子はいつからでも、いつまでも女で乙女なんや〜!!」

「そんな理不尽な生き物がいてたまるか」

「ジン君のアホ〜!!」

ギャー、ギャー

「図書館では静かに〜してね〜?（顔は笑顔なのに目が笑ってない）」

「すみませんでした!」

謎の凄みを利かせた受付の女性（何者だ?）の笑顔に気圧されつつ、読書コーナーに避難するオレとはやて。

桃子さんといい、さっきの女性といい、海鳴はどうなっているんだ?

「ああもつ……ジン君のせいでえらい目におうたわ」

「お前が騒いでただけだろう」

「それでもや!」

「静かにしろ。次は叩き出されるぞ?」

「あつ……」

慌てて口を両手で押さえるはやて。いや、今更しても仕方ないだろうに。

「で? 今日は何借りるんだ?」

はやてがここに来るといふのは二つに一つ。本を借りに来たか……

「ちやうちやう。姉ちゃんが今日料理当番やから食材買いに行っ
んねん」

「留守番するのも暇だから本を漁りに来たというわけか」

「そや。読んだ分は返してその分また借りようと思ってるんやけど
な?」

はやてには双子の姉がいるらしい。会ったことはないがはやて曰
く「わたしに似て美人さんやで」らしい。

どうでもいいが遠回しに自分を持ち上げるのはどうかと思う。

「ああそう。じゃ、オレも何か借りるか……」

どうせこのまま帰る気だったし、本を読むのは好きだ。特にファンタジーなどの夢のあるものをよく読む。

以前それをセレンに見られた時は腹を抱えて笑われたが。いいじゃないか、別に。ファンタジーは現実と違って夢がある。

「またライトノベル？」

「ああ。読む時間があんまり取れそうにないからな」

「わたしがオススメのやつ選んだるか？」

「……そうだな。選んでもらえるか？」

「ほな、ライトノベルコーナーにレッツゴー！」

「静かにしろつてのに……」

騒ぐはやての車いすを押しながらライトノベルコーナーに移動する。

到着してからははやてがどんなストーリーが好きなのか、短編と連載物のどっちがいいのか、など聞いてきたのでオレは適当に答えながら先ほどチラッと思い返してしまったことについて考える。

セレン・ヘイズ

命からがらアスピナから抜け出してきたオレを拾い、リンクスとして登録後にオペレーターとしてずっと付いてきてくれた人物。

オレにとっては恩人であり、戦友であり、唯一の恩師とも言えるだろう人物。

腰まで届く黒髪のロングヘアを首筋あたりで一度まとめている髪型に、年齢不詳の容姿。

整備班のおっちゃんと酒飲んでた時に ” 。 。 十年の酒飲み友達だ ” と言っていた覚えがある。無論、オレもおっちゃんも半殺しにされた。

…… 先の件からわかる通り、少々キツイ性格。訂正。かなりキツイ性格。機嫌を損ねて何度殴られたことか……。まあ、ただで殴られたわけじゃな……。いや9割方は理不尽に殴られてた気がする。酒に酔った時だろ、機体をボロボロにした時だろ、出撃して赤字になった時だろ（僚機にエイプールなんか選ぶからだ）、向こうのオペレーターがム力ついたとか言ってた時だろ（それオレ関係なくないか？）……。ああ、やめやめ。古傷がうずく。でも……。何だかんだいって心配してた、のか？ うん。心配してた！ そう思いたい。思わなくちゃやってられない。

閑話休題。それでも彼女は悪態をつきながらもORCAに入る時、オレに何も言おうとはせずただついて来てくれた。企業側に就いた時、ウインディの依頼を受けるのを文句を言いつつも出撃を許可してくれた。ループし続けるその中には敵として立ち塞がった時もあった。その時でさえ、自分の撒いた種だと言って誰にも責任を押し付けようとはせず、ただオレを殺しにきた。

ああ……今でも覚えている。すべてが嫌になり、自棄になってオールドキングとクレイドルを叩き落とし、虐殺を繰り返していたあの時。ピンク色の、よく機体調整用のシュミレーターで相手をした機体に乗ってやって来た彼女と各企業から選出された最精鋭のリンクス4機。5対2の中、最後まで足掻き続けていたオレに止めを刺すその刹那。

お前には説教することが山ほどある。覚悟しておけ……

死の直前になってそんなことを言う。どうやって説教されるとい
うのか。

あるいは、彼女はもとより死ぬ気だったのかもしれない。元オリ
ジナルにして引退した山猫^{リンクス}。もはや乗ることすら叶うことが無くな
ったネクストに乗る。それが引き起こす結果はA M Sによる異常過
負荷での死。

あの瞬間から……彼女の死は決まっていたのかもしれない。

どっちにしろ彼女の説教は死なないオレにとつて聞くことが叶わ
ぬものであったが……。あの時の言葉は……。どこかバツの悪い気が
した。

それすらもオレは……。オレのモノじゃないというのだろうか？

なら……本当のオレはどこにある？

わからない……

「……主人公が炎の剣を構えてうおおおって突っ込みながら
まそっぷー!!”　　っていう所がまた　……　って聞いているんか？
ン君」

「……」

「ジンく〜ん」

「……」

「お〜い」

「……」

「むっ……」

「イタッ！」

手の甲を襲う痛みにオレは声を上げる。見ればはやてが頬を膨ら

ませながらオレの甲を捻り、こちらを見上げていた。

「なにするんだ」

「”なにするんだ”　ちゃうで！　わたしの説明無視しといてよう言えるなあ？」

「……そりゃすまんかったな」

「そんな形だけの謝罪なんていらんわ」

「どうしろっていうんだ……」

はやては拗ねたのか、そつばを向いてオレの方を見ようとしな
い。

なんだ？　今日は厄日なのか？　本は返却し忘れてるわ、悩みは
解決どころか迷宮入りしてる気がするわで……

「ハア……」

思わず溜息が出る。別にそれで悩みも現状も解決するわけでもな
く、ただ図書館特有の静かな空間に息の漏れる音だけが響く。

「……ジン君、今日ずっとそんな感じやけどどないしたん？」

先ほどの不機嫌さはどこに行ったのか。はやてが心配げな顔でこちらを向く。

「別に……何でもないさ」

まったく……無様。こんな子供に、無関係なはやてにまで心配かけてどうする。

「嘘ばっかし。そんなあからさまに溜息ばかり吐いといてそれはないわ」

「別に溜息吐くぐらいオレの勝手だろうっ？」

「……誤魔化すの下手すぎひん？」

うるさいな、オレだってそう思ったよ。

「一応、何に悩んでるか知らんけど……」

「……」

「聞くだけやったら私にもできるで？」「こっやったら誰も寄り付かんし」

いつの間にか図書館の奥まった場所にオレたちは移動していたらしい。辺りに人影はなく、受付の方から聞こえる声は微かに聞こえる程度。先程の様に騒がなければ余程のことではない限り人が来ることはないだろう。

しかし、どう言ったらいいものか……

「……」

「……」

お互いに黙りこくってから数分。どうやらはやては何が何でも聞き出すらしい。しょうがなく、オレが観念することにした。

「……これは、ある小説の主人公の話なんだが……」

「……」

ようやくと話し出したオレに茶々を入れるでもなく、ただ黙って聞いているはやて。話しづらいな……

「そいつは自覚のない記憶喪失だった。自分ではしっかりと記憶を持っているつもりだったんだが……ある日、不意に掠める記憶になり記憶に気がついてしまった。それは言葉にできるものでもなく、かといって無視できるものではなかった。事あることにそれはつい

て回り、主人公を苛み、自分がいつたい何者なのかと自身を見失う。
失われたのであろう記憶は、主人公にとって決して忘れてはならないことであるのだというのに、いつまで経っても思い出せず、拳
句の果てに……以前交わした大事な人間の約束ですら破ってしまい
そうになる始末……」

「……」

「……悪い。話す気が失せてきた」

喋っていいおいて何だが嫌になつてきたオレはそんな中途半端なと
ころで話を切り、はやてから逃げるようにして背を向ける。なんだ
か今日は人から逃げてばかりだな。

「わたしが！」

そんなオレの後を追ってくることはなく、はやてはその場で声を
上げる。

それは偶然とはいえ朝のオレと恭也さんのやり取りと全く同じ構
図であつた。あるいは必然だつたのかもしれないが……

「私がそれを読んだとしたらの感想は……！」

「……」

「まだ途中までしか聞いてないけど……その主人公アホちゃうか、

ってことや」

「……！」

一瞬で沸騰しかけた思考と今にも殴りかからんとする体を押さえつける。子供の戯言だいたい何を期待していたのかと自身に言い聞かせる。お前に一体何がわかる！

そんなオレを知ってか知らずかはやては続ける。

「主人公にとっては大事なことなんやろうけど、周りにとってそれがどれだけ心配かってのを考えなあかんと思うで？」

「……」

「けどな、ほら、よくあるやん？ 昔の記憶が蘇って別人みたいになるっていうパターン。そうなってからでも周りの人は別にそんなこと関係ないと思うねん。」 今” のその人が周りにとってのその人なんやし、変わったところでまた新しい” 今” になるんやから」

「……？」

はやての感想に少しついていけなくなる。あるいははやても混乱しているのかもしれない。

「ああ、なんて言ったらええんかなあ……」

「……」

「ああ、そや！……そやけど、昔を思い出すよりもっと大事なことってあるやろ？」

「……大事なこと？」

そんなものあるのだろうか？

「大事な約束を守ること。その約束をした時は別に何ともなかったんやろ？ それやったらその時の気持ちは決して嘘じゃうやろ？ 間違いなくその人の気持ちや。それを嘘にしたらあかんで。嘘にするっちゅうことはその人の ” 今 ” と 周りの人との関係を嘘にするっちゅうことや」

呆然とする。なんと単純明快な答えか。ただこの胸にしっくりくる感覚は何なのか。自分はそれほど単純だったのか。自分はそんなことも分からなかったのか。

さまざまな思いが渦を巻く。そうだ、約束した時の気持ち。あの時、なのはの前でのオレの気持ちは……

「それに、約束破る男は女の子に嫌われるで？」

……不意にはやてに対して殺意が湧いた。何できれいに締められないのか。はやてなりの照れ隠しだと思うが……なんかもういろいろと台無しだ。

オレは背を向けたままその場を去る。ただ、そのまま去るのもどうかと思ったからと……その、なんだ……あれだ。

「……ありがとう」

一言言ってから去ることにした。……なんて無様。

s i d e o u t

s i d e - はやて

うん。元気になったみたいやな。よかったよかった♪

今日は姉ちゃんか夕飯の料理当番の日やから我儘言つて図書館まで連れてもらつてから買い出しに行つてもらつたっんやけど……ホ
ンマ来てよかったわ。

暇潰すつていうのもあつたけど、実際はジン君に会えるかもつて
思う気持ちの方が強かつたし。

ジン君

本名 ジン・レイヴン・アナトリア……やったっけ？

会ったのはちょうど半年ほど前。今日みたいに一人で図書館におったとき。わたしは本を取ろうとしていたんやけどいかんせん、車椅子に乗っているわたしじゃその本を届かない所にあつた。図書館の職員の人も周りにおらず、しょうがなく諦めようとした時に声がかつたんや。

「どれ、取りたいんだ？」

すごいぶつきらばうな感じにそう聞いてきた男の子。振り向いた時に思いのほか体が近くにあつたから驚いてしまったけれど、黒髪のツンツン頭と何より特徴的なその翠色の目。吸い込まれそうになるその目を見て固まってしまったわたしに、機嫌を損ねるでもなく彼は問う。

「どれ取りたいんだ、って聞いているんだが……」

「ええ！？ ああ！ す、すみません！」

「シーツ！ あんまり騒ぐと職員に目をつけられるぞ？」

「あっ……！」

「で、どれ？」

「えと、その左から三番目の……」

「これか？」

「あっ、はい。それから……」

「そこから先は ” そんな話が好きなのか？ ” ” はい。あなたは？ ” といった感じで盛り上がり、いつの間にか仲良うなっていたんや。

「ほんでまた自分でもベタやなあ、とは思っけどいつの間にか惹かれてもって……うん。」

だから今日みたいに元気のないジン君は見たくなかった。

なんて言うか……らしくない？ ジン君は何となく、いつでも余裕をもって喋る感じがしっくりくる。

そやから、悩みごと解決すんの手伝えへんかなあ〜と思って聞いてみたけど、あからさまに隠しごとをしてますよ〜ってな感じ満載にはぐらかされた。

嘘つくの下手やなあ、と思いながら追撃するとなんや遠回しに言うてくる。なんやねん小説の話って。苦しくないか？ ホントらしくないなあ。それほど切羽詰まってるんやろか？

でもジン君の ” 例え話 ” はそんな思いが吹き飛ぶような話だった。

いくらなんでもその例え話は嘘やんな？ そんなことすら聞けない雰囲気。わたしにできることはそれを聞いてからの感想と応援を遠回しにしてあげることぐらい。

途中で話を終わらせて帰ろうとするジン君を必死に呼びとめて、いろいろと焦りつつもわたしが思ったことを言う。途中で自分でも何が言いたいのかわからなくなってしまうけど、言いたいことは言えたと思う。

それでもジン君はわたしの方を向くことはなく去っていく。やっぱり、いらんこと言うてもうたんなあ……とわたしが後悔しているときに

「……ありがとう」

聞こえるか聞こえないかぐらい小さなジン君の声。けど確かに

”ありがとう” って言ってた。

なんやねんそれ……背中向けて歩きながらって、それなんてドラマのワンシーンやねん！ でも声音はどこかやさしい感じがしたし、これでよかったのかな？ ああもう！ ええ男は何でも様になるなあ」

「おまたせ！ はやて」

「ううん。そんなに待ってへんよ」

わたしがさっきのことを振り返りつつ、図書館の前で待っているとすぐに姉ちゃんが両手にスーパーの袋を持ちながらやってきた。

「いやー肉屋のおっちゃんから値切るのに時間がかかってさ。こんな美少女が可愛く値切ってたのに断らなくてもいいと思わない？」

「あはは……姉ちゃんはいつも値切ってばかりで他の一緒に買おうとせんからやと思うで？」

「ぶうーぶうー！ いいじゃない！ それの何がいけないのよう！」

「あははははは！」

うん。相変わらず姉ちゃんはマイペースだ。今日もまた商店街の人に微笑ましく見られていたんやろうなあ……あかん。これってもしかして身内の恥？

「ところではやて」

「なんや？」

わたしが密かに頭を抱えていると、姉ちゃんが車椅子を押しながらわたしに聞いてくる。

「なんかいいことあった？」

「なんで？」

「なんかわたしが声掛けるまでニヨニヨしてたし」

「見とつたんかいな！？」

「で？　なんかあった？」

「……別に何もないで？」

「嘘ね」

わたしが返した返事が嘘だということをすぐさま見抜いてくる姉ちゃん。うゝん……前々から思ってたけど姉ちゃんはやけに勘が鋭い。超能力者が魔法使いなんやろうか？

「ホンマに何もないで？」

「まだ嘘つくか！？
えい
♪ お・し・え・ろ」

「ね、姉ちゃんちよつと、タンマ！　　そ、そこあかんで！？　あ、あはははははははははは！！！」

わたしが話さんのをみてか、姉ちゃんが後ろから私の脇をこしよばしてくる。あ、あかんで！そこは！

「ハア、ハア、ハア……」

「……言っ気になった？」

「な、なんもあらへんてば……」

「まだ足りない様ね？」

「わかった！ わかったからそれはやめて！」

「しょうがないわね。で、何があったの？」

うつうつ あんま言いたくないのに……

「…………ジン君に会ったんや」

「ああ！ はやての好k「そんな大きい声で言わんといてえな！？」
…………いいじゃない、別に減るもんじゃないし」

「そついつ問題じゃないやろ…………」

「じゃあどついつ問題？」

「うつうつー…………」

ああもう！！ だから言いとうなかったのに！！ 言えば絶対姉
ちゃんにからかわれるってわかつとつたし！！

「んゝ 青春だNE」

その後、家に帰るまで姉ちゃんにからかわれたのは言うまでもないことや。あうつうつ…………

第10話 日常の魔法（後書き）

♪ジンとAAと愉快的仲間たちのリリなのお茶会♪

AA「はいはい♪ 前回から約一週間！ ようやっとな更新できました！」

ジン「今回は戦闘なしだったな」

AA「まあ、悪魔で……じゃなかった、あくまで日常でのジン君の悩み解決編ってとこだからね」

リック「結局解決してない気がするんだけど……」

AA「それはこのシリーズを通して存分に悩んでもらうってのが趣旨。一応伏線とも絡む予定だからね」

ジン「全部回収できるのか？」

AA「わからない。なにせ小説書くの初めてだし……まあ、キッチリ回収はしたい」

リック「ところでさ」

AA「うん？」

リック「ジンは何で忘れちゃってんの？」

AA「それは新しく加筆修正したキャラ設定 及び 精神状態を参照してくれ」

ジン「そんなのあったか？」

AA「あるある。よく見てちょうだい」

リック「あつ、ホントだ……こつそり増えてる」

ジン「ここで紹介されてなかったら気づくかどうか……」

AA「まあそうだろうね。それはさておき！ 前回できなかった質問疑問に答えるコーナー名づけて……！」

ジン「名前なんてあったのか？」

リック「というか半分以上は自作自演だったよね？」

AA「はい、ソコ！ 茶々入れない！ ええゝ気を取り直してもう一度……名づけて” AAのコジマ汚染病棟”！」

ジン・リック「うわー……」

AA「そこ！ なんだその目は！」

リック「ねえよ」

ジン「ないな。よりによって何でコジマなんだよ……」

A A「ではまず記念すべき第一号の患者さんの質問！ 『そういえば、リックって前世でA Cやったことないんですかね？（↑いまさらな質問すいません）』 いやいや今更なんてとんでもない！ 私が説明しなかったばかりにこんなことに……どうもすみません。ということ、ハイ答えは？」

リック「えーと、A Cって何？」

ジン「お前知らなかったのか……今までのここでの思わせぶりなセリフは何だったんだ？」

リック「ノリ？」

ジン「……」

A A「はいそう言うことでしたー。O K？ それじゃ次いつてみよう！」

ジン「その ” 次 ” はないけどな」

A A「えー」

ジン「それだけお前の小説に見る価値がないか、目を覆いたくなるか、質問する気が起らんほど疲れるかのどれかなのだろう」

リック「そ、それはちょっとひど過ぎないか？」

ジン「いや、これくらい言っとかんとこの阿呆はすぐ調子に乗るか

らな」

リック「ああー……でも端っこの方で蹲ってるんだけど」

ジン「いつものことだ。放っておけ」

リック「（いいのか？）ええーああー……いつもの感想返しコーナー！」

ジン「荒神丸様、BⅡS様、EX-S様、悠様、確変様。いつも感想ありがとうございます」

リック「だいたい感想くれる方は決まってるんだけど、それでも貰える喜びって言うのは言葉じゃ伝えきれないそうな」

ジン「いつの間にかPV：80000越えにして ユニーク：13000越え」

リック「愛されてるなあっと思うぜ！」

ジン「一応疑問に思ったことは感想にお願いします。あの意味不明なコーナーが一回きりで終わることになる。……まあ目に見えているが」

リック「というわけで」

AA「これからもよろしくお願いします！」

ジン・リック「うわ！ いつの間に復活したんだ！？」

× × × × × × × × × × × × × × × ×

追記

A A「今回のA Cネタはジナイダの『私はただひたすらに強くあろうとした……』と 同じくジナイダからさっきのセリフの続き『そこにわたしが生きる理由があると信じていた……』のセリフ改変したやつ。それからフィオナ嬢の奴ぐらいかな？

他にもA C以外からネタを入れてるけど……君はいくつわかるかな？ 答え合わせはしないZ E 異論は認めないぜ！」

10万PV記念 番外編その一（前書き）

超短文。

番外というか過去編かな？あと1時間以内には本編次話を投稿します。

10万PV記念 番外編その一

別にいつも戦っているわけじゃない

山猫にも休息の時間ぐらいある

日陰の気持ちよさそうな場所

お気に入りの場所で

好きなことをする

そっけないのがあっても良いだろ？

魔法少女リリカルなのは 〈 白き閃光の後継者 〉
Magical Girl Lyrical NANOHA
Successor of WHITE-GLINT

10万PV記念 番外編その一

荒廃した大地。コジマ汚染により砂漠化し、今もなお汚染を撒き散らし続ける経済戦争により命無き地と化した不毛の地。

そんな中、周りの殺風景な砂漠の中にポツンとある近代的な建築物。高さ20メートルほどのビルとだいぶ離れた所に15メートルほどの飛行場にあるようなシャッター付きの倉庫のような建物。さらに遠方には集合住宅のようなものがいくつか存在している。

独立傭兵、リンクス名 ” ジン ”

その事務所 兼 格納庫 兼 移住区である場所。

それが ” ストレイド ” だ

” 迷子 ” を意味するこの……最早小さな企業とさえいえる場所は、ジンやその他の社員とその家族の唯一安らぐことができる場所でもある。

社員数62名。これが現状のストレイドの必要最低限の人数でもある。他の大企業に比べるとずいぶん小さなものであるが独立傭兵というものは大概こんなものである。要するに懷事情が厳しいのだ。

アーマードコア・ネクストによる一回の出撃の稼ぎはそこいらの人間の年収を軽く超えているとはいえ、そのほとんどがネクストの整備、汚染除去に使う薬品、弾薬費やその他もろもろ……

いくら稼ぎがよくても尋常ではないコストパフォーマンスを持つ

ネクストは、維持するだけでも多くの大金が掛かるものなのである。その分、その圧倒的な性能は戦場を単機でひっくり返す……または制圧してしまうほどである。閑話休題。

その化け物染みた機体に乗るリンクスであるジンと事務所の所長であるセレン・ヘイズは、よく依頼の選別や決定のため二人つきりで所長室に籠もることが多い。これは断じて邪なことで籠っている訳ではない。もう一度言う。そういうことでは断じてない。

今日もまた二人して件の部屋に籠っている訳だが……

「アハハハハッ！！」

なぜか部屋から女性特有の少し甲高い笑い声が聞こえてくる。中では来客用のソファーに座りながらブスッと仏頂面した黒髪の20代と思われる男と所長席の質の良い椅子の上で右手を机にバン

バン叩きつけながら左手で腹を抱えて笑っている金髪蒼眼でボブカットの妙齡の……いや、年齢不詳の女性。しかも笑いが止まらない。

そのうちヒューン言いながらやつのことで笑いを収めた女性は、先ほどから仏頂面をしている男に向かって謝罪する。

「いや、すまんジン。お前のソレが妙にツボに入っ……ククッ
！」

「……」

女性は自身のツボに入ったと言っているものを指さしながら笑いを堪えるために片手で口を覆う。

「……別にいいだろう、セレン。オレの勝手だ」

ジンと呼ばれた男は拗ねたように体の向きをセレンと呼んだ女性の反対側に向ける。それが更にツボに入ったのかセレンと呼ばれた先ほどの女性は再び声をあげて笑う。

「クククッ……！ いやはや。お前にそんな趣味があるとは思わなかったぞ？」

「……」

ジンはセレンの言葉を見殺し、それに視線を落とす。それもまた彼女のツボに入っただけ、再び笑いの発作が起きた後にジンを再び絡み出す。

「拗ねるなよ」

「……拗ねてなどない」

「それを拗ねてるって言うんだよ」

「……子供じゃあるまいし、そんなことするか」

「じゃあこっちを向け。打ち合わせがでkindらうが」

ジンは渋々セレンの方へ向くがすぐに再び背を向けてしまう。

「何でまた後ろを向く？」

「……お前のそのニヤケ顔が気に入らない」

「拗ねるなよ」

「……拗ねてなどない」

「いいじゃないかファンタジー。私は別に何とも思わないぞファンタジー。読書好きの傭兵の好きなジャンルがファンタジー。ギャッ

ブとか気にしなくてもいいと思うぞ？ ファンタジー」

「……うつせーよ、ババア（ボソツ）」

あんまりな絡まり方に我慢できなかったのか悪態を吐くジン。それがいけなかった。

「……おいジン。今何て言った？ お前」

「ババアって言ったんだよババア」

「よーし……それは私に喧嘩を売ってるんだな？ そこに直れ！」

「叩き売りだ馬鹿野郎！ 人の趣味を笑いやがって！」

部屋からは年甲斐もなく二人が言い争う音と暴力的な音が響いている。たまたま所長に用があった社員が部屋の前に来ていたが「またか……」と物音を聞いて出直すことに決める。

これらの事からわかるように、この二人の喧嘩は日常茶飯事だ。それはどこか親子喧嘩のようにも見え、姉弟喧嘩のようにも見える。

「私はまだ若い！」

「見た目だけだがな！ 人の嫌味しか言えなくなってきたらそれはもう年だっつうんだよ！」

「言っ たな貴様！ そんなことを口にできないようにしてやるっ！」

「そんな大人、修正してやる！」

部屋からはいまだ騒音が絶えないが、今日もストレイドは平和だ。そう平和だ。平和だって言っ てんだから平和だ。異論は認めない。

これはそんな日々の一ページである。

第11話 決意の魔法（前書き）

投稿が遅くなって申し訳ない！

いろいろと忙しくて……フロムの企業説明会に行ったりとか、提出課題ができてなくてヒィヒィ言ったり。

待たせておいて内容がグダグダな気が……それに短い。くそう…

…

第11話 決意の魔法

魔法少女リリカルなのは
 Magical Girl Lyrical NANOHA
 { Successor of WHITE - GLINT }

第11話 : 決意の魔法

” 次元空間 ”

その空間を一言で表すのであれば ” 虹色 ” である。この表現には答えれば多くのものが賛同してくれることだろう。周りの風景は一定した色であることはなく、次々とその色を変えていく。

世界はただ一つということはなく、いくつもの世界が存在する。しかし普段はその世界同士が繋がることはない。世界と世界の間にはある空間が存在するからだ。

それが ” 次元空間 ” 世界と世界の間の世界とも言えるだろうもの。

そんな空間を一つの大きな物体が進んでいく。それはどこか近未来的でありながらも、その節の人間が見れば機能性を併せ持った一つの芸術品、だと答えるだろう。

” 時空管理局 次元空間航行艦船 『アースラ』 ”

名前の通り、次元空間を渡ることのできる船である。時空管理局が把握している世界を管理内世界、それ以外の世界を管理外世界とし、その双方で起こる魔法的な事件を解決するために常にと言っ

いいほどの空間を走っている船。いわゆる動く拠点である。

今回もそんな事件が起こっているが故に、この次元空間航行艦船『アースラ』は次元の海を移動している。

そのアースラの一室。戦艦等における艦橋と言える部分。そこではこの船のクルーたちが膨大な情報を処理し、絶え間なく変わるディスプレイとにらめっこしていた。そんな所にこの部屋に唯一繋がる後ろの扉が開き、一人の女性が入ってくる。

青い制服に身を包み、それでもなお隠し切れていないスタイルの良さ。そして最も特徴的なのが地球ではありえない緑色の長い髪。それをポニーテールにしてまとめた女性。

名をリンディ・ハラオウン

時空管理局提督にして、この船の艦長である。

「皆どう？ 今回の旅は順調？」

「はい。現在第三船速にて航行中です。目標次元には今からおよそ160ベクサ後に到達の予定です」

「前回の小規模次元震以来、特に目立った動きはないようですが…
…二組の探索者が再度衝突する危険性は非常に高いですね」

クルーたちの報告を聞きながら最上段の自分の席に座るリンディ。

「そう」

「失礼します、リンディ艦長」

カップに紅茶をいれ、リンディの目の前の机に持ってくる少女。彼女もまたこの船のクルーである。

「ありがとね、エイミィ。そうねえ、小規模とはいえ次元震の発生は……」

少女に礼を言いつつ先ほど入れてもらった紅茶をひと飲みし、今後のことについてリンディは語る。

「ちょっと厄介なものねえ。危なくなったら急いで現場に向かってもらわないと。ね？ クロノ」

そう言って己が息子の方へ顔を向けるリンディ。クロノと呼ばれた少年は母であるリンディに振り向きながらも自信をもって答える。

「大丈夫、わかってますよ艦長。僕はそのためにいるんですから」

Side - ヘリックス

どことも知れぬ次元の中。まるで魔王が住んでると言われれば確かにと頷いてしまいそうな場所に今俺達三人（正確には二人と一匹）はいた。

——ヒュンッ、バシン——

「っつっ！」

扉の向こうから聞こえる人を叩く何かの音と悲鳴。

断続的に聞こえるソレはフェイトの母と言えるであろう” プレシア・テストロッサ” がお仕置きという名で行っている体罰。おそらく鞭状になったデバイスでフェイトをひたすらに打ち据えているのだろう。

助けない

助け出してやりたい

助けたい助け出してやりたい助けたい助け出してやりたい助けたい
助け出してやりたい助けたい助け出してやりたい助けたい助け出し
てやりたい助けたい助け出してやりたい助けたい助け出してやりた
い助けたい助け出してやりたい助けたい助け出してやりたい助けた
い助け出してやりたい助けたい助け出してやりたい助けたい助け出
してやりたい助けたい助け出してやりたい助けたい助け出してやり
たい助けたい助け出してやりたい助けたい助け出してやりたい助け
たい助け出してやりたい助けたい助け出してやりたい

ただ……ただ、助けたいのに。

助けたいだけだというのに！

この体は扉の向こうに行こうとしてくれない！

そもそもなぜこの体が動かないのか？ それは俺の出生に問題がある。

この体はイレギュラーで起きた、性別が反転してしまったクローン体。そんな俺に目を付けたプレシアは俺を自分の手駒として扱うことを決めた。ここまでなら良かった。

しかし飼犬に手を噛まれてはいけない。このとき既に病に侵されていたプレシアは、万が一の可能性でさえ見逃すことはしたくなかったのだろう。俺の体を再調整するという名目で再びあのポッドに入れられた俺はそこである一つのモノを記憶に、強迫観念として擦り込まれた。すなわち……

”プレシア・テストロッサに逆らってはいけない”

駒である俺が逆らわないようにする楔^{くさび}。それは遺伝子レベルで擦り込まれており、彼女の言葉一つで俺は何でも行つ人形となつてしまつたろう。まあ、逆らつてはいけないという裁量は俺の判断に任されているわけだが……

このことはアルフにある程度教えている。でなければオレがフェイトの兄としてあのような凶行を黙っているのがおかしいと思つたからだ。自分の主人を害する人間に理由なく従う者を信用するとは思つていなかったからこそ俺はアルフに話した。さすがにフェイトのことまでは喋つてはいない。俺はフェイトのクローンということで話している。

アルフがもしそんなことを知つてしまつては、間違ひなくプレシアに向かつていつてしまつたろうからだ。アルフ一人では決してプレシアに勝てる通りはない。病に侵されてはいても大魔導師を冠した人間だ。それはともかく、ここに俺がいるのは……

”ヘリックス・テストロッサはこの部屋に入つてはいけない”

その命令を受けているからだ。命令には逆らえない。

「何だよ……いつたい何なんだよ……！」

未だ聞こえる鞭で人を打つ音とフェイトの悲鳴。それを聞くまい

と耳を両手でふさぐアルフが声を漏らす。

「あんまりじゃないか……あの女……！」

「……クソッ！」

聞こえる悲鳴に自身の無力さを思い知らされ、傍にあつた石柱を拳で力一杯横殴りに殴りつける。叩きつけた左手はジンジンと鈍い痛みをこちらに伝えてくるが、異様に高ぶった精神がそれを些事だと思わせてしまう。

唐突に体に伝わる衝撃。何時の間に近寄ってきていたのか、俺に縋りついてくるアルフの体を黙って受け止める。俺とアルフでは身長差があるから傍から見たら妙な光景なのだろうが、生憎と周りに人はいない。

「あの女の……フェイトの母親の異常さとか、フェイトに対するひどい仕打ちは今に始まったことじゃないけど……今回はあんまりだ！　いったい何なんだ？　あのロストロギアは！……ジュエルシードはそんなに大切なもんなのか！？」

「……」

「ねえリック！　あの女は……あの女は一体何を考えているんだい！？」

「わからねえよ……わからねえよ、俺にも！」

知っている

彼女がアレを求める理由を……

そう言えたらどれほど楽なのだろうか。主人想いのアルフのことだ。言ってしまうえばアルフはきっと俺のことを嫌ってしまっただろう。なぜ知っていて放って置いているのか、と……

それは嫌だ。もう、一人になるのは嫌だ……。そんな自分勝手な願いで俺は……

フェイトをプレシアに差し出している

例え後で救われるのだとしてもフェイトの心には癒えない傷を作る、
作ってしまう

俺の自分勝手が他人を、今生の妹を、姉を……傷つけ続けている

最低だ……

ギリギリと食いしばった歯からは音が漏れるがそれは悲鳴にかき
消されていく。

そんな時間がいつまで続いたのだろうか？ 長い数分、あるいは
数十分、数時間だったのかもしれない。いつの間にか聞こえていた
音が止み、扉が開いたかと思ったらボロボロのフェイトが中から現
れた。体中のあちこちに傷があり、着ていた服は鞭によってズタズ
タに引き裂かれていた。

扉から出て数歩こちらに歩いてきたフェイトだったがすぐに膝か
ら力が抜けたのか、地面に崩れ落ちていく。

「フェイト！」

加速魔法で一瞬のうちに距離を詰めた俺はフェイトが地面に倒れこむ前にその体を受け止める。

「フェイト、ごめんよ！ 大丈夫？」

「何でアルフが謝るの……？ 平気だよ……全然……」

「だってさ……！ まさかこんな事になるなんて……ちゃんと言われた物を手に入れてきたのに、あんなひどいことされるとは思わなかったし……！ 知ってたら、絶対に、止めたのに！」

「ひどいことじゃないよ……母さんは……私のためを想って、って……」

「想ってるもんか、そんなこと！ あんなのただの八つ当たりだ！」

「違うよ……だって、親子だもん……。ジュエルシードはきつと母さんにとつてすごく大事なものなんだ……。ずっと不幸で悲しんできた母さんだから……。わたしなんとかして喜ばしてあげたいの……」

「だって……でもさ……」

「アルフ、お願い。大丈夫だよきつと……。ジュエルシードを手に入れて帰ってきたら、きつと母さんも笑ってくれる……。昔みたいにやさしい母さんに戻ってくれて……。アルフにもきつと、優しくして

くれるよ」

「……」

……齒痒い。俺はこんなところで一体何をしているのか、何のために生きているのか、なぜ再び得た ” 生 ” を無駄にしているのか……！

「兄さんも、手伝ってくれる？」

「……え？」

葛藤する俺に掛けられた声。この娘は今、何て言った……？ 俺でいいのか？ こんな……自分のことしか考えられないような奴でいいのか？

そんな思考が俺の頭の中でぐるぐると回り出す。

「ダメ、かな……？」

……ああ、そうか。この子は何も知らない。俺のこと、自分自身のこと。

それでもプレシアのことを信じている、愛しているのだろう。そこにはきつとアルフも入っているのだろうし、自惚れだが……俺も入っているのだろう。

純粹で、真っ白で、真っ直ぐな……そんな心。けど、それが折れる日はもつすぐそこまで迫っている。なら……

「馬鹿……手伝うに決まってるだろう？」

「うん……！」

花咲くような笑顔。鞭で打たれた傷が痛むだろうそれを、心配させまいとする気遣うような笑顔。それでもその中にはちゃんと嬉しそうな感情も入っていた。

「じゃあ行こう……今度は、きっと……失敗しないように」

マントを羽織り直し、先頭を歩くフェイト。その後ろを心配そうに歩くアルフ。後ろから見て、この小さな体にどれだけの無茶と悲しみを背負う力があるのかと思う。

この娘が本当に心の底から笑える日が来るまで、悲しみを乗り越え本当の幸福を見つけたことができるまで。

「……俺が守り続ける」

そう、素直に思った。

side
out

side
- ジン

答えは得た

とは言い難いが、確かに今するべきことは見つかった。オレが誰なのか、何者なのか、何を忘れてしまっているのか……なんて言うのはこの件が終わってからでも別にいい。迷うのはやめよう。戦闘に支障をきたしては本末転倒だ。

今すべきはあの時交わした約束。やや一方的とはいえ、交わしたそれは約束。口約束とはいえ傭兵の約束は契約と同義である。

傭兵は実行不可能な契約、依頼でなければこれを放棄しない

オレはリンクスの、レイヴンの誇りに掛けて約束を、契約を履行しなければならない

それに気づかせてくれたあいつ、はやてにはこれが終わったら礼の一つでもしてやらなければならないな。

そんなことをつらつらと考えながら帰宅しているとユーノから念話ってきた。どうやらレイジングハートの修復が終了したらしい。

「『思ったより時間が掛ったな』」

「『レイジングハートが表面だけ修復して隠してた損傷がエレベアにバレちゃったらしくて……』」

「『だから時間が掛ったのか……』」

「『うん。今レイジングハートがエレベアのお説教を受けてるとこ

るだよ』」

「『……しっかりしてそうな気がしてたんだけどな、彼女のAIは』」

「『しっかりしすぎてなのは心配かけたくなかったらしいよ。デバイス同士で説教ってあんまり、というか絶対見ない光景だよね。レイジングハートも黙って……はないけど素直に聞いているし』」

「『それは……』」

少し想像してみる。

デバイスコアをチカチカと光らせながら説教しているエレベアと、どこか元気なさげと言うか殊勝な感じでデバイスコアを光らせながら抗議するレイジングハート。

「『……もうちょっと続きそうか？ この目で見てみたいんだが』」

「『ん……あと何分で帰れる？』」

「『急げば10分』」

「『ギリギリ間に合う、かな？』」

興味本位で、というか好奇心か。ともかく件の様子を見たいがために急いで帰ろうとした矢先に、この街全体と言ってもいいほどの

広さに魔力の衝撃……ジュエルシードの覚醒の前兆が波を立てて通り過ぎていく。

それはまるで脈動するかのように一定の間隔で伝わってくる。

「『ユーノ』」

「『うん。こっちも確認したよ、ジュエルシードが発動しかけてる』」

「『一度合流しよう。どこかの誰かが一人で突撃しないように抑えていてくれ』」

「『もうしないってばー!!』」

オレとユーノの念話に割り込んでなのはが文句を言ってくる。まあ、わざと聞こえるようにしたんだがな。

「『あゝハイハイ。誰もなのはのことなんて言っていないだろう？ 自覚があるのなら自重しろ』」

「『うつうつ……』」

遊びはここまでにしよう。戦闘が始まるというのなら、戦う者にオレは切り替えなければならない。

この体になってからは精神が引つ張られているのか、それが難しくなってきたいるが文句は言ってられまい。

戦いは待つてはくれないのだから。



夕暮の空の下。港にほど近いこの場所には多くのコンテナが配置され、そこにオレとなのはとユーノ、ヘリックスとフェイトとアルフが向かい合って対峙する。

この場にいる全員の視線の先にあるのは……ちょうどお互いの距離の真ん中にある発動しかけているジュエルシード。お互いがそれを確認した後、それぞれが相手をするだろうう者を見据える。

「ジュエルシードには衝撃を与えたらいけないみたいだ」

「うん。昨日みたいなことになったら……わたしのレイジングハートもフェイトちゃんのバルディッシュも可哀そうだもんね」

「……だけど、譲れないから」

Grave Form

「わたしはフェイトちゃんと話がしたいだけなんだけど……」

Device Mode

「わたしが勝つたら……ただの甘ったれた子じゃないってわかってもらえたら……お話、聞いてくれる？」

なのは、その思考自体が甘いということが分かってないな。明確に敵対している者同士ならば、最後の勝利者がすべてを得るものだ。む？ なのはの言ってることも結論は同じ、か……こんな子だっただろうか？ なのはは。

おかしいな……うれしくとも何ともないのに妙に胸にくるものがあるんだが……

まあいい。オレの相手はヘリックス一人に絞っていいればいいか。最悪の場合あちらに手を出すか、こつちを抑えていなければ話にならない。私見だが、ヘリックスの方がフェイトよりも数段強い。子供のチャンバラなどではない、”剣術”の匂いにする攻撃。

フェイトが相手ならば昨日の戦闘でなのはは粘ることができた。ならばオレがヘリックスを墮とすまでの時間ぐらい耐えきれんだろう。

それに、今日のヘリックスは昨日とは違う。何か……そう、纏うモノが違う。

「……こつちも始めるか？ ヘリックス」

「いいぜ、ジン。今日こそ墮としてやる」

「……お前に出来れば、だがな。今日は最初から全力で行かせてもらおう」

L i n k s t a r t

S e t u p

お互いにバリアジャケットを展開し武器を構える。前回のような油断も、戦う楽しみもない。

……ああ、なるほど。ただ感覚的に、いわゆる直感的に。

お互いに ” 守るべきモノのために戦う ”

敗退は許されず、かといって勝利のみを求めるでもない。自分にとって一番の優先順位のモノのためにその他のすべてを切り捨てる。どういった経緯でそうなったかはわからない。知る必要はない。自分のエゴのために戦う。

……存外、似た者同士だったのかもしれない。きっとオレたちの表情、目の色……鏡を見ているようなものなのだろう。

「……ヘリックス」

「……何だよ」

既に戦う前だというのにオレは語りかけ、ヘリックスは訝しそうにこちらを見る。……ただ惜しいと思った。だから……

「良い戦士だ。……感傷だが、別の形で会いたかった」

「……同意はしておく、けど」

「「それだけだ」」

考えることは同じか。なら……

オレは周りの魔力をかき集め始める。同時にヘリックスも右肩から青い光の翼を生やし、周りの物質を分解しながら自分の魔力に変換していく。魔力素が集まるにつれて発生するはずのオレのPAは、ヘリックスとの魔力素の取り合いにより余剰分がなくなり、発生することはなくなった。

オレとヘリックスにより集まり始めた膨大な魔力は渦となり、周

りに潮風とは違う風が吹き始める。魔力素を集める時に巻き込まれた空気によって引き起こされているものだ。

そんな最中。唐突にオレの周りにP Aが張られ、それを見たヘリックスは目を見開いて驚く。

「何を驚いている？ 言っただけだぞ。最初から全力だ、と……」

余剰分が足りないならそれ以上の魔力を掻き集める。それで足りないならヘリックスの回収するはずの分まで掻っ攫う。負荷は掛かるがオレの利点を生かすのならば必要なことだ。

額をいくつもの汗が流れ落ちていき、膨大な情報処理しているための負荷が……頭痛が常にオレを襲い始める。しかしそれすらどうでもいい。

視界の端ではなのはとフェイトが自らのデバイスを振り上げて接近していくのが見えた。あのデバイスが接触したとき、こちらの戦

闘も始まる。先ほど動揺していたヘリックスも既に落ち着いており、ユーノもアルフも戦闘準備よし。ただ始まりを告げる激突の音を待つのみ。

そして充分接近した二人は振り上げたデバイスを振り下ろす。

接触と共に視界を遮る青い閃光。

光が収まった後にあったのは……左手でなのはの、右手のデバイスである杖でフェイトの。それぞれのデバイスを受け止めている黒ずくめの少年。

「ストップだ！　ここでの戦闘は危険すぎる」

よく見ればなのはとフェイトの手足に青いバインドが掛けられている。

「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。詳しい事情を聞かせてもらおうか……」

現れた黒い少年は自らの名を名乗り上げた。

第11話 決意の魔法（後書き）

「ジンとA Aと愉快的仲間たちのリリなお茶会」

A A「ハイハイ！ 今回も始めました」 「ジンとA Aと愉快的仲間たちのリリなお茶会」 略して……略してえ……え……」

ジン「見切り発車して收拾がなくなっただな。まるでこの小説のようだ」

A A「あ……う……」

リック「まだ考えてるな」

ジン「無視だ無視」

リック「したいけどさあ……ほら、質問きてたじゃん？」

ジン「……あの下らんコーナーが続くのか」

リック「みたい」

A A「ああもうメンドクセエ！ 略すのなし！ ノーカウント！ ノーカウントだ！」

ジン「さつさと次に進め、阿呆」

AA「さあ始まるザマスヨ！」

リック「いくでがんす！」

ジン「……」

AA・リック「ジーー」

ジン「……なんだよ？」

AA「……別に？」

リック「……何も？」

ジン「ならさつさと進めろよ阿呆共」

リック「ちよっ！ コイツと一緒にしないでくれ！」

AA「……（´；ω；）ブワッ（最近こいつら反抗期なのかなあ……扱いひどくない？」

ジン「いいや。今オレの中で同類判定が出た。却下できないのであるしからず」

リック「同類……あれが俺と同類……。いやだ、認めたくねえ……？ or z？」

AA「アハハハ……もういいや。」 AAのゴジマ汚染病棟 ” 開

院しまーす！」

リック「くそう……あゝ、今回もまた一人だけだけどな」

ジン「所詮その程度が限界だったということだ。こいつは」

リック「経営不振で潰れそうだな？」

AA「一人でも患者が来ているのならばコーナ―は存続します！
患者さん第二号。症状をどうぞ！『エレベアを使用している時A
MSの負担とかあるんですか？』」

ジン「あるぞ」

AA「なかつたら理不尽の塊化するからねえー」

リック「今でさえ理不尽な気がするの俺の気のせいかと聞いてみる
テスト」

AA「気のせいじゃない気がすると言ってみるテスト」

ジン「ひとえにこの阿呆一号のせいだろうか？」

リック「お・ま・え・の・せ・い・かあああああー！！」

ジン「所詮戦力バランスの調整のために急遽出来たキャラだしな。
お前」

AA「そついうメタ発言禁止！　っておうわ！」

リック「俺の時代を返せええええ!!」

AA「知らん! とうかこの時点でお前の時代なんてないわ! プロットを調整した段階からなあ!」

ジン「貴様のそれも十分メタ発言だろうが(ボソツ)」

リック「クソツタレ! でりゃあああああ!」

AA「喰らえ! リバーズカードオープン! 罠カード、ステイシスの水没! このカードは相手モンスターが攻撃してきたときに発動することができる。攻撃してきたモンスターの攻撃を無効にし、除外する!」

リック「うごっ!?!」

突如リックの足元に水面が現れ、それにリックが足を突っ込んでしまった

リック「謎のナレーションが!?!」

AA「お前はもう既に死んでいる(今回のコーナーの出番的な意味で)」

リック「ちよっ、飛行魔法が発動できない!? しかも何でこれ体が浮かばねんだよ!? 待てっ、待って! タイムタイム! ストップ、ストップだって……! あ、あ、あ……アッ……アアアア……(ブクブクブク)」

ジン「（理不尽……）」

AA「邪魔ものもいなくなったところで詳細説明。ジン君どうぞ」

ジン「あー……物質創成で作った鎧とか銃器は基本デバイスだ。エレベアを通して全体をリンクさせることで彼女を軸にして一つのデバイスとして機能の拡張を図っている。ここまではいいな？」

AA「エレベアの一部になるってことだね」

ジン「まあ、そういうことだ。で、オレの場合デバイスとオレ自身を直接リンク（接続）させることで魔法の構築のタイムラグ、自身の魔力総量や周りの状況をデバイスを通してではなく直接手に入れることができる。ようするに魔法の展開力の速さと自分の五感だけに頼らない情報処理能力を得る訳だ」

AA「うんうん」

ジン「……それだけの利点があるのに欠点がないなんてことはなく、オレの体はリンク中、エレベアと密接した関係となっている。ある意味一心同体と言ってもいい。彼女が受けた損傷はその分だけオレの方にも伝わってくる。それだけで腕が飛ぶ、なんてスプラッタなことはないが神経系に負荷を掛けてくる。こんなところか」

AA「ちなみにエレベアの完全破壊でどうなるの？」

ジン「おそらく廃人だな」

AA「うわぁ……」

ジン「ただ、そうそうそんな攻撃に当たることはないし彼女はいつも胴鎧の内側だ。余程の貫通力がなければ無理だな。まあ、そのときはオレも貫かれて死んでると思うが」

AA「実質無理つと……はい、今日はここまで。皆さんわかっていただけただろうか？　というか皆さん質問ないんですか？　矛盾点とか指摘される方とかいないのでしょうか？　（涙）」

ジン「矛盾だらけそうだしな」

AA「うぐう……自分一人のチェックじゃ甘い気がしてどうにも……」

ジン「それはともかくこの駄文もいつの間にか10万PVを突破した」

AA「鈍亀更新に付き合ってくださいありがとうございます！初作品だけに大切にしていきたいと思います。それでは」

ジン「EX-S様、悠様、埋没王子様、ガイア様、確変様、タカヒ口様。感想ありがとうございます」

AA「感想でのやり取りがいつも楽しいです！」

ジン「そろそろ時間だな」

AA「そっか。じゃ……」

AA・ジン「また次回！　お楽しみに！」

リック「（これが俺の最後だ？ 認めねえ……認められるかこんなこと……！）」

× × × × × × × × × × × × × × × ×

追記

今回のACネタはAC4より国家解体戦争に参加したオリジナルのNo.1こと、レイレナード最強のリンクス『ベルリオーズ』より。彼の渋カッコイイ声とセリフは私としてはど真ん中。

どうでもいいけど個人的にアニメ版クロノの空気の読めなささは嫌いだ、劇場版のクロノは好き。空気読むのはもちろんのこと、ツ

ンデレ属性と主人公並の優しさを持つというハイスペック。
でも私はアルフとすずかが好き。誰にも渡さない。異論も認めない
！！

無印のキャラ設定（2010/6/19更新）
各キャラの精神状態（2010/6/19更新）

番外編その二 『ケモノ』（前書き）

ジンが言うこときいてくれないorz

アンチ管理局路線に行く気ないんだぞぉ！？

ムシャクシャして書いた番外編。前回との直接的な繋がりはありません。

第十話でポロつと出た過去話。ループの中の出来事。そんなところで

生存報告代わりに投稿。リリカルはちょっと待ってください。一週間以内には本編を更新したい、なあ……

番外編その二 『ケモノ』

繰り返される
” 惨劇 ”

繰り返される
” 悲劇 ”

繰り返される
” 喜劇 ”

幾度
” 時 ”
を駆けようとも

幾度
” 人 ”
を救おうとも

幾度
” 愛 ”
を語ろうとも

世界の呪縛から解放されることはなく

ただ、荒廃した世界を眺め続ける

男の ” 凶器（狂気） ” は世界に向けられ

耳に届く銃弾の ” 協奏（狂想） ” は

世界の空を走り続ける

救われぬ世界に

報われぬ想いに

解き放たれぬ自分に

そのすべてに絶望しながら……

魔法少女リリカルなのは 〈 白き閃光の後継者 〉
Magical Girl Lyrical NANOHA
Successor of WHITE-GLINT

番外編その二 『ケモノ』

中世の水上都市、と言えはいいのだろうか。

いや、正確には人など誰も住んでいないのだから都市とは言えないの
だろうが、少なくとも周りを城壁で囲み幾層もの防衛網を敷く
それは外敵から街を守るために作られた城塞都市と言える。

それが海のと真ん中にあるのだから水上都市というのもあながち
間違いではないのだろう。ただ守るものが民衆ではないだけで。

そんな中それに近づいていく二つの影。

【よお、首輪付き。お前も ” 呼ばれた ” クチか？】

「……………」

【ヘッ、相変わらず無口だな、お前】

「……………」

【まあどうでもいいか、そんなこと。やることに変わりなんざねえ……………】

コジマ粒子に汚染された海を横切る ” 狂人 ” と ” 獣 ”

片や ” 殺戮者 ” と呼ばれる狂人

片や ” 人類種の大敵 ” と呼ばれる獣

既に億単位で人を殺しているこの二人に入った全く同じ依頼。

誘い出すような、明らかな罠。それでも二人……………いや、二匹の山^{リッ}猫は罠に飛び込んでいく。

別々に行動していた二人が同じ依頼を受けたのは、偶然ではなく必然だったのだろう。

いずれはこうなるとわかっていたが故に、ここで乗ることに決め

たのだ。

【やっぱ誰もいねえなあ。騙されたか？】

「……………」

”狂人” オールドキングは ”獣” たるジンに機体間での通信でそう語りかけるがジンは沈黙を持ってそれに答え、わかっていたことだがな、とオールドキングが呟いたところで無差別な全回線通信が入る。

【偽りの依頼、失礼しました。あなた方にはここで果てていただきます。理由はお分かりですね？】

割り込んできたのは女性の声。言うまでもなく、オールドキングもジンも男性である。

辺りを見渡すために城壁の上に降り立ったジンは遙か彼方の空に光る5つの光を見た。

【ま、そういうことだ。どうせ確信犯なのだろう？ なら話しても仕方がない】

【フン……所詮は獣だ。人の言葉など解さんだろう】

現在最大勢力を誇っている4つの企業。オームル、インテリオル・
ユニオン、グローバル・アーマメンツGA、BFFから選ばれたリンクスたち。各企業から選
ばれた上位リンクスたち。
だがジンにはそれら全てに興味はなかった。

ただ一点。

たったの一つ。

彼の眼にはピンク色のネクストだけが映っていた。

【お前とこうなるとはな……。私が撒いた種だ、刈らせてもらっぞ
……】

見覚えのある機体から、聞き覚えのある声が聞こえる。

知らず、背筋が伸びる

知らず、喉が渇く

知らず、心拍数が上がる

【戦争や風情が、偉そうに……選んで殺すのが、そんなに上等かね】

【殺し過ぎる、お前たちは……】

誰かが何か喋っているのも気にならず、ただその機体一点だけを見つめ続ける。

まるで恋い焦がれた者を見つめるかのように。

【御託はいい、とつととヤロウぜ。なあ、相棒？　ってオイ！？】

「……………」

オールドキングが話しかけた時には黒塗りの、前時代の戦闘機に似た形状、旧レイレナード社製中量二脚型フレーム、”闇”を意味する名を持つ機体は5つの機影に突撃して行っていた。

532

開かれるは狂乱の宴。

未だクレイドルを支え続けるエネルギー供給施設たるアルテリア・カーパルスは数多の銃弾が飛び交い、エネルギー弾が空気を焼く。流れ弾は施設を、城壁を、それらすべてを抉り、焼き溶かし、もはや先刻までの機能美たる美しさはなくなってしまっている。

途絶えることのない戦劇のBGMを何とも思っていないのか、クイツクブーストによる爆音を奏でる殺戮者の二匹と企業の猟犬たる五匹。

【I・m　t h i n k e r　トウトウトウトウトゥッ】

【鼻歌交じりとはな……】

【……そろそろか？】

【……そうですね】

古参の実力者　”ローディー”、B F Fの新たな王女　”リリ
ウム・ウォルコット”、G Aの災厄とさえ呼ばれた　”ウィン・
D・ファンシヨン”

実力者三人を相手に鼻歌交じりに戦うオールドキングの实力は本
物だと言える。しかし……

——ドオウン——

奏でられていたB G Mに存在しなかった異音。この戦闘が始まっ
てから初めての異音。

音源はオールドキングの機体　”リザ”　の特徴的な逆関節の脚

部。そこから黒煙が上がっている。

【オイオイ、脚部が損傷だあ？ 一発も喰らってねえってのに……。整備班の奴ら、なにしてやがる。……………ッ！ そういうことかよ……】

機体の突然の不調に自分の部下の不手際にぶつくさと文句を言っていたときにオールドキングはあることに気づく。

本来自分はここまでの実力は持ち合わせていない。といってもこれらのリンクスに負けるようなものではないと自負している。

が、この戦いが始まったとき自分は死ぬ覚悟をした。ただでは死なない。誰か一人は連れていく……と。

しかし蓋を開けて見れば、お互いの機体にダメージというダメージを与えられていないとはいえ、客観的に見てみれば自分の優勢。明らかな異常であった。

このときオールドキングは自分の犯した失態に、慢心に、呆れを通り越して笑いがこみ上げる。

【ハハハ…… ”ネズミ” が紛れ込んでいたのかよ】

”ネズミ” …… ようするにオールドキングの部下の中に裏切り者、もしくは企業側の人間がいたということだ。

確実に整備班の中の誰か、ということはすでに確定している。

【そういうことだ】

【こちらにも損害をあまり出たくないがための作戦です】

【おまえが私達3人相手に勝てるんでも思っていたのか？】

【フフ、フハハ……殺してるんだ。殺されもするさ】

直後に始まる猛攻。先ほどとは打って変わったかのような激烈な攻撃にリザはボロボロにされていく。

脚部が損傷し、機動性が極端に下がっていたのも一因なのだろうが、単にオールドキングと三人の実力の差というのが大きいのだろう。

猛攻が始まってから数十秒。蹂躪されつくされたりザはバズーカにより右腕がもげ、頭部はエネルギー兵器によって溶かされ機能不全と化し、胴体にはあらゆる銃痕が付いていた。

ここでようやく攻撃が止まり、また狂人の歩みも止まる。

狂人たるオールドキングは自らの同族。狂うことしかできなかった相棒に通信回線を繋げる。

【すまねえな、相棒……】

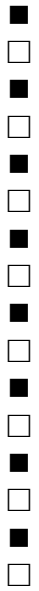
通信回線も先の戦闘でイカレてしまったのだろうか？ ノイズが多分に混じった音声でオールドキングはジンに語りかけてくる。

【どっちら、俺の器はいいまでっちらっ……】

どこか満たされた、満足したような声音。

【よかつたぜ、お前とは……】

この言葉が狂人の、
” 殺戮者 ”
の異名を持つ者の最後の言葉だ
った。



「……………!!」

【グッ！？】

空中に舞う火線。

お互いに撃ち合った結果、傷ついていくのは桃色の機体。

エネルギーの回復のために一度地上に降り立ったジンの横合いから貫く太いオレンジ色のエネルギー！。

それをいち早く天性の勘と長年の戦闘経験により機体を捻らすことで避けたジンにミサイルが次々と着弾する。

生憎とすべてのミサイルは分厚いPAにより機体にダメージを与えないことなく自壊していったが、薄くなったPAを貫いた銃弾が機

体のあちらこちらに致命的ではないものの、風穴を開けていく。

【私の見当違いだったか。その程度を避けられんとは……】

苛烈な罵倒とも言える皮肉を吐きだしてくるのは、ディープブル
ーの機体。

奇抜な前傾姿勢を取るそれは、ラインアークの海に沈んだはずの
カレードランク1”ステイシス”

空中に静止していた彼は自らの機体の特性、他の追隨を許さぬほ
どまで高められた空力特性により得られる超スピードを生かし、空
を存分に駆け回りながら左右に構えた長銃より確実に殺すと言わん
ばかりにジンを狙い撃つ。

しかし、それで終わってしまうジンではない。

この中で一番戦闘経験があるのはジンである。

何度もしたループでの戦闘経験、記憶として埋め込まれたアナトリアの傭兵の戦闘経験、その二つをもつてしてスピードで劣るエレベアをステイシスの移動予測経路に回り込ませることによって無理やり追隨させながら両背中でのデュアルレーザーを起動させ、放つ。

ステイシスは飛んでくる螺旋の蒼光を容易く避け、お返しとばかりに左手のレーザーバズーカの異名を持つライフルを撃つ。

ジンはそれさえも機体を捻りながら避け、右手のマーヴ・カスタムを撃とうとするがそれを突然止めて後ろにQBしながら退避する。一瞬前までにいた所には視認するのが難しいほどの弾丸が通り過ぎていき、後ろに引き遅れたマーヴ・カスタムの銃身を貫く。奇跡的にも爆発はしなかったが、もはやこれは使用することはできないだろう。

生え抜きとは異なる実践派の天才 ” オッツダルヴァ ” と国家解体戦争に参加したオリジナルと呼ばれるリンクス、元オリジナル No.16 ” セレン・ヘイズ ” …… いや、 ” 霞スミカ ”

まったくというほど共闘は向かない二人ではあるものの、そこは実力者同士。適切なタイミングで放たれるそれはどれもが一撃必殺であり、お互いをカバーするようにして放たれている。

まさに一進一退。撃つては撃ち返され、撃ち返されては撃ち返す。二機と一機は空中を駆け回りながらお互いにその身を削っていく。

それでもなおジンの優勢は揺るがなかった。

右手の銃が使えないと判断するとそれをセレンの乗機 ” シリエジオ ” の方へ投げ、左手の銃で弾倉を撃ち抜き暴発させることによりダメージを与え、固まっているシリエジオに銃身に発生させたレーザーブレードによって斬ろうとする。

その隙を突こうとステイシスが両手の銃で仕留めようとするが、それをジンは避ける。

結果として機体を裂こうとしていた刃は軌道を逸らされたことにより、機体を掠めるだけに留まる。

【左足が……！！】

しかし蓄積されたダメージは表面化し、見事シリエジオの脚部を片方だけとはいえ破損させることに成功する。

【こうまでして一方的にやられるとはな……】

左足の機能が失われたせいでバランスが崩れたシリエジオをすぐさま機体バランスを再計算させて直立させながらセレンは自分と相手の実力の差に驚く。

追撃が来なかったのは、立て直している間にジンがステイシスとの戦闘に入っていたためであり、結果的にセレンは命拾いしたから

だ。

セレンがバランサーの調節を終え、再び戦闘に参加しようとした時、味方から入ってきた通信に足を止めた。そろそろらしい。個人的には気に入らない作戦だったが、企業から機体を借りている身で文句を言えることではないため、セレンは指示には従った。

【すまねえな、相棒……】

戦闘中に入った通信はノイズ交じりのオールドキングから。

【どつちら、俺の器はこゝまでらしい……】

その言葉に含まれた想いは決して少なくない……

【よかったぜ、お前とは……】

「……………」

【惜しいな、若すぎる】

【死んだか……慰めにもならん】

【当然の結果だ。お前たちは、ORCAの名を貶めた。貴様らには水底が似合いだ……！】

沈黙を守り続ける獣と罵倒を吐きつける者達。
対照的ではあるものの同じ。

彼の者の死についての無関心

彼らの中にもオールドキングのせいで肉親を失ったものもいるの
だろうが、それは既に彼を討ったことで既に晴らされている。彼の
死そのものに関心を抱いてなどいない。

無論、獣にとっても彼は何者でもなかった。家族でも戦友でも相
棒でもない。ただやることが同じであつたから行動を共にする機会
が多かつたというだけの話。ただそれだけ。

【後は貴様だけか】

【私自身で刈り取りたかったが……仕方ない、か】

対峙するのは五人の兵と一匹の獣^{ツワモノ}

【貴様さえ……貴様さえいなければ……！】

罵倒とも悲痛な叫びともとれる声を上げるのはカロード最高のリンクス” オツツダルヴァ”

彼はそう言うと同時にジンに向かって銃口を向けるがそこにはもうジンの姿はなく、QBによって接近したジンの駆るエレベアが左手の牙を剥いていた。

が、そこは5対1。ジンの接近に気付いた誰かが凶刃を阻むようにして弾丸を放ち、それを皮切りに相手を破滅へと追いやる協奏曲が始まった。

獣が誰かに牙を剥けば誰かがカバーするようにけ牽制の弾を放つ。怯んだ所をすかさず誰かが仕留めにいくがそのことごとくを獣は避けていく。

ある時は死角から、ある時は態勢が完全に崩れているとき、ある時は二人同時に……そのことごとくを避ける姿はまさしく人外と言えるような軌道を描き、その勘によって死角からの攻撃を避ける姿は後ろに目が付いているのかと思われるほどだ。

事実、囲んでいるはずの兵たち^{ツワモノ}は逆に獣の巢に生身で踏み込んだような、背筋が凍りつくような感覚を味わっている。

【クソッ……！】

ウィン・D・ファンションが悪態を吐きたくなるのも頷ける。こちらの攻撃はことごとく避けられ、（と言っても致命的なものではないだけで、直撃はしている）こちらは何人かが既に機体から火花を出し始めている。

獣は無慈悲に、冷酷に、己が敵に攻撃を当て続ける。装甲はあちこちに削られた跡のようなものが付いているが、それは表面上だけのことで、他の機体のように機体各部から火花は飛び散っていない。

【最高だよ、おまえは……！ 私の最高傑作だ！！】

戦局は企業側が不利だというのに、セレンは驚嘆の声を上げる。

それは称賛だった。しかしながら憎悪でもあった。
セレン・ヘイズにとってジンは己の答えを見つけるための最後の光であった。

故に称賛。

自分の元に来てわずか数年。その間に体は鍛えはしたが実際に実戦に出たのはつい最近のこと。いくらあの ” 大鴉 ” の記憶を受け継いでいるとはいえ、記憶と感覚は違い、齟齬が出ていると言っていたのに…… それらを超えてよくここまで成長したものだ。

故に憎悪。

自らの力の在り方を否定したかった。しかしながら彼女はそれを許されない立場にあった。だからこそリンクスを辞め、自分が為し得ることができなかった力の在り方を見たかったからこそ彼を育てた。その力は自分以上に人を―― いる。自分が視ていた、信じていたものは結局幻だったのかと。

【アンビエント、戦闘不能。…… 申し訳ありません、王大人。リリ

ウムは御信頼に背きました】

熾烈な攻防に最初に脱落していったのはBFFの王女。その機体のコアには深々と残った牙の痕。レーザーフレード半ば以上を抉り取られそれは、その高度を徐々に落とす。

どこまでも自分の師を信じ続けた彼女は、最後まで師を気にしながら海の底に沈んでいった。

しかしそれさえなかったかのように戦闘は止まない。

企業側にとって一人が欠けた所で戦闘に支障はない。なぜなら大多数のリンクスは単機でミッションを遂行するからである。僚機を連れていくとしても二機編成だ。

5機ものネクストを投入しての作戦は彼らにとっても初めてのことであり、連携も何もないことから自分たち本来の実力を十全と発揮できていなかったのだ。

自分たちの数が減れば減るほど本来の実力を発揮していくその姿は、荒廃した大地に死んでいき、それでもなお生きようとする人類を示すかの様でもある。

【限界か……すまん。フィードバック、帰還する。後は任せた】

また一人、戦線を離脱してゆく。この中では最古参である。ローディーならではの引き際の良さで、OBを使つて墮ちることなく戦線を離脱。

残ったのは上位リンクス2名と元オリジナル。内、セレンは片足を潰され機動力が著しく低下。ウィン・Dは右腕を切り落とされている以外は損害はない。オツツダルヴァもまた頭部パーツを損失しており、サブカメラによつて十分とは言えないが視界を確保しながら戦闘している。

ジンもまた無事ではなく、度重なる攻撃の中で避けきれないものだけが無用となった右手を盾代わりにしていたために肘部分からありえない方向に折れ曲がつており、無茶な機動によつて各関節部分のフレームは一部が歪み、ブースターも酷使すぎたため冷却が追いついていないのか、目に見えて赤くなっている。

お互いに満身創痍。それでもなお戦闘は続けられており、お互いの心情を表すような戦いに空間は震え、最早そこは地獄に最も近い地となっている。

そんな中、今の今まで沈黙を保っていたジンはここに来て初めて声を上げる。

「さすがに5対1はきつかったか……」

淡々と感想を語るだけではあったがそれは本心からであったのだろつ。

「……世界など、最早どこまでいったって同じだ。だというのに何時までしがみついているつもりだ？ オツツダルヴァ……いや、マクシミリアン・テルミドール」

相対するディープブルーの機体に蔑むようにして話すジン。

【だからこそこのクロースプランだったのだ。それを貴様らが……！】

オツツダルヴァはジンのあまりの言い方に、革命家”マクシミリアン・テルミドール”として答えてしまう。クレイドル体制を否定すべき者として。

「……どの”道”を選ぶと末路は同じ。
……終わりのなき闘争の果て……犬死だ」

それを吐き捨てるようにして語り始めるジン。今まで黙りこくっていた者とは思えないほど饒舌に。

「そう。すべては同じ。人を救おうとも、殺そうとも……すべては同じ。」

人類の終局へのカウントダウンはとっくの昔に始まっている」

【フン……何を根拠に「気付いているんだろう？」……】

「人類に、世界に、もはや飛び立つ余力などなくこのまま地上に縛られ続けながら死滅していくということに……！ もはや救う術^{すべ}などないということに……！」

【……………】

それは慟哭だったのか。聞くものすべてを震え上がらすほどの怒気が込められているようで、同等以上の悲哀が多分に含まれていた。二人の会話を聞いていた他の二人も、思わず動きを止めて会話に聞き入っている。

「救える人類など、救うに値する人類など……！ もうどこにもいないのさ……オツツダルヴァ」

【……だからと言って貴様らが殺しまわって良いという訳ではない】

救うに値する人類なし。人類に見きりをつけたと語るジンの言葉の後に、ウィン・D・ファンションは至極真つ当な正論で以って返す。

「ウィン・D・ファンション……。そう、これはただの八つ当たりだ。誰もが”今”を見ていないというのに苛立つオレが……他人を巻き込みながら当たっているだけだ。だが……」

いつかは死ぬんだ。ここでも死んでも大差はないだろう?」

【ならお前が先に逝け!!!!!!!!!!】

あまりの暴論に我慢ならず、攻撃を再開するウィン・D・ファン
ション。それに続いて他の二人も動き出す。

停滞していた時間が動き出し、再びそこは戦場と化す。

【そんな……そんな理由で! 私の母は死んだのか!?
お前のような! お前のような奴に!!!】

「ああ、それは……」ご愁傷様？
でもまあ、今すぐ会わしてやるから安心しろ」

【つあああああああああ！！】

憤怒

あまりの身勝手さにウィン・D・ファンションを支えていた、あるいは抑えていたモノが切れた。激情に身を任せた攻撃は機体にも反映され、拳動が単調になる。

戦闘においてはそれは致命的なものだが、元々の実力が高い彼女のそれは、自身の負担を考えなくなったために普段以上の速度における苛烈な攻撃となり、ジンに休ませることを許しはしない。

「クッ……！！」

【チィ！！】

【落ち着け、ウィン・D！！】

冷静さを失ったウィン・Dは早々に弾を撃ちつくし、軽量機ならではの身軽さと限界を超えた機動性で接近戦を挑んでおり、セレン達は援護しようにもあまり両者が近すぎるために手を出せずにいた。ウィン・Dとはわずかな間とはいえ、同社に所属していたために

先輩と言えるセレンは彼女を宥めようとするが、何度呼びかけても聞く耳持たずの状態に自らの唇を噛む。

尋常ではないスピードで接近戦を仕掛け、青く発光するレーザーブレードを振り回す、ウィン・D。それを本当に紙一重の位置で避け続ける、ジン。

そんなことが数十分と続く中、あまりに吹かし過ぎたブースターが悲鳴をあげて黒煙を吐きだした。もちろんの事、ウィン・Dの乗機”レイテルパラッシュ”である。

一瞬、動きが停止するレイテルパラッシュ。その隙を、これ wait っていたと言わんばかりに不可避の一撃で以ってコアを抉り、ジンはウィン・Dを討ち取る。その一撃は必中、必殺。一撃で以って中の人間ごとその身を切り裂いた。

機体から力が抜け、頭部のメインカメラからライトが消える。重力に従い落ちていく機体は右手を中に挙げながら落ちていく。

さながら、まだ戦えるという意思表示のように。

——ただ、まだ戦えるだろう!? レイテルパラッシュ——

【あまり調子に乗るな!!!】

【「!!!」】

再び灯る頭部カメラ。力がこもる機体。

残ったエネルギーすべてを費^{つい}やし、再び空へ。敵へ。ブースターがすべて焼き切れている機体ではたいした上昇速度は出ず、ゆるゆると昇ってくる。

機体後方からはブースターの熱により陽炎が立つ。それが無機質なはずのネクストが鬼怨を纏うかのような姿を……

この場の全員が、幻視した。

それを無慈悲に青い螺旋光線が射抜く。

右肩のデュアルレーザーを展開したジンの姿。無慈悲に、正確に。今度こそ死出の旅路に行けるよう。

レーザーが直撃したレイテルパッシュは再び落下していく。

ジンは言い知れぬ何か、得体の知れぬ感情を胸に秘めたままその姿を見送る。

レイテルパッシュは今度こそ海中に沈んでゆく……主と共に。

「……っ！ぐ……」

【空中で止まるとは余裕だな。それでもリンクスか？】

一緒に余韻が招いた事態。

空中で背を向けて止まっていたジンにオツツダルヴァが斉射したそれは、直前で右に避けたことで左背中デュアルレーザーを挟み使い物にならなくする。

ジンの武装はもはや左の弾が切れたアサルトライフルのみ。レーザーブレードを展開できるとはいえ、さすがに二人相手にするはきついものがある。

開始早々に右手のアサルトライフルが破壊されたことにより射撃武器として使い続けてきた右肩のデュアルレーザーは既に発射可能耐久限界を超え、使用には耐えられない。

ジンは機体にかかる負荷を下げるために両肩の武器をパージし、機体を軽くする。

【ここで終わらせやろ……と言いたところだが、チッ……】

「……？」

意気込むジンとは違い両手の銃をだらりと下げるステイシス。

【生憎と弾切れでな……。撤退させてもらつ……。せいぜい苦しめ】

そう言って背を向け、水平線へOBを吹かして飛んでいくステイシス。残った二人はその背を見続ける。

【最後まであの調子とはな……】

「ガキか？ あの男は……」

機体を向かい合わせてお互いを機体越しに見つめ合う。言葉にできぬ何かが二人の間に交され、それは確かにお互いに伝わる。

【図らずともお前とこうなるとはな】

「自分自身で刈り取る……だったか？」

【ああ】

「……………」

【……………】

お互いに語ることが語った後の沈黙。言葉は不要だと、語り合わずとも伝えあふ。気心が知れた……それこそ家族の様だったからこそだった。

そうして二人は戦場で向かい合う。

お互いに動かない。問題は自身の攻撃範囲であることがわかって
いるから。

セレンは左足を破損しているとはいえ両手の銃は健在。ジンの度
重なる戦闘によって薄くなったPAと装甲は一撃で貫通し、コック
ピットを撃ち抜くことだろう。

対してジンの方には射撃武器が皆無。あるのは接近戦を想定した
レーザブレードを発生させることができるマーヴの改造型が一丁。
接近するまでが困難だが近づいてしまえば脚部を破損したセレンに
逃れる術はなく、一撃で仕留めることができるだろう。

だからこそ二人は動かない。タイミングを計っているのだ。自ら
の必殺になるであろう一撃を加えられる最適なタイミングを……

「……………」

【……………】

「……っ！」

先に動いたのはジンだった。このままでは埒が明かぬと溜めに溜めたブーストで一気に距離を詰めようとし、セレンはそれに銃口を合せ、引き金に指を掛ける。

開いていた距離はあっという間に縮まっていき、セレンの有効射程距離に入る。

【（まだ、まだ……）】

しかしセレンは撃たなかった。この距離ではジンは確実に避けると、そうわかっていたからだ。

例え視認が難しいほどの弾速だろうと避けてみせる。それはついに先程、死角からの攻撃を見えているかのように避けていたことから明白だ。きつと紙一重で避けてこの身を断ちに來るだろう。

だからこそ撃たない。避けられるなら避けられない距離で撃つ。おそらくその距離はジンの距離まで残り一歩というところだろう。狙うべきは攻撃のために前に出てくるその時。すなわち……

カウンター

お互いにやることはわかっている。後はどう凌ぐか、確実に射抜くか……距離は縮まっていくな。

800

ドドオン！！

300

400

500

600

700

交差した瞬間はそれこそ一瞬。たった一瞬の交錯。

狙い澄まされて撃たれた弾丸は虚空を穿ち、一気に懷に潜り込んだ牙が深々と突きささる。

どこかの配管が千切れ飛んだのか深々と刺さった場所からはオイルが噴出し、ジンの機体を濡らす。さながら獲物をしとめた後の獣の如く、返り血を浴びる、浴び続ける。

余韻は一瞬。自らの恩師を殺したという事実^{オイル}に酔う。それを味わった後で突き立つ銃を抜こうとしたジンは不意に動きを止める。否、動きを止められた。

左腕には何者かの手がしっかりと握りこまれており、背中にも回された腕が互いに機体を密着させる。

「馬鹿な……」

【……何……が、だ？】

確かにジンのレーザーブレードはコックピットを貫いている。故になぜ動けるのか？……なぜ生きているのか？

「ぐっ……放せ！」

思考を外に放ってセレンの拘束から機体を逃そうと足掻くジンだが全く離れない。

本来ならネクスト二機分の重量ぐらいならば宙に浮かせることな

ど造作もないことなのだが、酷使しすぎたブーストは最早耐えきることは叶わずに黒煙を吐きだす。

そうして二人は共に着水。海中に沈んでいく。歪み、風穴だらけの装甲では水圧に耐えることなどできず、すぐさま浸水が始まる。

「クッ…… オツツダルヴァではあるまいし水没はゴメンだ！」

【ふふ…… 誰、がお前に、相手ノ動きヲ…… 封ジる、技を教え
た…… 思ッテル。 …… もう逃さ、ンぞ？】

セレンの方でも浸水は始まっており、ノイズ交じりの通信がジンの愚痴に返答として返される。

「ちっ……」

ここにきてジンは抵抗を止めた。最早このまま突き放つことに成功しても無駄だろう。あまりにも機体各部に海水が貯まり過ぎた。浮くことすら叶わないだろう。それよりも気がかりだったのは……

「これを狙ってたな、セレン」

【さあ、どうだったかな？】

返答など期待していなかったが、どういう訳か先程のノイズ交じりの通信が何だったのかと思うほどクリアな声がジンに届く。

「狸ババアめ、どの口で言ってたんだか……」

【誰が狸だと？ いや待て、誰がババアだ!!】

「お前以外に誰がいるんだよ」

【なんだと……？】

この場に第三者がいれば気が抜けるような会話。本当に今の今まで殺し合いをしていた人間同士なのかと思うような雰囲気。……後半は底冷えするような声音だったが。

【まあいい、お前には説教することが山ほどある。覚悟しておけ……】

「ハッ……」

死に損ないがないが何を言う。

そう言いたいのに。

何故だろうか。

「ハハハッ……」

なぜかジンの顔には……

「ハハハハハハ……」

笑みが浮かんでいた。

「オレは……」

爆音が辺りに響き、地上では水柱が立つ。

人類種为天敵と言われた彼が何を思ったのか、何を感じたのか、何が言いたかったのか……

誰も知ることはない。すべては暗い海の中、？闇？の中に。

世界は回り続ける。

彼は世界に囚われたまま……

再び再誕の時を迎える

番外編その二 『ケモノ』（後書き）

ごめん。エイプとメイの話にならんかった。
o r z

第12話 管理局の魔法（前書き）

投稿するのに大幅に遅れました。すいません。
そして、皆様お久しぶりです。

かなりg d g dかもしれません。
それではどうぞ。

第12話 管理局の魔法

魔法少女リリカルなのは
Magical Girl
Successor of
White-Glitter
Lyricall NANOHA
白き閃光の後継者

第12話 管理局の魔法

side - ヘリックス

「ストップだ！　ここでの戦闘は危険すぎる」

出たよ、K Yことクロノ・ハラウン。クソッ、目の前のことに熱くなりすぎた！　この癖をどうにかしないと……

「時空管理局執務官、クロノ・ハラウンだ。詳しい事情を聞かせてもらおうか……」

「時空、管理局……」

微妙な色のフェレット……ファンの間で”淫獣”と呼ばれているユーノが茫然とした感じで言葉を漏らす。

不本意な乱入者、管理局の登場でその場の全員の視線はクロノに向けられている。このままいけば原作通りにフェイトが撤退するときに無茶しかねない。なら……

B l i t z A c t i o n

「っ！？　待てー！！」

今ここでこの俺がジュエルシードを回収する！

クロノが何か言ってたみたいだがそんなことは関係ない。一瞬で

流れすぎていく景色。ジュエルシードとの距離がどんどん狭まっていき、あと一息という所で……

俺は全力で回避せざるを得なかった

避けた理由は俺に向かって飛んできた白い二重螺旋状の砲撃魔法。それを避けたためにジュエルシードへの進路を大きく逸れてしまった。

ジュエルシードがギリギリ反応しない位置。高速移動している俺に向かって放たれた魔法。しかも無誘導で、だ。信じられねえ……

「っジン、テメエ!!」

「悪いが、譲れないな。それは」

こちらに持っていた長銃を向けているジンと睨みあう。

「リック、フェイト!! 撤退するよ!」

こっちが不利、か……仕方ない。

「!!……了解、っと」

フェイトの方を見るとすでに転移魔法を展開している。原作と違って無理にでもジュエルシードを取りに行かなかったのか……まあ、怪我はしないに越したことはないな。

俺はすぐさまフェイトの方へ移動し、この場を離脱する。クロノが魔力弾を撃ってきたがお返しとばかりにフェンリルで打ち返してやったら、クロノに直撃して吹っ飛んで行った。ざまあみる。

転移する直前、ジンの奴と目があつた。

俺が覚えてろって意味合いで睨みつけていたらあいつ、不敵な笑みを浮かべたあと鼻で笑いやがった！

……まあいいさ。今から大変なのはそっちも変わらないんだしな。せいぜい四苦八苦すればいいさ。

そんなことを頭の隅で思いながら自分が今後どうするべきかを考えつつ、その場を後にした。

s i d e
o u t

* * * * *

撤退したか……いい判断だ。とりあえずこっちをどうにかする
ことにしよう。

魔力弾をデバイスで撃ち返すという芸当に驚いたのか、一瞬だけ
すべての行動を止めてしまった執務官とやはら自らの魔力弾により
近場のコンテナに頭から突っ込んでいった。オレは彼の後を追ひ、

「動くな」

瓦礫の中から立とうとしていたクロノ・ハラオウンと名乗った少
年にオレは後ろからレーザーファングを纏わせたマ―ヴを突き付け
る。ちょうど二股に分かれている魔力刃が首を挟むようにして突き
付けたそれは、オレが手首を捻れば容易に吹き飛んでいくことだろ
う。……何がとは言わないし、なのはの前でそんなことをする気は
ないが。

「……君は自分が何をやっているのか分かっているのか？ 僕に武
器を向けると言うことは管理局法第……」

「お前こそ現状を理解できないのか？ さっさとその子に掛けてい

るバインドを解いてもらおうか」

「……………」

目の前の少年は渋々といった感じでなのはに掛けていたバインドを解く。

「これでいいか？」

「いいや、まだだ。杖を……デバイスも放してもらおうか」

「馬鹿を言つな！ 君のそれは明らかに公務執行妨害だ！ このまま現行犯で……！」

「はやくしろ」

的確に、短く、かつ単純に。相手に自分の要求を突き付ける。生殺与奪は今、オレが握っている。

「それともこのまま首が跳ぶのがお望みか？」

彼の耳元でなのはに聞こえない程度の声でそう言い、オレは突き付けているマーヴの魔力刃を先端から徐々に結合していき、首元数センチで止める。

まるで首輪のようになったそれを見て、さすがに顔を青くする少年。

「……前に放ればいいのか？」

「そうだな。ゆっくり前に投げるんだ」

さて……後は高みの見物を決め込んでいる人間を引きずり下ろすか。さつきから監視用の魔法だか何だか知らないがなかなか鬱陶しい物がいて邪魔くさい。

「ジ、ジン！」

「ん？ どうしたユーノ？」

予想外の事態が相次いで起こったために思考を停止させていたのだろうユーノが我に返ったのか、オレの名前を大声で呼ぶ。

オレはしっかりと反応してやるが、目の前の少年からは視線どこるか意識すら離さない。

「いったい何してんのさ！？」

「何って……交渉用の人質に決まっているだろう？ 高みの見物をしている奴らのな」

「いやいやいや！　そもそも彼らは……」

【お話し中ごめんなさいね。時空管理局提督、次空航行船『アースラ』の艦長リンディ・ハラウンです】

「やっと出てきたか……」

ユーノが何か言いかけていたがそれに割り込むようにして緑色の髪をし、制服だろう物に身を包んだ女性。控え目に言っても美人と言える女性が唐突に眼前に現われたモニターに映し出される。

しかし、ハラウン……目の前の少年とは肉親、または親族なのだろうか？

【単刀直入に言います。こちらの局員を解放してください】

「条件付きならいいだろう」

とりあえず引きずり降ろしたが、さて、素直にこちらの条件に従うかどうか……増援を送られる前にケリをつけたいとこ「ジン、ジンってば！　ストップだって！」ろだな。

「……さつきから何なんだユーノ。うるさいぞ」

「君は勘違いしているんだって！　彼らは敵じゃない！　時空管理

局は、え〜となんて言ったらいいか……そうだ！ いわば地球の警察みたいなものだよ」

喋ってるうちに落ち着いてきたのか、ユーノはオレを説得するようについてくる。目の前のウィンドウの女性も少年も、ユーノの説得に安心したように息をつく。

「……こいつの信用度は？」

「魔法関係なら絶対。人員不足のせいで辺境の管理外世界になればなるほど対応が遅いのは否めないけど……」

「そうか……」

ユーノが言っている通りなら魔法世界においてはそれなりに信頼を獲得している組織ということか？

どこまでの規模なのかはいまいち推測できないが、多くの次元世界を管理していると言っのならかなりの大きさだろう。いや待て、もしかすると……

「……もしかして、おまえがジュエルシードを輸送しようとしていたのはこいつらか？」

「そうだよ」

「あ……」

どうやらオレは場をややこしくしてしまっただけ。しっかりユ
ーノの話を聞いておけばよかったか。まあいい、方針は変えずに対
応策を修正するか。

「……すまん、こちらの勘違いだったらしい。非礼は詫びよう」

そういつて目の前のクロノ・ハラオウンの首元から魔力刃を消し、
手を差し伸べる。

「立てるか？」

「……………」

クロノ・ハラオウンはその手を払いながら自らの足で立った。こ
れは……嫌われたか。

「すみません艦長。片方は逃がしてしまいました」

【うーん……ま、大丈夫よ】

すぐさまモニターのリンディ艦長とやらの報告を開始するクロノ・

ハラオウン。しかし軽いな艦長。

【でね、ちょっと話を聞きたいから、そっちの子たちをアースラに案内してくれるかしら？】

「ですが、艦長……！」

そう言ってクロノ・ハラオウン……長くて面倒だな、クロノでいいか。クロノはオレの方をチラツと見ながら反対しようとする。

このまま茶番劇を見ている結果はオレたちをアースラとやらに案内することに変わりないだろうが、時間が惜しい。というかオレが原因の気がするから口を挟むことにする。

「話し合いに割り込んで失礼。私は何もせんよ、そちらが何もしないというのであれば」

【ほら、そっちの子もそう言ってるし】

「艦長！」

【クロノ？】

「うっ……了解です、すぐに戻ります」

まだ何か言いたげだったクロノを名を呼ぶだけで黙らせる艦長こ

とリンディ女史。

なぜだろうか？ 今一瞬彼女に桃子さんと同じ気配がしたのは気のせいだろうか？

そうこうしているうちに通信は閉じられ、クロノ若干肩を落としながらオレたちを案内しだした。

■
□ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □

「ユーノ君、ユーノ君……ここって一体……」

周りをキョロキョロと見回しながら不安げにユーノに尋ねるなのは。確かにこの一面真っ白な廊下はどこか不安になる。窓のない病院を歩いているようだ。

「次元管理局の、次元航行船の中だね。えと、簡単に説明するといくつもの世界を移動するための船、の中ってことになるね」

「あ、あんま簡単じゃないかも……」

なのはあまりわかってないようだがユーノの説明を聞きながら歩いているとクロノが急に立ち止まりこちらに向いた。

「どうした？ トイレにでも行きたくなったのか？」

「違う！」

「……そんなにムキになるな。ちょっとしたジョークだ」

「……っ！ 君という奴は……！ いや、それよりも……」

沸点が低いというより頭が固いだけなのか。こうやって話したり、からかったりする時の反応で大体の奴の性格は掴める。相手の性格を掴むというのは意外と重要な要素である。性格さえわかれば対応の仕方なんかはほぼパターン通りだからだ。このあたりは経験がモノを言うが生憎と経験には事欠かない。

しかしコイツ面白いな。同族の匂い（苦労人氣質）がしたが、それ以上にからかいがある。なのはとは別ベクトルだが。

「バリアジャケットは解除しても……って君、今何かよからぬことを考えなかったかい？」

「いいえ、なにも考えていませんよ執務官殿？」

などと言いながらサブデバイスである外装をパージし、あたかもバリアジャケットを解除したように見せかける。今の姿はどこにでもいそうな私服――無論これはバリアジャケットだ――をした白髪翠眼の少年と言ったところか。そのときにPAを発生させないだけの供給量まで魔力収集の吸収率を落とし、外部から自身の魔力量を測れないように妨害用の術式を展開させる。これは外部から観測しようとしても魔力値が変動するようになっていく。その誤差実に魔力保有量の＋－3倍。パターンを解析されるまではまだ時間がかかるだろう……最低でもこの場だけは隠蔽できるはずだ。

既に探り合いは始まっているのだから、安易に自分の情報は渡さない方がいい。なのはにもこの術式をかけようかと思っただがオレと違ってPAなどないなのは先の戦闘で既に計測済みだろう。後手に回ったのが痛かったか。

なのはもバリアジャケットを解除し、レイジングハートも待機状態にするがこちらを見て驚いたように目を開く。ユーノも同じようにしているのが視界の下の方に映ったので念話で黙っているように言い含める。なのはは不思議そうにしながらも黙っていてくれたが、ユーノは不服そうだ。あまり管理局に隠し事をしたくないらしい。まあ、当然と言えば当然か。だが現状、こちらにとっては信用ならない組織であることには変わらない。隠せるものは隠しておいて手札を増やしておくべきだ。

唐突だが、組織というのは肥大化すればするほど内部に ” 歪み ” が生じる。知性ある獣である人間は個体によつて考え・価値観が違うためどうしても意思の統一が難しいためである。それは ” あの世界 ” の企業とて同じだ。その歪みはいずれ拡大していき、止まることを知らずにゆけばいずれ多くの者を巻き込んでいくことになる。

管理局とやらがどうなのかは知らないが子供を前線に投入しておいて増援が来ない理由としては目の前の少年ほど戦闘に長けた者、あるいは魔力量を基準とするなら彼以上の人間がこの船（？）にいないということになる。

と、なると……比較的魔力量の多いオレやなのはには必ず勧誘が来るだろう。最悪、拉致という強硬手段を取る可能性すらある。そこまで腐っているのかそうでないのか知らないが、それは絶対に防がなければならぬ。そう、絶対にだ……

つと、クロノ執務官が不服そうにこちらを睨んでいる。少し弄り過ぎたか？ いや、まだこのくらい序の口だろう。クロノ執務官は表情を元に戻しつつ視線を下にさげてゆき、ユーノを見る。

「君も……元の姿に戻ってもいいんじゃないかな」

「ああ！　そういえばそうですね。ずっとこの姿でいたから忘れて

ました」

「……………」

忘れてたつて、オイ。お前に人間の尊厳とかそういうのではないのか？ こいつとは馬が合う友人だと思っっているのだが考えを改めた方がいいのだろうか？ 隷属することに快感を覚えるとかじゃないよな？

「？」

なのは不思議そうにしてユーノを見ている。……ああ、そうかなのははユーノが変身魔法で姿を変えていることを知らなかったな。そうこうしている内にユーノは変身魔法を解いて元の姿に戻っていく。

「ジンは始めてだと思っけど、なのはは始めて会った時以来だね」

と、本人は言っているがなのははユーノに指を突き付けながら固まっている（といってもその指先は小刻みに揺れている）

「ゆ、ユーノくん？ そ、その姿は？」

「へ？ いや、これが僕の本当の姿だけど……」

「え？ えええええーっ!？」

一瞬焦ったが、反応からして知らないのが確定みたいだ。

なのはの叫び声の後、二人が状況を確認している。ククク、計画通り。最初にユーノを見たときからいつかこうなると思っていたが……

とりあえず爆弾でも投下するか。

「……じゃ、ユーノは本当は人間の癖に女風呂で入浴したことになるな」

時が、空間が。

すべてが凍結した。

なのはも気付いて顔を赤くして、逆にユーノは顔を蒼くした。

そうなのだ。いつぞやの入浴の時に美由希さんに連れ去られたユーノは、高町家の女性全員と入浴したことがある。

で、オレと隣のクロノはアイコンタクト。

「クロノ執務管。フェレットもどきに变身して、女風呂で一緒に入浴していた『淫獣』がいるんだが罪はどの程度だろうか？」

「ふむ。わざわざ小動物に变身するあたりに計画性を感じる。とりあえず、禁固刑を目標に裁判してみよう」

「ちょ！？ な、なんで君たちはアイコンタクトができるんだ！？」

そんなもの、共通の対象（弄る）がいるからに決まっている。

しかし意外だな、クロノが乗るとは。今までの考察からじゃ型物タイプなんだが……

「あのフェレットもどきはなんとなくウマが合わない」

「そうか」

などと現状における相手の反応と傾向、それに応じる対策と自分の立ち位置を確認しながらユーノを弄っているとクロノ執務官が止まった。どうやら目的の場所に着いたらしい。自動ドアが開き室内が見えてきたのだが……訳、だが……

「何だ”コレ”は？」

思わず口から思っていたことが漏れてしまったがしょうがないだろう。

純和風……と言っては失礼だろう。というか失礼だ。室内の様相は端的に言えば間違った日本文化を覚えてしまった外国人。これに尽きる。

向こうの世界では有澤重工の社長の家に招かれたことがあったし、オレ自身日本文化は嫌いじゃかったからそれなりに調べて自分の部屋にも取り入れていたが……これは、酷い。ああ、もういちいち突っ込むところが多すぎて頭痛い。

これはあらでの精神攻撃なのだろうか？ それともお前たちの世界など知ったことかという意思表示なのだろうか？

部屋の中にいたのは先ほどモニターに映っていた緑色の髪をした美人のお姉さんと当たり前だが初見となる茶色の髪が似合うお姉さんだ。

ふむ、この体の年齢からすれば茶髪のお姉さんになるのだろうか、中身から見ればいまだ頼りない子供にしか見れないジレンマ。

……やめよう。考えるだけ無駄だと（時間と精神的ダメージな意味で）結論は出たはずだ。

まあオレの関心はそこではなくて……いや、そこもあるのだが……何故、戦艦の中に和風の部屋が用意されている？ しかも地味に間違った。

この内装が個人的な趣味だとしたら、職権乱用以外の何物でもない。

「ようこそ。アースラへ。艦長のリンディ・ハラオウンです」

と、緑色の髪をした女性が自己紹介をして手を差し延べた。

オレはそれを先ほどのゴタゴタがこちらの不本意ではない証のためとして手を差し延べ返し

「ジン。ジン・R・アナトリアだ。リンディ艦長」

「ええ。お互い先ほどのことは見解の違い故の擦れ違いだった（・・

・)ってことにしましょ」

「こちらこそ先ほどはすまない。いやはや、話の分かる人間でよかった。そのうえ美人なのだから……痛っ!？」

な、なんだ!？　なのはが足を思い切り踏んづけて……

「おい、なのは。いったいなにす……!？」

「なーに？　ジンくん？」

む、これは、不味い……

今のなのはから桃子さんと同質の気配を感じる。二人見たときから似てるとは思っていたが、こういうところまで似ることはないんじゃないだろうか？

いや、結局血縁だから素質はあるのか？（なんのだ？）

アースラの女性陣はそんな俺たちを見て笑っていて、ユーノは不満気。クロノはわからず疑問顔だ。

なのはが怒りの気配^{オーラ}を消して自己紹介する。

「私は高町なのはです。友達みんな”なのは”って呼びます
！！」

今度は茶髪のお姉さんが自己紹介をする。

「あたしはエイミィ・リミエツタ。エイミィでいいよ」

なんか、性別を超えた友情が結べそうな気がするな、この人とは。
主に黒ずくめの執務官を弄る時とか。

互いに自己紹介している間にリンディ艦長は話の席の用意を一人で

「今回、こちらに来てもらったのは事実関係の確認です」

事実関係の確認、ね……

さて……どこまでやってくれるというのかな？ 管理局とやらは。

まあ、最悪の場合は……

「いえいえ。それじゃ、お茶をしながら話し合いましょう」

と言って、緑茶を取り出し……

なぜ、ミルクと砂糖を取り出す？

そして、それを緑茶に（しかも過剰）投入。今の投入の入は乳じやないからな。

って違う！！ 何故だ何故だ何故だ！？ 何故緑茶にそんなものを入れる！？

「……一応聞くが、何をしているので？」

「え？ 砂糖とミルクを入れたただけけど？」

立ったままの態勢で固まっていたオレ達の隣に居るクロノとエイミーさんを見るが二人とも首を振りながら、クロノは顔を顰めながら、エイミーさんは苦笑いを浮かべている。

彼らの反応からするにいつものことらしい。リンディ艦長は人間か？ あの糖度はまずいだろう。

驚愕という名の戦慄をオレとなのはが受けているのを知ってか知らずか、こちらにも進めてくるのを丁重に断りつつ彼らの話を聞くことにした。

話の内容としては、時空管理局とはどういうところか？ ロスト
ロギアとはどういうものか？ というものだった。

まあ、簡単にいえばいくつもの次元世界を股に掛けて、魔法による犯罪、災害その他もろもろを解決するためにできた組織で立法、行政、司法を一組織が管理し運営しているらしいのが管理局。

滅んでしまった次元世界の遺物、危険物、現代の管理局の技術では再現不可能な技術の塊をロストロギアいい、これらを放置しておくとか多数の事態を招くことになるのでそれも管理するのも仕事……
というらしい。

まったく……似ているな、オレの世界と……

オレはこれらの情報は前例があるので問題ないが、なのはは非常に感心している。

まあ、外聞だけ聞いたらそうなるだろう。本題はここからだがな。

「これより、ロストロギア『ジュエルシート』の回収は時空管理局が全権を持ちます」

なのはが驚いているが当然だろう。もとよりそれを行つための組

織だ。その場に一般人を組み込むことはない。

が、そうそう引き下がれん。アレがあるうちは地球にのどこにいても消滅の危機があるということだ。それはこちらでできた友人、知人の死を意味する。

力持つ者の責務としては、黙っては引き下がれん。いや、言い訳だな。守るために戦いたいだけか。

戦いしか知らないから

まあいい。おそらくこちらから協力させることが目的で話したと

は思っのだが……傭兵業だったからか、その対応は気に食わんな。少々やり返すか。

「……全権を持つのはいいが戦力はどうなのですか？」

「どういうことかしら？」

「ここまで来るまでにこの船の魔力をサーチしたが、アレに……ジュエルシードの魔力に対抗できるほどの魔力量を持つ人間がその執務官があなたぐらいしかない」

「そうね」

「ジュエルシードの回収は魔力が大きい人じゃないと難しい。抑え込むだけでもこの戦力では精一杯だろう」

大勢でやるなら問題ないが、効率の問題で魔力量が大きい人を一人でやらせた方が効率がいい。

加えて、ジュエルシードの力が戦闘に特化した場合、集団戦は得策ではない。物量よりも質が要求されるのだ。

オレの持論を聞いたうえでリンディ艦長はが苦笑を浮かべ

「大丈夫、正式な訓練をした優秀な人たちよ」

「では、なぜ過去に起きた次元震の話をした？ 話を聞くだけで不

安になるんだが？

「この人間だけで足りるのなら、オレたちに具体的な内容を話す必要はなかったはずだ。オレたちがジュエルシードを集めているのは責任感からだと思って、それを使って協力を申し込みたいと思ったからじゃないのか？」

交渉とは自分が有利に進むようにすることを言うのだ。

先ほどの過去の例はそのための下準備だったのは間違いない。

「単体戦力として事実上有効なのは……そこにいる執務管しかいないから戦力に不安なのはわかる」

「おい！？」

「そうねえ」

「否定してください、母さん！」

クロノのツツコミが冴え渡るが、この場で誰も気にしている者はいない。

「うーん……じゃあ、単刀直入に聞きましょう。ジュエルシードの回収を手伝う気はない？」

「はい！」「」

なのはとユーノは元気に頷いたが、オレはそれに頷かず

「……だめだ、二つ条件がある」

全員の視線がオレに集まる。

これだけは譲るわけにはいかないことがある。

「第一、今まで集めたジュエルシードを渡す代わりの正当な報酬を
すること」

「どういうことかしら？」

「簡単な話だ。知らなかったとはいえ、こちらはまさに命を削って
いたんだぞ？」

そもそも私たちが手を出すことになってしまったのは君たちの
対応の遅さに他ならない。よって危険手当ぐらいは貰い受けたい」

「うーん……」

「なに、そんなに悩む必要はない。形にしていただければ何でもい
い。それ相応ならな」

「……わかりました。なんとかしてみましよう」

「第二、指揮系統はそちらにあるとしてもそちらの命令が私たちに
とって不利な、または不利益なことになる場合これを行使し、あな
たたちの指揮系統から外れ命令を拒否する権利をいただきたい」

「それは……」

「君は自分が何を言っているのかわかってるのか？ そんなことで
きるはずがないだろう？」

「そうか、なら仕方ない。この話はなかったこととし、なのはと共
に単独でジュエルシードを探すでしょう」

「君はさっきの話を聞いてなかったのか！？ ジュエルシードは危
険なものなんだ！！ それを民間人の君達に任せるわけにはいかな
いに決まってるだろう！！」

「こちらには暴走したジュエルシードを確保した経歴があるんだか
ら騒ぐほどのものじゃないだろう？」

と、いうわけだ艦長。こちらは別に単独で搜索しても構わない
んだ。何せ自分の世界の危機なのだからな」

「……………」

「そちらにとつてのメリットは厄介な条件がつくが戦力が三倍以上
に膨れ上がること。」

まあ、オレ一人でその執務管の三倍はあるが」

「…………君は喧嘩を売っているのか？」

クロノが怒りの気配オーラを全開に出してくるがそれをすべて無視し話を続ける

「オレ達の利点はジュエルシードを探索する手間と負担を減らせること。そんなに深く考える必要性はないと思うが？」

「艦長！！ まさか協力させようだなんて言いませんよね！？ こんな無茶な条件を通す必要なんっ……ぐえっ」

リンディ艦長は深く悩むようにして両目を閉じ、右手を顎に添えながら考え込んでいる。

先ほどから五月蠅かったクロノにはバインドを猿轡のように口周りに設置してから、鳩尾に一発叩き込んでおいた。今じゃ床に力なく倒れ、すっかり大人しくなっている。

そしてようやくと結論が出たのか、両目を開けた艦長はオレの眼をまっすぐに見据え

「わかりました、条件を承諾し協力を要請します」

そうはつきり言った。

オレはそれに納得し今まで黙って見ていた一人と一匹、いや二人に目を一度向けてから

「「「「よろしく願いします」「」」」」

声を揃えて答えるのであった。

余談だがリンディさんに『リンディ艦長なんて堅苦しく言わないでリンディって呼んで？』と言われたがさすがに初見の女性を呼び捨てるのもアレだったのでさん付けする方向性で留まった。

それでも納得できなかったのか、やけに食い下がって来たので理由を問うてみたらなくなった夫にしゃべり方が似ているらしい。それを（見た目）子供のオレに求めてどうするんだと思わないでもなかったが、決して口にすることはなかった。

桃子さんに似ているってことは反応も大体同じだろうしな。藪をつついて出てくるモノが大体わかっているのに突く馬鹿はいるまい。

side out

side - クロノ

今日はもう遅いと言ってこの船から彼らが下りて数時間後。僕とエイミィはこの世界に着てすぐに観測した彼らの戦闘データを眺めていた。

「それにしても、なのはちゃんとあの黒い子……二人共スゴイねえ。管理局でも5%いるかないかの魔力量だし、なのはちゃんは127万……こっちの黒い子も……」

目まぐるしく変わるデータをピアノを弾くがごとくキーをタッチしながらまとめ上げるエイミィは感嘆したように言う。

「えーと……うん、143万。最大発揮時はその3倍以上。魔力だけなら、クロノくんよりも強いよねえ」

「……魔法は魔力だけで決まるものじゃない。状況に応じた応用力と使用できる判断力だろ」

自分の魔力量は確かにこの二人に勝てないだろう。だが戦闘になれば別だ。

戦闘は別に魔力量だけで決まるわけじゃない。一番にものを言うのはやはり経験なのだ。

「わかってるって……まあ、こっちは明らかに別格だけどねえ……」

と言って映し出されるのはこちらの魔力弾をあつさり弾き返してきた黒い剣士と先ほどまでこの船にいた白い銃士。

彼らは空を縦横無尽に駆けながら戦闘を行い、しのぎを削っている。

「……『魔法は魔力だけで決まるものじゃない』っていう持論を持つ執務官クロノくんに聞くけどこっちの二人は？」

「……嫌味か？ それは」

「あはは……けどこれでも1/5の速度で再生してるんだよ?」

「……………冗談か? それは」

何の冗談だそれは? なんでその再生速度で人が消えるように動くんだ。

「あつ、ジン君が……………」

思考の海に潜っていた僕はエイミイの言葉につられ画面を見ると、先ほどの動きはどこへ行ったのか。

ジンは精彩を欠いた動きで黒い剣士……………ヘリックスというらしい、に滅多斬りにされている。

ヘリックスの方にも変化がある。いつの間にか右肩から青い輝く翼を広げ、先ほどよりもなお一層増したスピードで残像を残しながら移動している。

「……………ヘリックスとかいう奴の変化もそうだが、ジンの奴は急にどうしたんだ?」

「わかんない。急に動きが悪くなって……………」

「魔力の制御に失敗したんじゃないのか?」

あれだけの高速戦をしていたのだ。魔力の制御を一つ乱すだけで綿密に組まれた魔法プログラムは瓦解していく。

僕はそれを指摘してみたがエイミイは苦い顔をしながら答える。

「それもわかんないんだよねえ……」

「わからない？」

エイミイの答えに僕は戸惑う。

確かにエイミイは魔導士ではないが、こうやってデータ解析することに関してはとても優秀だ。

それに加え、アースラの観測システムも現状においての最新装備だ。魔導士一人の魔力運用を解析することなど造作もないことだ。

それなのにわからないと言っのはどういうことなのだろうか？

「わからないっていうか、観測できないっていうか……」

「……結局どういことなんだ？」

「ジン君の周りに膜みたいなのが見える？」

「……？」

エイミーは再生データを停止させ僕に確認を求めてくる。

画像では今まさにジンが斬られたところであり、その接触個所を中心としてジンを取り巻くように何かの膜が浮かび上がっている。

「……確かにあるな。防御術式の残骸が何かじゃないのか？」

僕はそうエイミーに言ってみるが、彼女は首を横に振りながら言う。

「ううん、違うよクロノくん。これ防御の術式でも何でもなくて純粹に大気中の中の未反応魔力素、反応魔力素、未反応反応魔力素、その他諸々を集めた壁なんだよ」

「なっ！ 未反応反応魔力素の壁！？ アイツはそんなモノを操っているって言うのか！？」

無茶苦茶だ！！ それをただ掻き集めて壁にしているというのか！？ いや、掻き集めること自体が異常だ！！

これがどれほどの異常なのかを理解するにはリンカーコアと魔力素の関係について説明しなければならない。

魔導士は空気中の魔力素をリンカーコアといわれる魔力に変換す

る臓器に一度取り込み、自分の魔力に変えて使うものだ。

その点においてはあれほどの、目に見えるほどの魔力素を集めることができるアイツの出力は凄まじいことが推測できる。

取り込む魔力が大きい魔導士ほど魔力放出が高い魔導士には違いないが、その取り込む魔力素にも種類というものがある。

まず未反応魔力素。

これは大気中の誰にも使われていない魔力素。魔導士はこれを大気中から取り込み自分の魔力に変換し、魔法を行使する。

次に反応魔力素。

これは魔力を使用したさいに出る残りカスのことを指す。通常はすでに使われた魔力素は他の魔導士には使えず、草木によって吸収、変換。未反応魔力素に戻る。

通常と表したのは術式によって自らのリンカーコアを通さずに行使できる魔法が少なからず存在するからである。例を取れば収束魔法などが挙げられる。これは先ほどの通りリンカーコアを通さずに、周りから魔力素を術式自体に掻き集め放つ魔法だ。

最後に未反応反応魔力素。

これは自然界に極微量に存在しているものである。しかしこれが最も危険な魔力素である。

普段吸収してしまうことのない反応魔力素をリンカーコアが誤認し、吸収してしまうことにより体に様々な悪影響を及ぼす。

主な症状としてはリンカーコアの衰弱、四肢の麻痺、それを超えて最悪心肺停止で死に至る。

普段吸収してしまう分には人体の浄化作用によってゆっくりと分解されていき、無害な未反応魔力素となつて体外に放出されるが、何らかの理由によりこれを大量に体内に吸収してしまうと魔力素が体外に放出されなくなり蓄積され、上記で説明した通りのショック症状を起こす。

そしてこれがもっとも特徴的なことだが、未反応反応魔力素は魔力的、物理的方法で操作、運用することはできない。

魔力的運用はそもそも未反応反応魔力素がリンカーコアでさえ誤認させてしまうほどのある種の力場を持っていると考えられており、術式自体がリンカーコアを中心として発達したものが今の魔導なので運用する術がない。

これを運用するには新たな魔法技術体系を確立するしかないと言われている。

物理的運用は技術的に確立しておらず、そもそも利用価値がないためどの次元世界でも技術開発は進んでいない。

これらのことから解るとおり、存在自体は明確に確認されているにもかかわらず正確な情報がほとんどない、未知の魔力素が未反応魔力素なのである。

この魔力素は魔導災害やロストログアの暴走直後などに多く確認され、魔力素が正確に反応しきれず中途半端に変化したものだというのが通説であり、この説から『未反応反応魔力素』と言われている。

説明が長くなったが現在において運用が不可能とされている未反応反応魔力素を掻き集めるという行為の異常性と人体に悪影響があるそれを平然と使っている彼の異常性については理解できたと思う。

「馬鹿げてる……。いや、この際そのことは置いておこう。アイツの魔力運用が確認できないのは未反応魔力素の壁による発生する力場のせいということか？」

「たぶん……。ランダムに魔力の波長がぶれてて解析できないんだよね」

「なら船にいたときのものからデータを取ればいいだろ？」

「私もそう思ったんだけどさあ……。ジン君、隠蔽術式組んでいたみたいで全くわかんないんだよね。いや、まったくつてわけじゃないけど今すぐってというのは……」

「無理というわけか」

「……ごめん」

「いや、エイミィは悪くない。あれだけ近くにいて気付かなかった僕が悪い」

「クロノだけのせいではないわ。私も気付かなかったもの」

「艦長……」

後ろから掛けられた声にふり返るとそこには艦長が苦笑しながらこちらに向かって歩いてきていた。

「彼の隠蔽術式は完璧だった。少なくとも……専用の機器を使わないとこちらが判断できないくらいに……」

「ですが……」

「過ぎたことはしょうがないわ、クロノ。今わかっていることから整理していきましょ」

「……はい」

そして僕たちは動き始めた画面を再度見始める。

相変わらず馬鹿げた速度で空を駆け回る二人。

「エイミィ、あっちの女の子の側にいる男の子の方は？ 見た目からして肉親ではあるのだろうけど」

「はい。魔力量の推定ランクはA A A + …… あはは、こっちもクロノくん以上だね」

「……魔法は魔力だけで決まるものじゃない。状況に応じた応用力と使用できる判断力だろ」

何か同じことを数分前にも言った気がするが、これは僕の信条なのであえて言わせてもらう。

「じゃあクロノ。この子と戦うとしたらどう戦う？」

「……………」

母さ……艦長に言われて少し考えてみる。

映像を見る限り遠距離攻撃もできるみたいだがデバイス自体が武器になっているタイプだ。

剣ということは接近戦を好むのだろう。ならば……

「遠距離魔法で牽制しつつ距離を取る……」

映像では未だジンが劣勢ではあるものの、だんだんと元の動きを取り戻しつつあった。

「例え劣勢であっても相手の心理状態を利用し……」

高速で移動する相手に無誘導の魔力弾を撃ち込み牽制するジン。

驚くべきはあのスピードで当てる腕前もそうだが、かなりのスピードの魔力弾をあの大きな剣で跳ね返す相手も相手である。

「決めにかかるところを……」

怯んだジンに勝利を確信したのか。ヘリックスは両手の剣を横に広げ、一直線に飛び込んでいく。

あきらかに勝敗は決したように思えるこの瞬間。僕は確信していた。

このぐらいでやられる訳がない、と。

あれほど用意周到に、用心深くこちらの本陣に来たのだ。

これが不測の事態の訳がない。だから……

「罨を張る」

結論は同じ。

飛び込んできたヘリックスは、目の前でジンの張ったバインドにかかる。

かかった相手と何かを話しながら右手を掲げ、砲撃魔法をチャージし始める。

「勝った、かな？」

「ああ……」

エイミイの眩きに僕が返したその時、ジンの身にも青いバインドがかけられる。

ヘリックスはそれを見てニヤリと笑った後、上空から犬耳の女性が加速をつけながらジンに拳を叩きつけた。

が、それはジンに届かず緑色の障壁に阻まれる。

ユーノ・スクライアの張った魔力障壁が拳を受け止め、ジンはバインドを解除。

そして今度はジンがニヤリと笑った後にチャージしきった砲撃を放った。

「読み違えたわね」

「くっ……」

僕は艦長の指摘に押し黙るしかなかった。

「まあ、それはともかく。ヘリックス君だったかしら？ 彼のあの

変化……」

艦長が言っているのはあの羽根のことだろう。

なんでこんなにレアスキル（と思われる）持ちがこんなにいるんだ。

頭を抱えなくなるのを堪えながらエイミィの説明に耳を向ける。

「え〜とですね……あの羽根が出た後は魔力の観測ができなくなりまして……」

「まさか……」

「……本当に？」

あまりのことに艦長ですら聞き返す。

頭どころか胃が痛くなってきたな……

「たぶんジン君と同じ原理じゃないかなあ……と。まあ、決定的に違うところはあるんですけど」

「違うところ？」

「ここです。ビルの一部が崩壊してますよね？」

「流れ弾があつたんじゃないの？」

「いいですか？ ここの部分を再生するんで観ててください」

と言って問題の部分を再生。そこには徐々に形を崩し、魔力となつていくビルの一部が移っている。

「無茶苦茶だ……」

「クロノくん、それさっきも言った」

「……わかつてる」

「すごいわねえ……」

なんて艦長は呑気に言っているがあれを僕が相手をしなければならぬと思うと……

「彼はジン君に任せましょう。一度勝っているし、彼自身それを望んでいたし」

「ジンが……ですか？」

「ええ。『どうせ相手のできる奴などここにはいないだろう？』って」

思いもよらない言葉に痛みをこらえつつ艦長に聞くと実にあっさりとした答えが返ってきた。

若干腹が立つものの、その申し出はありがたかった。

「艦長……」

「なに、エイミィ？」

「うちの武装隊では相手にならないっていうのはデータを見てわかるんですけど、クロノくんじゃだめなんですか？」

「うーん……できたわけではないんだろうけど」

「やめてください。僕は彼らを相手にしたくない」

「なんで？」

「あんな……よく考えてみてくれ。彼らは周りの魔力を集めるんだぞ？ 種別関係なく」

「うん、確かにそうだね。でもそれが何で勝てない理由になるの？」

「ハア……第一に、彼らには事実上の魔力枯渇による行動不能に陥ることはない。持久戦に持ち込まれたらこちらが確実に負ける。」

第二に、彼らに魔力消費という概念は存在しないと考えていい。理由はさっきと一緒に。自分の魔力出力を最大限に発揮し、何回も続

けて行える。体が耐えられるかは知らないけど。

第三に、こちらの魔力による攻撃は彼らに近付くほど魔力を削られ、衰退。結果、満足な攻撃が通らない」

「なるほど……」

「以上により、僕だけじゃないと思うけど……彼らの相手はしたくない。遠距離攻撃が得意な魔導士ほど彼らとは相性が悪い」

「でもクロノくんは接近戦もできるよね？」

「……僕を殺す気か？ 明らかにあの二人の方が格闘戦も得意だろうし、そもそもあのスピードについていけない」

「……あちゃ〜」

「と、いうわけだから彼に任せましょうっていうことよ」

そう言っただけで艦長はこの話題について締めくくり、僕はあまりのダメージ（精神的およびストレス的なもの）に目眩がしながら自室に帰って休もうと考えていたのだが、次の艦長の一言で更に頭の痛いことになった。

「それにしても……ジン君の使っている魔法はなんなのかしら？」

「「あつ……」」

僕は目の前の衝撃的な事実を目を奪われていたため気付かなかったが、よく観ると確かにジンの銃口から小さく出現している魔法陣は、少なくとも僕には見覚えのないモノだった。

「飛行魔法は……これを飛行魔法って言っているのかしら？」

艦長が疑問に持つのも当然だ。

ジンは飛行しているのではなく、魔力の噴射によって浮いていると言った方が正しい。

有り余る魔力があるからこそできる非効率な空戦だが、一瞬で起きる加速と魔力の隠蔽効果を持った力場のおかげで対面すれば掻き消えるように移動しているのを実感できるだろう。

「魔法というか……魔力を使った移動方法といった感じですね。肩の部分と、脚部の後ろ側……あと胴体の背中側にもありますね。

このデバイスが噴射機構として働いている感じです。本職に聞かないと細かいことはわかりませんが……無茶するなあ……これ、壊れると思うんだけど」

確かに。これほどの（といっても見た目で判断しているだけだが）魔力噴射を立て続けに行っておいて壊れないというのはもおかしな話だ。

「彼にはまだ隠していることがたくさんあるってことね」

「こちらの信用なしですか……」

エイミイが残念そうに言うが僕だって同じ気持ちだ。ここまで信用してもらえなかったことなどなかった。

「まあまあ……彼にとって私たちは胡散臭い連中なのよ。自分の家族が厄介事に巻き込まれて、それを何とかしようとしたら得体のしれない組織に逢っちゃったんですもの」

正論だと思うが……それでも僕は自分の何がいけなかったのか、つい考えてしまう。

「ほら、クロノも。そんなに考え込まない！ よくあることよ？ 次元世界はたくさんあるし、そこにいる人もたくさんいる。」

その中には私たちに賛同してくれる人もいるし、拒絶する人もいる。それだけよ？ 別に私たちが中心になって世界が動いているわけじゃないんだから」

「はい、母さ……艦長」

「ハア……ところでクロノ」

「はい」

「明日、彼と模擬戦してもらおうから」

「わかりま……は？」

艦長の口から今、信じがたい言葉が聞こえた気がする。

「だ・か・ら！！ 明日彼と模擬戦してもらいます」

「な、何故ですか！？ とうか一体何のために！？」

やはり先程の言葉は聞き間違いじゃないらしい！！

「そんなのおもしろ……彼の实力を測るためよ」

「今確実に面白いつて言いかけてましたよね！？ 实力もなにも映像を見たら一目瞭然でしょう！？」

「いい？ クロノ。表向きは彼の实力を測るっていうことにしてるけど実際は彼の能力について調査するためのデータ取りよ。」

もちろん彼にはそんな風に言っていないけど見透かされてると思うわ。实力を測るためっていうことにしてあるからなのはちゃんの後にするようになるけど……」

そこまでいって艦長は僕の間を見据えながら言う。

「やってくれますね？ クロノ執務管」

もう決まってしまったことは仕方ない。それに……僕自身も戦ってみたい。

一体どうしてあそこまで強いのか。確かに映像では苦戦しているように見えたが、その後の戦闘は劇的だった。

アイツは確実に強い、誰よりも。だから一人の男として直に感じてみたい。

「はい。クロノ・ハラウン、了解しました」

「うん、それでこそ私の息子だわ!!」

最後の一言で一気に萎える。何なんだろうか？ この脱力感は。

一人で燃え上がっていた僕が馬鹿みたいじゃないか。うわ、今考えるとものすごく恥ずかしい……

この後、僕が自室で一人で身悶えていたのは言うまでもないこと

だ。

第12話 管理局の魔法（後書き）

（ジンとAAと愉快的仲間たちのリリなお茶会（反省室編））

AA「お久しぶりです。AAです」

ジン「さて……死ぬ覚悟は十分か？」

リック「……………」

AA「それは中の人違いです。あと、あなたは今子供形態なのでそのチョイスはいただけません」

ジン「……そんなことはどうでもいい。これ以上続けるならコジマ漬けにしてやる」

リック「コジマ漬けはわからないけど、俺の怒りはどこに向けたらいい？」

AA「……すみませんでしたm（――）m 活動報告には『今週中にupする』とかほざいておりましたが、気づいたら一週間経っておりまして。

さらに言えば2か月も放置……本編については3か月放置しておりました。お楽しみにしていただいている方々に深くお詫び申し上げます」

ジン＆amp・リック「ハア……」

AA「言い訳は……しません。ええ、しみせんとも！ リアルが多忙だったとか、就活メンドくさいとか！！ という訳でスーパー反省タイム終了！！ いつものコーナー」 AAのコジマ汚染病棟
” 開院しまーす！！ ”

ジン「そろそろ潰れると思ったんだがまだ患者がいたか」

リック「メンドくさいから早く潰れればいいのに（笑）」

AA「はいそこ！！ そんな不景気極らないこと言わない！！」

リック「でもホントはそう思ってるんだろ？」

AA「……えゝ、気を取り直しまして」

ジン「（図星か……）」

リック「（図星だったんだな……）」

AA「患者さん第三号！ 毎回同じ人だと思ったが、別にソナコトハナカッタゼー！！ 『デバイスだとQBやOB等の機動力関連のパーツは変えることができるのですか？ AC5楽しみですね』 っ
ということ、ジン君！！！！」

ジン「またオレが説明か？」

AA「またです！」

ジン「……正直言ってブースターに変更も改良もない。メインもバツクもサイドも、すべて至高のブースター。エネルギー消費は考えなくていいし、耐久度も壊れたところから創造すればいいからな。^{クリエイト}存分に使っている。以上だ」

A A「ってな訳でご都合全開ブースターでした。えっ？ O Bの説
明してない？ ネタバレになるので詳しくはしませんが、基本的に
他のブースターと同じです。ただ……」

リック「ただ……？」

A A「それではまた次回、お楽しみに〜!!」

リック「説明なしなのか!？」

××××××××××××××××

追記

ブースターのことですが最終的にラインの乙女化します。わからない人はニコニコで調べましょう。

第13話 再現する魔法 前編（前書き）

ギリギリ間に合った

第13話 再現する魔法 前編

どんなに悔いても過去は変わらない

どれほど心配したところで未来もどうなるものでもない

だからこそ ”力” が欲しい

目に見える ”力” が

魔法少女リリカルなのは 〈 白き閃光の後継者 〉
Magical Girl Lyrical NANOHA
Successor of WHITE - GLINT 〈 〉

第13話 : 再現する魔法 (前編)

地球から……俗に第97管理外世界と呼ばれる(らしい)世界からほど近い場所に存在する次元世界。管理局の調べでは生命のいた痕跡はあるものの、現状ではすでに絶滅したと思われる命なき世界だそうだ。

辺りを見渡せばどこまでも広がる黄褐色の地平線が、植物さえ存在しないことを知らしめている

どこかあの世界に似ていて、幾分か気分が落ちつく

【上空まで伸ばした二重結界に戦闘訓練用のレイヤー建造物どんだけ壊しても大丈夫♪】

「……なら最初からそうしておけば良かったものの」

【あははは……】

そんな場所に今、オレはいる――

■
□
■
□
■
□
■
□
■
□
■
□
■
□
■
□

――数時間前の話――

なぜか最近出番がめっきりないような気がしてたまらない皆さん

の脳内アイドル、エレベアです

……失礼しました

さて、前回の邂逅から……といっても昨日のことですが。今日、再び顔を合わせるようになっていましたのでお相手の次元航行艦にお邪魔させていただいております

無論、安全と私たちの秘匿性を考慮してジンとは既にAMSを通して接続中です

今回の顔合わせの理由としましては私たちの戦力を測り、戦闘でどの程度の期待をかければよいかを判断するための模擬戦を行うそうです

私とジンの見解では私たちの存在の調査だろうと意見が一致しています

魔法文化ゼロの世界の住人が魔法を行使し、ありえないほどの戦闘能力を得ている

気になるのは”管理者”を名乗るだけあつてしかるべきなのでしょう

結局のところ探るだけ無駄なのですから好きにさせておくことにしました

今回行われる模擬戦にしたところで、私のリンクスが負ける道理などなのはちゃんがつンデレになるくらいありえません

……それはともかく。アースラに転送された私たちはすぐに艦内の訓練室に連れて行かれ、今回の模擬戦についてリンディ艦長から直々に説明してもらっています

「説明は以上よ。それではこれからあなたたち三人にクロノと模擬戦してもらうことになるんだけど……」

そこまで言ったリンディ艦長は説明を大人しく聞いていた私たちを一度見回す

「さすがにクロノ一人で三人一気に相手をするのはしんどいから別々に分けてもらっていいかしら？」

「こちらに異論はない。むしろ相手が執務官一人しかいないことに驚きだ。よくそれだけの戦力でこのような事件解決できるものだ」

「ここまで大きな事件はそうそう起きないのよ。私たちはパトロールみたいなものだから」

「最低限の戦力しか持たないと？」

「ええ……と言つてもこの艦は最新艦だから試験運用も兼ねているわ。だから他の部隊よりも……」

「戦力としては充実している……か？」

「……そうね。小回りは利かないけど大規模災害には対応できるわ」

「ふむ……」

「一応本部に増援は頼んでいるけれども、どこも同じように人手が足りないからこちらに来るまでに時間がかかるわ。もしかしたら……間に合わないかもしれない」

困ったようにそう言うリンディさんと難しい顔をしているジンとクロノ執務官とおそらく同じような顔をしているのだろうがフェレットの状態じゃ表情など見分けがつかないユーノ様

なのはちゃんだけは話の内容がわからない様だったが、ジンたちの雰囲気から何かを察したのか何も言おうとはしなかった

「……結局、頼りになるのはここの面子だけということか」

「そうなるね……」

「ま、深く考えてもしょうがあるまい。最悪の事態は想定しておくべきだが現状やるべきことはそれじゃない。ジュエルシードを回収することだろう？ そのための今回の模擬戦だ」

「そう。最悪の事態にならないように事件を収束させるにはあなた

たちの力を借りなくてはいけないし、どれだけの力を持つてるかも測らせてもらう必要があるわ」

さっきまでの暗い雰囲気を払拭するかのように明るい声で今回の目的を再度提示するリンディ艦長

「それで模擬戦の組み合わせだけど……」

「なのはとユーノでいいだろう。ユーノ単体では有効な攻撃手段を持ち合わせておらず、なのは自体は戦いというものを知らなさすぎる。サポート役の誰かをつける必要があるのだからちょうどいいだろう」

「じゃあ決まりね。けど、今の言葉をそのまま鵜呑みにするとジン君は戦い慣れているように聞こえるんだけれど？」

「……さて、どうかな？ 慣れている慣れていない……どちらにしろ、あまりダラダラと引き延ばすべきではないだろう。さっさと始めてくれ」

それとなくこちらを探ってはきますがその程度で情報を漏らす訳もなく、ボロを出してしまうのを恐れたのか、ジンはそうそうにその話題を切り上げ模擬戦を催促する

「そう……じゃあ始めましょう。エイミィ」

「ハイハイ。こちらコントロールルームです」

「ジン君はこっちょ、コントロールルームで見てもらうことになるから」

「了解」

リンディ艦長の指示に従い、私たちは訓練室を一望できるコントロールルームに移動。移動しながら模擬戦の内容を説明するようです

【模擬戦の内容を説明するね。模擬戦の勝敗はどちらかが降伏するか、魔力ノックダウンによる行動不能のどちらかになるよ】

コントロールルームから見たなのはちゃんの若干の緊張の色が見て取れます。あのみまでは十分な力を発揮できないでしょうね

「ハア……すまない、ちょっとマイク借りてもいいか？」

「えっ？ あっ……うん、いいよ」

ジンもそれに気付いたのか、エイミィさんからマイクを借り受ける。なんだかんだいって面倒見はいいですからね

「いいか、なのは。何をそんなに力んでいるのか知らんが、いつも

通りにすればいい」

「い、いつも通りって言われても……」

「む……」

何やら緊張を解すのに失敗したようです。こういう他人の心情を察するのは苦手ですからね、ジンは。まあ、たまに鋭いんですが、さて、二人とも黙りこんでしまっていては時間の無駄ですね。少々でしゃばることにしましょう

「なのh なのはちゃん、聞こえますか？」

「…… 川 or z 川」

ユーノ様が何か言おうとしていたようですが、こういうのは先に折れた方が負けなのです。失礼ながらこのまま話させていただきましょう

いつもあなたがやっている早朝訓練はけっして無駄なものではないのです。あの時の感覚を思い出してください。練習の時の空き缶がクロノ執務官になっただけの話なのです

「いつもの……」

そうです。あなたの出せる力を精一杯出せばよいのですよ

「せい、いつぱい……？ 全力、全開……？」

そうです！！ 全力を出し切ってしまえばいいのです！！

「そう、だよね……うん、わかったの！！」

私の助言が役に立ったのでしよう。今の晴れやかな顔は先ほどの硬かった表情よりも幾分と柔らかく、私が記録しているうちでもトップを争うものでしょう

良い顔になりましたね、ジン

「……………」

？ どうかしましたか？

「いや、なんでもない（何だろうか？ 押してはいけないスイッチを押したようなこの気持ち。大体なのは真っ直ぐすぎるのだから本当に全力を出しかねないぞ。大丈夫か？ この艦……）」

その後始まったクロノVSなのは（＋一匹）の模擬戦は凄惨を極め（ギリギリながらも執務官の勝利に収まった）、その破壊の爪跡はアースラ自慢の技術士官を徹夜で涙目に追い込むことになったのはまた別の話である――

「負けちゃった……」

魔力ダメージと魔力切れにより、いまだ自分で立てなくなっ
てしまったのは用意されていたイスに座っている

よほど負けたのがショックだったのか、俯くなのは頭を撫で
つつ（他意は無い。手ごろな位置に頭があっただけ）オレはこの後
にあるオレの模擬戦はどうなるのだろうかと考えていた

惜しかったですね。もう少しでクロノ執務官を墮せそうだったのですが……

「うん、最後にクロノくんの魔力弾をもらっちゃった……」

なんであのくらい防いで見せなかったのですか？ ユーノ様

「無茶苦茶言わないでよ！！ 僕だって全力を出しきって魔力切れ起こしてたんだよ！？」

そのくらい気合いで何とかかります！！

「気合いつて……」

最後にそう言ってユーノは事切れるように床で気絶した。

あちらはあちらでアースラ組が模擬戦の惨状を見ながらクロノ執務官の容態を訊ねているようだ

「クロノ君、大丈夫？」

「僕は大丈夫なんだが、訓練施設が、な……」

「あはは……派手にやったねえ」

「さすがに耐えきれなかったみたいだね。僕も一瞬死ぬかと思ったよ……」

「ク、クロノくん？ 何でそんな目をしてるの？ だ、だめだよ！

？ 正気に戻って！！ まだジン君とやらなきやいけないんだよ！
？」

「……ああ、そうだったなあ。……もう、ゴールしていいかい？」

「何のゴール！？ 何のゴールか知らないけど、きつとだめだよクロノ君！！」

「あらあら」

「あらあら」 じゃないですよリンディ艦長！！」

「ま、大丈夫でしょ」

「その自信はなんなんですかああああああああ！！」

あまり近寄りたくは無いんだが、この後の予定を聞かすには帰れないだろうし……

などと思っていたらリンディ艦長がこちらにやってきた。ちょうどいい、今のうちに聞いとくか

「今後の予定は？」

「うーん……このまま模擬戦は続けたいんだけどね、クロノがああだし」

と言って指さす方向には、いまだ何事かのうわごとを繰り返す執

務官の姿が

「それに訓練室もこのままじゃ完全に壊れちゃいそうだし」

「それはそちらがなのは技量と魔力量を見誤った代償にすぎないだろう……まあ、ここまでとはオレも思わなかったが」

「そうなの？」

「早朝訓練の時とはえらい違いだ。今までで最高の状態だったと言えるかもしれん」

「運が悪かったのかしらね」

「……運も実力のうちだ」

「手厳しいわね。さて、どうしようかしら？」

「施設も使用不可、相手も戦闘不可なのならば後日でいいんじゃないのか？ まあ、時間的余裕はないように思うが……」

実際問題、後日に行くなど無理だろうとオレは考えている。戦う場所も相手もおらず、かといって後日に回すには時間的猶予がないこうしている間にもリックたちはジュエルシードを集めている可能性が高いのだから……

「……………」

「……………（嫌な感じだ）」

隣の女性（言い換えたのに他意はない）から妙な気配が漂い始めたのでオレは静かに距離を取る

あれだ。桃子さんが何かを考え付いた時のような、そんな気配。そういう時は大抵オレに厄介事が回ってくるのでいつも離脱するのだが……

「……………相手がどうにかできるんならできるかしら？」

「……………あの施設の破損具合でか？」

今回ばかりはオレのことなので逃げられない

「訓練室は使わないわ」

「使わない？　じゃあどうやって……………」

「それはヒ・ミ・ツッ」

「……………」

「で、クロノを復活させるのにジン君の力を借りたいんだけど」

「オレの？」

「そうそう。クロノはジン君にえらくご執心みたいだし「オレにその気は無いからな!!」　そういう意味じゃないんだけど……」

「そうだ……オレにそんな気なんてものは無い！　ないったらない！！　ぐうう、な、なんだこの記憶は!?!」

蘇る閃光。忌むべき過去。フラッシュバックされるオレの記憶に
は……

—— 知らな……くは無い天井だ。見慣れたアスピナ機関の、
オレの始まりの……

—— 何故オレは四肢をベツトに縛られている？ 目の前の
ポリバケツを被った男はなんだ？

—— 何故脱ぐ！？ やめろ！？ こっちに来るな！！ や、
や、 やめろおおおおおおおおおおおお！！

R e c o r d r e p r o d u c t i o n (記 録 再 生) F o r c
e d e n d i n g (強 制 終 了)

M e n t a l s t a b i l i t y P r o g r a m (精 神 安 定
プ ロ グ ラ ム) b e g i n n i n g (開 始)

「っは、ハア、ハア……」

「えつと、大丈夫？（汗」

「ジン君、大丈夫？」

「……ダイジョウブダ、モンダイナイ」

なノはとりんδει艦長の心配そうな表情がワタシの視界に映ルが、

どうしておれの心配ヲしていルノか理解不能ノ事象だ。見夕目どオリ僕八正常ダるウニ

「ホ、ホント？　なんかカタコトになってるけれど」

「ジ、ジン君？」

「……イジヨウハナイ。ソレヨリツヅキヲタノム」

「（なにか触れてはいけないものに触れてしまったみたいね……）クロノはあなたと戦いたがっていたわ」

「オレと？」

「（戻ったの）」

「（戻ったわね）　ええ」

「どうして？」

「さあ？　でもクロノも男の子だし　”そついうの”　もあるんじゃない？」

「……道化を演じると？」

「そうは言ってないわ。ただ、お互いに利益がある方法はこれくらいしかないと思ったのよ」

彼女はこう言いたらしい。

場所はこちらで用意するからアレを何とかしてくれ、と。

この分だとオレが ”アレ” を実戦に使えるかどうかのためのテストをしたがっているのを掴んでいるのかもしれない。無論、詳細は知らないだろうが気配だけでも察したか？

しかし ”アレ” のテストには残念ながら彼だけでは不足だ

「いいだろう。だが条件がある」

「条件？ あんまり無理なのでなければいいけれど……」

「その心配は杞憂だな。オレの条件は……クロノ執務官が正気になつてからでいいか」

「あら、意地悪ね。教えてくれないの？」

「彼が正気にならなければ意味のない話だ。オレは……面倒は御免なんだ」

そう言ってオレはいまだ騒ぎ続ける二人組に近づいていく

「訓練室とはいえアースラは最新艦だぞ？ 管理局の技術の粋だぞ？」

「クロノ君！ クロノ君ってば！！」

「何でたかだか15分間の模擬戦で全損するんだ……この後にまだ同じクラスの奴を相手にするのか？ 選択権は一応あったんだ。こんなことになるのならば引き受けなければ……」

「逃げるのか？」

「……っ！？」

オレの言葉に今まだ愚痴ばかり吐いていた執務官はその口から弱音を吐くことを一時やめた

「それもいい。お前の決めたことなら誰にも文句を言う権利はないだろう。だがな……」

「……」

「いつまでも逃げられる訳ではない。前を向かぬ者に勝利はない」

「勝利……」

「得るモノも、な。なのはとの戦いを見ていたがお前の戦いは才能

によるものではあるまい。修練と経験の果ての物だろう」

「……」

「敗北するのはまだ良い。それは自分の力が足りなかっただけ。しかし逃走というのはな……」

――
相手に向き合うことすらしていない

――
それは自分への裏切りだ

――
修練も乗り越えた者たちにも、背を向ける行為だ

「裏切り……」

「これ以上、言葉を飾ることに意味はない。お前の返事一つで艦長は模擬戦の用意ができると言っていた」

「……」

「……一時間待とう。良い返事を期待している」

言うだけ言っただけなのは所に戻り、一時間だけ待つ旨をリンディ艦長に伝えたと艦長は笑って了承してくれた

これで再起しないのならば、見込み違いだっただけだろう

オレは逃走を先のように否定的に考えたことはこれっぽちもないがな。考えてもみる。騙し騙されの傭兵の世界で生き残ることが最優先だと言うのに逃げれるときに逃げず、無駄に機体と弾薬を消費するわけにはいくまい

口からの出まかせをそれっぽく言っただけだが……まあ、プライドを逆撫することはできたはずだ。オレは待機している間”アレ”の調整でも行っておくか……

■
□
■
□
■
□
■
□
■
□
■
□
■
□
■
□

「……で今に至る、と……」

【何か言ったジン君？】

「いや、ただの独り言だ。こちらの準備はできている。いつでも来い」

【オッケーオッケー！ こっちも準備できたからクロノ君 ” たち ” をそっちに転送するね】

すでにバリジャケットと言っには装甲を纏いすぎた感のある物を

展開させていたジンの目の前にアースラからの長距離転送により4つの人影が現れる

人影は徐々にその姿を明白にしていき、最後には完全に転送されたことを示すように転移魔法の陣が消える

「四人か……」

「君の条件通り『僕以外に追加戦力を加えた上での模擬戦』だ。アースラの武装隊から人選だ。集団戦闘における連携は慣れている」

彼の目の前に現れたのはクロノ以外に三人。アースラの武装隊から引き抜いて来たと言っていたので、事前に用意した情報をエレベアから引き出す

引き出した情報には確かに彼らはアースラの武装隊に所属しており、隊の中でも一際優秀な人材のようだ

「ふむ、問題はない。むしろ興が乗ってきた」

そう言っただけジンは両手を前に掲げながら自らの愛銃を具現化させる

「精々楽しませてもらう」

「……こちらは全力で君の相手をさせてもらうからね」

場には張り詰めた空気が漂ってきていた。ピリピリと肌に感じるそれは、多分に怒気が混じっている

怒気を発しているのはクロノではなく、周りにいた武装隊員たちそれも仕方のないことだろう。才能さえあれば前線投入というスタイルを管理局は取っているとはいえ、自分よりも年下の人間に……それなりの実力はあると自負している自分たちがこうも侮られているというこの状況はお世辞にも気分がいいとは言えない

【こちらアースラ艦長リンディ・ハラオウンです。それでは、民間協力者”ジン・R・アナトリア”君の戦闘能力調査を始めます。これらの調査は管理局法に則り行い、映像記録として記録します。皆怪我しないようにね？】

「怪我？ 五体満足でいられるか、そうでないかだろう？」

「お前、調子に……！」

「落ちつけ……！」

ジンの言葉にあふれる怒気はクロノが抑え込む

「さすがに言葉を選ぶべきだと思うが？ 『全員落ちつけ、挑発に乗るな。あっちの狙いはこちらの連携の崩壊なのは目に見えている。みすみす向こうの思惑に乗ることはない』」

「それは悪かった……口の悪さは生来の物なんでな、許せ（さすがに場数は踏んでいるか……まあ、この程度の挑発に乗ってもらって

は落胆するしかなかったがな」

などと言いながらジンは自分のレアスキルたる魔力収集を使い、
マジックチャージャー
周りの魔力素を集め始める

再度張り詰めていく空気

それは先ほどの物とは違い、目の前の人間から出る雰囲気、佇まいからくる”何か”のために強いられる緊張感……

先に動いたのはジンであった。魔力素を一定量収集し終えたことにより発生したPAの展開音と共にバックブーストを点火。クロノたちから距離を取る。それに触発されるようにアースラ組も流れるように陣を組む

「『全員分かっていると思うがこれが彼の能力だ。周りの魔力素を掻き集めて自分の物にするらしい』」

「『馬鹿げたもんですね。実際味わうまでわかりませんでしたか……』」

「『キツツイな、これ。防御魔法の術式からドンドン持ってきてるんだけど』」

「『ハッハアー！！ 気合いで何とかなるだろ！！』」

各々が念話で感想を漏らしている間にも、距離を取ったジンの両手からは数多の魔力弾がばら撒かれる。といっても狙いは正確で、一般的にはバリアジャケットを纏わない頭部を狙ってくるのだが

「『持久戦はこちらが不利だ。かといって射撃魔法も通りはしないだろう』」

「『……どうやらそうらしいですね』」

さすがに四方向に銃口を向けることはできず、弾幕の隙を狙って牽制用の射撃魔法を撃ち込むも傍から分解されていき届いていないようだ

「『うわーい、砲撃魔法クラスじゃないと通らないんじゃないかしら』」

「『近接も残ってるぜエエー!!』」

ある者は避けながら、ある者は防御しながら。今回の模擬戦相手が一筋縄ではいかないことを確認するかのように相手を観察する

「『全員戦闘記録を見ているな。あいつはスピードも侮れないものを持っている』」

「『どうします?』」

「『……作戦に変更はなし。打ち合わせ通りにやってみよう。正直それ以外に勝機はない……』と思う』」

「『あれま。弱気なクロノ執務官なんていつ以来かしら?』」

「『半年ぶりぐらいだああー!!』」

「『よくそんなこと覚えていたな』」

「『そりゃあ……』」

「『あわよくば……』」

「『ハッハアー!!』」

「『『弱みを掴めと思ったから(です/よ/だぜエエー!!)(』』』」

「『君たちは……！』」

あまりのことに念話とはいえ絶句するクロノ。人選を間違えたの
だろうかという疑問がクロノの思考をよぎる

「『……まあいい、作戦開始だ』」

「『『『『了解』』』』」

（さてどうするか……）

距離を取りつつ一方的に魔力弾をばらまくジンは冷静に相手の出

方を窺っていた

—— 彼にとって魔法とは未知の領域であった

確かにこの世界に入り込んだ時、数々の向こうの技術と引き換えに得た魔法の知識はあった

しかし、知識はあっても実際に使ったわけではなかった。魔法戦闘歴1ヶ月にも満たない彼の戦闘方法は馴染んだ形で再現されているとはいえ物理法則の範囲内である

リックたちとの魔法戦闘戦を経てジンは自分の凝り固まった思考がいかに危険かを学んだ

だからこそ彼らの様子を見る

だからこそ彼らの戦い方を学習する

だからこそ自分の戦い方を編み出していく

彼にとってこの模擬戦は自分の魔法戦闘隊形を作り出すその最初の一步なのだ

(どうする？ どうくる？ どう戦う？)

学ぶための戦いはそうはない。このチャンスは事件の間にはもうない

一回きりのチャンスを生かしてこそその傭兵だ
リンクス

ジンの魔力弾を防戦一方だった彼らは行動を開始する

(二手に分かれたか……戦力が判明しているクロノは後衛。ということは補助魔法および後方からの火力支援が考えられるが……)

二手に分かれた内の二人（若い男性と女性。おそらく20代だろう）が自らの杖に魔力で作成した刃で斬りかかってくるのをQBクイックブーストを用い、避ける

避けられた二人はそれを知っていたかのようにかなりのスピードでそのままジンを追っていき、再度斬りかかってくる

これ以上は距離を取り続けるのは不可能と判断し、ジンは自らの巨銃に魔力場を生成し迎撃に出る

「戦闘記録は見てたけどやっぱり速いねー、君」

「……」

「あらま。だんまり？」

「ハッハアー！！ 物静かな小僧だぜ！！」

二人と斬り結びながらも一方のグループも視界に入れ続ける

（目の前の二人は接近戦型か……それなりの物を持っているがまだ捌ける。問題は物静かなあっちの方か……）

さつきから接近戦を仕掛ける二人組とは違い、後ろに構える二人はやたらと物静かだ

（後方支援に徹するのと思ったが……何もしてこない。火力支援は味方が射線にいるからしないのか？ それなら補助魔法ぐらい……バインドくらいしてくると思ったが……）

「あら。余所見なんていけずね？」

「隙ありいー！！！」

「隙などない」

「のわっ！？」

意図的に作った隙に飛び込んできた馬鹿（さっきから五月蠅い男）を蹴りで弾き飛ばし、空いた片手で追撃の砲撃魔法を放つ

さすがにアースラでも上位に食い込む猛者故なのか、追撃の砲撃を寸でところで防御した男は墮ちることなく再びジンの方へ斬りかかってくる

「まだまだいけるぜ！！！」

「……」

どこことなくガトリング馬鹿を思い出したジンだが、すぐに戦闘に没入していく……

(……カウンター狙いか?)

戦闘が続いて5分。前衛組は変わらずジンを攻め立て、後衛組は相変わらず何もしてこない

否、僅かながら前衛組には疲れが出始めていた。それに引き換えジンは息一つ乱していない

子供であるジンが体力的に不利なはずであるのに優勢なのはなぜだろうか?

理由は簡単だ。前衛組は魔力場を生成し続けながら振り回しているのに対し、ジンは最小限の動きでそれを避け続け、直撃すると判断したものだけを刃でもって受け流す。刃は常時展開する必要などない。受け流すその時だけ発生させることにより魔力消費を抑えている

余談だが魔力を出すためにはそれなりに力を使う。常時展開するということは常に力瘤を継続させる行為に等しい

それに加え彼らはジンの魔力収集の影響を受けており、魔力刃の維持に普段の倍以上に魔力を注がねばならず、さらにそこから飛行魔法の維持と格闘戦のために軽いとは言えない杖を振り回す

体力が尽き始めるのは自明の理であった

（であれば、前衛は囿？ いや……）

様々な推測を立てるがやはり魔法戦の経験が少ないと選択肢が限られてくる

（推測は無意味。虎穴に入らずんば虎児を得ず、だ）

このままでは変わらない状況が続き、いずれ力尽きた目の前の二人を墮としてからもう二人を相手にすることになるだろう

実戦ならそれでよかった

勝ちがわかつているのなら冒険する必要など、どこにもない

しかしジンにとってこれは魔法戦を経験するための戦い。学ぶことがなければ意味がないのだ

故に、ジンは踏み込む。彼らの策であるとなかろうと……

「ちよっ！」

「おわっ！？」

斬り結んでいた二人を突き放し後方の二人にQBで急速接近する

みるみる縮むお互いの距離

ジンは接近しているにもかかわらず何の抵抗もないことに疑問を持ちながらも、それもまたおもしろいと突っ込んでいく

（射撃魔法は後ろの奴らに追いつかれるか？ いや、動きながら撃てばいいか）

超高速。亜音速の速度で飛ぶジンはそのまま二つの銃口を二人に向け……

白色の螺旋が空間を蹂躪していく

ふたつの螺旋は超スピードで放たれ、何の抵抗もなく対象に着弾する

「ぐッ……！？」

辺り一面を照らす強烈な閃光

防御魔法を発生させずそのまま受けた二人は着弾と同時に青色の閃光となってジンの眼を焼いた

（かかった！）

ジンが突っ込んでいくのを見ていたクロノは自分の作戦の成功を確信した

実際のところジンが見ていたのは幻影である。二手に分かれたときの一瞬の内に幻影で姿を隠しながら偽物を立たせて置いたのだしかし長時間の使用による魔力消費は凄まじいものがあり……

「『もう限界です……止めていいですか？』」

「『あと少しだ、耐えてくれ！』」

幻影を掛け続けていた武装隊員は魔力が切れかかっており、いまにも倒れそうだ

—— ここでまた余談だが、幻影魔法はかなり高度な魔法に入る気象により変わる湿度や温度、光による屈折などを常時演算し続けなければならず、その維持には広範囲に比例して多大な魔力がいる管理局内ではそのような搦め手の魔法は好まれず、正面から叩き伏せる魔法が好まれる傾向にあるために術式研究が進んでいないのも燃費が悪いことに拍車をかけている ——

そんな中、クロノの目の前でジンが発砲。ドンドンと幻影でできた自分に砲撃魔法が近づいていく

「『全員間合いを詰める！』」

直後に自分が仕掛けた魔法が発動し、辺り一面を真っ青に染める

作戦内容は単純

前衛二人を囲としジンの視界を一瞬塞ぐ

←

前衛は堕ちない程度にジンに接近戦を行い、後衛組は一切攻撃行動を取らない

←

焦れたジンが攻勢に出た瞬間にこれまた堕ちない程度に距離を取る

←

閃光により怯んだジンにできるだけ接近し砲撃魔法で止めを刺す

分の悪い賭けではあった

ジンが前衛を本気で墮としにかかったらどうするのか？ 果たして後衛を先に狙ってくるのか？

それでもこの作戦が一番成功確率が高いとクロノは言い張った。曰く、『ジンの戦い方には慎重さが見て取れる。まるで手探りのようだ。彼は間違いなく戦いを観察しながら行っている。持久戦に持ち込むことはたやすく、模擬戦という実戦ではないこの環境で畏が何なのか気になるはずだ。だからこそ仕掛けることは容易なはずだ』

彼はジンとの戦いのために過去に観測された全戦闘データを見て、その戦闘の特徴を見つけ出し作戦を立案したのだ

それでも賭けに違いはなかったのだが、今こうして成功している以上なにもいらなかった

（作戦通りにジンは動いてくれた後は最後の幕引き。砲撃魔法を減衰させられないように近づいた至近距離でのクロスファイア）

片手で目を抑えているジンに至近まで近付こうとしていたクロノ
達は気付かなかった

彼の口が笑みに歪んでいるのを

(もらった!!)

完璧な距離、ジンの攻撃を視認してから避けれる、そのぎりぎり
で放たれた4つの砲閃は――

―― 視界を埋め尽くす緑白色の閃光によって意識を断たれた
ことにより、届いたのか否かを知ることができなかった

第13話 再現する魔法 前編（後書き）

お久しぶりです皆さん。

長らく更新が滞ってしまい申し訳ない。

就活戦争やら進級作品やら立てこんでいてなかなか執筆する時間がなく、ここまで放ってしまいました。

さて、今回からこのコーナーの代名詞であった（私はそう思ってた）『ジーンとAAと愉快な仲間たちのリリなのお茶会（反省室編）』及び『AAのコジマ汚染病棟』はお休みです

ぶっちゃけ本編書いた後にこれはしんどいから。今日は紅白見たいし。

ってか久々投稿なのに前後編ってアホなの？ 馬鹿なの？

そんな作者ですが完結まで書きあげていと思っていますのでどうかよろしく願います。そして、来年もどうかよろしく願います。

それでは

第13話 再現する魔法 後編（前書き）

この静寂……遅かったというのか……

第13話 再現する魔法 後編

魔法少女リリカルなのは

 $\sim$

白き閃光の後継者

 $\sim$

Magical Girl Lyrical NANOHA
Successor of WHITE GLINT

SUCCESSOR OF WHITE - GLINT

第13話：再現する魔法（後篇）

「……うん」

目に入っただのは清潔感あふれる白色の天井。それがアースラの診療室の天井だと気づくのに僕は少しの時間を要した。

「ああ、目が覚めましたかハラOWN執務官」

起きたばかりで未だ意識がハッキリしないところに掛けられた声。発生源に目を向ければこの部屋の主たるアースラの医療スタッフの顔が見えた。

「……どのくらい眠っていた？」

「ほんの4時間ほどですよ」

「そうか……」

医務官である彼女の診察を受けながら周りを見れば、共に戦った武装隊員の姿が見える。見た目に主立った外傷はなく自分のように気絶しているだけのように思われる。

「はい、特に異常はありません。何かありましたらご相談ください」

「ありがとうございます」

「いえいえ……そういえば艦長がお呼びでしたよ？ 目が覚めて動けるようなら、と」

「了解。場所は？」

「ブリッジだそうです」

そのまま治療の礼を言い、横にあった制服を着こんでからブリッジに向かう。

「っ……」

動けるまで回復したのはいいがやはりまだダメージが抜けきっていないのか、ブリッジまでの道のりが酷く遠く感じる。ふらつく足に情けなさを感じる半面、何が自分をここまで痛めつけたのかが気になる。

「確かに作戦は成功したはずだ。避ける場所のない位置での超至近距離の砲撃……あいつは避ける素振りなんか見せなかった」

柄にもない、と思う。思考をまとめるために口に出しているが、傍から見れば一人でブツブツ言っているように見えるだろう。擦れ違う局員の視線が僕に向けられるが生憎とそこまで気が回らない。ブツブツと呟きながら5分ほど歩き、ようやくブリッジに付いた。ふらつきながら歩いてきたためか普段より倍近い時間が掛ったが仕方がない。

「失礼します」

「あら、おかえりなさい」

「おかえりクロノ君」

ブリッジに入るとエイミィと母さ……艦長と……

「存外、遅かったじゃないか」

何故かジンの奴がいた。

「何故君がここに居る？」

「居ると困ることがあるのか？ 何か後ろめたいことでも？」

「……ある訳ないだろう」

「なら居てもかまわないだろう？」

「そついうことを言ってるんじゃないんだが……」

何故こうも気が立つのだろうか？ らしくないと自分でも思うが自分の感情が止められない。今にでも……！

「ストップ。あんまり煽り立てるは止めてくれるかしら？」

「そうだな、すまない。あんまりにも弄りがいがあるのでつい、な」

「弄りッ！？」

「クロノもそんなに熱くならない」

艦長に止められて僕はようやくと頭を冷やすことができた。いまだにこちらを見ながらニヤニヤしている奴がものすごく癪に障るが無視することに決めた。

「そつえば体は大丈夫なの？」

「はい。少々魔力ダメージを引きずっているのか、体が重いですが問題はありません」

「無茶しちゃだめよ？」

「それは心得てます」

何故か艦長とエイミィにため息を吐かれた。次いで何故か合点が

いったという表情をしてからジンには呆れた目で見られた。何故君にそんな目で見られなければならない？

この妙な空気と視線を浴びせられること数分。誰からともなく外された視線と弛緩した空気に安堵する僕がいた。

「それはともかくさっきの模擬戦だけれど……エイミィ？」

目の前に表示されるのは先ほどまでの模擬戦の内容。画面は時には観測結果によって得られたデータが表示されており、グラフ化されたデータが忙しく蠢いている。

「データの整理は終わったか？」

先ほどまでこちらをニヤつきながら見ていたジンがいつの間にかエイミィの隣で画面を見ながらそう聞いている。

「うん。細かいところはもうちょっと突き詰めていかないといけないけど……」

「そこまでのデータでいい。こちらに回してくれ」

「お、おい！」

「いいのよクロノ」

模擬戦データとは言え機密事項だ。それを渡すように言うジンを僕は止めようとするが艦長にそれを止められる。

「艦長!？」

「もともとジン君はそのために残ってたのよ。模擬戦をするうえでの条件の一つよ。『模擬戦後に自分の戦闘データをコピーで構わないから渡すように』って」

「ま、そういうことだ」

そう言って作業に戻るジンを眺めながら僕は艦長に再三尋ねるが返ってくるのは了承の意のみ。結局ジンは自分のデバイスにデータを移し終えてしまい、用がなくなったと言って足早に帰っていつてしまった。艦長はそれを黙って笑顔で見送っていたが何がそんなにおかしかったのだろうか？

「ジン君は何でここに残っていたと思う？」

「？ データが欲しかったからでしょう？」

「それもあるけど、彼……。クロノが来るまでソワソワしてたのよ？ 見た目分りにくかったけど」

「……まさか」

いやいや、そんなはずはないだろう。あの不愛想な奴がそんなことは……。

人の心配など……。

「ジン君が使った魔法の大まかな内容を教えてくれたおかげでクロノ君たちの治療を的確にできたんだけどな」

データの詳細をさらに詳しく分析していたのであろうエイミーも口を挟んでくるが僕は到底信じることができなかった。何故と理由を問われたら僕自身も答えることはできない。自分自身でさえ何故こう思うのか、それ自体が理解できなかった。これはきつと世間一般で言う”性に合わない”というやつなのだろう。僕はそう結論付けた後、ジン・R・アナトリアについて考察する。

ジン・R・アナトリア

今回の事件の元凶、ジュエルシードの暴走体と接触した現地人の内の一人。もう一人の現地人である高町なのはとは家族の間柄ではあるが血縁関係はない。

当初は管理局の捜査協力に非協力的な態度を見せていたが、後述の条件をこちらに提示したうえでの協力体制を取ることもなった。

一、これまでの自分たちが受けた被害、または危険手当に相当する正当な報酬を払うこと。

一、そちらの指揮には応じるが、自分たち、または自分たちの世界にとって不条理命令である場合、その命令を拒否する権利を持つことを承諾すること

一、自分の素性には干渉しないこと

前述二つもそうだが管理局としては受け入れがたい内容。とくに最後の項目、素性を明かさない……それ自体は大したことはない。管理局に良い印象を持たない人間が、時にそういう態度に出ることがある。しかしその人物の所属している世界を探れば必ずデータが出てくる。

しかし、『ジン・R・アナトリア』については何かが、いや全てがおかしかった。

今回の事件の民間協力者となった『高町なのは』の家族。戸籍上そうなっているが、そうしたのはおよそ1年ほど前。それ以前のデータがまったくない。第97管理外世界の中でも国民の管理がしっかりしている国である日本という国家においてデータがないというのは明らかにおかしい。

まるで元から存在していないかのように

「クロノも模擬戦のデータ、見るでしょ？」

艦長の声で思考の淵から帰ると、そんな僕の考えが表情に出ていたのか。艦長は苦笑しながら映像を見るように勧める。もちろん僕も職務上見ないわけにはいけないし、どうやって自分が落とされたのかが気になるので素直に了承の意を示すと先ほどジンが持っていたデータと同じ物がブリッジのスクリーンに投影される。

そこにはジンと格闘戦を仕掛ける二人とその後方に控える僕らのダミーの姿。こうやって見てもジンがこちらの様子を窺いながらほとんど体を動かすことなく独特の戦闘機動——おそらく魔力放出による移動と推測される——によって二人の前衛の格闘を避けきっている姿。

「こうやって見ても圧倒的だねえ……」

「ああ。それをどうにかできるだけの近接戦闘技術があることは知っていたけど……」

圧倒的だった。大人と子供の差など、数の差など知ったことではないとでも言うように振るわれるその有り余る戦闘能力には凄まじいの一言に尽きる。スクリーンの映像はそのまま再生されていき、エイミィは引き続きこのデータを割り出す作業に当たる。

こうやって第三者の視点で模擬戦を見ると、あきらかに手を抜か

れている。いや、あしらわれていると言うべきか。得意の瞬間的な噴射機動を行っているものの、そのスピードは今回の事件のヘリックスと戦っていた時ほどのものがない。

そんなこんなで拮抗していた状態は、ジンがダミーに向かって突っ込んで行くところまできた。ジンがダミーに射撃。着弾と同時に閃光。仕掛けた罠が発動し、目晦ましと共にジンの四肢をバインドで拘束する。同時に各員は所定の配置に移動し全魔力を投じての砲撃態勢に移行。

「……ここまでは覚えてる。最後はどうなったんだ？ 作戦が成功して砲撃魔法を撃った瞬間までは覚えているんだが……」

砲撃魔法の発動とほぼ同じタイミング。目の前を埋め尽くし全てを飲み込んだ、あの緑白色の光。目の前の記録映像がそれを確かめさせてくれる。映像ではあの時と同じように画像一面が緑白色に輝き、それに続いて遅れてきた衝撃が画像を乱す。

——けれどもクロノは確かに見た。ジンを中心にして全てを飲み込む圧倒的な力を

陽が沈んだ住宅街をひとり歩く。周りの家々からは兄弟喧嘩の声や風呂場からの少し反響した声など雑多な生活音が漏れ出ている。

そんな中、白髪に青眼の少年はひとり歩く。もともと異国の人間が多いこの町とはいえ、その容姿は人の目を引き付けるものであるのだがそもそも家族団欒のこの時間に住宅街の道を歩く人間は少ないために物珍しい者を見る目もまた少なかった。

「良いデータが取れたな」

そうですね。さすがにあの状態じゃ自分のことを観測してデータを取る暇がありませんからね

「ああ。しかしまだ魔力素の変換率が足りてないのがわかるな」

あの量の魔力素を一気に自身の魔力素に変化し、なおかつその場に対流させるだけの整波能力が足りていませんね。不甲斐ないです

「それは仕方ないだろう。ひとえにオレの力量不足だ」

そのようなことはないかと。私の演算能力が足りていないだけの話です。もう少し式を見直してみます

「……ほどほどにな」

自分の魔力変換効率が届いていないと言っているにもかかわらず、デバイスである自身のスペックが足りていないだけと主張する相棒に苦笑しながらそれを窘める。肝心な時に処理落ちして戦えませんが、など笑いごとではない。

自分はそれほど口数が多いわけでもない。いつもはよくしゃべる相棒も今はただ術式の見直しをしているのか、首から変えたコアをチカチカと照らしている。闇夜の住宅街は周りの生活音がただ響く、それを心地よいと感じるのか、耳障りだと感じるのか。少年の表情からは窺い知れない。

「そろそろ家だ。接続を切るぞ？ 術式の調整はまた今度だ」

……了解しました

あきらかに不満そうな声で答える相棒に自分に似て負けず嫌いな、と考えながらうなじから伸びるコードを引き抜く。一瞬の痺れにも似た慣れた痛みと共に傍に止めてあった車に映りこむ自身の姿を見る。白かった髪は毛先から黒へと変化していき、目の色は青から翠へと色を変える。白い少年はまばたき一つの間に黒い少年へと変わった。それを確認した後数歩先にある一件の家に目を移す。今自分が世話になっている家。

「やて……」

なのはには帰るのが遅れるのを伝えてもらえるように言っているが……今現在の時刻

——午後11時——　　いくらなんでも遅すぎた

——　　どうしようか？

——　　……どうしようもないんじゃないですか？

——　　……

——　　……

——　　……そうだな

意を決してドアを開けた先には予想通りの人物が、笑顔で立っていた。

第13話 再現する魔法 後編（後書き）

2011年3月11日。東日本を襲った大震災。いまだに復旧の目処がたっていない中、この作品を見てくださっている皆様の心身がご無事でありますようお願い申し上げます。

さまざまな感情、言葉が胸あふれますが、今はただ皆様のお心に安らぎが戻りますよう、そして亡くなられた方々に深い哀悼の意を表しております。

アサルトアーマー

— A A —

久々に投稿。小生の家は兵庫県だから大丈夫だよ〜っということと生存報告がてらの投稿。なんかいつの間にか20万PV突破しとるがな（´・ω・｀）番外編を書いとかないとね、今度こそえいぷーに……！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8696j/>

魔法少女リリカルなのは ～ 白き閃光の後継者～

Magical Girl Lyrical NAN

2011年9月7日19時55分発行